

D・CⅡなのはstriker's漆黒と桜花の剣士

京勇樹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平和な日常の中、1人の少年は暗い闇の中で戦っていた……

その少年は、悲しみを背負って、誰かを守るために、戦う道を選んだ……

これは、pixivにもマルチ投稿しています

本編、終了しました

長い間の愛読、ありがとうございました

目次

IF クロスオーバー

IF 話 異世界からの来訪者

IF ストーリー 状況確認

IF ストーリー 魔法とデバイスと家と

面接と驚愕

IF ストーリー 初めてのバイト

デバイスと驚愕の出会い

異世界での初登校

二人の少女

渦中

救出戦、前篇

救出作戦 後編

入り口

告げられた残酷な真実

独白

元の世界へ

クリスマスパーティー編

プロローグ 1日の始まり

設定 (1月12日追加)

騒がしい朝の風景

選択

選んだのは……なんですと!?

新しい出会い A・M編

ヘッドハンティング

132 121 115 104 97 84 81 77 73 69 64 61 56 49 43 38 31 26 19 11 5 1

| | | |
|------------------|-------------------|-----|
| それぞれの日常 | そして…… | 138 |
| 治療と裕也の…… | | 148 |
| 新しい出会い | E・M編 | 154 |
| お願い事 | | 163 |
| 追いかけること | 裕也の実力。そして、露見 | 174 |
| 幕間 | 由夢の夢 | 190 |
| 準備と模擬戦。 | そして…… | 192 |
| 過去の語らい | 始まり | 204 |
| 過去の語らい | その1 | 209 |
| 過去の語らい | その2 | 213 |
| 過去の語らい | その3 | 217 |
| 過去の語らい | その4 | 227 |
| 過去の語らい | 閑話 | 233 |
| 過去の語らい | その5 | 237 |
| 過去の語らい | 終 | 245 |
| 学校、復活、準備 | | 255 |
| 風見学園の日常と帰ってきたアイツ | (12月19日編集) | 259 |
| 美夏危機一髪! | (黒ヒゲじゃないよ!) & 赤っ恥 | 267 |
| 準備完了! | そして…… | 273 |
| | (12月19日編集) | |
| 救出作戦!! | | 281 |
| 戦闘後の診察 | | 286 |
| クリスマスパーティー開会式 | | 289 |
| クリスマスパーティー | 1日目その1 | 292 |
| クリスマスパーティー | 1日目その2 | 304 |
| クリスマスパーティー | 2日目その1 | 309 |

VIPルーム開店! | 316

生徒会の仕事 | 320

クリスマス・パーティー 2日目 突撃・撤収・思い | 326

生徒会合宿編!

呼び出し | 335

到着! その場所は…… | 340

スキー開始! | 344

それぞれの時間 | 347

夕食と会議 | 351

王様ゲーム!! | 355

王様ゲーム! その2 | 362

非公式新聞、参上!! | 368

それぞれの年越し | 371

それぞれのチエイス | 376

避難 救われる少年 | 382

帰還 | 389

夜の会話 | 393

タネ明かし&帰宅。少し事件 | 396

新学期編

幕間 渦巻く陰謀 | 405

ミーティング 兆し | 407

喫茶ミーティング | 413

約束 | 418

| | |
|--------------------|-----|
| 突撃 | 549 |
| 推移 | 545 |
| 開戦 | 542 |
| 備え | 538 |
| 宣戦布告 | 534 |
| 週末戦争編 | |
| 襲撃と誘拐 | 527 |
| 彼女の願いと…… | 522 |
| カウントダウン | 515 |
| 少女の慟哭 | 510 |
| 親の願い | 506 |
| 二人の決意 | 501 |
| 叫び | 495 |
| 悲しい事実と説得 | 490 |
| ドキドキの同居生活その2 残酷な…… | 485 |
| 平和なひと時 | 481 |
| 衝撃の事実と悲しい別れ | 477 |
| 二つの進展 | 470 |
| ドキドキの同居生活 その1 | 458 |
| それぞれのデート 終 | 451 |
| それぞれのデート その3 | 447 |
| それぞれのデート その2 | 441 |
| それぞれのデート? | 437 |
| デート前のヤリトリ? その2 | 430 |
| デート前のヤリトリ? | 424 |

| | |
|-----------|-----|
| 異世界からの救援 | 552 |
| 絶望的な真実 | 555 |
| 新たな契約 | 559 |
| 突入 | 563 |
| 封印解除 | 566 |
| 親子の戦い、始まる | 570 |
| 二人の思い | 573 |
| 友人達 | 576 |
| 仲間たち | 581 |
| ゆりかご内の戦い | 585 |
| 流転 | 590 |
| 最後の切り札 | 595 |
| 不退転 | 599 |
| 終焉 | 603 |
| 終章 | |
| さくら | 609 |
| サクラノキセキ | 614 |

IF クロスオーバー

IF話 異世界からの来訪者

ピンポンパンポーン♪

ある日の放課後、突然放送が始まった

《2年Fクラス、吉井明久及び常村結華大至急、学園長室に來なさい。繰り返します》

それを聞いた、文月学園2年Fクラス所属の吉井明久よしいあきひさと常村結華つねむらゆいかは嫌な顔をした

「また？」

「今度はなにをする気だよ……」

そう呟きながら、二人は教室を出た

二人は度々、学園長の実験に協力してきたが、それらは全てロクな結果ではなかった

故に、二人が顔を見合わせて嫌な表情を浮かべたのも無理はないだろう

そして、二人は学園長室に到着するとノックした
すると

『入りな』

と、促された

二人はドアを開けて、学園長室に入った

「呼ばれたので来たんですが……」

「なんのようですか？ ババア長」

明久のは、はつきり言って罵倒である

隣に立っていた結華は、明久の頭を叩いた

「このジャリには、いっぺん誰がこの学園で一番偉いか教える必要がありそうだねえ」

学園長もあまり誉められた口調ではない

だが、ある意味仕方ないのかもしれない

この学園長はむしろ、教育者というよりも研究者なのである

故に、口調が悪いのだ

「それで、要件はなんですか？」

と結華が問い掛けると、学園長の藤堂カヲルは机の引き出しから一対の腕輪を取り出した

「この《赤月の腕輪》の実験さね」

明久と結華は、予想通りの事に嫌な顔をした

そして明久は、表情を変えずに

「大丈夫なんでしょうね？」

と、学園長に頷いた

すると学園長は、フンと鼻で笑い

「さあ、知らないね。あんたらで初めて試すんだから」

と断言した

それを聞いた二人は

(信用できない……)

と、心の中で思った

「ほら、いいからさっさと試しな」

業を煮やしたのか、学園長が腕輪を二人の前に置いた

二人は渋々といった様子で、腕輪を装着した

「で、キーワードはなんですか？」

と、明久が諦め半分で聞いた

「まだ試験だからねえ。普通アウエイクンに起動さね」

それを聞いた二人は視線を合わせると、うなずき

「起動!!」アウエイクン

と、キーワードを唱えた

すると、足元に魔方陣が浮かび上がるが

「あれ？　なんか、いつもと違うような……」

「だなあ……それになんか、バチバチ言ってる」

二人が呟く通り、魔方陣の形はいつもと違い、さらには放電している

と、二人が見詰めていたら

「二人とも！　今すぐに、腕輪を外しな！」

学園長が声を張り上げた

「学園長、まさか!？」

「暴走してるんだよ! さっさと外しな!」

「このババアは、本当にロクな物を作らないな!!」

明久達は罵倒しながら、腕輪を外そうと手を伸ばしたが

次の瞬間、部屋中を強い光が覆った

そして、光が収まると

「吉井と常村はどこに行ったんだい……?」

学園長室内には、明久と結華の姿は無かった……

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ある一室に、一人の男が椅子に腰掛けていた

その男は紫色の髪に、少しくたびれた白衣を着ており、キーボードを高速で叩いていた

「ふむ……理論的には、これでイける筈だが……」

男、ジェイル・スカリエツティがそう言いながらエンターキーを押すと

部屋の中央にあった直径約2メートルほどの台座が光った

「お、お、おお?」

スカリエツティが見つめている先で、少しずつ光が強くなり……

爆発が起きた

「むう……失敗だったか……なにがいけなかったのだろうか?」

スカリエツティはそう言いながら、空調を動かして煙を排出した

そして、部屋の中央を見て固まった

「ひ、人だ!?」

部屋の中央にあった台座は壊れていて、代わりに二人の少年と少女が倒れていた

その二人を見たスカリエツティは、しばらく呆然としていると

「ど、どうしたものかな……これは……」

と、頭を掻いた

そしてしばらくすると、電話の受話器を取って

「あ、私だが……」

と、誰かと電話を始めたのだった
バカと魔法が交錯した時、面白い物語が始まる

IFストーリー 状況確認

明久と結華の二人が目を覚ますと、すぐ近くでは

「ノーヴェさん！ 落ち着いてください！」

「離せ、裕也！ もう十発は殴らないと、気が済まない！」

赤いショートカットの少女を、小学校高学年くらいの眼帯を着けた少年が必死に押さえていた

その少年の背後の床には、白衣を着た紫髪の男性が息絶え絶えに倒れていた

その光景を、明久と結華の二人がポカーンと見ていると

「あら、起きたのね」

と、薄紫髪の女性が声を掛けてきた

「あの……ここは？」

明久が問い掛けると、薄紫髪の女性は片手を上げて

「ちよつと待つてね。詳しい話をする前に」

と言うと、視線を三人の方に向けて

「ほらほら、あなた達、彼らが起きたわよ」

と、手を叩いた

それに男の子と女子は気づくと

「良かった。目を覚ましたんですね」

男の子は安堵した様子で、明久達に駆け寄り

「仕方ねえ、このくらいで勘弁してやるよ。ドクター」

赤髪の女子は不承不承と言った様子で、拳を下ろした

すると、ドクターと呼ばれた男性はノロノロと起き上がり

「ぐう……ノーヴェ……君は遠慮が無いね……」

と、苦言を呈した

すると、赤髪の女子

ノーヴェは、拳をゴキゴキと鳴らしながら

「なんなら、まだ殴ってやるよ」

と言うが、薄紫髪の女性が再び手を叩いて

「はいはい、いい加減にしなさい」

と、ノーヴェエを止めた

その光景を、明久達は呆然と見ていた

少しすると、ドクターと呼ばれた男性は椅子に腰掛け、男の子とノーヴェエ、薄紫髪の女性は近くに立って

「では改めて、私の名前はジェイル・スカリエツティ。皆からはドクターと呼ばれているよ」

「僕の名前は防人裕也です。裕也って、呼んでください」

「私の名前はウーノです」

「あたしはノーヴェエ」

と、明久達に自己紹介した

すると明久達は、頭を掻きながら

「僕は吉井明久です」

「あたしは常村結華だ」

と、自己紹介した

「吉井明久くんに常村結華ちゃんだね」

二人の名前を確認すると、スカリエツティは二人の顔を見て

「すまない！」

と、頭を下げた

「ちよ!? いきなりなんですか!?!」

「訳を教えてください！」

スカリエツティが突然頭を下げたので、二人は慌てて問い掛けた

「今回、私の実験に巻き込んでしまって、君達を呼び寄せてしまったよ
うなんだ……」

と、スカリエツティが苦い顔で言うと

「呼び寄せてしまった……?」

「あの……ここは、どこなんですか?」

二人が問い掛けると、スカリエツティは苦い顔で

「ここは、初音島だよ」

と告げた

「が、告げられた名前を聞いた二人は首を傾げて

「初音島? 結、聞いたことある?」

「いや、ないな」

と、不思議そうな顔をした

二人の言葉を聞いたスカリエツティは、眉をひそめて

「初音島を知らない？ 一年中、桜が咲く島で有名なのにかね？」

と聞くと、二人は首を振って

「聞いたこともないです」

「あたしもだ」

と言った

「どういうことだ……？」

スカリエツティが首を傾げていると、裕也が一步前に出て

「ドクター、ちよつと僕が聞いてみますね」

と一言断ると、二人の前に立つて

「魔法、デバイス、ミッドチルダ式、ベルカ式。これらのワードに聞き覚えはありますか？」

と、二人に聞いた

すると二人は、不思議そうに顔を見合わせて

「魔法って、あれ？ ゲームや本に出てくるやつのこと？」

「デバイスって、なんだ？」

と、首を傾げた

その二人の発言を聞いて、裕也は口元に手を当てると

「もしかして……すいませんが、お二人が通ってる学校はどこですか？」

と聞くと、二人は同時に

「文月学園」

と答えた

二人が答えると、裕也は視線をスカリエツティに向けて

「ドクター！」

裕也が声を上げると同時に、スカリエツティは空間投影式キーボードとウィンドウを開き高速タイピングを始めた

明久と結華の二人は空間投影式キーボードとウィンドウを見て、驚いていた

「ねえ、結。あれって、パソコン……だよね？」

「多分……でも、あんなん知らないぞ」

と話していると、スカリエツティは調べ終わったのか

「裕也くん……ビンゴだ」

「やっぱり……」

スカリエツティの言葉を聞いた裕也は、額に手を当てた

二人がどういう意味だろうと、首を傾げていると

「明久くん、結華ちゃん。君達が言った文月学園だが……存在しない」

という、二人にとっては衝撃的な発言をした

二人はスカリエツティの言葉を聞いて、驚きで固まり

「あ、あの……それってどういう……」

と問い掛けると、次に裕也が

「あなたがたが言った文月学園ですが、僕の知る限り、日本にはありません」

「そんな……」

裕也の言葉に二人が俯いていると、裕也が再度口を開いて

「それと気になったのですが、お二人が居たのは、西暦何年ですか？」

と問い掛けた

明久と結華は、裕也の質問に首を傾げて

「西暦2011年だけど、それがどうした？」

「今年だよね？」

と、裕也に返した

すると裕也は、首を振って

「これで決定的になりましたね……今年が西暦2051年です」

と再び、明久達にとって衝撃的な事実を述べた

「2051年!？」

「四十年も未来なのか!？」

二人が揃って驚いていると、裕也は首を振って

「正確には、並行世界の四十年後です」

と告げた

裕也の言葉を聞いた二人は、ポカーンとして

「えっと、どういうこと?」

と、明久が尋ねた

すると裕也は、両手を肩の高さに上げて

「まず、あなたがたの世界では、一つ文月学園が存在する。二つ初音島が存在しない。三つ魔法が存在しない。という、点があります」

裕也がそこまで言うと、二人は頷いた

「ですが、僕達の世界では、一つ文月学園は存在しない。二つ初音島が存在する。三つ魔法が存在する。という違いがあります」

と、そこまで言うと、結華があつと言って

「そうか……ifの世界か……」

と呟いた

すると明久が、困惑した様子で

「結、どういうこと?」

と問い掛けた

すると結華は、ため息を吐いて

「つまりはな、もしもの世界なんだよ。もしも文月学園が存在しなかったら、もしも魔法が存在したら、っていう可能性で、世界は分岐するんだよ」

と説明するが、明久の頭から煙が吹き出した

すると、結華は盛大にため息を吐いて

「もういい……簡単に言うと、パラレルワールドって解釈しとけ……」
「うん」

結華の説明に明久は頷くが、それを見ていたスカリエッティ達は苦笑いだった

すると、裕也が結華に近づき

「えっと、失礼なことを聞きますが、明久さんって……」
「バカだ」

裕也が問い掛けると、結華は即答した

「待って、結! お願いだから、バラさないで!!」

結華が即答すると、明久が涙ながらに懇願した

「悪い、アキ。フオロー出来ないんだ」

「なん……だと……!?」

懇願する明久から結華が視線を逸らしながら言うと、明久はガーンと打ちひしがれていた

なお、この光景を見ていたスカリエツィ達は後でこう語る

「いやー、見ていて微笑ましかったですね」

「互いのことを理解していましたね」

「この二人なら、大概の場所でも仲良く居られそうだ」

「まるで、夫婦みたいでした」

と……

IFストーリー 魔法とデバイスと家と

結華と明久の二人は、落ち着くとこの世界での魔法について説明を受けた

その1 この世界での魔法は、どちらかと言うと、オカルトよりも科学という面が強い

その2 魔法を使うには、デバイスが必要

その3 魔法には、ベルカ式とミッドチルダ式の二つが存在していること

その4 最も重要なのは、人が魔法を使うには、リンカーコアという器官が必要だということ

これらの説明を受けた後、二人は検査を受けた

検査とは言っても、別に二人の体調が悪いわけではない

二人が行う検査は、魔法適性検査である

この魔法適性検査により、二人の適性値がわかるのだ

そして、二人の検査結果が明記された紙をスカリエツティと裕也達が見つめていた

「これはこれは……」

「結構、凄いですね……」

スカリエツティと裕也の二人は、検査結果を見て驚いていた

明久と結華の二人は、なぜ裕也達が驚いているのかわからなかった

明久達が首を傾げていると、それに気付いた裕也が

「お二人の魔法適性ですが、かなり高いです」

「ああ、具体的には……まず、明久くんだが、魔力はAAランク。適性魔法は近代ベルカ。更には電気への変換資質も持っているね」

裕也の言葉に続けて、スカリエツティがそう説明した

すると、明久は首を傾げて

「変換資質って、なんですか？」

と問い掛けた

「変換資質というのはですね、簡単に言うと、魔法に属性を付与する能力ですね。例えば、斬撃を行う時に発動すると、明久さんの場合は電

撃付きの斬撃となります」

「それって凄いじゃん！」

裕也の説明を聞いた明久は、興奮した様子だった
「ええ。ですが、強力な分、非常に珍しい能力です。そうですね……一つの学校が四百人くらいだとしますと……大体、十数人居れば多いほうですね」

「ふへー……凄いレアなんだね」

裕也の説明を聞いた明久は、感嘆した様子で呟いた

「はい、その通りなんです。では、お二人に関しての説明を再開しますね。ドクター」

裕也が話を振ると、スカリエッツィは頷いて

「次に結華嬢だが、魔力はAA+ランクで適性魔法は近代ベルカ式。希少技能は炎熱変換資質だね」

「あたしは炎か……」

スカリエッツィの説明を聞いた結華は、腕組みしながら呟いた

「それでは、お二人のデバイスですが、こういった形と種類にしますか？」

とウーノが聞くと、結華が手を上げて

「デバイスにも種類があるんですか？」

と問い掛けた

「ああ、その通りだよ。一般的なストレージに、人格を有するインテリジェント。そして、武器型のアームドの大きくわけて、この三種類だね」

「なるほど……」

スカリエッツィの説明を聞いて、結華が唸っていると、裕也が手を上げて

「お二人は初心者ですし、更にはベルカ式ですから。アームド型のインテリジェントではどうでしょうか？」

と提案した

「ふむ、それが妥当だね」

スカリエッツィも裕也の提案に頷き、二人を見て

「二人に聞くが、得意な武器とかはあるかい？」

と問い掛けた

問い掛けられた二人は、揃って唸りだした

その時、ふと脳裏によぎったのは、自分達が学園で使役していた召喚獣の武装だった

明久は木刀で結華は鉄パイプだったが、それでは見栄えが悪いし、威力も低いだろう

それを発展させると、何になる？

「刀……かな？」

「あたしは……棒、いや、槍だな」

二人が呟くように言うと、スカリエッティは頷いた

「わかった。知り合いには、それで発注しておこう」

そのスカリエッティの言葉を聞いて、慌てた様子で手を上げて

「でも、あたし達にはお金が……」

二人はこの世界に来る前に、学園長室に寄っていたために、財布はカバンの中に入れておいたのだので、所持金はゼロだった

それを思い出した結華は、その事を言うと

「なに、構わないさ。さすがに、君達からは貰えないよ」

と、スカリエッティは首を振った

「次に帰る方法だが、君達の世界の座標が分からないからねえ……」

と、スカリエッティが困った様子で頭を掻いていると

「あの、この腕輪は使えませんか？」

と、明久が腕輪を外して差し出した

「む？ その腕輪は？」

スカリエッティが問い掛けると、結華も腕輪を外して

「この世界に来ることになった原因だと思います。腕輪を発動したら、なんか放電しだして、気づいたら、この世界に居ました」

その説明を聞いて、スカリエッティは腕輪を受け取ると

「ふむ……それだったら、コレはしばらく預かって調べさせてもらう。構わないかい？」

と、二人に問い掛けた

「構いません」

二人は即答だった

二人の心境としては、むしろ持つていつてくださ、と言ったところか

スカリエツティは預かった腕輪をケースに仕舞い、ウーノに渡した
ウーノは渡されたケースを持って、どこかに行った

「次は学校だな。二人とも、学生なんだろう？」

それまで黙っていたノーヴェが問い掛けると、二人は頷いて

「ええ、高校生でした」

「正確には、高校二年生です」

と返した

それを聞いたノーヴェは、どこからか、十枚くらいの紙を取り出して

「これは、この世界での中学生レベルの問題だ。学力テストのつもりで、やってみてくれ」

と、二人の前に置いた

明久は嫌な顔をしながら、結華は目をパチクリとしてからシャーペンを取った

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

記入が終わった二人は、問題用紙をノーヴェに返すと少し驚いた様子で

「これって、本当に中学生レベルの問題ですか？」

「正直言って、高校生レベルの間違いじゃあ……」

と言った

それを聞いたノーヴェは、問題用紙を見て

「やっぱり、こういうところでも違いが出たか……」

と呟いてから、その問題用紙をスカリエツティに渡した

渡された問題用紙を見て、スカリエツティは固まった

「結華嬢は普通だが……明久くん。君のは……」

スカリエツティが頬を引きつらせながら言うと、裕也が問題用紙を横から覗きこんで、スカリエツティと同じように固まった

「空白ばかり……」

結華の問題用紙はほとんどが埋まっているが、明久のは二割埋まっていれば良い方だった

スカリエツティと裕也が視線を向けると、明久はスツと目を逸らした

そんな明久を見て、スカリエツティは苦笑いを浮かべながら

「うーむ……これでは、本校には通わせられないな」

と呟き、それに同意するように裕也は頷いて

「ですね……」

そこで少し悩んで、手を打った

「付属なら、大丈夫なのでは？」

と提案した

「それが無難だね。確か、今年に音姫ちゃんが入学していたな？」

「はい。さくらさんに頼めば、音姫さんのクラスに入れてくれるかと」

「そうだな」

二人が頷いていると、明久達が慌てた様子で

「そこまでしてもらわなくても!」

「流石に、相手にご迷惑では？」

と言うが、裕也とスカリエツティは微笑んで

「大丈夫ですよ。こちらはあなた達の力になりたいんです」

「それに、さくらさんならば、迷惑とは思わんだろう」

と言った

それを聞いた二人は、数秒間唸ると

「すいません……」

「正直言うと、ありがたいですね……」

と頭を下げた

二人の言葉に、スカリエツティ達は満足そうに頷くと

「さくらさんには話しをしておいて、向こうからの連絡待ちとしておいて……」

「問題は、彼らの家だね……」

裕也に続いて、スカリエツティがそう言うと、明久達は手を上げて

「あの……それだったら、適度な家を用意してくだされば僕達で暮らせますので」

と言うが、スカリエツティは首を振って

「家を用意してやりたいのは山々なんだが、君達はこの世界では戸籍もないし、なにより、魔法に不慣れだからね……」

「魔法が使えないと不便な場合もありますからね」

スカリエツティと裕也がそう言うと、明久達は苦虫を噛み潰したような顔をした

そして、数秒間沈黙が続くと、裕也が

「僕の家になります?」

と提案した

「いいのかい?」

裕也の提案にスカリエツティが問い掛けると、裕也は頷いて

「幸いにも、部屋なら余ってますから。問題ありません」

と言った

裕也の言葉を聞いて、スカリエツティは数秒間黙考して

「ふむ……裕也君の家ならば、連絡も着きやすいか……頼めるかい?」

「任せてください」

スカリエツティの頼みを、裕也は快諾した

その後、明久と結華は裕也の先導で裕也の住んでいるアパートに向かった

そしてアパートに到着し、裕也が鍵を開けると

「なあ、本当にいいのか? 突然来たりしたら、ご家族に迷惑じゃ?」

と、結華が問い掛けた

それを聞いた裕也は、微笑むと

「大丈夫ですよ……それと、家族は……居ません……」

と言いつつ、それを聞いた二人は固まった

「家族が……居ない?」

「まさか、お前……」

二人が言葉に詰まっていると、靴を脱いだ裕也が振り返って「こつちです。付いて来てください」

と言ってから、歩き出した

明久と結華の二人は靴を脱ぐと、裕也の後について行った

そして着いたのは、仏壇だった

裕也は仏壇に入ると、黒い仏壇を開けて

「紹介します。両親と妹です」

と言いながら、仏壇に飾ってある写真を示した

「なっ……………」

「そんな……………」

まさか、裕也以外が死んでるとは思わなかった二人は目を見開いた

「両親は五年前に事故で、妹は去年に病気で死にました」

裕也はそう言いながら、線香に魔法で火を着けて立てた

そして両手を合わせて祈ると、体を二人に向けて

「それから僕は、一人暮らしです」

と言った

それを聞いた結華は、裕也に視線を合わせて

「お前は……………寂しく、ないのか？」

と問いかけた

すると、裕也は

「もう、慣れました」

と言いながら、微笑んだ

だが、結華と明久にはその微笑みが、酷く悲しいモノに見えた

そして、次の瞬間には、結華と明久の二人は、裕也を抱き締めてい

た

「あ、あの……………いきなり、なにを？」

まさか、いきなり抱き締められるとは思ってなかった裕也は、戸

惑った様子で二人に問い掛けた

すると、結華が声を震わせて

「なんでお前は……………泣かないんだよ……………泣いてもいいんだぞ？」

と言い、それに続くように明久が

「まだ会って間もないけど、僕達にはわかる。君が優しいってことく

らいはね……………」

と言った

すると裕也は、目を細めながら

「ありがとうございます……でも、僕には……」

そこから先は、かなり小声で喋ったために二人には聞き取れなかったが、こう言っていた

僕には……泣く権利なんて、無いんですよ

と……

面接と驚愕

明久と結華の二人がこの世界に来てから、二日経った
そんな夕食の席で

「え？ バイト、ですか？」

二人からの言葉を聞いて、裕也はキョトンとしていた
余談であるが、三人共に料理は出来るが明久と結華の二人はずば抜
けていた

それを裕也は、昨日の昼食と夕食で知った

それからは基本的に、一日交代で作るようにして今日は結華である

閑話休題

「ああ、裕也だつてバイトしてるんだろ？」

「まあ、僕の場合は必要に迫られてですが……」

結華からの質問に裕也がそう答えると、明久が

「流石に、お世話になりっぱなしっていうのも、気が引けるしね」
と言った

それを聞いた裕也は、うーんと軽く唸りながら

「別に気にしなくていいんですよ？ お二人は次元規模での迷子な
んですから」
と言った

が、二人は納得いかないようで

「いや、これは年上としての義務なんだ」

「子供だけに働かせるっていうのも、カッコ悪いしね」
と言った

二人の言葉を聞いた裕也は、これじゃあ引かないな。と分かり、し
ばらく考えると

「それじゃあ、僕が働いてる喫茶店ではどうですか？」
と提案した

「喫茶店？」

裕也の提案を聞いて、結華が首を傾げた

「はい。僕が働いてる喫茶店というのは、この初音島では有名な、喫茶

翠屋という喫茶店です」

と裕也が補足説明すると、明久が手をポンと叩いて

「ああ、そういえば、昨日来たフェイトちゃんが言ってたね」と納得していた

実は先日、裕也の友達である、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、ユーノ・スクライア、桜内義之、月村すずか達が勉強会という形で来たのだ

なおその時、明久と結華のことは死んだ両親のことを頼ってきた転校予定の人達と告げた

閑話休題その2

「はい。あ、ちなみに、喫茶翠屋というのはのはの実家が経営してるんですよ」

「なるほど、だから裕也が働けるのか」

裕也の説明を聞いた結華は、納得した様子で頷いていた

「はい、僕の境遇を知ってるので、受け入れてくれました」

裕也はそこまで言うのと、少し考えてから

「後で話をしておきますから、少し待っててくださいね」

と言った

それを聞いた二人は頷き、三人は食事を再開した

その光景はまるで、家族の団欒のようだった

食事が終わり、三人がそれぞれ順番にお風呂に入っのんびりしていると裕也が

「先ほど連絡しましたら、明日の昼過ぎに面接するそうです。ちょうど、バイトが欲しかったそうです」

と言った

それを聞いた二人は、グッと拳を握った

そして、寝る時に結華と明久の部屋から、明久の奇声と共にもの凄い轟音が響き、裕也が驚いていた

翌日、裕也は朝食を食べ終わると、昨日の轟音と天井の穴のことを近くの部屋の人達と大家に謝ってくると言っ制服に着替えて出ていった

それを聞いた二人は、深々と裕也に頭を下げた
そして数時間後、明久と結華の二人は商店街の外れにある喫茶翠屋
の前に来ていた

外から中を見た二人の印象としては、暖かい雰囲気のお店だった
二人は履歴書片手に、店のドアを開けた
すると

「いらっしやいませー!」

と元気な掛け声の後に、若い印象の女性が駆けよってきた
その女性を見た二人は、なのはちゃんのお姉さんかな? と、内心
で首を傾げた

「お客様は二名様ですか?」

と女性が二人に問いかけると、二人は首を振ってから

「いえ、僕達はバイトの面接に来ました」

「これ、履歴書です」

と言って、二人は履歴書を女性に差し出した

その履歴書を見た女性は、軽く手をポンと叩いて

「ああ! あなた達が裕也くんとなのはが言ってた二人ね!」

と言うと、店の奥を指し示して

「奥の個室に行ってくれるかしら? 私がすぐに行くから、待ってて
ね?」

と言った

それを聞いた二人は、示された個室に入って手前側の椅子に座って
待っていた

少しすると、先ほどの女性がお盆片手に入ってきた

女性はお盆から二つのカップを取ると、それをそれぞれ二人の前に
置いた

「はい。コーヒーで、良かったかしら?」

「あ、ありがとうございます……」

「大丈夫です……」

二人がそう言ってる間に、女性は奥側の椅子に座った

「では、これから面接を始めたいと思います」

女性は座ると、三つ目のカップをお盆から机に置いて、一口含んでからそう切り出した

「よろしくお願いします！」

女性の言葉を聞いて、二人は緊張した様子で頭を下げた
すると、女性は微笑んで

「そんなに緊張しなくていいわ。リラックスしてね？」

と言ってから、二人の前に置かれたコーヒーを示した
どうやら、飲んでみてね。というところか

二人は無言でカップを取り、コーヒーを一口含んだ

「こ、これは……」

「おいしい……」

コーヒーを飲んだ二人がそう零すと、女性は嬉しそうに
「良かった。土郎さんが喜ぶわね」

と言った

土郎というのは、コーヒーを淹れた人物なのだろう

そして、二人がコーヒーを飲んで驚いている間に女性は履歴書を確認
認していて

「えっと……吉井明久さんと常村結華ちゃんね。うん、第一印象は合格ね」

と言うと、二人に視線を向けて

「裕也くんからの紹介とはいえ、それとこれは別よ？」
と言った

「はい！」

女性の言葉を聞いて、二人は気を引き締めた
それから、約一時間後

「はい。これにて、面接は終わります。合格発表は、追って連絡するか
ら待っててね」

女性はそう言うと、二人の履歴書を持って立ち上がった
すると、二人も立ち上がり

「ありがとうございます！」
と頭を下げた

女性はニコニコと微笑むと、お盆にカップを三つ乗せて二人を伴って個室から出た

すると、店内は来た時より静かで二人の男性がカウンター越しに会話していた

その時、席側に立っていた男性が顔を向けると、もう一人の男性も気づいて

「おや、桃子さん。面接は終わったのかい？」

と問い掛けてきた

すると、問い掛けられた女性

桃子は頷いて

「ええ、終わったわ」

と言いながら、奥側に立っている男性にお盆を渡して

「ええ、詳しい話は後で話すわね。 土郎さん」

と言った

どうやら、先ほどのコーヒートを淹れてくれた人物らしい

そうと分かった二人は、土郎に

「コーヒー、ありがとうございます」

「おいしかったです」

素直に感想を述べた

すると、土郎は笑みを浮かべて

「口に合ったようで、良かったよ」

と言った

そのタイミングで、カウンター奥の通路からメガネを掛けた三つ編み特徴の女性が現れて

「お母さん。シュークリームの予備がもう少ないから、新しいの焼いてくれる？」

と言ってきた

（お母さん？）

三つ編みの女性が言った言葉を聞いて、明久と結華の二人が内心で首を傾げていると

「あら、そう。分かったわ」

と、先ほどまで面接していた桃子が頷いた

「え？ ……お母さん？」

明久が呆然とした様子で呟くと、桃子はポンと手を叩いて

「そういえば、自己紹介してなかったわね。私が喫茶翠屋の店長兼パティシエの高町桃子。なのはのお母さんです♪」

と名乗った

それを聞いた二人は、数秒間固まってから

「H A H A!？」

「お母さん若っ!？」

人体の神秘に驚愕していた

桃子の見た目は二十代前半か行っても後半くらいにしか見えなかった

そして、よく考えてみれば士郎はどうなのだろうか？

そう思った明久は、士郎に顔を向けて

「もしかして、士郎さんは……お父さんなのですか？」

と問い掛けた

すると、士郎は微笑みながら

「そうだよ。私が、なのは、恭也、美由希の父親の高町士郎だ。よろしくね」

と、肯定した

それを聞いた二人は、再び固まった

恭也というのは、カウンター奥側に居る男性だろう

美由希というのは、先ほど現れた女性だろう

二人の年齢は見た目からして、大体、明久達と同じか二十歳くらいだろう

だから、そこから考えると、桃子と士郎の年齢は最低でも、四十代の筈である

だがどう見ても、二十代後半か三十代くらいにしか見えない
アンチエイジングどころの話ではない

(高町家……恐るべし……)

二人はそう思いながら、帰宅した

そして明久達の話聞いて、裕也も納得した様子で

「高町家の皆さんって、見た目が若いんですね。恭也さんは二十一歳で美由希さんは十九歳だったかな？　でも、二人共、高校生くらいには見えませんよね……」

と言っていた

こうして、三人の一日は終わった

余談だが、その日の内に合格という連絡が来た

IFストーリー 初めてのバイト

バイトが決まった翌日

明久と結華、そして裕也の三人は喫茶翠屋に来ていた

それはもちろん、客ではなく店員としてである

「ではまず、僕が見本を見せますから、見ていてください」

「わかった」

「うん」

裕也の言葉に二人が返事をする、裕也は入ってきた客に近づいて「いらっしやいませ！ お客様は何名様ですか？ ……二名様ですね。こちらのお席をどうぞ」

と裕也は、二人の客を空いている席に案内すると、カウンターから二つの氷水の入ったコップとメニューを取って客の座った席に近づき

「お冷やとメニューです。お決まりになりましたら、お気軽に声を掛けください」

と言うと、恭しく頭を下げてから下がった

そして、二人の居る場所まで戻ると

「とまあ、こんな感じですね」

と言った

「なるほど……」

「勉強になるね」

手慣れた様子の裕也を見て、二人は感心した様子で頷いた

そのタイミングで

「すみませーん！ 注文いいですか？」

という、呼ぶ声が聞こえた

「はい！ ただいま！」

裕也は返事すると、カウンターの端から伝票を一つ取って近寄り

「お待たせしました。ご注文をどうぞ」

と促した

「私はこのシュークリームセットのミルクティーを」

「私もシュークリームセットで、飲み物はアイスコーヒーをお願いします」

二人の注文を裕也は、手早く伝票に書く

「では、繰り返しします。シュークリームセットがお二つ。飲み物はそれぞれ、ミルクティーとアイスコーヒーで、お間違いないですね？」

裕也が問い掛けると、二人の客は頷いた

「承りました。では、お持ちします」

裕也はそう断ると、カウンターまで近づき

「土郎さん、注文です。シュークリームセットが二つ、ミルクティーとアイスコーヒーです」

と言いながら、伝票をカウンターに置いた

土郎はそれを受け取ると、軽く伝票を一読して

「わかった。すぐに作るね」

という、奥に引っ込んだ

そして、戻ってきた土郎の手にはシュークリームが二つ有った

土郎はそれをトレイに乗せると、カウンター裏の棚に近寄り、カップとコップを取り出した

カップとコップを置くと、ティーポットに茶葉を入れてからお湯を入れて、コップには大量に氷を入れた

そして、大量に氷を入れたコップにサイフォンからコーヒーを注いだ

注がれたコーヒーは、氷により急激に冷やされていく

土郎は注ぎ終わると、キッチンと冷えているのを確認してからガムシロップとコーヒーフレッシュを取って、コップと一緒にトレイに置いた

すると今度は、ティーポットを取って、カップに琥珀色の液体を注ぎ冷蔵庫から牛乳を取り出して注いだ

そして、カップをトレイに置くと最後に角砂糖が入ったポットを置き

「裕也くん、出来上がったよ」

と裕也に取りやすいようにと、少し前に出した

「ありがとうございます」

裕也はそれを受け取ると、片手で持ち、注文した客の席に近寄り「お待たせしました。シユークリームセットのミルクティーとアイスコーヒーです」

と言いながら、丁寧に机の上に置いた

「ご注文は以上で宜しいですか？」

裕也が確認すると、二人の客は頷いた

「では、ごゆっくりどうぞ」

裕也は最後にそう言うと、静かに下がった

そして、明久と結華の所に戻り

「今のが、注文を受けた際の動きです」

「いやあ……」

「凄いね……」

裕也の動きを見ていた二人は、あまりの手慣れた動きに呆然としていた

裕也の動きは、二人にとっては遥か高みのものであった

「まあ、僕は慣れてますからね」

なお、二人の教育係は手が空いてる人がやることになっている

そして、今現在には手の空いている裕也が教えているという形である
年下の子供に教えられるという、なんともシユールな光景である
「それでは、最初に明久さんからしましょう」

と裕也が言った直後、ちようどドアが開いて女性客が二人入ってきた

服装からして、仕事の昼休みといったところだろう

「明久さん、行ってください」

「う、うん……」

裕也に促され、明久は緊張した様子で女性客達の方に向かった
「い、いらつしやいまちえっ……」

明久は思いつきり、舌を噛んだ

次の瞬間、裕也が明久の隣に立って

「失礼しました。この人は研修中でした、緊張しているみたいです」

と女性客達に謝った

すると、女性客達は明久のネームプレートの下に研修中という文字を見つけて

「あ、大丈夫ですよ」

「君も、あまり気にしないでね」

と返した

「では、僕が案内しますね。お客様は二名様で宜しいですね？　では、こちらへ」

そう言うと、裕也は明久とすれ違い様に

「明久さんは、奥に下がって休んでてくださいね」

と裕也が言うと、明久は口元を手で覆いながらコクコクと頷いた

そして数分後、一通りの対応を終えて裕也が戻ると、明久は分かり易いくらいに落ち込んでいた

そんな明久を見て、裕也は肩に手を置き

「明久さん、大丈夫ですよ。最初はあるなモノです」

と、慰めた

「だけど……」

「誰だって、最初はミスしますよ。大事なのは、繰り返さないことですよ」

裕也のその言葉を聞いて、明久は視線を裕也に向けた

「繰り返さないこと……」

明久が呟くように言うと、裕也は頷いて

「ええ……失敗を糧にして、次に活かす。それを繰り返して、少しずつ上達してけばいいんです」

と微笑みながら、明久に助言した

すると、結華と美由希が戻ってきて

「大丈夫だよ、明久くん」

「あたしもミスったから……」

美由希に続けて、結華が頬をポリポリと掻きながら告げた

「結も？」

「ああ……注文の品を間違えてた」

明久からの問い掛けに、結華が答えると

「一個隣の注文と間違えちゃったんだよね。まあ、お客さんが言ってくれたから、すぐに直せたけど」

と美由希が言った

「とまあ、こんなように誰でも失敗はありますよ。あ、美由希さん。ありがとうございました。結華さんを教えてもらって」

裕也がお礼を言うと、美由希は手をパタパタと降って

「大丈夫だよ。ちようど、私も暇になつてたし」

と言うと、明久の肩に手を置いて

「明久くん。誰にでも、ミスはあるし、苦手なこともあるよ」

と、語りだした

「美由希さん……」

「私だって、初めての頃は失敗ばかりしてたし。料理なんて、恭ちやんに気絶させられてまで止められるし」

美由希の話聞いて、裕也はどこか遠い眼をしながら明後日の方向を見ている

どうやら、なにかあつたようである

「でも、今はこうして上手に対応できるようになつてる。それはね、失敗の経験を活かしてるからなんだ」

「失敗の経験を活かす……」

明久が呟くように繰り返すと、美由希は頷いて

「うん……だからさ、明久くんも、めげずに何回も頑張ろうよ」

と、肩に置いていた手を明久に向けて差し出した

「美由希さん……はい！」

明久は美由希の手を掴むと、笑顔で立ち上がった

「頑張りましょう！」

裕也がそう言った直後、ドアが開いた

四人はそれを確認すると、頷きあつて

「」「いらっしやいませ！ 喫茶翠屋へようこそ！」「」

声をそろえて、客を迎えた

デバイスと驚愕の出会い

明久と結華がバイトを始めて数日後、スカリエツティから連絡が来た

内容は、二人のデバイスが完成したのと、芳野さくらが会いたいからしい

その連絡を受けて、明久と結華の二人は裕也の案内により風見学園へと向かった

「随分と大きい学園だね」

「だな。広さなら、文月学園より広いんじゃない？」

明久と結華がそう言うのと、裕也が

「風見学園は付属と本校の二つで構成されてまして、生徒の人数は八百人くらいは居ますね」

と説明した

裕也の説明を聞いて、二人はへえーと声を漏らして

「いわゆる、エスカレーター式なんだ」

「そりゃあ、広いわけだ」

と納得していた

そのまま裕也の案内されて、二人は風見学園の体育館へと入った
体育館には既に、五人の姿があった

その内四人は、二人も知っていた

左から順にスカリエツティ、ノーヴェ、ウーノの三人はこの世界に来た時に出会った

右端に居るのは、長い紫色の髪が特徴の女性で、名前は月村忍つきむらしのぶである

彼女は喫茶翠屋でフロアチーフを勤めているので、バイトの明久と結華は何回も会って会話している

だが、最後の一人

金髪碧眼の少女には見覚えは無かった

見た目からして、大体十代前半くらいだろうか

その少女の頭の上には、犬と思われるのが器用に乗っている

「やあ、お二人さん。待っていたよ」

「お久しぶりです」

「元気みたいだな」

上からスカリエツティ、ウーノ、ノーヴェの言葉である

忍は微笑みを浮かべながら、二人に対して手を振っている

そして、二人はこの時に気づいたが、忍の足下に一個のトランクケースが置いてある

恐らく、その中に二人のデバイスが入ってるのだろう

そして、全員が来たのを確認したからか、金髪碧眼の少女が手を叩いて

「OK！ 主賓も来たことだし、そろそろ始めよっか♪」

と言った

それを聞いて、スカリエツティ達は頷き

「では、忍嬢。彼らのデバイスを」

と言った

「はいはい」

スカリエツティの言葉を聞いて、忍は陽気に返答しながら足下のトランクを持ち上げて蓋を開けた

そして、中から取り出したのは蒼い腕時計と赤いブレスレットだった

忍は蒼い腕時計を明久に、赤いブレスレットを結華に手渡した

「それじゃあ、まずは名前から決めようか」

忍がそう言うと、二人は数秒間ほど唸ってから

「それじゃあ、僕はサーシャで」

「あたしは、バーンズかな」

と告げた

その直後、二人の手にあったデバイスが光り

〈名前認証しました。はじめまして、マスター〉

〈これから全力で、マスターをサポートするぜ〉

と応えた

「それじゃあ、セットアップしようか」

忍の言葉を聞いて、二人は頷いてから、デバイスを肩の高さに掲げた

〈へスタンバイ・レディ！〉

「セットアップ！」

愛機が促すのを聞いて、二人はキーワードを唱えた

その直後、二人の身体は光に包まれ一瞬にしてバリアジャケットが展開された

明久のバリアジャケットは蒼を基調としていて、腰に一本の刀がある（見た目はSAOのキリトの色違い）

結華のバリアジャケットは紅を基調としていて、手に長い槍を持っている（シグナムの色違いバージョン）

「明久くんのは、昔やってたアニメの主人公をモチーフにしてるの。結華ちゃんのは、知り合いのをモチーフにしたの」

忍がそう説明すると、二人は自分の姿を見てから、互いの姿を見た「なかなか似合ってるじゃねえか、アキ」

「そういう結こそ、似合ってるよ……だけど、そのバリアジャケット……」

結華の言葉に明久は返すと、明久は結華の姿を舐め回すように見つめた

「アキ？」

結華が首を傾げると、明久はコクリと頷き

「エロいね！」

と言いながら、右手の親指をグツと立てた

「はあっ!？」

明久の言葉を聞いて結華は驚愕したが、明久の目を見て気付いた明久の目は、マジだった

結華が知る限り、こうなった明久は性欲の塊である

衆人の視線の真ん前だろうが構わず、襲い掛かってくる

その証拠に、明久は手をワキワキさせながら、結華にジリジリと詰りめ寄ってきている

結華もそんな明久から離れるために、後ずさりしている
そんな時、明久の目がピカーンと光り

「結——」

某怪盗跳びで、結華に飛びかかった

その直後

「裕也の教育に悪いだろうが！」

という怒声と共に、明久の顔面に拳がめり込んだ

「おごっふっ！」

殴られた明久は、見事な放物線を描いて吹っ飛んだ

明久を殴り飛ばしたのは、何時の間にかバリアジャケットを展開して結華の前に現れたノーヴェだった

「どうやら、裕也を思つての行動らしい

「なにすんのさ！ 僕と結の愛の邪魔をしないでよ！」

吹っ飛ばされた明久は起き上がると、ノーヴェに抗議を始めた

「時と場所を考えろ！ ガキが居るだろうが！」

ノーヴェがそう言うと、明久はカッと目を見開き

「そんなの、僕には関係ない！」

と断言した

「この変態がああ！」

「最高のほめ言葉だ！」

ノーヴェの言葉に明久がそう返すと、二人は戦い始めた

「結華さん……苦労してるんですね」

裕也がそう言うと、結華は渋面を浮かべて

「言うな」

と言った

「やれやれ……先に始めてしまうとはね……まあ、データを取るつもりだったから構わないがね」

スカリエツティが困った風体で言うと、ウーノが

「明久くんのは既に、データ収集を始めてます」

と答えた

ウーノの言葉を聞いて、忍が裕也に視線を向けて

「それじゃあ、裕也くんは結華ちゃんの手をお願いなね」とお願いした

裕也はそれに頷くと、右手を肩の高さに上げて

「阿修羅、セツトアップ！」

〈セツトアップ！〉

キーワードを唱えて、一瞬にしてバリアジャケットを展開した

「裕也のは、全体的に黒いな」

裕也のバリアジャケットを見て、結華はそう言った

「そうですね。僕の魔力光に合わせたんです」

裕也はそう言うと、腰から刀を二本抜いた

「それでは、結華さん。僕がお相手します」

裕也が構えながら言うと、結華も構えて

「おうよ。お手柔らかに頼むぜ？ こっちは素人なんだ」

と言った

結華の言葉に裕也が頷くと、ウーノが右手を上げて

「それでは、試合開始！」

と宣言しながら、振り下ろした

その直後、二人は互いに駆け出した

それから十数分後、明久はノーヴェの一撃によりノビていて、結華は裕也に降参する形で模擬戦は終了した

「分かってはいたけど、裕也は強いなあ……」

「僕の場合は、経験が勝ってただけです。結華さんは、いい動きをしてみましたよ」

二人がそう会話している横では、スカリエツティと忍の二人がウーノの収集したデータを見ていた

「ふむ。なかなか良いデータが取れたね」

「ええ。後はこのデータを元に、遠隔微調整すれば大丈夫そう」

と話し合っていて、そんな四人をよそに

「おら、いい加減に起きろ」

ノーヴェは明久の腹部に蹴りを入れていた

「ぐふっ!? もう少しは、優しく起こしてほしい……」

「変態にはこれで十分だろ」

明久の抗議に、ノーヴェは嘆息混じりに返した

そして、明久は起き上がるとバリアジャケットを解除して、結華の隣に立った

裕也と結華は先にバリアジャケットを解除していたので、それに続いた形である

「その二機は間違いなく、二人専用機だから。大切に使ってね」

「はい、ありがとうございます！」

忍の言葉を聞いて、明久と結華の二人は頭を下げた
すると、金髪碧眼の少女が二人に近づいて

「それじゃあ、二人には風見学園に通ってもらうね」

と言いながら、茶封筒を差し出した

「えつと……」

「君は？」

二人は茶封筒を受け取りながら、首を傾げた
すると、少女はポンと手を叩いて

「ああ！ そういえば、自己紹介してなかったね。僕の名前は芳野さくら！ よろしくね、明久くん、結華ちゃん！」

と名乗った

「え……ええええええええ!!?」

少女、さくらの名乗りを聞いて、二人は驚愕した

なにせ、芳野さくらの名前は風見学園の学園長として知っていた

だが、目の前に居るのは少女にしか見えないのである

自分達が知ってる学園長というのは、やはりあの性格の悪い老婆だからどうしても、目の前に居る少女が学園長と言われても信じられなかった

「お二人の気持ちは分かりますが、さくらさんは間違い無く、風見学園の学園長さんですよ」

裕也はそう言いながら、二人に茶封筒の中を見るように促した

二人は裕也に促されて、茶封筒の中から《風見学園入学案内書》と書かれたパンフレットを取り出した

そして、その内の1ページには確かに、風見学園学園長、芳野さくら。と書かれている

「本当なんだな……」

「さくらさんって、何歳なんですか……?」

明久が呆然とした様子で問いかけると、さくらは口元を猫のようにして

「女性に年齢を聞くのは、マナー違反だよ。明久くん?」

と言うだけだった

そして、二人の身体測定が終わり

「それじゃあ、制服や教科書類は裕也くんの家に送るね」

というさくらの言葉に、裕也は頷いた

すると、二人が

「あのお、お金とかは……」

「今僕達、大して持ってないんです……」

と言うが、さくらはニヤハハと笑ってから

「スカリエツティくんから聞いたけど、二人は次元規模での迷子なんですよ? だったら、貰えないし貰わないよ」

と言った

それを聞いた二人は、思わず

(あの性悪ババアにも、見習わせてやりたい)

と思った

こうして、二人にデバイスが与えられて、二人が風見学園に通うことが決まった

異世界での初登校

明久達がデバイスを貰って数日後、裕也の家に制服と教科書一式が配達された

「さすがは、さくらさん。仕事が早いですね」

裕也は配達されたダンボールを見て、素直に感心していた

「しかも、本当にタダだよ……」

「あの学園長にも見習ってほしいわな……」

ダンボールの中身と添えられた紙を見て、明久達はそう呟いた

中に添えられていた紙には、《君達の一刻も早い、元の世界への帰還を祈るよ。byさくら》と書かれてあった

そして、二人は制服へと袖を通した

「あー……なんだか、中学生の制服を着るってのも、なんだか気恥ずかしいな」

「そうかな？ 僕としては、懐かしいって感覚だよ」

制服を着た結華と明久は、それぞれ感想を零した

そして翌日

二人は風見学園の職員室に来ていた

風見学園では、教師は付属と本校で一部共通しているので職員室は一つである

そして、二人が職員室に入ると

「あ、君達が学園長が言ってた編入生だね？」

と一人の男性教師が訪ねてきた

「はい、そうです。僕が吉井明久で」

「アタシが常村結華だ」

二人は名乗りながら、頭を下げた

「ん、よろしくね。君達の担任は、あの先生だから」

と男性教師が指差したのは、一人の女性教師だった

「ありがとうございます」

二人は男性教師に感謝すると、女性教師に近づいた

女性教師はタバコを啜えているが、火は着いておらず白衣を着てい

た

「あのー……」

明久が声を掛けると、女性教師は気づいたようで

「いらっさーい」

タバコを人差し指と中指で挟んでから、暢気に声をかけた

「私の名前は水越舞佳よ。よろしくね」

「僕は吉井明久です」

「アタシは常村結華だ」

水越先生が名乗ったので、二人も名乗った

すると、水越先生は二人に手招きして

「話はスカリエッツィ先生から聞いたわ」

と小声で言った

二人がその言葉に目を見開いていると、水越先生は微笑んで

「次元規模の迷子なんでしょう？ だったら、教師としては助けてあげなきゃね」

と言った

「ありがとうございます」

水越先生の言葉を聞いて、二人は素直に感謝した

その時、水越先生は壁の時計を見ると

「そろそろ時間だし、教室に行きますか」

と言った

「わかりました」

二人は頷くと、水越先生の後を付いて行った

そして着いたのは、付属1ー3と書かれたプレートが掛けられた教室だった

「私と呼んだら入ってね」

水越先生の言葉を聞いて、二人は頷いた

そして、数分後

『入ってー』

と促されて、二人は入った

「そんじゃあ、自己紹介よろしくね」

二人は頷くと、先に明久が前に出て
「僕の名前は吉井明久です。好きに呼んでください。特技は家事で
す」

と言うと、それに続き結華が

「アタシは常村結華だ。好きに呼んでくれ」

と言った

すると、生徒達は片手を上げたりしながら

「よつろしくー!」

「これからよろしく!」

と元気よく挨拶した

すると、水越先生が手を叩いて

「二人は訳あつて年上だけど、気にしないで接してやってね」

と言うと、生徒達は元気に返事をした

水越先生は生徒達の返事に満足げに頷くと、一人の生徒

大きなリボンを付けている女子を見ると

「朝倉、二人の面倒をお願いしていい?」

と頼んだ

すると、女子生徒こと朝倉音姫あさくらおとめは立ち上がり

「わかりました。お任せください」

と言った

そして、SHRが終わると二人は音姫に近寄り

「これからよろしく!」

「世話になるな」

と手を差し出した

「よろしくお願いしますね。吉井さん、常村さん」

「明久って呼び捨てでいいよ」

「アタシもだ」

音姫の呼び方を聞いて、二人はそう言った

二人の声音を聞いて、音姫は少し考え込むと

「では、明久さんと結華さんって呼びますね」

と微笑みながら言った

「まあ、いつか」

「さん付けも要らないんだけど……」

と二人は、納得することにした

「そういえば、二人はどこに住んでるんですか？」

「知ってるか分からないけど、防人裕也君って男の子の家だよ」

「あいつの両親を頼って来たんだ」

二人の説明を聞いて、音姫はポンと手を叩き

「ああ、弟くんが言ってたのって、二人のことだったんだ」

「弟くん？」

「誰のことだ？」

音姫の言った弟くんというのが分からず、二人は首を傾げた

「会ってる筈ですよ。桜内義之つて言います」

「ああ、義之くんか！」

「でも、なんで弟くんなんだ？」

「実は、弟くんとは一緒に住んでるんです」

二人からの問い掛けに、音姫はそう説明した

「あ、そうなんだ」

「従兄弟なのか？」

結華からの問い掛けに、音姫は首を振って

「いえ、随分前にさくらさんから預けられたんです」

「さくらさんが？」

明久の言葉に、音姫は頷いた

「はい。さくらさんも仕事で忙しいから、お爺ちゃんを頼ったんだと

思います」

「お爺ちゃん？」

「兄弟なのか？」

「そうみたいですよ？ さくらさんはお爺ちゃんのことを、お兄ちゃ

んって呼んでますし」

音姫の説明を聞いて、二人はへーっと呟いた

そのタイミングで、チャイムが鳴った

「あ、授業が始まりますよ」

「つと、そうだな」

「また後でね」

二人はそう言って、自分の席へと戻った

こうして、二人の異世界での学校生活が始まった

二人の少女

「ふへー……疲れた……」

初日の授業が全て終わり放課後になると、明久は背伸びしながらそう呟いた

「明久さん。途中煙が出てましたよね……」

「まあ、基本的にバカだしな」

世話を任されていた音姫の呟きに、結華は同意して頷いた

明久はそんな二人の言葉をスルーすると、振り返って

「で、今日はこの後バイトだよね？」

「ああ。そんじゃ、行きますか」

明久の言葉に同意すると、結華は机に掛けていたカバンを掴み立ち上がった

「バイトですか？ 学生なのに？」

バイトをするのが予想外だったらしく、音姫は二人を見ながら首を傾げた

「ああ。あたし達な、元々裕也の両親を頼りに来たから、あんまし金が無いんだ」

「それに、裕也くんが働いてるのに僕達が働かないのはカッコ悪いしね」

音姫からの疑問に対し、二人はそう返した

すると、音姫は納得した様子で頷き

「裕也くん、頑張ってますよね」

と、微笑みながら呟いた

その呟きを聞いて、二人は頷き

「だよね」

「まあ、少しは年上として頑張らないとな」

と言うと、ドアの方へと歩み出して

「じゃあね、音姫ちゃん」

「また明日な」

「はい！ また明日！」

と三人は別れた

そして下校していると、途中で一台のリムジンが明久達の隣に止まり窓が開いて

「こんにちは、明久さん、結華さん」

「こんにちは！」

リムジンの中から、すずかとアリサの二人が挨拶してきた

「あ、アリサちゃんにすずかちゃん」

「二人とも、本当にお嬢様だったんだな……」

リムジンに乗っている二人を見て、明久と結華は驚いた

二人が裕也の家に来た時、二人がお金持ちというのは聞いていたのだが、まさかリムジンまで有るとは思わなかったのだ

「フフフ……ビックリしました？」

「フフン、どうよ？」

すずかは微笑みながら、アリサは胸を張りながらそう言った

「いやあ……初めて見たよ」

「本当に長いんだな……」

リムジンを見た二人が呆然としてみると、運転席側のドアが開いて中から執事服を着た初老の男性

アリサの執事である鮫島さめじまが出てきて

「吉井様、常村様。お乗りください。喫茶翠屋までお送りします」

と言いながら、恭しく頭を下げた

鮫島の発言を聞いて、二人は驚きからか目を丸くしながら

「いやいや、悪いですよ！」

「すずかちゃんやアリサちゃんの送迎を優先してください」

と言った

すると、中に居たアリサとすずかが

「あたし達、これから習い事に行くんだけどね。翠屋の前を通るのよ」

「ついからですから、乗ってください」

と言った

そんな二人の言葉を聞いて、明久と結華は顔を見合わせると

「ここまで言われたら……」

「乗らないワケにはいけないね……」

と呟くと、視線を鮫島へと向けて

「すみません、ご好意に甘えさせてもらいます」

と、二人同時に言った

すると、鮫島は微笑みながら

「承りました。では、どうぞ」

と言いながら、ドアを開けて二人に中に入るように促した

そして、リムジンの内装を見て固まった

高級感漂う赤い座席に、車の中だと言うのにあるテレビや小型冷蔵庫

更に、天井には豪華なシャンデリアすらあった

それらを見て、二人が固まっていると

「お座りください。出発します」

と、鮫島が座るように促した

その言葉に二人は我に帰り、近くの座席に座った

座席はやはり高級らしく、手触りは素晴らしく座ると体が優しく包まれた

二人が座ると、リムジンは静かに走り出した

鮫島の運転技量が高いからか、リムジンの内装はあまり揺れていない

そして、改めて内装に二人が感嘆していると

「何か飲む?」

とアリサが問い掛けた

問い掛けられた二人がアリサの方へ視線を向けると、アリサは近くの小型冷蔵庫のドアを開けて、中の飲み物類を指差していた

小型冷蔵庫の中には色々な種類の飲み物が有ったが、どれもかなり高そうだと二人は思った

「いや、大丈夫だ」

「どうせ、すぐに翠屋に到着するだろうしね」

結華と明久がそう言うのと、アリサはさすがに視線を向けて

「さすがは何か飲む?」

と問い掛けた

問い掛けられたすずかは、顎に人差し指を当てて考えると

「それじゃあ、オレンジジュース貰える？」

と言った

すずかの言葉を聞いて、アリスは中からオレンジジュースのパックを取り出すと

「はい」

と手渡した

「ありがとうございます、アリスちゃん」

受け取ったすずかはお礼を言うと、パックにストローを刺して飲み始めた

そして数分後、翠屋の前にリムジンは静かに止まった

「どうぞ、吉井様、常村様」

鮫島は素早く降りると、ドアを開けて二人に降りるように促した

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

二人はそれぞれ、お礼を言いながら降りた

そして、二人が降りると鮫島は恭しく頭を下げてから運転席に戻りリムジンを出発させた

二人はそれを見送ると、翠屋に入った

そして、手早く制服を脱いでから翠屋のエプロンを着てホールへ出た

すると、土郎が近寄ってきて

「リムジンで出勤とは、豪勢だね」

と微笑みながら言った

土郎の言葉を聞いて、二人は苦笑いを浮かべながら

「たまたま、アリスちゃん達のお迎えと重なったんですよ」

「それに、好意を無碍には出来ませんし」

と言った

すると、土郎は微笑みを浮かべながら頷いて

「わかってるよ。運転席に鮫島さんの姿が見えたからね」

と言った

士郎のその発言を聞いて、二人は驚いた

「よく見えましたね……」

「運転席、完全に翠屋の前を通り過ぎてましたよね？」

と二人が言うと、士郎は

「目の良さには自信があるからね」

と言うと、カウンターの奥へと戻った

二人は士郎を見送ると、改めて高町家のデタラメさを思い出ししていた

それは、今から数日前

二人が翠屋で働いていた時、観光客らしい男達が働いていた忍や美由希に対してしつこくナンパをしていたのだ

もちろんのこと、二人はそのナンパ男達を軽くあしらっていた

だが業を煮やしたのか、男達は忍と美由希に対して手を上げたのだ
しかし次の瞬間には、忍の前には恭也が現れ男を投げ飛ばし、美由

希は霞むような速度で動き意図も簡単に男を制圧したのだ

その後、士郎が男達を軽く数メートル程店の外に放り捨てたのだ

その光景に二人は呆然としたが、裕也曰わく

『相変わらずの身体能力ですね』

とのことだった

どういふことかと裕也に聞くと、裕也はどこか遠くを見ながら

『桃子さんとなのはは例外ですが、士郎さん、恭也さん、美由希さんの

三人は魔法を使っても勝てません』

と言ったのだ

それを聞いた二人は、しばらくの間固まってしまった

そして、忍が笑みを浮かべながら

『戦鬪民族高町家』

と言い、裕也は同意を示すように頷いた

閑話休題

二人が思い出していると、来客を示すベルの音が二人の耳に入った
その音を聞いて、二人は気を引き締めて

「いらっしやいませ！」

「喫茶翠屋にようこそぞ！」
と接客へと向かった

渦中

明久達がこの世界に来て、早数ヶ月が経過した

それにより、明久達は大方、この世界での生活に慣れた

更に言うと、明久と結華は魔法戦闘の腕をメキメキと上げて、学生達も一目置く存在となった

そんなある日、事件が起きた

その日はたまたま、明久と結華はバイトも無く、学校帰りにブラブラしていた

すると、バス停の所にアリサとすすかが居た

「あれ、アリサちゃんとすすかちゃん？」

「あ、こんにちは」

明久が気づいて声を掛けると、二人は顔を向けて頭を下げた

「珍しいな、二人がバス停に居るなんて」

「鮫島さんは？」

明久と結華が問い掛けたのには、訳がある

普段、アリサとすすかは帰りに鮫島がリムジンで学校まで迎えに来るのだ

だが、近くに鮫島の姿もリムジンの影すらない

「今日、リムジンが不調で工場に持っていくって、鮫島から連絡があったのよ」

「ですから、今日はバスで帰ろうってことにしたんです」

「なるほどな……」

二人の説明を聞いて、結華が納得していると明久が

「あ、ジュース飲む？ 奢るよ？」

と言いながら、近くの自販機を指差した

「いいんですか？」

すすかが問い掛けると、明久は微笑みながら頷いて

「たまには、年上らしいことでもいいしね」

と言った

すると、アリサが嬉しそうに

「それじゃあ、あたしはリンゴジュース！」

「言い、すずかはおずおずと」

「わたしはオレンジジュースを……」

と言った

「ん、わかった。結はウーロン茶だね？」

「ああ」

結華が頷くと明久は頷いて

「ん、了解。待ってて」

と言つて、自販機目指して駆け出した

そして、自販機に到着すると財布を取り出そうとした

その時、車のスリップ音が響き渡り

「なにすんのよ！」

「は、離してください！」

という、アリサとすずかの声が聞こえた

明久が慌てて振り向くと、そこには一台のバンが止まり数人の男達
がアリサとすずかを捕まえようとしていた

「おい！ お前ら！ その手を離せ！」

結華はそう言いながら、デバイスを展開しようとした

だが、一人の男が黒い物体

スタンガンを握り

「黙ってろ！」

と声を張り上げて、結華に押し付けた

次の瞬間、結華の体はビクンと痙攣してから力が抜けたように倒れ
た

「結！ アリサちゃん！ すずかちゃん！」

明久が三人の名前を呼びながら駆け出すと、男達は慌てた様子で

「ついでだ！ その女も連れてくぞ！」

「了解！」

と言つて、結華も車に押し込むと急発進させた

「くそっ！ サーシャ！」

《バーンスのGPS、追跡出来てます》

明久が名前を呼ぶと、サーシャは明久の前にウィンドウを開いてマップと光点を表示させた

「追うよ！ セットアップ！」

《セットアップ！》

明久はバリアジャケットを展開すると、空を飛んでいった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「……………」

《間違いありません。GPSもここを示してます》

明久の目の前には、シャッターが降りた建物があった

雰囲気から見て、どうやらスパーだったようだ

そして、明久は周囲を回っていると、一カ所のドアが開いていることに気づいた

「ここから入れそうだ……よし！」

明久は気合いを入れると、静かに中に入った

どうやら電気は通ってないらしく、中は暗かった

だが、廊下の奥の部屋のドアが薄く開いていて、そこから明かりが漏れていた

明久は静かに歩み寄ると、隙間から中を見た

そこには、数人の男達の他に白い法衣を着た人物達が数人居て、結華達は中央付近で縛られていた

「なにを喋ってるんだろ……」

どうやら何か話し合っているらしく、ボソボソと聞こえるが詳しくは分からなかった

「どうしようかな……」

明久としては今すぐにでも、三人を助けたかった

だが、明久は直感的にあの白い法衣の人物達は危険だと察した

明久もかなりの修羅場を経験しており、過去には銃火器を持った強盗と戦った経験がある

だが、その強盗達よりも危険な雰囲気とその白法衣の一団から感じた

「ありや……人を殺すことも厭わない連中かも……」

明久はそう呟くと、どうしようかと悩み始めた
その時だった

奥側の窓ガラスを突き破って、黒い人影が二人ほど突入してきた
すると、それに驚いた全員の視線がそちらに向いた

「今だ！」

その隙を突いて、明久は一気に突入した

「いっっしゃあー！」

掛け声と共に、明久はサーシャを一閃し結華達に近かった二人を倒した

そして直ぐさまに結界を展開すると、三人に近寄り

「大丈夫!？」

と、三人の口のガムテープを優しく剥がした

「明久さん……」

「お世話になっちゃったわね……」

「気にしないで」

申し訳なさそうにアリサとすずかが言うと、明久は微笑みながらそう言った

そして、結華に視線を向けて

「結……無事で良かったよ……」

「助かったよ……アキ」

と話すと、明久は結華を抱き締めた

その時だった

「ギャアアアアアア!？」

「た、助け!？」

という男達の叫び声が聞こえた

明久は反射的にアリサとすずかの視線を塞ぐように、そちらに体を向けた

するとそこでは、結華達を誘拐した男達が白法衣の一団により殺されてきた

「なっ……」

「仲間を……殺したのか？」

明久は驚きで息を呑み、結華は驚愕していた
そして、明久は更に驚愕した

先ほど突入してきた二人だが、かなり小柄だったのだ
頭から黒いマントを被っているので、性別は分からない
だが、身長はアリサやすずかと大差ないと分かった

そして、突入してきた二人はそれぞれ、刀を二本と戦斧を持っていた
た

そして、明久は気づいた

「戦斧はデバイスだけど……あの刀は本物だ！」

そう、一人が持っている刀は本物の日本刀だった

しかも、白法衣の一団が持っている武器も本物で、その証拠に鮮血
が滴り落ちていた

「てめえら、なんで仲間まで殺しやがった？」

そう言ったのは戦斧使いで、それで戦斧使いが男だと分かった

「仲間？ 笑わせるな。あいつらは道具に過ぎない……」

「道具だ……？」

白法衣の男の言葉を聞いて、戦斧使いは少し苛立った様子で問い掛
けた

「そうさ……使い終わったなら、捨てるのは当たり前だろ？」

明久はその言葉を聞いて分かった

あの白法衣達は、他の人間を道具位にしか見ていないと

「あいつら……なんなんだ？」

言い様のない不安に駆られて、明久は思わず呟いた

「確か……インデックスって呼ばれてたな……」

「インデックスって……禁書目録？」

結華の言葉を聞いて、明久は疑問に思った

禁書目録と言えば、いわゆる魔導書の名前だったはずだ

なぜ、そんな名前と呼ばれていたのか

「相変わらず、ゲスだな……このモグラ共が……そうやって、てめえら
は何人殺してきやがった!？」

戦斧使いは怒りを露わに、持っていた戦斧を突きつけた

すると、白法衣達

インデックスの一人が笑い

「貴様ら異端者など、人にあるものか……真に人と呼べるのは、我らインデックスの使徒のみよ！」

と高らかに宣言した

「使徒ってことは……教会かなんかか？」

インデックスの告げた使徒という言葉聞いて、結華は首を傾げた
「確かに……異端者って言葉は、教会とかでよく聞くね」

結華の言葉を聞いて、明久は同意した

「この……っ！」

戦斧使いが怒りで武器を構えると、それを日本刀使いが遮った

「こいつらと押し問答するだけ無駄だ……」

日本刀使いはそう言うと、刀を突きつけて

「我ら守護者部隊……貴様らを断罪する……」

と宣言した

「守護者部隊って確か……」

「最近噂で聞く、私設武装組織か？」

明久達は学校で最近、凶悪犯罪などに出現する武装集団のことを噂で聞いたのだ

その武装集団の名前が、通称守護者部隊だった

守護者部隊は凶悪犯罪が起きた場合、颯爽と現れては犯罪者を断罪し被害者達を救う現代のヒーローと呼ばれていた

だが、それと同時に謎にも含まれていた

誰が所属しているのか、どれだけの規模なのかを誰も知らない

更に言えば、守護者部隊のほうが悪者だ

と声高に叫ぶ者も居る

犯罪者を武力で鎮圧するなんて、と

だが、守護者部隊のおかげで助かった

という声のほうが悪者に多い

なにせ、守護者部隊は常々

《救われぬ者達に救いの手を。救いを求める者達に救いの手を》

と言っている

そして、自身を危険に晒してまで被害者達を助けに突入する

まさしく、ヒーローのようだ

「守護者部隊とインデックス……」

明久はインデックスと守護者部隊の双方を見ると、そう呟いた

この時、明久達は気付かない内に、守護者部隊とバチカン法王教皇庁禁書目録聖省、通称インデックスとの戦争に巻き込まれたのだった

救出戦、前篇

謎の人影が入ってきて、僅か数分で戦いが始まった

しかも、自分達とは別次元の戦いが

「異端者が！　ここで朽ち果てる！」

「はっ！　寝言は寝てほざけ！」

インデックスが放った魔法を、斧使いは斧を盾代わりにして防いだ
「なぜだ！　なぜ貴様らは無闇に悲しみを振りまく！」

「我々の理想に賛同出来ぬのならば、貴様らは人を名乗る資格などない！」

「ふっぎけるなあああ！」

インデックスの言葉を聞いて、刀使いは怒りの雄叫びを上げた

「ダメだ……僕達じゃあ、手に負えない……」

戦闘を見ていた明久は、呆然と呟いた

明久の目には、全員の動きが全く捉えきれていなかった

明久とて、Aランク超えの魔導師である

だが、目の前で起きてる戦いは完全にSランク超えの戦いだった
互いの動きを先読みして、必殺の一撃を放っては避けている

明久は、自分にあれほどの動きが出来るのか？　と自問自答する
が、答えは否だった

あれは完全に別次元の戦いだった

互いの命を刈り取るうとする、命懸けの戦い

それが目前で起きている

しかも、それを行っている片方は自分よりも幼い子供だ

それを考えると、情けなく思った

「僕は……弱い……っ！」

明久が悔しくて拳を握り締めていると、結華が心配そうに見つめて

「アキ……」

と明久の名前を呼んだ

その時だった

「貴様らこそ、なぜそんな化け物を守る？」

とインデックスの使徒が言うと、すずかの体が震えた
「化け物……?」

明久が呆然と呟くと、すずかは頭を両手で抱えて
「やめて……」

と呟いた

「いいか? そこに居る少女はな人間じゃない!」

インデックスはすずかを指差しながら、そう言った

「やめてよ……!」

インデックスの言葉に、すずかは泣きそうになりながら呟いた

「いいか!? そこに居るのはな……!」

「やめてよおお!」

インデックスの言葉を遮るように、すずかは泣き叫んだ

「そこに居るのは、夜の一族という吸血鬼! 化け物なんだよ!」

「やめてえええ!」

インデックスのその言葉に、すずかは涙を流した

「それでも、貴様らはそこに居る化け物を守るとでも!」

インデックスはそう言うと、笑い声を上げた

その直後、そのインデックスの胸部を刃が貫いた

「がっ……」

そのインデックスは口端から血を流すと、崩れ落ちた

「それがどうした……?」

刀使いがそう言うと、インデックスの使徒は眉をひそめた

「なに?」

「その程度のこと、なにがどうなる?」

刀使いがそう言うと、インデックスの使徒はすずかの方に視線を向
けた

そこでは、アリサがすずかを抱き締めていた

「すずか、ごめんね……」

「アリサ……ちゃん?」

アリサの言葉に、すずかは呆然とした

すると、明久がすずかの頭に手を置いて

「夜の一族だから、なに？　　すずかちゃんは、すずかちゃんでしょ？」
と語り掛けた

「そうだぜ？　　すずかはすずか。それ以上でも、それ以下でもない」
明久が続いて、結華がそう言った

「明久さん……結華さん……！」

明久と結華の言葉を聞いて、すずかは嬉しそうに涙を流した

「さあ、断罪の時だ……！」

刀使いはそう言うと、右手の刀を突き付けた

その時、明久はその刀使いの姿がある少年と重なった
自分達と一緒に住んでいる、眼帯を着けた少年だった

「裕也……くん？」

明久がその名を呼んだ瞬間、刀使いの動きが僅かに鈍った

だが、その鈍りはこの場では致命的な隙だった

僅かに動きが鈍った瞬間、刀使いに対してインデックスの魔法が直
撃し爆発が起きた

「裕也!？」

その光景を見て、斧使いは思わず刀使いの名前を呼んだ

「裕也!？」

呼ばれた名前に結華が驚愕していると、爆煙の中から人影が飛び出
してきた

飛び出してきた人影は、明久達の近くに着地した

それは間違いなく、明久と結華の居候先の家主

防人裕也だった

しかし、裕也は先の被弾で顔の左側を血で濡らしていた

「裕也くん！」

すずかが心配そうに呼ぶが、裕也は反応しなかった

すると、アリサが何かに気づいて斧使いに視線を向けて

「まさか、そっちは……蓮華？」

と呟いた

その時、斧使いの動きが僅かに鈍った

その直後、インデックスの使徒が明久達に杖を向けた

その後

「明久さん！ 結華さんを！ 蓮華はアリサを！」

と裕也は叫ぶように言っつて、すずかを抱きかかえた

それに続くように、明久は結華を抱きかかえて、斧使い

蓮華はアリサの前に片膝を立てて斧を盾にした

その直後、インデックスの使徒は膨大な数の魔力弾を発射した

明久と裕也はそれぞれ、結華とすずかを抱きかかえて走り出した

「裕也くん！」

「喋ると舌を噛むぞー！」

裕也はそう言っつと、所狭しと、空間内を駆け回った

その動きは一般人の範疇を超えており、同い年の少女を抱えている

というのに同じ速度を維持している

明久は柱の影に隠れて、結界を張っていた

だが、裕也は立ち止まることなく駆け回っていた

「クハハハハハッ！ 逃げるだけか？ 異端者の猿が!!」

インデックスがそう告げた直後、二人が割つて突入してきた窓の向

こうが一瞬光った

その直後、魔力弾がその使徒の胸部を撃ち抜いた

「な……に……う？」

使徒は何が起きたのか理解出来ないと言った表情を浮かべると吐

血して倒れた

それを確認すると、裕也はようやく足を止めた

「終わったか……」

裕也はそう言っつと、すずかをゆつくりと降ろした

「明久さん、結華さんは無事ですか？」

裕也が声を掛けると、明久は結界を解除して

「僕達は大丈夫！」

「無事だ！」

と二人で無事を教えた

二人の無事を確認すると、裕也は続いて蓮華のほうに視線を向けて

「無事に決まっつてるだろ」

「大丈夫よ！」

と蓮華に続いて、アリサも無事を告げた

裕也は頷くと、すずかに視線を向けて

「ごめんね……助けるのが遅くなった……」

と謝った

すると、すずかは首を振って

「私は大丈夫……それよりも、裕也くん。傷が……」

と裕也の頭に手を伸ばした

「僕は大丈夫……これぐらいじゃあ、死なないから」

裕也はそう言いながら、すずかの頭を撫でた

すると突如として、裕也はすずかを抱き締めてグルリと回った

その直後、裕也に対して魔力弾が直撃し裕也は倒れた

救出作戦 後編

「裕也ー!」

「裕也くん!?!」

魔力弾を受けて倒れた裕也を見て、蓮華達は思わず声を上げた

「裕也くん……裕也くん!!」

すずかは自分を庇って倒れた裕也を見て、涙を流した

「バカめ……化け物を守って死ぬなんてなあ!」

そう言ったのは、先ほど魔力弾を胸部に受けて倒れた使徒だった

よく見れば、胸部にプロテクターがしてあり、それが致命傷を防い

だようだ

「くそっ! プロテクターなんて着けてやがったか!」

蓮華は悪態を吐きながら斧を構えて、その使徒に突撃しようとした

だが、使徒は一瞬にしてすずかに近づくと

「動くな!」

とすずかの髪を掴んで、首筋に魔力刃を突き付けた

「動けばどうなるか、わかるよなあ!?!」

使徒のその言葉に、蓮華達は動きを止めて歯軋りした

「クハハハハ! そのままでジツとしていろ! 私が逃げるのを、そ

こで見」

使徒が笑いながらそこまで言った時、使徒の胸部から刃が現れた

使徒は驚愕の表情を浮かべると、ギギギと背後に視線を向けた

そこに居たのは、先ほど倒れた筈の裕也だった

「貴様……私の魔力弾の直撃を……受けた筈……!」

「あの程度で死ぬと思ったのなら、大間違いだ……それに、化け物という

のはな……」

裕也はそう言いながら、刀を捻って向きを縦から横に変えた

「お前や僕みたいに、人を傷付けることを躊躇わない存在を言うんだ

!」

裕也はそう言うと、躊躇わずに刀を振るって切り裂いた

「ガハッ……」

使徒は口から大量に血を吐き、振るわれた刀と同じ方向に倒れた
そして、倒れそうになったすずかは刀を手放した裕也が支えた

「それに、「一番の化け物は僕みたいないな存在だよ……」

「……え？」

裕也の眩きを聞いてすずかが首を傾げていると、裕也の体がゆつくりと傾いた

「裕也くん！」

すずかは支えようとしたが、間に合わずに裕也は倒れた

倒れた裕也の背中は血でベツトリと濡れていて、すずかの両手が
真っ赤に染まった

「裕也くん！ 裕也くん!!」

すずかは涙を流しながら、裕也の名前を呼び掛けた

だが、裕也は反応しない

「裕也くん!!」

すずかが名前を呼び掛けながら揺らしていると、蓮華が近寄り

「下手に揺するな！ 出血が激しくなる！」

とすずかを止めた

「蓮華くん！ ……でも！」

「待ってる！」

蓮華はそう言うと、耳元に手を当てて

「ドクター！ 裕也が負傷した！ レベルは3！ 大至急、治療の必

要を認む！」

と声を上げた

その十数秒後、近くに魔法陣が浮かび上がり赤毛で巨大なボードを
装備した少女

ウエンデイと小柄な銀髪の少女、チンクが現れた

チンクは倒れている裕也に駆け寄ると、傷口を見て

「これは酷い……ウエンデイ！」

とウエンデイを呼んだ

「おうッス！」

ウエンデイは駆け寄ると、裕也を背負ってボードに乗った

「IS、エリアル・レイブ発動！」

ウエンディがそう言うのと、ボードは浮かび上がって裕也達が突入してきた窓から出ていった

「あ、どこに……?」

明久が問い掛けると、チンクは使徒達が死んでいることを確認しながら

「ドクターの診療所だ」

と答えた

「ドクターって、もしかして、スカリエツティ先生のこと?」

「でも、あそこってそんな医療設備って、あったか?」

明久と結華が首を傾げていると、蓮華が立ち上がり

「極秘のスペースが有るんだ……一応、これから事情聴取が始まるが、その後にドクターの診療所に来てくれ」

と言った

「蓮華、いいのか?」

チンクが問い掛けると、蓮華は頷いて

「こうなったら、仕方ねえさ」

と言った

「あんたら、何を隠してるのよ?」

アリサがジト目で問い掛けると、蓮華は肩をすくめて

「ちゃんと話すから、待っててくれや」

と告げた

こうして、誘拐事件はひとまず幕を下ろした

入り口

警察の事情聴取が終わり、明久達はスカリエッティの診療所へと向かった

しかし、診療所は休みらしく暗かった

「休みみたいだけど……」

と明久が中を覗いていると、ドアが開いて

「裏に回ってくれ」

とチンクが言った

チンクの言葉に従って、明久達は裏口へと回った

そして中に入り、チンクの案内に従って付いていった

「なあ、一体どこに行くんだ？」

結華が問い掛けるが、チンクは無言で進んだ

そして入ったのは、ロッカールームだった

「ロッカールーム？」

「一体、どうして……？」

アリサとすずかが不思議そうにしていると、チンクは《使用禁止》という札が貼られたロッカーに近づいて鍵を使って開けた

そして、ロッカーの中が階段になっているのを見て、明久達は目を見開いた

「付いて来い」

チンクは短く言うと、階段を降りていった

明久達は一回顔を見合わせるが、すぐにチンクの後を追って入った
そして、一分近く降りていくと、先に光が見えた

「光だ」

「本当」

アリサとすずかが声に出した数十秒後、明久達は光を潜り抜けた
そして明久達の視界に入ったのは、広大なスペースと大きなモニターだった

「ここは……」

「まるで、どこかの司令部みたい……」

すずかは呆然として、明久がそう言うと、結華がハツとして

「まさか……守護者部隊の司令部？」

と呟いた

「え？」

明久が不思議そうにしていると、パチパチと手を叩く音がして

「見事な観察眼だね。結華嬢」

と、スカリエツティが現れた

気づけば、明久達の周囲にウーノ達も立っていた

「ここは守護者部隊の初音島支部さ……そして私が責任者で、ウーノ達はこここの所属の隊員という扱いき」

スカリエツティの説明を聞いて、明久達は周囲に立っているメンバーを見回した

その中に蓮華の姿はあったが、裕也の姿は無かった

「あの……裕也くんは……？」

すずかがおぼろげと問い掛けると、スカリエツティは指を鳴らした
すると、スカリエツティの背後の壁が開いて、手術衣を着た裕也が入ったポッドが出てきた

「裕也くん！」

「裕也！」

すずかとアリサ、明久は駆け寄るが、結華はスカリエツティに視線を向けて

「裕也も守護者部隊なんだよな？」

と問い掛けた

すると、スカリエツティは頷き

「ああ……裕也くんは初音島支部では、随一の戦闘能力を有している隊員だよ」

と答えた

すると、結華は拳が白くなるほど握り締めて

「だからって、子供を戦わせていい理由にはならねえだろ!? 蓮華だってそうだ！ なんて、小学生が殺し合いしてるんだよ！」

と怒鳴った

根が優しい彼女だからこそ、どうしても譲れなかった
戦いというのは、本来は大人がすること、子供は守られるべき存
在である

その子供が、いくら戦闘能力が高いからといっても、殺し合いの戦
場に投入されているのが、どうしても許せなかったのだ

「彼らが自ら望んだんだよ」

「……なに？」

スカリエツティの言葉を聞いて、結華は思わず首を傾げた

「彼らが自ら望んだんだ……皆を守りたいからってね」

スカリエツティが再び説明すると、結華はギリッと歯を鳴らして

「望んだからって、殺し合いの戦場に投入すんなよ！　なんで、裕也達
なんだよ！　あんたが戦場に出ればいいじゃないか！」

「ゆ、結、落ち着いて」

怒鳴り散らしている結華を明久が必死に宥めようするが、結華は明
久を振り払って

「皆を守りたいって言ったからって、なんで殺し合いなんだよ！　な
んのために非殺傷設定に出来る魔法が有るんだよ！　それで十分
じゃねえか！」

結華がそう言うのと、蓮華が近づいてきて

「非殺傷設定の魔法じゃあ、あいつらは倒せないんだ……インデック
スの奴らはな」

と言った

「なに……？」

「そういえば、インデックスって何者なの？」

結華は眉をひそめて、明久は首を傾げた

すると、スカリエツティが投影式キーボードを操作して、モニター
に映像を表示させた

《バチカン法皇教皇庁禁書目録聖省　通称、インデックス》

「バチカン法皇教皇庁禁書目録聖省……？」

「それで、インデックス？」

モニターの文章を見て、結華と明久は首を傾げた

バチカンは二人も知っている

世界的宗教の総本山である

「そのインデックスが、何をしてるのさ？」

「まあ、ただの宗教家じゃないのは、あいつらで分かるが……」

二人揃って首を傾げていると、ウーノが前に出て

「インデックスは、世界支配をしようとしています」

と告げた

「……は？」

「世界支配……？」

明久と結華は理解不能といった表情を浮かべて、首を傾げた

「そして、その為ならば……誘拐や殺しも厭わない」

「現に、幾つかの遊牧民や街が消えた……」

ウーノとスカリエッティが立て続けに説明すると、アリサが

「まさか……カナダのアガサス町が無くなってたのも、そうなの？」

と問い掛けた

「アガサス町……ああ……確か、二年前だったか。インデックスが攻め込んできた」

スカリエッティがそう言うと、アリサはその場で座り込んだ

「アリサちゃん!？」

さすがが心配そうに駆け寄ると、アリサは涙を流しながら

「あの町の人達が、何をしたって言うのよ……優しくって、暖かかったのに……なんで……!」

と叫んだ

「インデックスは自分達が異端と認めた魔法が存在する場合、徹底的に蒐集するために、町一つは簡単に消す」

泣いているアリサをさすがに慰めて、明久と結華は驚愕していた

インデックスが、そんなことをしていたのかと

「裕也は……ある意味、一番の被害者だ」

そう言ったのは、裕也のポッドの近くに立っていたノーヴェエだった
「どういふこと？」

明久が問い掛けると、ノーヴェエは浮かんでいる裕也を見てから

「裕也はな……家族を奪われて、身体を作り替えられたんだ」と告げた

告げられた残酷な真実

「どういう……ことですか？」

ノーヴェの言葉が信じられなかったのか、すずかは呆然とした様子で問い掛けた

するとノーヴェは、一回目を閉じてから、ゆっくりとした口調で

「裕也の家族の死んだ理由、聞いたか？」

と問い掛けた

すると、アリサが少し不思議そうな表情をしてから

「確か、両親は事故で亡くなって、妹は病死って聞いたわよ？」

と言った

アリサの解答を聞くと、ノーヴェは頷いてから

「それは、表向きの死因だ。本当はな、産みの両親は殺されて、育ての両親は戦って死んで、妹は……裕也が殺した」

ノーヴェの言葉を聞いて、明久達は固まった

「そんな……」

「そんなのって……」

すずかとアリサは呆然とした様子で固まり、明久と結華は目を見開いた

「裕也くんの父親は、インデックスの使徒だったが、外部の女性と結婚し裕也を産ませたことで、背信者として殺されたよ、女性も一緒にね」

スカリエツティはそう言うと、一拍置いてから

「そして、育ての両親は追撃してきた使徒と交戦し死亡……そして、妹の美樹ちゃんは操られて戦わされて、裕也くんが殺した……」

スカリエツティがそこまで言うと、結華は拳を握り締めて

「……んだよ、それ」

と呟くと、スカリエツティを睨みつけて

「ふざけんな！……なんだよ、理不尽過ぎるじゃねえか！」

と怒鳴り出した

「裕也が何をしたってんだよ!?!」

と怒鳴りながらスカリエツティに近寄ろうとしたが、それを明久が

なんとか制した

「そうだね……本来なら、私達のような大人が戦うべきなんだよ」

スカリエツティはそう言いながら、顔を俯かせた

すると、なんとか結華を宥めた明久が

「それで、ドクターはなんで裕也君のことを詳しく知ってるんですか？」

と問い掛けた

すると、スカリエツティは明久に視線を向けて

「それはだね……私も元々はインデックスの使徒で……裕也君を改造した人間だからだよ」

と告げた

スカリエツティのその告白に、明久達は息を呑んだ

「不思議に思わなかったかね？ 高い魔力と戦闘力。それに、常人離れした身体能力を」

スカリエツティのその説明を聞いて、アリサとすずかはすぐに思い当たることがあった

小学校で模擬戦をやった時、裕也は教師を相手に勝っていた

それだけじゃなく、救出戦の時にはすずかを抱えて有り得ないスピードで部屋中を駆け回っていた

それらは確かに、普通では有り得ないことだ

「私は裕也君をね、とある魔道具に適応させるために、体を作り替えたんだ……今は後悔しているがね」

スカリエツティがそこまで言うと、明久が目を細めて

「ある魔道具？」

と首を傾げた

すると、スカリエツティはポッドに入っている裕也に視線を向けて

「生態融合型魔道具……劫アイオンの眼」

と呟くように言った

「……劫アイオンの眼？」

「なんだそれ？」

スカリエツティの説明を聞いて、明久と結華は首を傾げた

ただし、生態融合型魔道具という響きからか、嫌そうな表情を浮かべているが

「その言葉の通りだよ……使い手と融合する魔道具さ……私が知る限り、最悪の魔道具だがね」

とスカリエツティは答えた

「最悪の……魔道具？」

「どうして、ですか？」

アリサとすずかが問いかけると、スカリエツティは泣きそうな表情を浮かべて

「劫アイオンの眼はね……使い手の魂を食らうんだよ」

と明久達にとっては、衝撃的な事実を告げた

「魂を……食らう……？」

「つまり……裕也君の寿命を削るって……ことですか？」

呆然とした様子でアリサとすずかが問いかけると、スカリエツティは無言で頷いた

すると、結華が歯を噛み砕くほどに鳴らしてから

「なんで、そんな物を裕也に埋め込みやがった!?! あいつが何をしたってんだよ!」

と叫びながら、スカリエツティの襟首を掴んだ

だが、スカリエツティは答えずに泣きそうな表情で結華を見るだけだった

スカリエツティのその表情を見て、結華は拳を握り締めると

「なんか言えよ!」

と言いながら、拳を振り上げた

だが、その拳が振り下ろされることはなかった

「結、ダメだ!」

なぜなら、その拳を明久が止めたからだ

「だが!」

「いいから、堪えて!」

結華は抗議するが、明久は必死な表情でそう言うときスカリエツティに視線を向けて

「ドクター……裕也君は、そのことを知ってるんですね？」
と問い掛けた

すると、スカリエツティは頷いてから

「ああ……自分が長く生きられないことは知っている」

と答えた

その時、階段を降りてくる足音が聞こえて

「裕也君はね、自分の寿命が短いのを知ってて、それでも、戦う道を選んだのよ」

と女性の声が聞こえた

明久達が視線を向けると、そこに居たのはさすがの姉の忍だった

独白

「お姉ちゃん……」

すずかは階段を降りて現れた忍を見て、呆然とした

忍は一回すずかに微笑みを浮かべると、真剣な表情を浮かべて

「それに、私たちが夜の一族だっていうことも知ってるわ」

と言った

「え……？」

すずかが呆然としてみると、忍が

「裕也君はね、守護者部隊の活動を始めた時に私たちが夜の一族だっていうことを知ったのよ……だけど、裕也君は自分の方が化け物だって言っただのよ……私達の話は、少し特殊かもしれませんが、それでも忍さんとすずかちゃんだって言ってるからね……」

忍の話を聞いて、すずかは視線を裕也の方へと向けた

「裕也君……」

すずかが裕也の入ってるポッドに触れると、スカリエツティは俯いて

「僕は戦う方法を知っている……」

と呟き始めた

そして、全員が視線を向けるとポツリポツリと

「僕には戦う為の力があって……皆を護りたくて……僕の命は短いけれど……それでも、誰かを護るために戦える……それが、嬉しいんです」

スカリエツティはそう言うと、裕也が入っているポッドに視線を向けて

「裕也君が守護者部隊に入る時に言った言葉だよ……この言葉を聞いて、私は酷く後悔したよ……私は裕也君から、平穏を奪ってしまった……私が裕也君を強化改造してしまったから、裕也君は修羅の道を選んだ……」

スカリエツティはそう言うと、その目に絶望の光を宿し

「私が一番の罪人だよ……本当だったら、今すぐにも首を差し出し

たい気分だ……だがね、それを言ったら裕也君に怒られてしまったよ……『ドクターのそれは、只の逃げです。罪を償いたいなら、自分で出来る事をしてください』……ってね……だから私は、この診療所を開いた……一人でも多く、患者を助ける為にね」

それは、スカリエツティの独白だった

罪の意識から来る、懺悔

それを聞いて、結華は頭をガシガシと乱暴に搔いてから

「裕也がそう言ったんなら、アタシ達には何も言えねえ……だけどよ……裕也の寿命はどうにもならねえのかよ……」

とスカリエツティに問い掛けた

「たった二十歳で死ぬなんてよ、悲し過ぎるだろ……」

結華がそう言うのと、スカリエツティは首を振って

「私も方々手を尽くしたが、出来たとしても、魂の消費をギリギリまで抑える事位だったよ……」

と言って、裕也に視線を向けた

「あの眼帯は、私の持てる技術を全て投入して作った封印だよ……」

スカリエツティがそう言うのと、明久が裕也に視線を向けて

「あの眼帯が……封印……」

と呟いた

すると、スカリエツティは頷いて

「あの眼帯を取り付けついる限り、裕也君の魂の消費はギリギリまで抑えられる……それでも、二十歳位までが限界だったんだ……」

と言った

「それに、二十歳位というのも最大限であって、連なる能力を使う度に、寿命は短くなる……」

スカリエツティは続けてそう言うのと、裕也に視線を向けて

「本当に、私は酷い罪人だよ……」

と呟いた

その言葉を最後に、話し合いは終わった

そして診療所から出た後、ずずかは診療所を振り返って

「私……裕也君が好き……」

と呟いた

「すずか……」

「すずかちゃん……」

明久達が止まっていると、すずかは明久達の方に振り向いて

「私に出来ることはほとんど無いかもしれない……でも、何かしたい」

と言うと、胸元で両手を組んで

「だから、私はメカニックマイスターの試験を受ける」

と宣言した

「メカニックマイスターって……」

「確か、凄く難しいヤツだよな？」

結華が問い掛けると、すずかは頷いてから

「はい……だけど、私は機械関係が得意なんです。だから、資格を取って、裕也君をサポートしたいんです」

すずかがそう言うのと、アリサは笑みを浮かべて

「すずかがそう言うのなら、私が手伝うわ！」

とすずかの手を握った

「アリサちゃん……」

すずかが嬉しそうにしていると、アリサは毅然とした態度で

「インデックスのしてる事は絶対に許せないし、私も何か手伝いたいわ」

と言った

そして、携帯を取り出して

「手始めに、お父さんに言って守護者部隊に融資出来ないか聞いてみるわ！」

と言うと、通話を始めた

それを見て、明久は

「こういう時、女の子は行動力が凄いよね」

と言うと、結華は明久に視線を向けて

「恋する乙女を舐めるな」

と断言した

こうして、少女達は行動を始めた

そして、別れの時は近づく

元の世界へ

裕也の真実を知って数日後、明久達は戻ってきた裕也からスカリエツティが呼んでいることを聞いて、スカリエツティが指定した風見学園の体育館へと向かった

「ドクター、僕たちを呼んだ理由はなんですか？」

明久が問い掛けると、スカリエツティは頷きながら

「君たちが元の世界に帰れる目処が立ったよ」

と言った

「本当ですか!？」

「そもそも、どうしてアタシ達はこの世界に？」

明久は喜び、結華は異世界に渡る原因が分からずに首を傾げた

すると、スカリエツティはウインドウを開いて、腕輪の中らしい映像を見せながら

「どうも、このICチップが偶然にも転移魔法の魔法陣と同じ役割を果たしたらしい。そして、私が行っていた実験の転移装置と共鳴して、こちらの世界に来たみたいだね」

と説明した

「ババア長……」

「本当に偶然か……？」

明久と結華はカラルが色々な実験を行い、様々な厄介事を引き起こしたので疑っているようだ

「そして壊れていた部分を直して、魔力も補充した」

スカリエツティがそう説明すると、ウーノがトランクを持ってきて

明久達に見えるように開いた

その中には確かに、あの二つの腕輪があった

明久と結華がそれを受け取り、腕に装着すると

「私の計算では、補充した魔力で二回までは転移魔法を使える筈だ」

とスカリエツティが説明して、スカリエツティの説明を聞いて

「二回？」

と明久が首を傾げた

「そう……まあ、念のためだよ。もし一回で君たちの世界に戻れなかった時の為だね。多分だが、こちらの世界にも来れると思うよ？」と答えた

スカリエッツィの説明を聞いて、明久と結華は腕輪を見てから「今すぐにでも使えるんですか？」

とスカリエッツィに問い掛けた

するとスカリエッツィは、頷いてから

「ああ、問題なく使える筈だよ」

と答えた

「結」

「ああ」

明久の言葉に、結華が頷いた

「僕たち、帰ります」

明久がそう言うと、同席していたさくらが頷いて

「うにゃー、寂しくなるね……僕にとっては、生徒は皆、僕の子供だから」

と言うと、明久達に歩み寄って

「でも、明久君達にも帰る場所があるんだもんね……元気でね」

と言いながら、明久達と握手した

「ありがとうございます」

「お世話になりました」

明久達が立て続けにお礼を言うと、さくらは輝かんばかりの笑顔で浮かべてから離れた

さくらが離れると、次に裕也が歩み寄って

「明久さん、結華さん、今まで楽しかったです」

と言いながら、右手を差し伸べた

「裕也くん……」

「裕也……お前は絶対に生きろよ」

明久は寂しそうに名前を呼び、結華は諭すように言った

すると、裕也はゆっくりと頷いてから明久達から離れた

そして、明久達はスカリエッツィに指定された場所に立った

「では、始めてくれ」

スカリエツティに促されて、明久達は領いてから腕輪を装着した腕を掲げて

「起動！^{アウェイケン}！」

とキーワードを唱えた

その直後、明久達の足下に召喚魔法の魔法陣が展開した
すると、少しずつ明久達の体が透け始めた

それを見て、スカリエツティ達は手を振りながら

「また会おう」

「じゃあねー！」

「また何時か！」

と声を上げた

すると、明久達も

「さようならー！」

「ありがとうございました！」

と声を上げた

その直後、明久達はこの世界から消えた

そして、元の世界の学園長室

「なに事さね!?!」

目の前に光が集まり、それが人の形になっていくと藤堂カヲルは声を上げた

そして、光が収まるとそこに現れたのは明久と結華だった

「吉井に常村!?!」

カヲルが驚いているが、明久と結華は部屋の中を見回して

「ここは……」

「文月学園の学園長室……?」

と今居る場所を認識すると、次に時計を見た

「そんなに時間は経ってない……」

時計には日付も付いていて、それを見ると僅か数分しか経っていないのが分かった

「戻ってこれたみたいだね……」

「ああ……」

二人が安堵していると、カヲルが立ち上がった

「あんた達、今までどこに？」

と明久達に問い掛けた

カヲルの問い掛けを聞いて、明久と結華は顔を見合わせると吹き出すように笑ってから

「異世界」

と口を揃えて答えた

こうして、二人は元の世界に帰還した

夢のようだったが、二人の首元にはデバイスの待機形態が有り、更には二人が着ているのも、風見学園の制服だったことから、夢ではないと分かった

そして二人は、元の日常へと戻るために教室へ向かった

だが、この時点で二人はまた、あの世界に行くとは思いもしなかった

しかも、平和とはかけ離れた時に

クリスマスパーティー編 プロローグ 1日の始まり

朝6時30分に俺、防人裕也さきもりゆうやは目覚ましの音で起床した

「さてと、エリオとキャロの分の朝食を作らないとな」

俺は学校の、風見学園の制服に着替えてから自室を出て居間の右隣にある仏間に入って仏壇を開けた

「おはよう、お父さんお母さん、そして美樹みき」

仏壇に線香をつけてから俺は手を合わせて挨拶した

そこには2枚の写真があり、右の写真には俺の両親の防人幸也さきもりゆきやと母親の防人彰子さきもりあきこの写真があり

左側には大体小学3年生くらいの女の子が映った写真が、名前は防人美樹さきもりみきと言う

俺は仏壇を閉めて、台所に入り冷蔵庫を開けた

「今日はスクランブルエッグにするか」

俺は冷蔵庫内から材料を散りだして手早く調理し、俺のを含めて3人分用意してから時間を確認した。

「ふむ、7時10分か。そろそろ2人を起こすか」

俺は2人が寝ている部屋に向かう

俺達3人が暮らしているのは共栄住宅のアパート、まあ所謂団地だ俺は“エリオとキャロの部屋”と書かれたドアを開けると

「ほれ、エリオにキャロ、そろそろ起きろ。今日は2人とも日直なんだろう?」

と寝ている義息子と義娘をゆすって起こした

「うー、おはよう義父さん」

と赤い髪の毛をショートカットに切りそろえた男の子で名前はエリオ・モンディアルが眠そうに起きると

「おはようございます……」

2段ベッドの下の段で寝ていたピンク髪の毛の小柄な女の子が髪の毛

がぼさぼさの状態で起きた、名前はキャロ・ル・ルシエと言う

この2人は俺がとある理由から助けて引き取った子供で現在9歳で、風見小学校に通っている

「ほれ、っ飯できてるから、顔洗って着替えろ」

「はい」

2人の返事を聞いてから、俺は台所に戻った

2人が来たのはそれから約10分後だ

「「いただきますー！」」

俺達は3人揃ってから朝食を食べ始めた

「ねえ、義父さん。今日はバイトあるの？」

エリオがお皿に盛られたスクランブルエッグを食べながら聞いてきた

「ああ、だから今日は何時も通りにリンデイさんのところで夕食だな」
リンデイさんとはフルネームをリンデイ・ハラウンと言い両親が死んでから1番世話になってる人

だ

同じアパートの上の階に住んでおり、俺がバイトで遅くなる場合は2人を預かってもらっている

「わかった」

そんな生活に慣れた2人は返事をしてくれた、・・・なんか申し訳ないな

そして朝食を食べ終わり食器を流しに浸けると

「食器はそのままにしておけ、帰ったら洗うから」

と俺は言い

「そんじゃ、学校に行きますか」

「うん！」

2人は部屋にランドセルを取りに行った

俺達がすんでるアパートは風見学園にしても、風見小学校にしても距離がある

俺は既に昨夜用意しておいた指定カバンを持った時だった
ピンポーンとチャイムが鳴り

「裕也く時間だよ〜?」

とかわいらしい声が聞こえた

「ああ、わかったよ!」

俺はドアの向こうに聞こえるように返事し

「準備完了!」

と言ってランドセル（エリオが青でキャロがピンク）を背負って玄関まで来た

俺は2人を確認すると

「それじゃあ、行きますか」

と言ってドアを開けると

「おはよう裕也」

と先ほどと同じくかわいらしい声の本人が目の前にいた

「ああ、おはようフェイト」

目の前の少女は太陽が跳ね返るような金髪に赤い眼をした美少女と言える子で名前はフェイト・T・

ハラオウンと言いつ俺の幼馴染だ

「エリオとキャロも、おはよう」

とフェイトは俺の後ろに居た2人にも挨拶した

「おはようございます! フェイト義母さん!!」

義母さんというのはこの2人を引き取る際に俺だけでは無理だったのでフェイトに名前を貸してもらったのだ、だから名義上は俺とフェイトの子供と言うことになる

「うん、おはよう。あ、そうだ裕也。はい、お母さんからお弁当だよ」

とフェイトは左手に持っていた青い包みのお弁当を俺にくれた

「毎度ありがとうな。リンディさんにも、お礼言つといてくれ」

「ううん、いいの。お母さんは好きでやってるみたいだし」

俺は貰った弁当を持って

「それじゃあ、今日も1日元気に過ごしましょう!」

「「うん!（はい!）」」

こうして俺達の1日が始まった

設定 (1月12日追加)

防人裕也さきもりゆうや

風見学園付属3年3組に所属

実は18歳

身長 176cm

体は細いが、痩せているわけではなく、かなり鍛えられている

エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエの2人とある理由で引き取って、養子として育てている

現在、生計はバイトと両親の遺産。そして、とある仕事で賄っている

髪は黒く、後ろだけ伸ばしていて、首の後ろ辺りでヘアバンドで纏めている

顔立ちは丹精だが、左目の傷と“アイオン劫の眼”を隠すために銀十字の模様の眼帯を装着している

同じアパートには、クラスメイトの沢井麻耶さわいまやと幼馴染のフェイト・T・ハラオウン。そして、高坂まゆきが住んでいる

使用デバイス インテリジェントデバイスの阿修羅あしゅら

モードは高機動を主体に、近距離格闘戦、近距離戦闘、遠距離戦闘が可能なオールラウンダー。カートリッジシステムを搭載している

バリアジャケットは、侍の肩当に手甲と脚甲を装備しており、それ以外は風見学園の制服そのままの状態

待機形態 腕輪

使用魔法

魔力値 リミッター時 S リミッター解除後 SSS

ミッドチルダ・古代ベルカの混合 それと、本人の家のためか特殊な陰陽術と西洋魔法を使う。更には、本人の空間魔法により、複数の日本刀を所持・封印している

希少技能 全属性変換資質

エリカ・ムラサキ

遠い東欧の小国からやってきたという、留学生

どうやら、王族らしく所々に育ちのよさが滲み出ている

しかし、子供っぽい一面もあるために、インテリジェントデバイスのAI・グラーマに諭されることも多々有る

使用魔法 ミッドチルダ

魔力値 AA+

希少技能 無し

使用デバイス ヘキサペンタ（名前の由来は六芒星と五芒星から）

待機形態 指輪

バリアジャケットの形トランプのクイーンの服を白基調に変更したもので、肘まで覆う手袋と膝まであるブーツ。

五芒星形のビットが胸、両手の甲と両足の甲に着いている。

武器はクイーンズスタッフ、トランプのクイーンが持っている杖を薄紫色に変更している、杖の両端に六芒星のビットが3つずつ着いている。

使用魔法王族であるエリカ・ムラサキのデバイスのため防御に特化している、計11個あるビットは攻撃力は皆無に等

しく3個で面を形成するとAランク攻撃を完全に防げる程の防御壁を張ることが出来る

使用するビットを増やせば防御力と範囲は広げることが出来る。

11機すべて使えば学園を護ることも可能。

ただし、ビットがムラサキ本人から離れるほど機動力と防御力が低下するため、だいたい100mから200mで使われる、最大で5キロほど離れてる距離でも防御壁を形成できるが防御力は低くなってしまう。

カートリッジシステムは現在は搭載していないがムラサキ本人は搭載する気のようなだ。

因みに攻撃力が皆無に等しい事に焦りを感じたムラサキ本人の要請によりクイーンズスタッフは端に鎌のように魔力刃を形成するよう改修してある、モードチェンジによって鞭のようにも使える。

ムラサキは2つを合わせた鎖鎌も使えるようになっており、両端にするか悩んでいるもよう。

五芒星のビットには偵察機能が、六芒星のビットは封印の機能が着いている。

11機全てを使った最大防御力はプロテクト・ブレイク機能が着いているスターライト・ブレイカーすら防ぎきること
が可能

攻撃力は一般のストレンジデバイスにすら劣る、なお誘導弾の攻撃力は低いが誘導性は非常に高い。

得意なレンジは撤退戦闘と封印作業及び偵察任務だがムラサキの能力により近接戦闘も可能。

AI名はグラーマ、口うるさい婆やのような存在だが、基本的にはムラサキの決定に従うが説教したり助言する。

ムラサキの生存を最優先にしているために時々ムラサキの命令を無視してしまうこともある。

あまかせみなつ
天枷美夏

風見学園2年1組に所属している学生

髪と眼の色は青で統一されている

何時も牛柄の帽子を被っており、首には赤いマフラーを巻いている人間ではなく、2055年より約50年前に製造されたロボットのプロトタイプで、本来は2055年に起きる予定ではなかったが、杉並と義之によりの偶然の行動（主には義之だが）により起動した

過去のとある理由により、人間嫌いに陥っているが本来は優しく素直な子で、義之たちを基本的には呼び捨てにしているが、ある理由により杏だけ先輩と慕っている。

尚、性能上どうしても8時間に1回バナナを食さねばならない。本人はバナナが嫌いと言語しているが本当は好き。

使用しているデバイスは、かなり特殊なストレンジデバイスのコロス（ギリシャ演劇のバックコーラスより）。

待機形態 ネットクレス（なのはの色違い）

本来はインテリジェンスデバイスだったが、搭載予定だったAIのMIAKIというAIが何故かきちんと起動せず、まるで本来の主を待っているように、沈黙を保っている。

美夏のAIとリンクするため、ある意味で美夏自身がインテリジェンスデバイスとも言える。

尚、美夏には当時の技術では人工リンカーコアが再現できなかったため、本来は魔法は使えないが、クロスに特殊なシステムが搭載されており、周囲の魔力を吸収して魔法を使用できるようにした。

バリアジャケットは、なのは本編のナンバーズと同じようなインナーが展開され、その上に白いジャンパーと白い半ズボンを纏い、手と足に肘と膝まで覆うような手甲と脚甲が展開する。

尚、脚甲の足首部分には紺色の六角形の宝石状の物体が埋まっており「ウイング・ロード」が使用できる。補足だが、脚甲にはローラーが着いている

両手甲の部分には、左右3つずつ小さい珠が埋まっており、美夏本人が視認した魔法を左右3つずつ。合わせて6個ストックできるし、1度見た魔法は構築に時間が掛かるが構築可能

尚、更に特殊なシステムでカートリッジシステムが搭載されており、ストックした魔法を本来、魔力を圧縮する薬莢に圧縮して保存することが可能になっていて、圧縮した魔法により、色が違い、見間違えないように薬莢の側面には魔法の名前が記載される。

尚、圧縮するための薬莢を入れる場所は、手首の部分に3発ずつ入れる事が可能で、発動するためには薬莢を手首から外して肘の内側の穴に入れる必要がある。

更に、フルにストックした魔法を使用及び圧縮しないで新しくストックしようとした場合、古くストックした魔法から消えていく

得意レンジ無し　あえて言うならば魔法を構築する時間が稼げる遠距離が得意。しかし、あまり遠すぎると視認できなくなるため、どうしても近づく必要がある

得意魔法及び希少技能《レアスキル》無し

魔力値　不明

橘たちばなれんか
蓮華

男

15歳

風見学園付属3年3組

167cm

濃い黒色のショートヘアに琥珀色の瞳、全体的に女性的で柔らかみのある顔立ち

かなり、自由奔放なお天気屋で、プチバトルマニア

好きなもの チキンラーメン・和菓子全般・体を動かすこと

嫌いなもの 魚の練り物（カマボコやハンペンやチクワ等）・柑橘

系・

趣味 プラモ作り・アニメ鑑賞・一人旅

一人称 俺

基本的に友人は、名前呼び

魔力値 リミッター時 A A A + リミッター解除後 S S +

魔力光 琥珀色

術式 近代ベルカ式

変換資質 炎熱・電気

裕也達と同じ、3年3組のクラスメイトで、裕也達とは小学2年生の頃からの付き合い

かなり自由な性格で、度々学園を休んで日本各地を気ままに旅をする放浪癖があるが、成績は常に上位の為に、学園の一部の教師からは問題児扱いされている。

裕也と同じ守護者に所属

最近の悩みは、神夜が迫ってくること

希少技能

【高速治癒能力】

名前どうりの能力で、骨折程度なら、十秒ちよいで完治出来るが、傷を治す代償としてカロリーを消費し、傷の度合いにより、消費するカロリーも多くなる：

その為、普段は制服の内ポケットに、高カロリーの丸薬「兵糧丸」を常に入れていた。

デバイス グランヴェル

アームドデバイス

近代ベルカ

AI女性

待機状態・琥珀色のブレスレット

騎士甲冑

袖無しの太股まである黒いジャケットと、白いアンダーシャツ、太いベルトで固定された白いGパンと膝まで隠れる脚甲がある、全体的に動きやすさを表したバリアジャケット。

第1形態・アックスモード グランヴェルの通常モードで、戦斧型イメージは、DOG DAYSの魔戦斧グランヴェール

第2形態・アーチャーモード

グランヴェルの中々遠形態で、弓型

魔力を矢にして放つ事ができ：

単発の砲撃モードと連射タイプの射撃モードを備えている。

フルドライブ：???

カートリッジシステムを搭載しており、リボルバー機構式

たちはなかくや
橘神夜

女

14歳 風見学園付属2年1組 由夢と同クラス

164cm

3サイズ 85・56・88

膝下まである薄い青の黒髪、少し釣り上がった目と整った顔立ち

和の似合う少女

何よりも蓮華を優先し、蓮華に仇なす存在には容赦なく敵意を向ける。

クールな感じの印象に思われるが、蓮華限定で「甘えん坊」

本当は裕也の妹だが、そこは話し合って和解している

好きなもの 蓮華の全て・蓮華に膝枕・和食全般・蓮華の腕枕
嫌いなもの 蓮華に仇なすもの全て

趣味 家事全般・薙刀術・蓮華の観察

魔力値 リミッター時 AAA リミッター解除時 S

魔力光 濃い桜色

術式 近代ベル方式

変換資質 凍結

蓮華の義妹で、昔：蓮華の父親が連れてきた女の子：最初は、蓮華に懐かなかつたが：

ある一件から、蓮華にベタぼれの重度のブラコンになり現在に至る。

蓮華以外の男子に興味がなく、かなり毒舌を吐く事もある。

裕也と同じ計画の強化人間

しかし、計画としては失敗作として扱われ、処分されそうだったが、それをスカリエツティが止めていた

昔は素直な性格だったが、気付けば毒舌的な性格になっていた

しかも、隙あらば蓮華に迫る

希少技能 『時視』

最低で数秒先から、最高の数週間先までの未来を視ることが出来る予知能力。

だが、その能力の発動は自分で制御が出来ず突発的に発動する。

元から持っていた能力ではなく、実験により植え付けられたら、後天的な能力。

デバイス シャーリーズ (冬の女神の意味)

アームドデバイス

AI・女性

待機状態・指輪型

物
バリアジャケット 薄紫の生地に、紅色の蓮華の花が刺繍された着物

第1形態・風月

シャーリーズの通常モードで、薙刀型。

近々中タイプ

第2形態・花月

二つの鉄扇型で、回復や防御など、サポートに特化した形態。
フルドライブ ???

アリサ・バニングス

付属3年3組所属

体重 燃やすわよ？

スリーサイズ 消し炭にするわよ？

裕也たちとは腐れ縁で、小学校の頃からの付き合い

裕也と蓮華が守護者に所属しているのを小学校の頃から知っている

見た目、名前ともに西洋人だが、生まれも育ちもバリバリの日本人家が資産家で、手広く出資しており、守護者にも出資している
そういった家だからか、過去に誘拐されたという経歴があり、その際に裕也と蓮華に救助されており、裕也と蓮華が所属していることを知った

直接助けてくれた蓮華に好意を寄せているが、性格からか素直になれない

名前ネタでからかわれるのが苦手で、バニングは半ばNGワードになっている

付属二年になると同時に、親の仕事の都合でアメリカに行っていたが、最近戻ってきた

魔力値 A A A +

希少技能 炎熱変換資質

使用魔法 近代ベルカ&ミッドチルダ混合

デバイス インテリジェントデバイス 紅蓮

待機形態 ヘアピン

AI 男 (エミヤシロウをイメージしてください)

慎重な性格なのか、時々アリサを嗜める言動が多数出る

バリアジャケット リリカルなのはイノセント本編のバリアジャ

ケツトに腰に刀、手には手甲を装着している
近距離を中心にバランスがいい戦闘が可能

月村すずか

付属3年3組

スリーサイズ 言いません

体重 そんなに重くないよ？裕也たちとは腐れ縁で、小学生の頃からの付き合い

実家が大地主で資産家、実家には彼女が拾ったりしている猫が何匹も居る

大人しく引っ込み思案な性格だが、優しい

しかも、見た目に反して運動神経も抜群で普通の男子よりも優れている

機械工学が得意で、デバイスも組み立てられるほど

メカニックマイスターの資格を取得するために、本島に行っていて、数ヶ月ぶりに帰ってきた

実家が資産家ゆえに、誘拐されることがあって、裕也たちに助けられて、裕也と蓮華が守護者に所属していることを知った

自身を助けてくれ、しかも、自身の正体を知っても、分け隔てなく接してくれている裕也を好いている

その正体は通称〈夜の一族〉と呼ばれている、吸血鬼である
運動能力が高い理由がそれである

とは言え、本人の性格により戦闘には不向き

主には、デバイスのメンテナンスと後方支援を請け負っている
月村忍という姉が居て、その姉もメカニックマイスターとデバイスマイスターの資格を有している

ちなみに、裕也の夜叉を開発したのが忍とスカリエッティである
補足だが、姉はかなりのマッドサイエンティストで、自宅はすずか曰く

「もう、一個の要塞だよ」

と、言わせるほどの火力が隠されている

その火力の一端は、裕也と彼氏の恭也が経験している

魔力値 S

変換資質 無し

使用魔法 ミッドチルダ

デバイス インテリジェントデバイス クレセント

待機形態 カチューシャ

AI 女

優しい雰囲気のAIで、さすが本人はもちろん、周囲の人達も気遣う

バリアジャケット イノセント本編のものを参考してください

主には後方支援を得意としており、シヤマルと同じように回復や転移を得意にしている

とは言え、戦えないわけではなく、弓形態で遠距離狙撃を中心にし、様々な攻撃が出来る

フェイト・T・ハラオウン

風見学園付属3年3組に所属している学生

髪は太陽の光が跳ね返るような金髪で瞳の色は赤、身長は一般的な女子と同じ位でプロポーションはかなりのもの

双子の妹で姉にアリシア・T・ハラオウンが居る

兄は名前はクロノ・ハラオウン、風見学園の風紀委員で副委員長長の役割を受け持っている

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのバルツディシュ・アサルト

得意なのは主に高機動近接戦闘、カートリッジシステムを搭載している

バリアジャケットはリリカルなのはStrikerSを参照

使う魔法はミッドチルダ

レアスキル、魔力の雷変換資質
希少技能、

桜内 義之さくらい よしゆき

風見学園付属3年3組に所属している学生

髪は黒でショートカット、瞳の色は少し茶色がかった黒

本人の意思とはまったく関係無しに、風紀委員にブラックリスト入りされている

両親は不明、養母は風見学園の学園長の芳野よしのさくら

隣の家の朝倉家とは昔から家族同然に育っているために生徒会長の朝倉音姫あさくらおとめには弟くんと呼ばれ、音姫の妹の朝倉由夢あさくらゆめには兄さんと呼ばれている

使用デバイスはインテリジェンスデバイスの桜花おうか

バリアジャケット S A Oのキリトと同じで青いラインが入っている

武器は刀

待機形態 指輪をネットワークスにしている

A I 女

音姫に近い性格だが、融通は利く

得意なのは高機動近接格闘と遠距離砲撃戦、カートリッジシステムを搭載

使う魔法はミッドチルダと近代ベルカ

魔力値 A A A +

レアスキル
希少技能 魔力の桜の花びらへの変換資質とお菓子（和菓子限定）の構成

アリシア・T・ハラオウン

風見学園付属3年3組に所属している学生

髪はフェイトと同じ金髪で瞳の色は水色

身長は一般的な身長でプロポーションは完璧

双子の姉で妹はフェイト・T・ハラオウン

兄の名前はクロノ・ハラオウン

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのバルディッシュ・レディアント

待機形態 映画版リリカルなのはA'sのバルデイツシュの色違い
(水色)

AI バルデイツシュとまったく一緒
得意なのは高機動近接戦闘と中距離砲撃戦闘、カートリッジシステムを搭載している

バリアジャケットはフェイトと同じで色が逆
使う魔法はミッドチルダ

魔力値 S+

レアスキル 希少技能魔力の雷への変換資質

すぎなみ
杉並

風見学園付属3年3組に所属している学生

髪は黒瞳の色も黒

身長は約171cm、運動神経抜群、頭脳明晰とかなりの能力を誇るが風見学園切つての問題児

非公式新聞部なる部活(?)に所属しており、イベントの度に何かしらの行動を起こす困った奴、しかも大抵が義之を巻き込む為、義之もブラックリスト入りされた。

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのテストメン
ト

待機形態 黒い指輪

AI 男

杉並と同じく破天荒な性格

得意なのは高機動近接格闘戦と遠距離砲撃戦闘でカートリッジシステムを搭載している。

バリアジャケットは黒い西洋鎧の身体の部分が無い状態で有るのは手甲と脚甲と肩当程度で背中には膝丈まである黒いマントが特徴
使用魔法はミッドチルダと近代ベルカ

レアスキル 希少技能魔力の闇への変換資質

こしげか
高坂まゆき

風見学園本校2年3組に所属している学生

髪は藍色、眼の色は茶色

身長は161cmと女子にしては少し高い様子、運動神経が抜群で陸上部に所属しており得意なのは走り高跳びだが陸上競技全般で高い成績を保持している、尚生徒会副会長も兼任しており半ば杉並専門の追跡者となっている、尚義之、杉並、渉、杏、が同じクラスなのは彼女が学年主任に提案したからである。

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのエクスカリバー

待機形態 ネットクレス（なのはの白バージョン）

A I 男

正々堂々とした性格

得意なのは高機動近接格闘戦と中、近距離戦でカートリッジシステムを搭載している

バリアジャケットは白いジャージ状で身体の側面と正面に青い線が入っており、足には移動力強化のためか脚甲にローラーズケートが着いている

使用魔法は主には近代ベルカだが時々ミッドチルダも使用する
レアスキル
希少技能魔力の風属性への変換資質

騒がしい朝の風景

「今日も、義之のところに行くの?」

フェイトが曲がり角の所で、俺に聞いてきた（エリオとキャロは既に小学校に行った）

「ああ。まあ恐らくすでに、なのはか由夢《ゆめ》ちゃん。もしくは、音姫《おとめ》さんが行ってるだろうけどな」

今言った3人は、義之《よしゆき》こと、桜内義之《さくらいよしゆき》の幼馴染だ

特に、由夢ちゃんと音姫さんは、義之とは兄妹同然に育った仲だ
そんなこんな言ってるうちに、義之の家の前に到着つと

「兄さん! いい加減に起きてください!」

という、由夢ちゃんの声が聞こえた

「おーおー。やってるね」

俺は義之の部屋の位置の、2階の窓を見ながら呟いた

「裕也。そんな暢気に言ってるいいの?」

フェイトが学校に遅刻するよ? と言ってきた。確かに少し危ういかな?

と、その時だった

「由夢ちゃん! どいて!」

と、なのはの声が聞こえた

「んお?」

「なのは?」

やっぱ、なのはも居たか

だけど、なんだろう。嫌な予感が……

「ちよ!? なのは先輩! それは流石にマズい!」

由夢ちゃんよく、少一しばかり言葉遣いが怪しいぞ

だけど、なんだろう……

窓から、桜色の光が洩れてきて……

「全力・全開! デイバイン・バスター!」

と聞こえた次の瞬間、桜色の閃光が窓を破壊した……

「ギャー……！」

義之の悲鳴が！

「……………」

「……………なのは」

俺は、呆然とすることしか出来ず

フェイトは、額に手を当てていた……

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

10数分後

「なのは！ お前は俺を殺す気か！」

俺達は学校に向けて、走っていた

「素直に起きない、義之くんが悪いんだよーだ」

「いやだからって、デイベイン・バスターはやり過ぎだよ。なのは……」

「起きたんだから、結果オーライ！」

「それで殺されかけたんじゃ、割りに合わんぞ？」

と言ってるうちに。俺達は、桜吹雪の舞う公園に着いた

「ここまで来れたら、もう大丈夫ですね」

着いたのは、桜公園だった

ここ、桜公園は。1年中桜が咲く初音島でも、1番多く桜の木が植

えられてる場所だ

清掃業者の方達曰く

「ここがあれば、俺達は安泰だ」

らしい

何故かと言うと。桜の花びらの回収だけでも、1年中暇が無いからだ

因みに、今の季節は12月の冬である

季節感もへったくれもない

歩いていると、校門が見えたが……

「なんか、騒がしいな」

「ですね」

「だね」

なんか、学校が騒がしいのだ

「はーっはっはっは！ 捕まえてごらんなごーい！」

その原因は、今わかったが

「杉並か……」

「あいつは……」

俺と義之は、頭を抱えた

杉並とは

俺達が通う風見学園に存在する非公式新聞部なる団体を率いて、いろいろなトラブルを起こして

本人曰く

「イベントを面白くしているのだ！」

という、困った奴だ

「どうする、裕也？」

「行くか。一応、俺達も非常要員とはいえ、生徒会役員なんだ」

「わかった」

俺とフェイトは、鞆を開けて、中から生徒会を示す腕章を取り出して、右腕に着けた

「じゃあ、なのは。鞆お願いね？」

「義之、頼んだ！」

俺とフェイトは鞆をそれぞれ預けると。再び、走り出した

そして、校門を越えると

「杉並ー！ 待てー！」

と、軽やかに走っている男子、杉並を猛追する1人の女子生徒が居た

「まゆき先輩！」

「応援に来ました！」

まゆき先輩と言うのは、フルネームを高坂《こうさか》まゆきといい、生徒会副会長であり、風紀委員会の会長でもある女傑で、通称へ生徒会長の懐刀だ

補足だが、会長は音姫さんだ

「って、デバイス展開してるし！」

まゆき先輩もそして、杉並もデバイスを展開していた

「ちい！ 剣使い《ソードダンサー》に心優しい閃光が来たか！」

杉並は漆黒のバリアジャケットを纏っていた。それが、彼のインテリジェントデバイスのテストメントだ

黒い西洋鎧に、黒いマント。そして、両手にはブロードソードを持っていた

因みに、剣使いと心優しい閃光と言うのは、俺とフェイトの2つ名だ

「仕方ない。フェイト！」

フェイトは俺が促すと

「うん！ バルディッシュュ！」

頷き、黄色い三角形の髪留めを出して

「阿修羅《あしゅら》！」

俺は、右腕の黒い腕輪を突き出す

「セツトアップ！」

キーワードを唱えた

〈承知！〉

〈イエス・サー！〉

俺達は光に包まれて、次の瞬間には、バリアジャケットを纏っていた（詳細は設定を参照）

俺の両手には、刀型のアームデバイスが2本有って。フェイトは両手で、鎌を彷彿させる杖を持っている

「準備完了したら、突撃！ 行くよ、エクスカリバー！」

〈了解〉

エクスカリバーは、まゆき先輩のインテリジェントデバイスで、待機形態は白い宝石状のネックレス（なのはの色違い）で。展開すると、両刃の大剣になる

バリアジャケットは、白を基調として、青いラインが入ったジャージとマント。そして、手甲とローラー付きの脚甲だ

「了解！」

俺達が突撃すると

「あかん！ 裕也くんはフェイトちゃんまで来たんか!？」

特徴的な関西弁が聞こえた

「この声は……」

「はやてまで……」

気付けば、はやてこと。八神はやてが杉並の近くに居た

はやては既に、ラインIIとユニゾンした姿になっていた(なのは本編を参照)

「同志八神よ、撤退だ!」

「了解や!」

と、2人が逃走しようとした時だった

「ウイング・ロード!」

と聞こえて、空色と青色の帯状の道が2人の逃走ルートをふさいだ

「これは!」

「スバルにギンガさんか!」

スバルとギンガとは

姉妹で風紀委員会に所属していて、本名は、スバル・ナカジマとギンガ・ナカジマと言う

2人とも既に、バリアジャケットを纏っていた(なのは本編を参照)
「裕也先輩に、フェイト先輩。おはようございます!」

スバルは相変わらず元気だな

「裕也君にフェイトさん。おはようございます!」

「おはようございます!」

俺達が挨拶してると

「うわあー」

「派手にやってんなー」

「本当ですね……」

どうやら、歩いてきた義之たちが到着したようだ

と、義之たちに気付いた杉並

「むう! 風見学園の白い魔王が来たか!」

決して、言っではならない言葉を言ってしまった……

「「「あ……」」」

なんだろう……なのはの方向を見れない……

「…………イマナンテイツタ？」

終わった！　なのはから、黒いオーラが見える!!

「総員、退避————!!」

俺は全力で叫びながら、これまた全力で反転

杉並たちから、離れた

「スコシアタマヒヤソツカ？」

なのははそう言いながら、バリアジャケットを纏って、ある魔法の準備を始めた

「ちよ!?　アタシまで巻き込みかいな!？」

はやては、なのはの魔法に気付いて、顔を青ざめた

「ちい!　間に合わん!　フェイト、スバル、ギンガさん!　早くこっちに!」

俺は3人を呼びながら、両手の刀を腰の鞘に納めて、右手を左脇下に持っていく

「来い!　千歳の徒《ともがら》!　雷切!」

俺の右手には、帯電した刀が握られていた

「間に合え!」

俺は、雷切を地面に刺した

「五雷神君の奉勅、五雷神君の天心下り、十五雷の正法を生ず!　邪怪禁呪、悪行成す精魅、天地万物の理をもちて微塵と成す!　十五雷正法十二散、禁!!」

俺が呪文を唱え終わると、雷切から電流が迸り、俺達を囲む壁になった瞬間だった

「全力・全壊!!　スターライト・ブレイカー!!」

なのはの最高攻撃力の一撃が、2人に対して放たれた

「ぎゃあああああ——!」

杉並とはやての悲鳴が、つて!　学校の校舎になのはのスターライト・ブレイカーが!!

「アイギス!」

ほっ

どうやら、学校の校舎は音姫さんが、自身のインテリジェントデバ

イスのアイギスと一緒に守ってくれたみたいだ
そして、閃光が収まると

校庭は死屍累々の状況で、クレーターが出来ていた
そしてクレーターの中心には、はやてだけが倒れていた

「杉並には逃げられたか……………」

俺はため息を吐きながら、言った

「皆は無事か？」

俺は、後ろに居たスバルとギンガさん。そして、腕に抱いていた
フェイトに聞いた

「私達は大丈夫ですが、フェイトさんが……………」

と、スバルとギンガさんが指差してきた

俺は不審に思っつて、腕の中のフェイトを見た

「……………（顔真っ赤）」

フェイトは顔を真っ赤にして、固まっていた

「おわっ!? フェイト!?!」

俺はフェイトを揺さぶったが、反応は返ってこなかった…………

こうして、俺達の1日は始まったのだ

選択

裕也 side

俺たちは今、LHR《ロングホームルーム》、まあ平たく言えば委員会決めとかのあれをやっていた

「皆さんもご存知の通り、来週の23日から25日までの3日間」

教室の1番前の教卓に、われらが委員長の沢井麻耶《さわいまや》が立っている

と、鈍い音が聞こえたので左後ろを見ると、先ほどまで居眠りしていた義之が顔面を机に打ち付けていた

「我が校でクリスマスパーティーが催されます」

義之は、状況を確認するためか周囲を見回している

「クリスマスパーティーですが、言ってしまうえば文化祭と変わりません。各クラスでの催し物が義務付けられています」

「どうやら、義之は状況を把握したのかももう1回寝ようとしたら

「しかあし！」

と沢井が教卓を強打したので、びっくりして起きた

「うわっ、ビックリした」

アホか

前では、沢井がギリギリと忌々しそうに握りこぶしを作りながら俺達を睨んでいた

義之は、怖いのか少し背中が反っている

「残念なことに、私達のクラスの出し物は未だ、何も決まっています！」

「そうなんだよね

「この議題、LHRで11月からしているのにもかかわらず」

俺達だけじゃね？

「桜内《さくらい》、桜内」

「どうやら、義之の左斜め後ろに座っている杉並が声をかけたようだが

「ん？」

義之は、視線だけを動かして聞いたらしい

「今日の委員長、いつもにも増して殺気だっている。居眠りしているとそのまま永眠させられるぞ」

それは流石に言いすぎでは？

「マツチ棒かなんかで、瞼《まぶた》支えとけ」

と言ったのは、義之の後ろに座っている男子で名前は板橋渉《いたばしわたる》という

ってか、普通持ってねーよ

「マツチ棒、持ってない」

当たり前だ

「じゃー、ほら。シャーペン」

眼が飛び出るぞ

「おー……、ってデカイわっ。眼球飛び出るわ」

「くくくく」

ちなみに、こいつらは3人でよくつるむため通称で悪ガキトリオだ
「……って言われてもなあ。いろいろ文化祭でやった感があるしなあ」
それはなぜかと言うと

「ふむ。我が校はイベント好きだからな。まあ、それでこそ俺も張り合いがあると言うものだが」

そうこの学校、風見学園はイベントが盛りだくさんなのだ、普通の学校に比べて2倍近いのではなからう

か？

と気付いたら、杉並が懐から黒皮製の手帳を取り出していた

「なんだそれ」

「ネタ帳だ」

「お笑い芸人か、お前は」

確かに

「俺も手帳、持ってるぜ」

と渉が制服のポケットから手帳を出したが……

「ふーん……って、なんで表紙にプリントシールばっか貼ってんだよ、女子かお前は！」

所謂、プリクラ帳か

「可愛いだろ」

いや、むしろ

「きもい」

うむ

「うわ、きもいはちよつとひどくね？ お前はもっと俺に優しくする

べきだ!!」

いや、お前の扱いはそれで十分だ

「お前こそ、もっと環境に優しくなれ」

うむ

「か、環境だあ？ お、俺は環境を汚染してるのかよ……」

まあ、お前だけが原因ではないが

「環境だけではない。今や板橋は地球規模で汚染存在だ」

言い切ったよ、おい

「うわあああ、許してくれ、地球っ！ ってか俺ってすごくね？」

アホのな

「ちよつと、そこの悪の根源3人組！」

確かに

沢井は、義之たちをズビシッと指で差していた

「ちゃんと会議に参加しないと、あんたたちに決めてもらうからね」

まあ、ここまで遅れた理由の大半が義之たちが原因だしな

「悪の根源3人組って、俺も入ってるの？」

なにを今更

「当たり前でしょう。ふたりがボケで、あんたがツツコミ」

まあ、妥当だな

「いつの間にそんな役割が……。心外だ」

最初からだよ

「では、いつそのこと3人ともボケということはどうだ？」

は？

「そうだな。新しい世界が拓《ひら》けるかもな」

おいおい、それじゃあ

「收拾つかんだろーが」

その通りだ

と気付いたら、静まっていた教室が騒がしい
どうやら、義之たちの漫才で沸騰したようだ

沢井が、今にも3人をぶちのめさんとばかりに睨んでいる

「静かに!!」

と沢井が手を叩いた

「今決まらないなら、放課後決まるまで残ってもらおうけど」
それは困る

どうやら全員同じ思いだったのか一気に静まった

「でも、なにをしたらいいのか、ぜんっぜん思いつかーん」

と義之が即効で断念した

まあ、確かに俺もない

「人形劇」

と静かな教室に、抑揚のない声が聞こえた

声のほうを見ると、そこに居たのは

見た目が人形みたいな小柄な女子の雪村杏《ゆきむらあんず》だっ
た

因みに、席は義之の左隣で窓に接している

こいつは人形みたいに小柄で可愛いんだが、表情が乏しいので思考
が分からないし、何より、時折吐き出す毒舌が凄まじいのだ、しかし
なんでも雪村流絶対暗記術とかを身につけているとかでとにかく頭
は良い

「人形劇はどうかしら?」

とまた言った

教室内から「なるほど」やら「それもありか」と聞こえてきた

「せっかくクリスマスなんだし、ファンタジーっぽい出し物なら文句、
ないでしょ?」

ふむ

「なるほど」

と教卓に居た沢井が頷いた

すると義之の前の女子が手を挙げた、その人物は杏と仲の良い花咲茜《はなさきあかね》だ

「はい。私も人形劇がいいと思いまーす♪、クリスマスだし。こ
う、ロマンチックな物語とかがいいんじゃないかなあ？ 聖なる夜を
盛り上げるラブロマンスとかー」

と、爆乳で豊満なボディをくねらせながら言っている、恐らく男子
の票をお得意の色香で誘ってるんだろ

まあ、確かに季節柄ロマンスものには一理あるが
と色香に誘われた男子が次々に手を挙げた

「俺も賛成だー」

お前もか、ブルー〇ス

義之は落胆している

まあそれも仕方ないな、杏と茜が結託して意見を出すときは何かし
ら企てている場合が多い

まあそれは杉並、義之、渉も一緒だが、……いや義之は巻き込まれ
てるだけか？

そして、女子2人と義之たちは仲がいいのだ

む？ バランスが悪いって？ 安心しろ女子にはもう1人居るか
ら

「ついでに提案なんだけど……人形劇のヒロイン役は、小恋《ここ》……
なんてどうかしら」

杏が1人の女子の名前を出したとたん椅子が派手にこけた音が教
室に響いた

クラスメイト全員の視線が音源に向けられた

「あい……たたたた」

と椅子ごとこけた、小柄だが胸が大きいちよこんと出たアホ毛が特
徴の女子が椅子を直しつつ、ぶつけたんだらうお尻をさすりながら立
ち上がった

「え、な、なに言い出すの、急に〜」

今椅子に座ったのが、月島小恋《つきしまここ》と言い、仲良し組
みの最後の1人だ

因みに、3人の名前の頭文字をそれぞれ取って通称、雪月花《せつげつか》と呼ばれている仲良しメンバーだ

補足だが、義之とは小学校からの付き合いで、所謂幼馴染だ、俺達全員で仲良し12人組み（俺とフェイトとアリシアとなのはとユーノ及びはやて含めて）ってわけだ（時々俺が居ていいのかも思うが）気付くと、義之がうな垂れている

「あの、あの、あの〜」

小恋は顔を赤くしながら戸惑っている

まあ、雪月花の中では1番まともなんよねこいつ

性格よし、顔もよしでクラス内ではへクラス内1番の良心〜と言われるほど人気があり、まあヒロイン役に抜擢されても誰も反論しないだろう・・・本人以外は

「そんなのできないよ〜」

な？

「大丈夫」

「うんうん。小恋ちゃんならできるって」

「な、何を根拠にそんな〜」

「ラブロマンスにするなら、相手が必要ね」

・・・なるほどね、2人の企みが分かったよ

杏がフフと笑いながら

「・・・相手役は義之で決まりでしょ」

「賛成です。相手役は義之くんがいーと思いますーす！」

やっぱり

「はえ？」

なにアホな声を出してるんだよ

クラスメイトの視線が義之に集中した

「うお、マジかよ。俺じゃねーの？」

いや、お前は論外

「だめだよお。義之くんっていい声してるし、演技もうまいんだから」「俺がいつ演技をしたんだ？」

それは、お前あれだろ

「仮病で学校を休んだ時」

「ぐっ」

そうなのだ。義之の奴ゲームをやりたいたらって、仮病で学校を休んだのはいいが、電話越しにやった熱にうなされた声があまりにも迫真の演技だったために先生が救急車を手配してしまったのだ。おかげで、義之は救急車に乗せられて病院に運ばれて先生が来る直前に脱走、結果、仮病とバレて大目玉を受けた

「いやー、あときはさすがに焦った。危ない、危ない」

「照れながら言ってる場合じゃないでしょ！」

まったくだ

「と、いうわけで、どうかなあ？　小恋ちゃんの相手役は義之くんってことで」

「特に問題はないと思うけど・・・」

「ちよ、ちよっと待って！　そんなの無理、無理！　義之がそんなのするわけないよ。あの義之だよ？」

お前さん、本人の前で言うか

まあ、実際義之がこういった催し物にまじめに取り組んだ覚えは無いからな、確かに頷けるが

因みに、小恋は赤い顔を更に紅潮させつつ、義之を上目遣いに見ている

「ふむ。そうね・・・悪の根源の1人を催し物の重要な役割にすれば、悪さも半減するか」

「えー。俺ってすごいマジメで、すごいいい人なのに。公園のゴミとか拾うのに」

説得力0だ

「黙りなさい、このさわやかヤクザ」

新しい!?

「さ、さわやかヤクザって何？」

確かに

「さわやかな笑顔を浮かべつつ、相手をボコ殴りにする人」
なるほど？

「そ、そんなイメージなの？ 俺って……」

ドンマイ

「……お化け屋敷か」

「は？」

杉並が今までの発言を完璧に無視して、さらっと言った

「ふむ、お化け屋敷。なるほど、催し物をお化け屋敷にすれば……、ここをこうしてと、そうだなアレは科学部の連中から拝借するとして……うん、これならばあの計画も……」

杉並が黒皮の手帳を見ながら、何かぶつぶつと呟いている

「お、おいおい……今の話聞いてたか？」

義之がなにか勝手に決め込んでいる杉並に聞いた

「聞いていた。月島とお前が人形劇を通じて、不毛な疑似恋愛をするという話だろう？」

「なんだか身もふたもない言い方だな。っていうかクリスマスにお化け屋敷？」

まあ、確かにあれはむしろ夏では？

「季節など関係ない。真冬でも桜が満開のこの島で何を躊躇《ためら》うことがあるだろう、要は気になるあの子を誘って、暗闇で告白できる！ 2人の密着度、MAX！ そんなスーバらしーお化け屋敷を作ることには何の異論があると言うのだ！」

と杉並の口上に、男子の野太い歓声が挙がった。

その中には渉まで居た……どっちだよ

しかし、杉並が色恋沙汰に手を貸すような言動をとるか？

こいつは色恋沙汰よりも、UMA《ユーマ》とか埋蔵金とかUFO《ユーフォー》とかのオカルト方面にしか反応しないはず、一体何を？
「何を企んでやがる」

義之が俺の気持ちを代弁してくれた

「やだ、なんのこと？」

「なんだ、てめえ。その汚れを知らない天使のようなおとぼけ顔はー！」

胡散臭すぎる

「はいはい、静かにー！ 杉並。その意見を出したっていうことは、あんたが責任者になってくれる。そう解釈しても構わないのね？」

沢井が騒いでいる男子を黙らせて、杉並に聞いた

「ふふふ。ホラーハウスのオーナーとでも呼んでくれたまえ」

「あ、そう」

沢井は杉並の言葉を軽く受け流した

「どのみち生徒会から目をつけられるだろうけど、でも、もう時間もなし、人形劇をやるにして、物語とか、具体的なイメージはあるの？」

沢井はズリ落ちた眼鏡を直しながら、杏たちに聞いた

「ロマンチックに、夢見るように♪」

「抽象的ね・・・」

「既にシナリオ構成は出来てるわ」

「そういや、杏は演劇部だったな」

「なるほど。では、今2つの意見が出たわけだけど、他にはない？」

クラスの皆は人形劇かお化け屋敷で盛り上がったいた

人形劇がほとんど女子で、お化け屋敷がほとんど男子だ

因みに人形劇の場合ヒロインと主役は小恋と義之で既に決まっている、それと小恋は音楽が得意だから（軽

音楽部所属）ついでに音楽決め役にも決まったようだ

因みに小恋は困った表情をしながらお化け屋敷と言っている（チラチラと義之を見ながら）

「ね。義之くんはどっちがいいの？」

茜が義之の顔を覗きながら聞いている

「どっちでもいいけど、人形劇だったら、ちよっと大変かな」

「大丈夫よ。義之のセリフ、少なくするから」

「ホントかよ」

「覚える気ないだろうし・・・」

「もつとも」

「そ、そんなことないけどさ」

「説得力0だ」

「時間もあまりないから」

「いやいやいや。すまないお嬢さん方。桜内の心は既にお化け屋敷で固まっている」

と杉並が、義之の肩に手を回しながら言った

「俺もお化け屋敷で賛成だな」

「渉くん、さつき人形劇に賛成だったじゃない」

確かに

「えー。だって暗闇でドッキリだぜー？　なあ月島」

「え？　あ、そ、そうだよ。うんうん」

と、いきなり話を振られた小恋は焦りながら答えている

「ほらー。月島だって、ああ言ってるじゃん」

「小恋ちゃんまで」

「だ、だって、わたし、ヒロインなんて出来ないもん」

小恋の自信なさげな言葉に杏と茜、顔見合わせたよ

「暗闇でドッキリ・・・ああ。なんて魅惑的な言葉なんだ！　俺、絶対

ドッキリしたい！　ドッキリついでに、あんなこととか、こんなこととか！　だあああ、もう心臓バクバクー！」

「落ち着け、ドッキリしすぎだ」

義之が暴走し始めた渉を嗜めている

「んもう！　静かにしなさーい！！　まったく何度言わせたら気が済むの!？」

沢井が教卓を叩きながら叫んだ

「委員長、落ち着いた方がいいわ・・・。あなたがこの議題で『静かにしなさい』って言ったのは、11月から数えて41回よ」

よく覚えてるね

「誰も数なんて聞いてないでしょ！」

「ちなみに、教卓を叩いたのは11月から28回・・・。深呼吸が必要だと思うわ」

「く、くだらないこと覚えてないで、静かにしてよね・・・」

で結果、多数決にもつれ込んだが、このクラスの人数は奇数だ

で、現在半々に分かれた。最後の1人は義之だ、さてどっちを選ぶ

かな？

「桜内……」

「え、え？」

沢井が呆けていた義之に聞いた

「早く決めてくれない？ あんたで最後なんだけど」

「はれ？」

お前、気付いてなかったな

「ふっ、わかっているな同志よ」

「う」

「……」

「え、えと」

困ってるな

さて、どっちを選ぶのかな？ それとも、新しい選択でも作るか？

親友よ

選んだのは……なんですと!?

裕也 side

「それ以外がいいなあ……」

なんですと?」

義之はしばらく黙考した挙句、そう言ったのだ

「はあ?」

沢井が怪訝そうな眼で、義之を睨んだ

いや、沢井だけではない。クラス中の視線が義之に集中した

「どうせだったら、もっと違うやつにしないか?」

義之、お前……

「あのねえ、桜内……、今更なに言ってるわけ? 多数決なのよ。

あと1票で決まるのに、まぜつかえさないでよね!」

「沢井よ落ち着け」

俺は、義之の言葉で案の定で怒った沢井をなだめた

「何か具体的な案があるわけ?」

雪村流暗記術で、先ほど義之が言った「何も思いつかない」宣言を忘れていない杏が義之にたずねた

「ん〜。具体的なものがあるわけじゃないけどさ、せつかくのクリパなんだし、もっと盛り上がるものはないのかな〜と思つて」

「なるほどね、要するに刺激が足りないわけか……」

「その通り」

確かに、今出ている2つは何処のクラスでもやっていて新しさはないからな

「まあ、ある意味具体的ね」

「具体的なのは方向性だけでしょ? 何をするかは全然具体的じゃないじゃない?」

「まあ、ある意味義之くんらしいよね」

「うん……」

「そうやね」

「ああ」

「だね」

俺たちは慣れているから義之を見た

因みに、はやては中央で俺の後ろの席な

「杉並、あんたからも何か言ってやんなさいよ。あんたたちの案じゃ、不満なんだつてよ?」

「ふふん……。面白そうなので、しばらく傍観させてもらう」
「はあ?」

沢井が、信じられないと杉並を見ている

「こういうとき、義之にまかせておくと、話がとんでもない方向へ流れることがあるもんね……」

「そういうことだ。今年の体育祭然り、文化祭然り……」

「ああ、こういうときの義之は面白いことをやってくれるからな」

「はあ、裕也が乗っちゃった……」

「まあまあ、フェイトちゃん」

「そうだよフェイト楽しまなくちゃ♪」

そう言ったのはフェイトの前の席に座っている(俺の右斜め前)アリシア・T・ハラオウン、フェイトの双子のお姉さんだ。フェイトと見た目がほとんど一緒だが唯一違うのは眼の色くらいで、フェイトは赤に対してアリシアは水色だ

「とんでもない方向に流れてもらっちゃ困るのよ、春の卒業パーティーのときみたいなことになったらどうするの?」

と沢井が、困りながら俺達に向けて言った

「杏、卒パでの出し物覚えてるか?」

えーと、確か卒業パーティーでの杏と茜のクラスでの出し物は……(去年はクラスが別だった)

「セクシーパジャマパーティーのこと? 当然よ。ね、茜」

「うん♪」

思い出した、こいつら寝巻き、要するにパジャマ姿で接客をしたのだった

「そういう感じの、はっちゃけ具合が欲しいんだよ」
「なるほどね〜」

「もう1回やってもいいけど?」

杏が小悪魔的な笑みを浮かべながら言った瞬間

「マジですか!？」

渉が飛びついてきた

「ん、それはちよつと……」

「なんだよ! 今年のクラスでやれば、杏や茜だけじゃなくて、月島のパジャマも見れんדרおが」

渉が自分の欲望《エロス》に忠実に叫ぶと

「板橋……」

沢井が渉をギロリと睨んだ

「あ、あといいんちよのパジャマ姿も……」

渉よ、そう取ってつけたように言ったら傷つくだけだが

「……はあ」

「まあ、なんだお疲れ……」

俺は気休めかもしれんが労わりの言葉を送った

「義之は、セクシーパジャマパーティーじゃ不満なの?」

「別に不服ってわけじゃないけど、それじゃ、卒パの二番煎じになっちゃうだろ?」

「いいものは何回やっても、いいものよ」

「そうかも知れないけど、インパクトをもうちよつとねえ……」

「インパクトねえ……」

「インパクト……」

「インパクトか……」

義之の言葉に、茜、なのは、ユーノが悩みだした

そして、気付いたら俺たちはクラスで一丸となって考えていた

補足説明だが、なのはの席は廊下側から2列目の最前列で、ユーノは廊下側の1番前だ

「あ、あれは?」

「何?」

俺達は小恋を見た

「わたしたちのクラスでは、焼きおにぎり屋さんだったじゃない。あ

れならインパクト、あるんじゃない?」

「焼きおにぎりか……」

焼きおにぎり屋とは去年杏と茜と渉以外の居た俺達のクラスで
やった出し物だ(途中からある理由で被害が

続出したが)

これは『美少女が生の手で握ったおにぎり』を焼く、という宣伝で
やったのだ。しかも、杉並の巧妙な情報操作により爆発的な勢いで売
れたのだ

閑話休題

「つまり、パジャマパーティーで焼きおにぎりを作るってこと?」

「なんか二番煎じっぽいわね」

確かに

「でも、方向性としては悪くないと思うんだよ。どう思う? 杉並」

「ふ、握って作られるのは、何も焼きおにぎりだけではあるまい……」

なあ、委員長?」

む? なぜに沢井に振ったんだ?

「え? あ……」

沢井が、なぜか表情を変えた。

どうやら、何か思いついたようだ

「思いついたか?」

クラス中の視線が沢井に集まった

「え? あ、いや……ダメよ。そんなの……」

む? 沢井にしては珍しく口ごもったな

「おいおい、発言する前から自分で否定してんじゃないやねえぞ。ダメかど
うか、言ってみなきゃわかんねくだろうが!」

「渉にしては良い事言った」

「ヒドい!」

「え、えくと……」

なぜか、沢井は恥ずかしそうにしている

「……………」

しばらく言おうとしたりしなかったりを繰り返して、沢井は視線を逸らしながら小声で呟いた

「聞こえね〜ぞ〜」

渉がもう1回催促したら

「お、お寿司って言ったのよ!」

「なるほど、寿司か……………」

義之と杉並が視線を合わせた

「光明が見えたな」

「ああ、それだ!」

俺達は頷きあった

「行けるんじゃないか? 寿司屋なんて他所のクラスじゃ絶対思いつかないぞ!」

クラスが一気に活気付いた瞬間だった

「セクシーパジャマパーティー、フィーチャリング寿司屋か。面白そうだな、ん? いやセクシーパジャマ寿司バーがいいかな……………」

そんなもん、どうでもいいわ!!

クラス中から「それだ!!」とか「面白そう!!」などなど聞こえてきた

「ふっふっふ、タイトルはこれで決まりだ。『セクシー寿司パーティー』、暗号名《コードネーム》はSSP!!」

名前のインパクトと意味のわからなさ具合がいい感じに合致した

SSPか……………。こりゃ、今年のクリパは寿司の旋風が巻き起こりそうだな

「ほらね、義之にまかせると、面白い方向に転がるでしょ?」

「うんうん。ホントだね〜」

「さすがは、義之くんや!」

「にやははは♪」

「でも、いいのかなあ〜。こんなので……………」

「ちよ、ちよつとちよつと、皆、何決まったような顔してるの? そう

「いう案が出たっただけの話でしょ？」

「沢井が俺達を現実に取り戻そうとしているが」

「何を言うか、委員長。俺の中ではすでに決まったも同然だぞ」

「お化け屋敷はいいの？」

「ふふん。企画は次回に持ち越しだな……」

「はい、まずは逃げ道が半分無くなって」

「に、人形劇は？」

「一縷の希望に望むが」

「シナリオの構想から練り直すわ……」

「……」

「はい、囲まれた！」

「クラスの雰囲気はSSP一色に染まる中、沢井だけが渋っていた」

「何をためらう必要があるのだ、委員長。寿司が食い放題なのだぞ」

「お、お寿司……」

「そういえば、沢井は寿司が好物だったな」

「これは決まったな。」

「義之の一言から始まって、ちよつとした考えから思わぬ方向に進ん

「だみたいだが――」

「皆乗り気になったのでこれで決まったな」

「そして、俺達の出し物が暗号名《コードネーム》SSPこと『セクシー寿司パーティー』に決まったのだった」

新しい出会い A・M編

義之 side

む、ようやく俺か・・・

俺は、昼休みのチャイムと同時に背筋を伸ばした

「くあく」

と俺が、あくびをしてたら

「どうだ桜内。一緒にメシでも」

振り返ると、杉並がイヤラシイ笑みを浮かべて立っていた

「俺は別に構わんけど、渉はどうするよ?」

俺は、机に突っ伏している渉に声をかけた

「あー、俺はパスパス。2人で蜜月の時間を楽しんできてくれ」

と渉は、手をひらひらさせた、ってか嫌な言い方すんな

「ふむ、それではふたりきりの甘いランチへしけこむとするか」

「気持ち悪いこと言うな」

一瞬、鳥肌がたったじゃねーか

「なるほど、このカップリングはありかもね」

「だよね。なんか色々といけない想像が……。ねえ、小恋ちゃん?」

「ふえ! な、なんでわたしに聞くの!?!」

「だって小恋ちゃん、そういうの好きじゃない」

「そんなことないよ」

「自分の欲求に素直になる。それが1番よ、小恋」

「だ、だから、違うってば」

後ろのほうで、勝手にキャツキヤと盛り上がってる雪月花3人組

アホか

「で、どこ行くよ? 学食か? 購買か?」

俺は杉並に聞いたでした

「ふふふ……。まあ、黙ってついて来い。とっておきの場所に招待し

よう」

にやりと笑って、すたすたと教室を出た杉並

「しゃーねーな」

俺は杉並を追った

「で、どこまで行くんだよ?」

俺は上履きから靴に履き替えながら聞いた

「なあに、ちよつとそこまでだ」

そう言った杉並の後を着いて行き

校門を出ていった

義之 side END

裕也 side

俺は、フェイトと一緒に弁当を食べていた

「ふむ、相変わらずリンデイさんは料理上手だな」

俺は、リンデイさんが作った弁当を素直に賞賛していた

「(ボソリ) うーん、今度は私が作ってみようかな?」

「なんか言ったか?」

「う、ううん! 別に!!」

「そ、そうか」

俺は、フェイトの珍しく強い語気に少し驚いた

「しかし、義之と杉並は一体どこに行っただか」

義之たちは、昼休みが始まると同時に教室を去ったきりだ

とその時、ポケットの携帯が震えた

「む? 一体だれだ?」

俺は、携帯を開いて画面を見た

「水越《みずこし》先生?」

水越先生とは、本名を水越舞佳《みずこしまいか》と言い、保健室の先生だが、本業は天枷研究所の研究員なのだ

「(ピ!) はい、防人です」

『あ、裕也君? 今いい?』

「はい、丁度弁当も食べ終わりましたし」

俺は携帯を肩で抑えながら、弁当を片付けていた

『よかった、ちよつと手伝ってほしいことがあるんだけど、いい?』

俺は時計を見た、ふむ、まだ時間的にも余裕があるな

「はい、構いませんよ?」

『よかった。じゃあさ、今から校門のところに来てくれる?』

「分かりました、少し待ってください」

そう言つて俺は携帯を切った

「水越先生なんだつて?」

フェイトが俺に聞いてきた

「なんでも、手伝つてほしいことがあるんだとよ。ちよつと行つてくる」

「うん、行つてらっしゃい」

俺は、教室を出て校門に向かった

そして、校門に着くと

「よし、来たわね?」

そこには、タバコ(無着火)をくわえた白衣を纏った女性が居た。この女性が水越舞佳先生だ

「どうしたんですか?」

俺は呼び出した用件を聞いた

「ん? ちよつと立ち入り禁止の場所に誰かが入つたみたいでね、戦力が欲しいのよ」

「なるほど、了解」

俺は了承した

「それじゃ、着いてきて?」

俺は水越先生に着いて行つた



桜公園を抜けて、道なき道を歩き密林を越えたら俺の目の前に洞窟が見えた

「ここは・・・」

「ここは“ある存在”を封印していたの。うーん、バリケードあつた

筈なんだけどなく」

そう言いながら、水越先生は洞窟内に入っていった

裕也 side END

義之 side

俺達の目の前には女の子が眠っているカプセルがあり、そして先ほど俺の膝がそのカプセルの横にあったス
イツチを押してしまった。

すると、洞窟内にピコンピコンと電子音が鳴り響いた

「どうするよ?」

「ふむ。まあ、押してしまったものはしょうがない。なるようになる
だろ」

「ずいぶん軽いな」

「深刻になったところで、どうしようもあるまい」

確かにね

「なんだと思う? これ」

俺は指差しながら聞いた

「さあな。まあ考えられるとすればー」

とその時、電子音が止まった

「考えられるとすれば?」

「こういうことだな」

俺は、杉並の視線を追ってカプセル内の少女を見た

そして、ガツチリと視線が交錯した

「なるほどね」

予想通りの結末。

少女は俺を睨みつけていた。

そして何故か、拳がプルプルと震えている

そして、体を起こした。

しかも勢いよく

「ゴーン!!」

「あがつ!!」

「……」

「まあ、そうなるわな」

「……」

「いい音が鳴り響いた。」

「おかげで、神秘性が一瞬で吹っ飛んだよ」

「ガラスの蓋がビリビリと震えている」

「き、貴様っ！ 謀ったな!!」

「いや、なにも謀ってないです」

「……てか、俺のせいかな?」

「ふむ、難しいところだな」

「いや、どうみても俺のせいじゃないと思うんだけど。」

「と少女が、中でなにかしらの操作をすると。」

「ウィーンとモーター音がしながら蓋が開いた」

「ちっ!」

「少女は上半身を起こすと同時に、盛大に舌打ちした」

「おでこが赤く染まっている」

「あの、大丈夫」

「貴様かな?」

「な、なに?」

「貴様が美夏を起動したのかと聞いている」

「起動だ?!? と言うことはもしやっ!」

「杉並が驚きつつ、どうやらこの子の正体に気付いたようだ」

「部外者は黙っていろっ!」

「杉並を少女は鋭く一喝した」

「む、むう」

「なぜ、美夏を起動した? なにが目的だ?」

「感情を抑え込んだ低い声。」

「明確に敵意を持った視線。」

「ぴんと空気が張り詰めていく。」

いや〜偶然です。

たまたま興味本位で洞窟に入り、屈んだ拍子に膝がぶつかって起動しちやいました。

そんなことを言ったら、間違いなく殺されちやいそうな雰囲気だ。

ここは慎重に言葉を選ばないとー

「ふつ、ただの偶然だ。屈んだ拍子にこいつの膝が起動スイッチを押したただけだ」

「バカかお前はっ！」

思わず叫んだ、つて、声裏返ってるし

「なにをバカ正直にー」

「・・・そうか。膝が・・・ね？」

俺もバカか！

後悔しても後の祭りだった

少女はゆっくりと身体を起こして、カプセルから降り立った。

「・・・偶然に・・・だど？」

少女は伸びをしながら、首をこきこきと鳴らした。

そして身体を半身に構え、ぐつと拳を握り締めた。

「・・・ふざけたことを」

ヤバイ！

「ちよ、ちよつと待ったあ！ 落ち着いて話そう、な？ な？」

「人間風情と同じ時間を共有しなければならないと考えるだけで・・・虫唾が走る」

「そ、その、勝手に起動したことは謝るよ、ごめん。でも暴力ではなにも解決しないと思うぞ、ほら、杉並もそう思うだろ？」

俺は一縷の希望に縋る思い（不本意だが）で、杉並に声をかけた

「すまない。部外者は黙っていないと怒られてしまうもんで、その件に関してはノーコメントとさせてくれ」

こ、この野郎!!

「覚えておけ。美夏はこの世界で嫌いなものが2つだけある、1つはバナナ。そして、もう1つは・・・人間だ！」

ぐいぐいと、にじり寄ってくる少女。

「美夏はずっと眠っていたかったのだ。それを無理やりたたき起こした拳句、偶然だと？ それで済まされると思っているのか。これだから人間ってやつはっ！」

少女は大きく右拳を振り上げる。

いやだから、暴力はいけないってえ！

「食らえっ！」

風を切る音。

眼前に拳が迫った瞬間だった

ダン！

と音が聞こえて、拳が止められた後少女は押し倒されて、その首筋に刃が当てられた

「そこまでよ！」

鋭い声が響き渡った

「な、なに!？」

「俺の親友に手え出そうとは、いい度胸だな？ 死ぬか？」

「どうやら間に合ったようね」

どこのどなたか知りませんが、ありがとうございます！

「H M I A O 6 型、ミナツね？」

俺は抑えてくれた人物と声の人物を見て驚いた

「裕也に水越先生!？」

それは、保健室の水越舞佳先生と親友の裕也だった

水越先生の背後からは、数人の屈強そうな男性達が俺達を包囲した

「あくあ、あんたたちだったのね。こんなオイタしたのは。まったく」

水越先生は、呆れたようにため息を吐いた

「す、すいません」

「ま、いいわ。裕也君、そろそろ解放してくれる？」

「・・・了解」

裕也は、押し倒していた少女の首筋から日本刀を離してから、少女を解放した

「で、お目覚めはどうか？ ミナツさん」

水越先生は身体を起こした少女に聞いた

「聞くまでもないだろう。最悪だ!」

「ごめんなさいね。私達としてもあなたを起こすつもりはなかったの。でも、起きてしまったからには・・・」

水越先生が周囲に目配せすると、包囲していた男性達が包囲を狭めて、裕也が刀を構えた

「誰も逃げたりなんかしない」

「そう。素直で助かるわ、それじゃあ、連れて行って」

「了解しました」

そして、少女を取り囲むように連れて行く

な、なんなんだこの状況は

洞穴の中に変なカプセルがあつて、そこで女の子が眠っていて、アラームが鳴つたと思つたら裕也と水越先

生がやってきて・・・。

H M 1 A 0 6 型? ミナツ?

頭が混乱してる

お、落ち着け。

とりあえず情報の整理をー

「貴様たち、なんという名前だ?」

「へ?」

「・・・なに?」

突然、話しかけられて思考が飛んだ

「バカか貴様は。美夏は貴様達の名前を聞いているのだ」

「え、あ、あつと、桜内義之」

「防人、防人裕也だ」

「桜内に防人か、その名前、覚えておくからな」

ぎろりとひと睨みされる。

いや、覚えなくていいから

「やれやれ」

そう言いながら裕也は刀を鞘に仕舞つて、空間魔法で消したそのまま少女は、男達に連れて行かれた

「まったく、入り口の立て看板が見えなかった？ 立ち入り禁止つて、それに有刺鉄線を嚴重に張り巡らせといたはずだけど？」

「いえ、俺達が来た時には有刺鉄線は切り取られていました。立て看板には気がつきませんでした」

杉並がしれつと嘘を吐いた。裕也も気付いてるようで、杉並を睨んでいた

「それよりもさっきの娘は？ H M I A 0 6 型とか言っていたように聞こえましたが」

「はあく、しょうがないわね、彼女はロボットよ。H M I A 0 6 型、開発コードはミナツ」

「ロボット!？」

俺は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。そのくらい驚きだった

「なるほど、あの手ごたえはやはりそうだったか」

お前は気付いてたんか!？」

「・・・ミナツ?」

「ええ、そうよ」

「いや、だって、あんな感情豊かなロボットなんて」

確かに、最近のロボット技術はかなりの水準に達していると言っている。いい。

現在市販されている『μ《ミュー》』というロボットを見たことがあるが、パツと見は確かに人間そっくり

に見える。

しかし、あそこまで感情豊かに動いたりしゃべったりするロボットを、俺は知らなかった

「うむ。確かにあそこまで見事に人間らしさを持ったロボットは見たことがないな」

「ああ」

「あの子は特別な。だからここで眠らせていたんだけどね、まったく、余計な仕事を増やしてくれて」

「すいません」

「そうね、悪いと思ってるんならひとつ仕事を手伝ってもらおうかな？ 桜内義之くん」

「は、はい。俺にできることなら」

「うん。それじゃあ、後で放送で呼び出すからよろしくね、ということ
で、とつとと帰りなさい。授業はじまっちゃうわよ」

水越先生はこれでお終いとばかりに、パンパンと手を叩いた

「はい、失礼します」

俺は水越先生に一礼して、歩き出す

「あ、そうそう、さっきの出来事は全部忘れなさい」

背中にかけられる声

静かに、鋭く。

「これはお願いじゃないから。この意味、わかるでしょ？」

「もちろんです」

「うん、それならいいわ」

そして、洞窟を出た

「結局なんだったんだよ？」

「簡単なことだ、洞穴の中に最新鋭のロボが保管されていた。それを
お前が起動してしまった」

「水越先生は？ どうしてここへ？」

「さしずめ本職は研究所の職員ってことだろう。副職として教師をす
る。さして珍しいことでもない」

ま、そんなところだとは思うけどさ。

「杉並、正解な？」

やっぱり

「それにしてもすばらしい体験だった。あそこまで生々しいロボを目
の当たりに出来るとは」

思い出したように興奮気味に話す杉並

「確かにな、さてと、って、あーっ！」

「どうした？」

「なにがあった？」

「時間だよ時間。授業開始まで後5分しかないじゃねーかよ！」

「ああ。と言うことで少し走るぞ」

「ばか！ メシは!?!」

「あきらめるんだな。その分貴重な体験が出来たんだ。結果的にプラスだろ。」

「それはお前だけだ」

「ふざけんな！ 俺のメシを返せ！」

「別に俺が奪ったわけじゃないから、返したくても返せんな」

「くそ！ カロリーが足りてないんだよ！」

俺たちは少ないカロリー（裕也は別）を気にしながら学校まで走ったのだった

ヘッドハンティング

義之 side

「さてと、今日はどうすつかな」

ホームルームが終わり、放課後の校内。

今後の予定を考えながら、俺は廊下を歩いていたと、その時だった

「よっしや、弟くん発見♪」

と、聞きなれた。でも、あまり嬉しくない声を後ろからかけられた。

「弟くん、今、暇？　つてか、もちろん暇よね」

ぐるりと回りこんで、俺の目の前に立つまゆき先輩。

「え、えつと……」

さつきは先輩から後光がさしているように見えたのに（何があったて？　聞くな）、今は悪魔の尻尾が見える気がする

「ん？　なにになに？　あまり会いたくない人に会ってしまったて、どうやってこの場から逃げ出そうか考えてる顔をして」

うぐっ！　鋭いっ！

「ま、弟くんがそんなことを考えてるわけないけどね。ね、弟くん、このまゆき先輩に偶然会えて嬉しいでしょ？」

ぐいっと身を乗り出して、睨んでくる。

「そ、それは、もう……」

結局、そう答えるしかないわけで。

嫌いではないんだけど、苦手なんだよな、まゆき先輩って。

どうやっても、勝ち目無いって言うか、オモチャにされるって言うか。

俺の回答に満足したのか、まゆき先輩はふふんと笑みを浮かべる。

「んじやさ、ちよつと付き合ってよ」

「付き合おうって、どこへ？」

「ちよつと、そこまで」

そう言って、まゆき先輩は俺の手を掴んだ。

「そんなしなくても、別に逃げないですよ」

「そう言っつて、昔、何回も逃げたのは誰だったかしら？」

ジロリと、まゆき先輩に睨まれる。

「あ、あはは……」

言い訳できない……

「ほら、とつとと行くよ、あたしもあまり時間無いから」

そう言っつて、俺はまゆき先輩に拉致（人間き悪い事言うな！）同様に連行されたのは、生徒会室だった。

「あれ？ 義之？」

そこに居たのはフェイトだけだった。

「コの字に並べられた机の1つのイスに座って、書類（かな？）の処理をやつてるらしい。」

「フェイトだけ？ 裕也は？」

「裕也でしたら、バイトです」

「ああ、そうだったね。翠屋だっけ？」

「はい、そうです」

翠屋《みどりや》とは正式名称を喫茶翠屋《きつさみどりや》といい、なのはの家の高町《たかまち》家が

家族で経営している年中無休の喫茶店だ。

「で、まゆき先輩。義之を連れてきたのはどうしてですか？」

「ああ、そうだった」

「忘れられてた!？」

連れてきたのは、まゆき先輩なのに!？」

「ごめん、ごめん。実はさ、弟くんに大事な話があつてね」

そう言っつて、まゆき先輩は真剣な表情をして俺の方に視線を向けた。

うーむ、大事な話ね……、想像がつかん

「ま、単刀直入に言うわ。弟くん、生徒会の仕事、手伝わない？」

「……はあ？」

「ふえ!？」

あまりに予想外な展開に、俺もフェイトも間抜けな声を出してし

まった。

「いわゆるヘッドハンティングってやつ？ 弟くんの力を生徒会に貸して欲しいの」

「いや、その……」

予想外すぎるまゆき先輩の提案に、思考が空回りしている

「基本的にね、あたしは認めてるの。弟くんを筆頭に杉並、板橋、雪村や花咲たち付属3年3組の連中の能力の高さはね。だからこそやっかないなのよ。その能力の使い方を徹底的に間違えてるし」

「あはは……」

いや、そんなことを言われても。

「ってか、そもそも俺を筆頭にしないでほしい。(俺は戦○B A○A R Aの眼帯の独眼竜ではない)」

「ぶっちゃけ、手が回らないのよね。今の生徒会のメンバーだけじゃ、数はそこそこ居るけど、能力的にはあんたたちに敵わないから。だから、弟くんに目をつけたわけ」

「……なんで、俺なんですか?」

「んなもん、決まってるじゃない。1番落としやすいからよ、音姫《おとめ》が苦勞しているのは弟くんも知ってるでしょ? さっきのやりとりを見てもわかるとおり、通常業務だけでも音姫にかかってくる負担つてのは相当大きい。さらにクリパでは色々と問題が起きるからね」

そう言つて、まゆき先輩はジト目で俺を見る。

「だから、俺は音姉《おとねえ》に迷惑をかけるようなことはしないつて」

「それじゃあ、意味がないのよ、弟くん自身はそう思ってるかもしれないけど、杉並や雪村は弟くんを利用しようとするわ」

「それは、まあ……」

あいつら、なにかことがあるたびに俺に接触してくるしな。

「気がついたら、知らぬ間に弟くんが計画の中心に仕立てられている可能性も考慮できる、なんだかんだ言つて、弟くんの影響力はバカにならないからね。本人にその気も、自覚もないとしてもさ。んで、生

徒会としては、その可能性がある限り、弟くんのマークを外す訳には
いかないのよねえ、それも、危険ランクAだから、それなりの人員の
割り当てが必要だし」

「……」

「そうだったんか……」

「あははは……はあ」

「だったらさ、弟くんをさ、生徒会《こつち》に取り込んだじゃったほう
が安心でしょ、基本的能力が高い上にランクAの人物たちとも接点が多
い、言ってしまうえば、首輪の鈴としては最適な人材なんだよね」
「……」

「それに、弟くん。音姫のために騒ぎを起こさないって言ってるけ
ど……、ほんとのところさ、少し物足りなさを感じてるんじゃない
い？ 本来はさ、生徒会《こつち》側の人間なんだし」

「そう言って、まゆき先輩は挑発的な笑みを浮かべた。」

微妙に反論できない感情があるところが、少し悔しい。

「だったらさ、正しい側の方で正々堂々と大暴れすればいいじゃない。
きつと、音姫も喜ぶと思うよ？ すっごく甘ったるい笑顔で、弟くん、
一緒に頑張ろうね♪ とか言っちゃってさ」

頭の中に、まさにその映像が思い浮かんだ。

音姉のことを言われると、ちよつと弱いな。

確かに、色々迷惑とか掛けてきたし。

手助けしてあげたいって気持ちも、確かにある。

「ま、あたしが言いたいのはそれだけ、嫌なら嫌で、断つてくれてもだ
けどさ」

「そう言いながら、まゆき先輩は指をコキコキと指を鳴らす。」

「まゆき先輩!？」

「そ、それって脅迫って言うんじゃない？」

「おほほ、人聞きの悪いこと言わないでよ。これは、交渉よ」

圧倒的力関係の差がある状況で、なにが交渉なんだろうか。

「フェイトも、まゆき先輩の後ろでごめんって両手合わせて頭下げてるし」

「つてことで、もう1回聞いわ。弟くん、生徒会の仕事、手伝わない？
とりあえずクリパの期間だけでいいから」
そう言って、まゆき先輩は小首をかしげた。

「……………」

生徒会の手伝いね。

正直、この展開は全然考えてなかったな。

普通にクラスの連中とクラス出展するつもりでいたからな。

例のセクシー寿司パーティーが、どう転がるのかの予想が全然できないけど。

ま、でも、生徒会の手伝いをするという選択も悪くないのかもしれない。

音姉の助けができるってのは大きいしな。

少し面倒くさいって気持ちもあるけどさ。

「……………」

俺は少し考えた後、まゆき先輩に答えを返した

「申し訳ないですけど、遠慮させていただきます。」

俺は自分の気持ちに素直に応えた。

「ふくん、このあたしが頼んでるのに断るんだ？」

まゆき先輩の目がスーツと細められる。

猛禽類が獲物を狙う時のような目。

って言うか、完璧に脅迫だよなあ、これ。

思わず、やらせていただきますと答えたくなくなってしまった。

「それじゃ、脅迫ですよ。まゆき先輩……………」

「なにか言った？」

「いえ、なにも……………」

フエイト……………諦めるのはやいよ……………

「やりません」

俺は念のために、もう1回言った

何より、せっかくのクリパライフを生徒会の手伝いで棒に振りたくない。

俺が言うと、まゆき先輩の顔が近づいてきた。

「……………」

「……………」

少しの間、見つめあう。

「……………」

と言うか、にらみ合う？

戦力的に圧倒的な差があるので、にらみ合いにならないけど。

「……………」

ってか、距離が近いですって！

吐息のかかる距離で、まゆき先輩はじつと俺の目を覗き込んでいる。

きりつとした綺麗な顔立ちで間近に迫られて、思わず視線を逸らしてしまう。

なんか、いい匂いするし。

「やっぱだめか〜」

まゆき先輩がふつと、表情を和らげた。

「うくん、残念」

「すみません」

「いや、別にあやまんなくてもいいよ。最初から無理だろうなあ〜って思ってたから、つくか、もし手伝ってもらえたらラッキーくらいのも〜でいたからさ。弟くんには弟くんの都合があるもんね」

「そりゃ、まあ」

「んじや、今日は帰っていいよ。時間とらせて〜ごめんね」

「はい、失礼します」

俺はまゆき先輩とフェイトにお辞儀をして、回れ右をする。

「ま、気が向いたらいつでも訪ねてきてよ、生徒会はいつでも弟くんの手助けを待ってるからね」

俺は、まゆき先輩の声を背中に聴いて生徒会室を後にした。

それぞれの日常　そして……

義之 side

俺たちは今、2人で台所に立ち料理していた。

これが俺達の日常だ。

ぐつぐつと音を立てる鍋から、煮物のいい香りが漂ってくる。

「ん、もう一味かな？」

「ほい、醤油《しょうゆ》」

俺は、音姉《おとねえ》が欲しいものを予測して手渡した。

「ありがと」

当たったようで、音姉が醤油で味を整える。

おたまで煮汁をひとすくいして、軽く味見。

「うん。いい感じ、いい感じ♪ はい、弟くん。どうかな？」

口元におたまを寄せられる。

「あくん」

「あくんとか言うな」

俺は、若干気恥ずかしくなりながら言った。

「ずっと、中の煮汁をすする。」

口の中に、醤油とみりんの柔らかい味が広がった。

文句なしの味付けだ。

流石は音姉。

「うん、おいしい」

俺は素直に賞賛した。

「よし、完成♪」

コンロの火を止めて音姉がにっこりと微笑む。

「お魚の方はどう？」

「いい感じに焼けてるよ」

俺はグリルを覗きながら答えた。

音姉とふたりでの夕食作り。

別段珍しいことでもなくて、もう日常の風景となっていた。

夕食時になると、隣の朝倉家からやってきては一緒にご飯を作っ

て、食べて、団欒《だんらん》して、そして帰る。

俺が、芳野《よし》の《家に移り住んでからもう半年以上。ほぼ毎日のように繰り返されてきた日常だ。

こんな日常も、まあ悪くないと思う。

「おーい由夢、皿の用意しろ」

ついでに、もうひとり。

俺は、たぶん居間でぐでぐでとしていたであろう由夢に声をかける。

「え、かつたるい」

と、予想通りの、なんとも情けない返事が返ってきた瞬間。

「由夢ちゃん！」

と、音姉の叱責が飛んだ。

「や、冗談ですってば」

いかにも、かつたるそうな台所にやってくる由夢。

その姿は、ジャージにメガネとリラックスしきった格好。

学校での姿とのギャップが激しいと言うか、なんとと言うか。

因みに、こっちの方が由夢の本性だ。

「や、それにしてもおふたりさん、お似合いだね。まさに新婚さんって

感じですか？」

何時もの対音姉の言葉を言う由夢

「し、新婚さん、な、なに言ってるのよ由夢ちゃん。やだなく(テレ)」

隣でもじもじと、エプロンの裾《すそ》を弄りだす音姉。

なにを照れてるんだかこの人は。

「妹《・》としましては、仲の良いおふたりの至福の時間を邪魔してしまうのはいかなものかとちょっと考えてしまうわけです」

「はいはい、いいからとつと皿の用意しろ」

俺は、おふざけとわかっている由夢の言葉を軽くスルーして、由夢に促した

「はーい。兄さんはノリ悪いなー」

ほらな

由夢の(渋々)用意したさらに料理を盛り付けていく。

肉じゃがに、塩鮭。それとご飯に味噌汁と。

「そんな、新婚さんだなんて……」

隣では、音姉がどこか遠くの世界に旅立っていた。

いい加減に帰って来い。

そして俺達はご飯を食べながら、クリパのことや、委員長のことを話したりした。

義之 side END

裕也 side

「ありがとうございました。またお越しく下さいませ！」

俺は、レジで精算して帰るお客様に何時ものセリフを言っ頭を下げた。

「裕也くん、お疲れ」

「お疲れ」

「お疲れさま」

そう俺に声をかけてくれたのは、なのはの父親の高町士郎《たかまちしろろ》さんと、お兄さんの高町恭也《たかまちきょうや》さん。それにお姉さんの高町美由希《たかまちみゆき》さん、そして母親の高町桃

子《たかまちももこ》さんだ。

「お疲れ様です」

俺は同じように返事をした。

「裕也君、お疲れ様」

そう言いながら、なのはがキッチンの奥から現れた。

なのはは現在、ここ喫茶翠屋の2代目の店長になるべく修行中の身だ。

え？ 本当ならばお姉さんの美由希さんがなるはずだっ？ それじゃダメです。美由希さんが料理を作る

と、大抵殺人級の料理に化けてしまうのだ。（美由希さんが作ったお菓子が原因で、以前俺は4時間意識不明になった。）

「それじゃ、今日はもう閉店ね」

そう言つて桃子さんは、ドアの札を「OPEN」から「CLOSE」に変更した。

「皆さん、今日もお疲れ様でした」

「「「お疲れ様でした！」「」」」

俺たちは店長である、桃子さんの前に整列した。

ここ喫茶翠屋では士郎さんではなく、桃子さんが店長だ。

「それじゃあ、忍《しのぶ》ちゃん、お願いね？」

桃子さんがそう言つと、俺の右の6番目、一番端に立っていた月村忍《つきむらしのぶ》さんが前に立つた。

「皆さん、今日もお疲れ様でした」

「「「お疲れ様でした！」「」」」

「それでは、明日のバイトの方の出勤者の確認をします。まずは有村さんに次に・・・」

なんで、高町家ではない忍さんがそんなことをやっているかと言うと、忍さんはここ喫茶翠屋のチーフウエイトレスで、バイトの人達の出勤などを確認したり、桃子さんの代わりにフロアでの指示出しなどをするのが仕事だ。

因みに、忍さんは資産家のお嬢様であり、なのはの兄の恭也さんの恋人だ。

そして、忍さんの確認も終わり

「それでは、今日はこれまで、皆さん明日も頑張りましょう！」

「「「はいー」「」」」

解散になった。

俺が、スタッフルームで着替えて帰宅しようとした時だった。

「裕也くん」

と士郎さんが、他の皆に聞こえないように耳打ちしてきた

「あまり、無理はしないように、もし君になにかあったら、幸也《ゆきや》さんと彰子《あきこ》さんに申し訳が立たない」

と言われて

「俺は自分の“罪”を償うまでは死ねませんから」
「と言って俺は翠屋を出た」

裕也 side 一時アウト

士郎 side

「“あれ”は君のせいなんかでは、ないのにな・・・」
私、高町士郎は帰宅する裕也くんの背中を見ながら呟くことしか出来なかった。

士郎 side END

裕也 side 復活

「寒いな・・・」
流石に、夜の10時は寒くてマフラーを口元まで上げた。
と、その時だった。ポケットの中に入れていた携帯が震えた。

「誰だ？」
俺は携帯を開いて確認した。

「メールか」
俺はメールのアイコンをクリックして、パスワードを入力した。
「！」

差出人はJ・Sとだけ書かれており、そしてメールの本文には画面
いっぱい“黒”だけが映り、しばらく
ボタンで下にスクロールすると、10桁の数字が書かれている。

「任務か」

俺はそう言いながら、10桁の数字を押して通話ボタンを押した。
『やあ、ちゃんとメールがいったようですよよかったよ』

「ドクター、今日の任務の場所は？」

『場所は風見湾の倉庫群の7番倉庫だよ。装備はすでにウエンデイに
運ばせた』

「わかった、すぐに向かう」

『頼むよ、守護者《ガーディアン》よ』

と言い通話は切れた、俺は携帯をポケットに突っ込むと目的地に向かい走り出した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

走り出して約10分後、俺は目的地の風見湾のすぐそばに着いた。

「裕也、こつちツスよ〜」

と聞こえたので声のほうを向くと、そこには肩あたりまで伸ばした赤い髪を後頭部に纏めた俺と同じ年くらい

いの女の子がいた。

この子が、先ほど言われたウエンデイだ。

「ウエンデイ、装備は？」

「ここにあるツスよ」

と手渡された銀色のトランクを、俺は留め金を外して開けて中身を確認した。

「確かに、確認した。着替えるか」

と言い俺は、周囲を確認して手ごろな小屋を見つけた。

そして中に入り、俺は着ていた制服を脱いでトランクに入っていた黒一色の服を身に纏い、腰には銃を装備

して脇には銃の予備マガジンをつけて、頭から足元までスツポリと覆う黒いマントを纏い、最後は顔に目元に赤い涙のような模様の書かれた白い仮面を着けてから外に出て、ウエンデイを見て。

「ゼストさんは？」

と聞くと

「既に展開済みツス」

「よし、では行こうか」

と、俺は7と書かれた倉庫を見た。



第3者 side

倉庫の外には、2台の黒塗りの車が停車していて、倉庫のドアの近くには夜なのにサングラスをかけた男達が周囲に目を光らせていた。

そして暗い倉庫の中。大きな木箱を机代わりにして、木箱の上にはランタンが置かれ、木箱の周囲にイスに

座った2人を含めて20数人の男達がいた。

「で、例の物は？」

と右側に座っていた男が、前に居る男に聞いた。

「そう焦るな、ブツはあそこだ」

と左側に座っていた男が、後ろにある布に覆われた箱状のものをみると

近くにいた男の部下が、布を取り払った。

「確かに、確認した」

と、箱状のケージを見ながら言った。ケージの中には数人の小さな子供がお互いの身体を抱き合いながら、すすり泣いていた。

右側の男が、足元から同じようなトランクを木箱の上に置いた。

その瞬間だった。

倉庫の巨大なシャッターが、轟音と共に吹き飛んだ。

「な、何事だ!!」

炎の中から1人の黒尽くめの人間が現れた。

「貴様たちの処刑人だよ」

「外にいた連中はどうしやがった!!」

と男が問いたですと

「ああ、それは“これ”のことか？」

と裕也（相手は気付いてない）は、右手に持っていた球状の物を男達の方に投げた。

“それ”は1人の男の首だった。

「てめえ!!」

男が声を張り上げると、周囲に居た部たちが懐から銃を取り出した。

しかし、気付くと裕也は居ない。

「遅い」

裕也の右手には先ほどまでは持っていなかった1本の刀が存在して、1人の男の後ろに立っていた。

そして、次の瞬間には男の首が切り飛ばされて、血が噴水のように噴き出した。

そこからは、一方的な蹂躪だった、ある男は頭から縦に切り裂かれて、もう1人は胴体を腰から両断されて絶命していく。

そして、銃声と肉を切り裂く音が響く。

しかし、裕也の刀はまるで舞うかのように剣閃が走った。

そして爆発から8分後、倉庫内外問わず男達の死体が転がった。

「相変わらず速いな」

裕也は声のほうを見ると、いまだ燃えているシャツ跡の炎が燃えていない場所に1人のガタイのよく茶色いコートを羽織り、左腕に手甲を装備していて、左手に巨大な槍のデバイスを持った中年の男性が居た。

「ゼストさんですよ、そちらも終わったようですね」

男性、ゼストは倉庫の周囲に展開していた戦力の掃討を担当していた。

その証拠に槍型デバイスからは血が滴っている。

「ああ、しかし数ばかりだったな」

ゼストはそう言いながら、槍を振るい血を飛ばした。

「おや？ あたしが最後でしたか」

とシャツターから先ほど別れたウエンデイが現れた。違うのは右手にまるでサーフボードの様な専用複合兵装の「ライディング・ボード」を所持していた。

そして、ウエンデイが裕也の近くに来た瞬間、裕也の“左目”がある“幻視《ビジョン》”が見えた。

(これは!!)

その幻視は、目の前に居るウエンデイが身体をくの字に曲げて倒れる映像だった。

「裕也? どうしたツスカ?」

と次の瞬間には、ウエンデイが自分に近づいている。

「ウエンデイ!」

と裕也は、ウエンデイを突き飛ばしていた。

次の瞬間“死の羽音”が連続して響き、裕也の身体から血が霧のように噴き出した。

「裕也!」

ウエンデイが体勢を立て直しながら叫んだ。

そして、ゼストは銃弾が飛んできた方向。つまりシャッターの方を見るとそこには1人の男が手に自動小銃

《アサルトライフル》を持っていた。

「殺された仲間の仇だー!」

と男は銃撃を再開した。

ゼストはバックステップして避け、ウエンデイはライディング・ボードを楯のように構えて倒れた裕也の前に躍り出た。

(このままじゃ攻撃できないツスカ!)

とウエンデイが危惧した瞬間

「IS 《インヒューレントスキル》発動、ランブル・デトネイター!」

と声が聞こえて、続いて爆発音が響いた。

「チンク姉 《ねえ》!」

先ほどまで男が立っていた場所には、粉みじんになった男の肉片が飛び散り、近くには小柄な体躯に腰まで伸ばした銀髪、右目に眼帯を着けた少女、ウエンデイの姉のチンクが居た。

「ウエンデイ、ゼスト撤収するぞ。ウエンデイは裕也をドクターの所へ」

「ああ」

「わかったツスカ!」

ウエンデイは持っていたライディング・ボードを地面に置くと、浮

き上がり倒れた裕也を抱えながらウエンディはライディング・ボードに乗ると

「ISエアリアルレイブ発動！」

と言うと、ライディング・ボードは高速で飛び始めて空に消えた。

遠くからは、パトカーのサイレンが聞こえ始めていた。

治療と裕也の・・・

第3者side

「ウエンデイ・・・俺は置いていけ・・・」

とウエンデイの背中中で、息絶え絶えになっている裕也が言った。
「何を言ってるっすか!」

裕也の言葉を聞いたウエンデイは、思わず叫んでしまった。

「俺は・・・簡単には”死なない”知ってるだろう?」

「知ってるっすけど・・・!」

確かに、裕也はとある理由で簡単には死なない。しかし、今は12月でしかも夜だ。気温は0℃近い。

しかも、ウエンデイは気付き始めていた。

(裕也の体温が低下し始めている!)

下手したら、裕也が死んでしまう可能性が高い。

「もう少しでドクターのところに着くっすから!」

ライディング・ボードで移動し始めてもうすぐ10分経過する、距離的にはもうすぐのはずだ。

と、遠くに見覚えのある建物が見え始めた。

「見えた!!」

ウエンデイは内心で喜んだ

(これで裕也を助けられるっす!!)

そして、建物の近くでウエンデイはボードから降りた。

建物の壁には看板が着いており、看板には「町医者 無限の欲望

J・S 医院」と書いてあった。

因みに裕也は、この看板を見るたびに「もう少しマトモな名前は思いつかなかったのか」と言う。

ウエンデイはボードを壁に立てかけて、建物の裏手に回った。

すると、勝手口が開き、中から1人の男が顔を見せた

「入れ、準備は整っている!」

男は髪の毛は紫で肩あたりまで伸ばしており、眼の色は黄色、この男の名前はジェイル・スカリエッティと

言う

「ドクター！ 裕也が、裕也が!!」

とウエンデイは、背中に背負っていた裕也をスカリエツティに見せた。

「わかっている、早く入れ」

ウエンデイはスカリエツティの言葉に従い、中に入った。

中は仕切りによって細かく区切られており、部屋ごとにベッドや診察台が置いてある。

スカリエツティはそれらは無視して、さらに奥に進む。

奥には「関係者以外立ち入り禁止」と書かれたドアがあった。

スカリエツティはそのドアを開ける、そこにはロッカーが並んでおり、1番奥のロッカーには「使用禁止」の札が貼ってある。

スカリエツティは、そのロッカーの鍵を開錠して開けた。すると、中には地下に続く階段が存在した。

狭かったのは入り口のみで、中は広がった。

少し降りると、下に光が見えた、そして光りを超えるとそこには広大な空間が広がっていた。

奥の壁には巨大なモニターが光っており、画面には様々な情報が流れている。

そして中央には、手術台のようなベッドが置いてあり、その周囲には治療道具が台車で置いてある。

「そこに裕也くんを寝かせたまえ」

とスカリエツティは、ベッドを指差した。

「了解です。裕也、少し我慢するつすよ」

ウエンデイはなるべく、裕也にダメージを与えないように優しく寝かせた。

裕也の傷は遠めに見ても重傷で、左半身に集中しており特にわき腹が酷い。

「ふむ、既に再生が始まっているが鈍いな、ウーノ輸血の準備を！」

と、スカリエツティは右手の壁際に居る薄い紫色の髪の毛が特徴の女性、ウーノに言った。

「わかりました、A型でしたかね？」

ウーノは棚の引き出しから輸血パックを取り出し、それを台車のトレーに置きながら聞いた。

「それと、麻酔と糸。針とピンセット、後は包帯も頼む」

スカリエツティは続いて指示を出し、ウーノは指示に従い取り出した道具をトレーに置いていく。

「さてと、治療を始めようか」

と、スカリエツティは言うど、治療を始めた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、約1時間後

「ふう、これで大丈夫だ」

スカリエツティは、持っていた針を置きながら言った。

「この傷は全て銃創ですね。彼が被弾するなんて、珍しいですね？」

ウーノは包帯を巻きながら驚いていた、それは裕也の戦闘力と戦闘技術を知ってるが故だった。

「裕也は・・・あたしを庇ったからっす・・・」

と、入り口そばの影になっている所に、ウエンデイが座り込んでいた。

「あたしが気付かなかったから・・・裕也は・・・！」

ウエンデイは、涙を滲ませながら叫ぶ様に言った。

「いたし方あるまい。まさか、1人だけ生き残ってるとは思わなかった」

裕也を撃った男は、偶然生き残っていた男だったのだ。

「それでも、あたしが気付かないといけなかったのに!!」

叫びながらウエンデイは、拳を血が滲むほど握り締めた。

「仕方ないだろ・・・偶然見えたんだ・・・」

裕也は痛みを堪えるように喋りながら、起き上がった。

「裕也、起きちゃだめっすよ!!」

ウエンデイはすぐに駆け寄って、裕也を支えた。

「『見えた』のは『左目』だね？」

「・・・はい」

裕也はスカリエツティの質問に、ゆっくりと返事をした。

「左目ってことは『アイオンの眼』っすか!？」

「ああ」

裕也はベッドから降りた。

「流石はドクターですね、もうほとんど治ってる」

「帰るのかね？」

「はい、エリオとキャロが待ってますから」

と、裕也は自分の格好を見て気付いた。

「しまった、制服と荷物忘れた」

裕也が頭を掻いてると

「これだろ、回収しておいた」

と、裕也の隣にチンクが来て、装備の入っていたトランクと風見学園の指定カバンを手渡した。

「ありがとうございます、チンク」

と、裕也は受け取ると、制服に着替えて階段に向かう。

「治療したとはいえ、2日間は無理しないように」

「わかりました」

裕也は入り口で返事をする、そのまま階段が上がっていった。

そして、裕也が去ってドアが閉まる音が聞こえると

「さて、裕也くんが怪我してしまったので、しばらくの間は君達、頼んだよっ。」

と、スカリエツティは室内に居る全員に言った。

「」「はいー」「」

全員返事をする、階段を上って去っていった。

それを確認したスカリエツティは、近くにあったパソコンを設置してある机のイスに座った。

「ふう……………」

と、ため息を吐いた時だった。パソコンの画面に電話のマークが現れた。

スカリエッツィはその電話マークをクリックした。すると、画面に水色の髪の毛が特徴の若い女性が映った。

「やあ、リンデイ」

そう、その女性の名前はリンデイ・ハラOWNと言いフェイトとアリシア、そしてクロノの母親である

しかしクロノたちの年齢を考えると40歳は超えてるはずなのが、見た目が30前半か下手すると20代後半にしか見えない。

『今、警察《こつち》の現場検証が終わったわ』

リンデイは、警察のとある機関の課長なのだ。

「ふむ、それでどうだったかね？」

『ええ、今回も“連中”の関与があったわね。それと、子供たちは全員保護したわ』

「そうか」

スカリエッツィがうなずくと

『裕也君、怪我したわね?』

「ああ、うちのウエンデイを敵の銃撃から庇ったんだ、“アイオンの眼”で気付いてね」

それを聞いたリンデイは、画面の向こうで驚いた顔をして

『“アイオンの眼”を!?!』

「ああ、先ほど帰宅したがね」

『そう・・・、それと先ほど土郎さんから気になる電話を聞いたのよ』
「気になる電話?」

『裕也君ね、「俺は自分の“罪”を償うまでは死ねませんから」って言ったそうよ』

「そうか・・・」あれ“は彼も被害者なのにな・・・」

そう言ってスカリエッツィは、机の右端に立っている写真たてを見る、その写真にはリンデイとクロノに似た男性とスカリエッツィ、そして裕也の両親を含めて10数人が写っている。

『“あれ”からもう9年なのね・・・』

「ああ、そして脱走から11年だ」

スカリエッツィはそう言って、引き出しを開けた。

そこには、1冊のぶ厚いファイルがあった。

スカリエツティはそれを出して、机に置いた。

表紙には「人工アイオンの眼移植計画」と書いてある、スカリエツティは表紙を捲った。

そこには、今から13年前の日付が書かれている。

スカリエツティはそれを無視して、ページを高速で捲った。

そして、とあるページで止まる。

そこには「人工アイオンの眼被検体候補者」、プロジェクトα・Ωと書かれており、下には「尚、被検体たちには人工アイオンの眼を使いこなさせるために強化手術を施す」と書いてあった。

「私も愚かだったよ」

『……』

スカリエツティは自嘲的な笑みを浮かべて、さらにページを捲るすると、1人の赤ちゃんの写真が写っているページで止まる。

その赤ちゃんは、どこか裕也に似ている。

しかし、本来名前が書かれている場所には「被検体N。 E-666」とだけしか書かれていない

「彼は最大の被害者なのにな……」

と、スカリエツティはイスの背もたれに寄りかかり、上を見上げた。

『ええ……』

リンディもそれに賛同していた……

新しい出会い E・M編

義之 side

「うゝつす、義之！」

やたらとテンションの高い声と共に、後ろから肩を叩かれる。

振り返ると、見慣れた（アホ）顔。

「ああ、渉か。おはよ」

「ん？ どうした？ なんかテンション低くね？」

「んな、朝っぱらからテンションあげられるかよ」

大体、俺はそんなキャラじゃないし。

「マジかよ。俺なんか今日、朝からすげーわくわくして、めっちゃ早起きしちゃったって言うのに！ ってことで、さっそく行こうぜー」

そのまま渉は、教室とは反対方向へと歩いていく。

「行くって、どこ行くんだよ？ 教室、そっちじゃねえぞ」

俺は方向音痴にでもなったのか、筋違いな方向へと歩く渉《バカ》を呼び止めた。

「はあ？ なに言ってるんだよ義之くん、行くって言ったら見学に決まってるだろ？」

「見学？」

「ああ」

「なんの？」

「転校生だよ、転校生。今日、うちの学校に転校生がふたり来るって。義之も聞いているだろ？」

「いや、知らん」

俺は正直に答えた。

「ちよあ、マジかよ！ お前なく、あんだけ噂になってるのに、っーか、非公式新聞、読んでないのか？」

「読むわけないだろ」

あんな怪しいの。

「マジでっー」

うるやい。

驚きの表情を浮かべる渉。

「つてか、本当に読んでるヤツがいたことの方が驚きだよ。」

杉並のヤツの満足そうな顔が一瞬、脳裏に浮かんで、少し嫌な気分になる。

「んで、その転校生はウチのクラスに来るのか？」

俺は正直な質問をぶつけた。

「いや。ふたりとも付属だけど、ひとりは2年、もうひとりは1年だつてさ」

「だったら、俺が知るわけがないな。」

「なんでも、ふたりともかなりの美少女らしいぞ、この時期に転校してくる下級生。しかも美少女！ たまらんなあ、義之！」

「そう言つて、ぐへへとだらしない(放送ギリギリ)笑みを浮かべる。」

「つたく、朝からホント元気なやつだ。」

「だから、ほら、早速行こうぜ。職員室」

自首しにか？

「いや、俺はいいよ。そんな興味ないし」

「はあ、なに言つてんの、お前？ 美少女がふたりも来るんだぞ？ それを、それをーっ！ 興味がないとおっしゃるのですか、あなたは！」

渉は、ぐいつと身を乗り出してきた

呼吸も荒く(まるでドコゾの変態みたいに)。

「あ、そーですか。そーいことですか、義之さん、まあ、すでにモテモテの義之さんには、転校生なんて興味の対象になんてならないわけですね、転校生に期待を膨らませてる僕らを見て、冷ややかな笑みを浮かべているわけですね、くきーっ！」

「べ、別にそういうわけじゃないけどさ」

「てか、モテモテってなんだ」

「だったら一緒に見学に行こうよ」

「いや、別にひとりで行けばいいだろうが」

「だ、だつて、なんかひとりで行くのは、ちよつと怖いじゃん、だから一緒に行こう。ね、義之くん」

身体をくねくねさせながら、俺の手を取ってくる。
「ってか、きもい。
ったく。」

「わかったよ。行きやいいんだろ、行きやあ」
「おお、心の友よ」

そして、渉にがっしりと肩を組まれた。
「じゃあアンか」

「んでは、新しい出会いを求めて、れつつらご」
渉に引つ張られるようにして、俺たちは職員室の方へと向かった。
「ありや？ 誰も居ない」

職員室前についたところで、渉がきよろきよろとあたりを見回す。
「おつかしくな。俺の予想だと、職員室は転校生を一目見ようって大勢の生徒でごった返しているはずなのに」

あほか
「みんながみんな、お前と同じ発想なわけないだろ？」
そうしないと、他の連中がかわいそうだ。

「んなこたーない！ 男って言うのは美少女転校生が来るって聞けば職員室まで見に来る生き物なんだよ」
「さいですか」

お前の思考が既に負け犬なのは、気のせいかな？
ま、実際はひとりもないわけだが。
「おつかしくな」

渉はそのまま、職員室のドアの隙間から中を覗き込んだ。
どこぞのストーリーカーみたいだな。
「それらしいヤツはいるか？」

俺は、覗き込んでいる渉《バカ》に聞いてみた。
「いや、なんの変哲もない職員室風景だな」
なんだよそれ

「転校生が来るってのは、正しい情報なのか？」
俺は一応確認した。

「ああ、なんせ非公式新聞に書いてあったからな」

「……………」

バカだ、バカが居る!!

「な、なんだよ。その沈黙は」

お前が愚かだからだよ

「他の情報源は？」

まさか

「ない」

マジで真正のバカだ!!

「……………」

「あんだよ」

お前のバカさ加減に呆れてるんだよ!

「いや、別に……………」

俺は怒りたい気持ちを押さえ込んで、返事をした。

確かに非公式新聞部……………つか杉並の情報収集能力はすごいものがあるけど、それと同じくらい適当《ガセ》なことを言うからな。

ガセの可能性もあるってことか。

俺はポケットから携帯を取り出して、時間を確認した。

もうすぐ、ホームルームが始まる時間だった。

「とりあえず、一旦戻ろうぜ。その転校生の情報自体、正しいかどうかの判断がつかん」

ってか、これで遅刻でもしたらばかみたいだな。

「いや、俺はもうちょっとだけ」

そう言つて、渉はもう一度職員室を覗きに行つた。
しようがない。

俺は教室の方へと足を向ける。

「んじや、俺は先に戻ってんぞ」

振り返つて、渉にそう声をかけた瞬間だった。

「あー!」

と、驚いた声

「きゃー!」

ぽすんと胸元に衝撃。

そして、

「うわっ！」

そのまま俺の視界が天井を向いた。
身体が後ろに倒れる感覚。

どすっ！

痛え！

「あだっ！」

背中を打ち付けられる衝撃。

視界が暗転する。

「いてててて」

そして、身体に押し掛かる重み。

右手のひらには柔らかい感触。

「ん？ なんだ、この感触は？」

手のひらを握りこむように動かすと、その柔らかな物体も俺の手の動きにあわせて形を変える。

「……………」

視界が戻つてくると同時に、俺は状況を理解した。

「あくあ」

「やっちゃった……」

む？ この声は？

俺は聞き覚えのある声に思考を向けてしまった。

そこには、裕也とフェイトが居た

なんか、額に手を当ててる

「……………」

改めて俺は、目の前の少女に視線と思考を戻した。

目の前には美少女の顔。

こんな状況でも、思わず見惚れてしまうくらいの美少女だった。

「……………」

「……………」

「……………」

「で……………あなたはいつまで、わたしの胸を触ってらっしゃるおつもり

なのかしら?」

「あ、ご、ごめん!」

俺は慌てて右手を離した。

「……………」

目の前には、ぎろりと俺を睨んでいる女の子の顔。

女の子から発せられる、甘い匂いが鼻腔をついた。

「……………」

「あつと、あの、最初に言っておく。わかっているとは思うけど、これは事故だからな」

「……………」

「その、まあ、なんだ。とりあえず、一旦落ち着いて話をしようじゃないか」

「……………」

「いや、その、キミが非常にご立腹だということも、感情がそこに到るまでの過程も十分と言っていいほど理解しております。ただ、暴力では何も解決しないと思うんだ、とりあえず、その振り上げたまま、ふるふると怒りに打ち震えている右手を下ろしていただく…」

「義之、諦めろ」

「言い訳はかっこ悪いよ?」

やっぱりだめか

「こんのおおおお、スケベおとこおおお!」

女の子の右腕が振り下ろされた。

「ちよ、ちよつと待っ!」

怒声と共に風を切る音が聞こえて、

パシン!

「ほげっ!」

頬に強い衝撃が駆け抜けた。

一瞬、視界が今度はホワイトアウトする。

「はあ、はあ、はあ……………もう、さいつて!」

女の子は怒声と共に立ち上がり

肩で息をしながら、俺を見下ろしている。

「いや、だからー」

俺は弁明しようとしたが

「うるさい!!」

女の子は気付くとバリアジャケットを展開した。(詳細は設定を参照)

「ちよっ!?!」

女の子の持っていた杖の上端にあった六芒星マークの小物が外れて、そこから鎌の様な魔力刃が形成された。

「やれやれ、フェイト。クロノさんに連絡して」

「わかった」

後ろからそんな声が聞こえたが、今の俺には意味は無い

「死になさーいーいー!」

女の子は魔力刃の形成された杖を俺めがけて、振り下ろしたが、
が、次の瞬間

「はい、そこまで」

と、聞こえて魔力刃は裕也の左手の人差し指と中指で止められていた。

義之 side END

第3者 side

「はい、そこまで」

転校生の女の子が振り下ろした薄紫色の魔力刃は裕也の左手の人差し指と中指に挟まれて、義之の髪先寸前で止まっていた。

「なっ!?!」

しかも、女の子の首筋には刃渡り40cmほどの刀が向けられていた。

「助かった・・・」

女の子が驚き、義之が安堵していた。

「流石にやりすぎだ、今回の出会いがしらの事故だ、最初のビンは見逃したが、これは見逃せない」

裕也は左手で魔力刃を止めながら、女の子を睨んだ。

「それに、校舎内でのデバイス展開は校則違反だよ？」

ほら、と、フェイトは生徒手帳を見せた。

そこには、校舎内での校則第9条特別項目第12項〈校舎内でのデバイス展開は緊急事態以外全面禁止〉と書かれていて、その下には〈尚、生徒会役員及び風紀委員は許可を得てからならば展開可能〉と書いてある。

「ですが！」

「言い訳無用」

〈お嬢様、彼の言う通りでございます！〉

「グラーマまで！」

裕也は転校生が持つてる杖の中間を見た、そこには紫色の丸い宝石が埋まっております、それが点滅していた。

「なるほど、インテリジェントデバイスか」

〈それに彼の刀、かなり厄介ですよ〉

「どういうこと？」

〈私のプロテクションを切り裂きました〉

「な!! グラーマのプロテクションを!？」

「やはり、防御特化型のデバイスか。他のプロテクションより硬かったからな。だが、この鉋切長光《かんなぎりながみつ》の刃には意味を成さないぞ？」

「〃切る〃ことならば、裕也の持つてる刀のなかでは最強だっけ？」

「ああ、俺の知る限りだがな、今まで切れないってのは無かったな」

その時だった。

「ここか？ デバイスを無断展開した転校生が居るといふのは」

と裕也たちの後ろの階段から、耳が見えるくらいで切られた黒髪に若干童顔気味な男子が数名の風紀委員会役員を連れてやってきた。

「ええ、そうですよ。クロノ先輩」

その人物の名前はクロノ・ハラウン、名前で分かると思うがフェイトとアリシアの兄に当たる人物で、風紀委員会の副会長を務めている。

更には、風紀委員会精鋭部隊へアースラを率いる部隊長でもある。「やれやれ……君達、彼女を風紀委員会室まで連行」

「はい！」

「義之と渉は教室へ戻れ。後、渉。デバイスを展開しなくてよかったな？」

渉の右手には、渉のインテリジェントデバイスのへブリューナクへの待機形態の青いカードがあった。

「先に戻ってるぞ？」

「おお：因みに、展開してたらどうなってた？」

渉は気になったのか、恐々とした様子で聞いてきた。

「最低でも、反省文10枚だな。最高で30枚」

使う用紙は、作文用の3000文字のものだ。

「マジで!?!」

「おおマジだ」

「うん」

「相変わらず、デタラメな刀を持つてることで」

「ついでに、シグナム先生に生徒会関係の用事で少し遅れると伝言頼む」

「私も」

シグナム先生とは、裕也たち付属3年3組の担任だ。

体育教師でいつもジャージを着ているピンク色の長髪をポニーテールに纏めている女性だが、その正体は、はやての有する魔道書の「夜天の書」の守護騎士プログラムとやらで、まあ、人間に近い人工生命体だ。

「わかった」

「任せとけ」

「頼んだ」

そうして、渉と義之は教室へ、裕也とフェイト、そしてクロノ達風紀委員会は風紀委員会室に向かった。

お願い事

義之 side

俺と渉は今、学食（学園食堂の略な）に来ていた。

「なんつーか、大盛況だな。相変わらず」

「所詮、我々学生は経済ヒエラルキーの最下層に位置しているからな、安い！ 早い！ 美味《うま》くないの三拍子揃った学食に人が集まるのは自然の流れだよ」

「切ない話だな」

まあ、渉はああ言ったものの。ごくまれに高いメニューや、出てくるのが遅いメニューがあったりもするし、天文学的確率で超美味なメニューが出てくることもある。

そういう人間味あふれるところも、うちの学食が人気である理由なのかもしれない。

「あー、たまには職人技を遺憾なく発揮した薄切りのじゃなくて、ジューシーな肉が食いてー！」

「だったら、裕也みたいにバイトしたらどうだ？」

俺は至極まっとうなことを言うと

「学生の本分は学問です」

「お前が言っても、何の説得力もねえな」

だって、こいつ昼休み直前の授業で「環境問題について」の授業だったのになぜか、大阪のたこ焼きについて熱く語ってたのだ、それで社会担当の戯矢利尊《ギャリソン》先生からCマイナスの評価を得ていた。（え？ 俺はどうしたって？ 聞くな・・・）

「うっせ。それよか、今日は何にすんだ？」

ふむ

「素うどん」

「うっわ。学食の中でも最もお買い得プライス商品かよ。わびしい奴だなー」

うっせ

「そういうお前は？」

一応聞くか

「スープレ ウィズ ウ・ダンヌ」

「……」

英語（しかも、文法間違ってる）で言ってるが要するに……
「つてことで、素うどんふたつ買ってくるから、お前は席取つといてくれ」

「りょーかい」

俺は席を確保に、渉は券売機に向かった。

渉と別れて、分担作業する。

短い昼休み。効率よく過ぎさないとな。

「んつと……」

俺は周囲を見回した。

きよろきよろと食堂を見回す。

ほんと盛況なことだ。

ぱつと見、空いてる席なんて無さそうなくらいの込み具合だ。

ふたりで座れそうなところは……つと、

「お、あそこが空いてるな」

俺は丁度よさそうな席を見つけたので、歩いて近づいた。

つて

「あ、兄さん」

お前か

隣の席で顔を上げたのは、由夢だった。

「こんなところでお会いするなんて、奇遇ですね」

しやんと背筋を伸ばして、軽く首をかしげる。

完璧《パーフェクト》な微笑み。

「どうかなさいました?」

そして、丁寧《ねこかぶり》口調。

家でのぐーたらな姿を知ってるから、こうきちんとした由夢を見るのはなんとも気持ち悪い。

まあ、こいつの猫つかぶりは本格的だからな。

一体、何人が騙されてるのか……

「？」

由夢は計算されつくした角度で、俺を見上げていた。

「相席いいか？」

いつまでも立ってるわけにはいかないので、聞いた。

「はい、どうぞ」

席に座ろうとして、

「うげっ！」

俺は由夢の向かいに座っていた少女と、目が合った。(てか、合ってしまった)

「ちっ！」

少女は盛大に舌打ちした。

これまた、盛大な舌打ちで……

まさか、渉の言っていたふたりの転校生のもう片方って、

「あら、もしかして、おふたりはお知り合いでしたか？」

「あ、いや、知り合いつてわけじゃないけど、一度会ったことがあって、名前とか知らないし」

「そうですか。えっと、こちらは天枷美夏《あまかせみなつ》さん。今日、わたしたちのクラスに転入してきたの」

やっぱり……

「……」

「この人は、桜内義之。一学年上の3年生で、わたしの兄みたいなものかな」

「……」

天枷は、まったく無視を決め込んでいた。

「あ、あははは……」

(いったい天枷さんに何したのよ?)

由夢が念話で聞いてきた。

(いや、特になにも)

俺はとりあえず誤魔化した。

(じゃあ、なんで天枷さん、あんなに不機嫌そうなのよ?)

(その件に関しては、ノーコメントとさせていたいただきたい)

(.....)

じと目で睨まれた。

そんな目で見られても、水越先生に口止めされてるからな。たとえ口止めされてなかったとしても、説明のしようが無いし。

実は彼女はロボットで、洞穴の中に安置されていたのをたまたま俺が起動してしまつて.....。

アホか、言えるかこんなん。

言つたとして、誰が信じるつてんだ、こんな話。

つてか、もう二度と会うことはないと思つてたのに。

殴られかけたことを思い出して、俺は少し冷や汗をかいた。

ちらりと様子をうかがうと、天枷は相変わらず俺なんて目に入らない様子で食事を続けている。

ん、なんとも気まずいねー.....。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

あれから沈黙と共に食事は進み、かなりの気まずさが残つた。

食事中に何度か渉が勇敢にも会話を試みたが全て無視されて、今じゃ落ち込んでる。

「ごちそうさま」

天枷が箸を置くと同時に、手を合わせてお辞儀した。

そこは礼儀正しいんだな。

そして、脇に置いてあつた鞆を引き寄せると、中からバナナを取り出した。

つて、バナナ？

「へえ、天枷つてバナナが好きなんだ？」

あまりにも自然な行為に、思わず言葉が出た。

「.....今、なんて言つた？」

その瞬間、空気が凍りついた。

怒気を含んだ声。

「あ、その、バナナ、好きなんだつて.....」

ヤバイ、地雷踏んだかも.....

「・・・貴様」

ほらね！

由夢と渉なんか、視線を外してあからさまに我関せずって態度を取りやがった！

この薄情者!!

「どこの誰が、バナナなんぞ好き好んで食べようかあつ！」

天枷はテーブルを叩きつけると同時に、俺を睨んだ。

「・・・貴様、美夏言葉を覚えてないようだな。」

覚えてつて・・・なにを？

もしかして、洞穴で言ってたのか？

だったら、覚えてない!!

「頭の悪い貴様に、もう一度だけ教えてやるからしつかりと覚えとけ。美夏にはな、この世界で嫌いなものがふたつだけある。たつたふたつだけだ。ひとつはもちろん貴様たち人間。・・・そしてもうひとつが、バナナだ」

天枷は右手に握ったバナナを睨みつけながら、搾り出すように喋った。

だったら食うな。

「できることなら、この世界上からバナナなんてものを・・・」

その瞬間だった。

ピコン、ピコン、ピコン

突然、天枷の言葉を遮るように腕時計のようなものから電子音が鳴り響いた。

「ちい！ バナナミンがつ！」

天枷は舌打ちすると、バナナの皮を剥いて噛り付いた。

そこからは、一心不乱に黙々と食べきった。

由夢と渉は、呆然とそれを見つめていた。

因みに、天枷は食べてる間ずっと不機嫌な顔だった。

なんなんだ、この子。

周りの連中は何事もなかったかのように、と言うか現実から目を背けるように日常に戻《にげて》っている。

まったくもって、訳が分からない。

(おい、由夢。天枷っていったいどんな子なんだ?)

(わ、わたしに聞かないでよ)

俺達は念話で話す。

(だって、お前クラスメイ・・)

と、その時だった。

ピンポンパンポン♪

なんだ?

『えー、付属2年1組の天枷美夏さん、及び付属3年3組の桜内義之くと防人裕也くん、至急保健室まで来てください』

「.....」

なぜに?

天井に設置されたスピーカーから、水越先生と思わしき声が聞こえた。

『繰り返します、付属2年1組の天枷美夏さん、及び付属3年3組の桜内義之くと防人裕也くん、至急保健室まで来てください』

ピンポンパンポン♪

「.....」

俺は無言で天枷を見た。

「ふんっ!」

天枷は俺を無視するように身をひるがえすと、トレーを返却して食堂からツカツカと出て行った。

俺は呆然と見送った。

「お前も呼ばれてるぞ」

「わかってるよ」

「また何かやらかしたんですか?」

じと目で睨まれる。

「だいたい、兄さんと天枷さんの間でいったい何があったんです?」

天枷さん、あきららかにおかしかったし」

「別になにもないよ、ってか裕也は無視か!」

「裕也さんは兄さんとは違いますから」

おのれ・・・

心当たりはあるけどさ。

ってか、天枷や裕也と一緒に水越先生に呼び出されるなんて、そこはかとなく嫌な予感がするんだが。

かと言って、逃げるわけにいかないしな。

あの時、仕事を手伝うって約束しちゃったし。

「はあ〜」

俺はトレーを返却してから、天枷を追った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

第3者side

「いらっさ〜い」

保健室に入ると、義之は水越先生ののん気な声としかつめ面した天枷、そして壁に背中を預けた裕也に出迎えられた。

「ま、ちよつとそこに座って」

指差す先。ベッドに義之は腰掛けた。

「・・・」

「わざわざ来てもらって悪いわね。ちよつと裕也くと桜内くんに頼みたいことがあってね」

「美夏は必要ないと言っている」

「まあ、そう言わないの」

水越先生はなだめるように天枷に声をかけると、視線を義之に向けた。

「えっと、この前ちよつとだけ話したと思うけど、この子。天枷美夏はロボットなのね」

「・・・ふっ」

なぜか、天枷は自信満々に胸を張った。

「最新鋭・・・とは言ってもちよつと古い技術なんだけど、まあなんて言うか少し特殊な作りになっててね、見ての通り人間となら変わらなない感情や自分の意思を持っているの、まるで人間と見分けがつかない

「いくらののね」

「……」

「確かに……」

天枷は感情をこめて義之を見つめた。

「本当にロボットなんですか？」

恐らく当然の疑問だろう。

「貴様っ！ 美夏を愚弄するつもりかっ！」

「いや、だって、どこからどうみても人間にしか見えないし」

「まあ、確かに」

「だったら証拠を見せてやろうじゃないか！ このロケットパンチを食らえっ！」

と、天枷は手を突き出すが

「付いてないわよ」

「なぜ付けんっ！」

「必要ないでしょ」

「むう、これだから人間ってヤツは……」

「それにロケットパンチ程非合理的な武装は無いぞ？ 飛ばしてる間は手が無いから無防備だし、他の武装も使えないし」

天枷は裕世の言葉を無視して、ブツブツと文句を呟いている。

「まあ、天枷がロボットだってことは間違いないわ。私が保証します。

桜内くんや裕也くんが疑問に思うのもわかるけどね」

「はあ」

「ふむ」

「逆に言えばね、それだけ特殊なロボットなの。だからあそこで凍結されていた、桜内くんや裕也くんも授業で習ったでしょ？ ロボットにまつわる色んな事件のこと」

「ええ、まあ」

「はい」

ふたりは同時に頷いた。

ロボットが人間社会に普及にすることに従って起こった、様々な事件をふたりは思い出す。

規制、弾圧、破壊、さらに最近では兵器への違法改造等。

言つてしまえば、人間のエゴ丸出しの事件ばかり。

それも、ロボットと製作者側からしたら至極傍迷惑なものだ。

「ぶっちゃけ、この天枷の存在が外に漏れるとやばいんだよね」

「……」

「間違いなく、スクラップ処分される」

「でしようね」

「私たちはそれを望まないの、んで、天枷は長い間凍結されていたから社会常識に疎い。さらにシステムのにも不安定、言つてしまえばかなり奇抜な行動を取ることが予想されるのね、だから天枷がロボットだつてばれないように誰かにフオローしてもらいたいのよ」

「で、それを俺たちに？」

「ご名答」

「だから、美夏には必要ないと言つているっ！」

天枷が怒鳴り声を上げた。

「美夏は常識人だしシステムも安定してる。奇怪な行動をとつたりもしないっ！」

耳から煙を噴出しながら……

「煙、煙、煙が耳から出てるから」

「まったく説得力ないわね。ほら、これで回路を冷やして」

水越先生が、ぽんつと冷却シートを天枷に投げた。

「……むう」

渋々と、冷却シートを額に張る天枷

「ほらね、ロボットだつたでしよ？」

「え、あ、はい」

「確かに」

耳から煙を出されたら疑うのは不可能だ。

「どのみちフオローする人間は必要なの。これは研究所の総意と受け取ってもらつて構わない。」

「……」

「だったら、すでに正体のばれている桜内くんと裕也くん頼むのが

手っ取り早いでしょ？」

「それはそうだが」

「天枷を起動したのは桜内くんだった。そういうめぐり合わせなんですよ」

「……」

「不満かしら？」

「もちろん不満だ、……が、水越博士の指示には従おう」

天枷はいかにも渋々といった表情で義之たちを見た。

「が、美夏は別にフオローが必要だとは思ってないからな。人間を信用するつもりもない、だから桜内、貴様は余計なことはするな。美夏が言いたいのはそれだけだ」

と、言い終わると天枷は保健室を出ようとしたが

「待った、天枷。今日の放課後、グラウンドに来なさい。」

「なぜだ？」

「あんたのデバイスを渡すのと、その試験をしたいのよ、わかったかね？」

「……わかった」

天枷は早い足取りで保健室を去った。

「はあく、やれやれだね」

水越先生は苦笑いしながら、肩をすくませた。

裕也と義之の顔に少し苦い表情が出る。

「まあ、別に、ずっと一緒に行動してほしいってことじゃないの」

ふたりの顔を見て水越先生が補足する

「あの子もバカじゃないし、そうそうばれるようなことはしないでしよう。ただね、たまに気にかけてあげて欲しいの、あの子、基本的にひとりぼっちだからね」

水越先生の表情《それ》は、まるで我が子を見守る母親そのものだった。

「で、引き受けてくれる？」

「まあ、彼女を起動してしまったのは俺の責任だし、出来る限りのことはしますけど」

「俺も出来る限りはフォローしましょう」

「うん。ありがとう」

水越先生は満足そうに笑う

「じゃあ、これ」

と、水越先生は机の上から分厚いファイルを義之に渡した。

「ん？ なんですかこれ？」

「天枷の基本資料。一通り目を通して置いて」

「わかりました」

「基本的には人間と変わらないから。しかも年頃の女の子のね」

「はあ」

「あっち系の機能ももちろん完備してるから頑張ればいいことあるかもよ？」

そう言いながら水越先生は笑う。

「あんたは本当に教師か！」

裕也が思わず、突っ込みを入れた。

「あ、そうそう。あとね、できることなら仲良くしてくれると嬉しいかな、ちよつと色々あつてね、今は人間嫌いになっちゃってるんだけど、あの子本当は素直ないい子だから」

水越先生はふたりを見ながら優しい表情を見せた。

「で、早速お願いね、二人とも今日の放課後空けておいてね？」

「わかりました」

そうして、ふたりは教室に戻った。

追いかけてつこと裕也の実力。そして、露見

義之 side

「さてと、放課後だからグラウンドに行くか」

俺は放課後になったので、グラウンドに向かおうとした。

「~~~~~♪」

「・・・ん？」

「~~~~~♪」

歌声だ。

廊下には、まだ残っている生徒がいて、結構うるさいのに。

それでも、聞こえてくる。

清らかで、澄んだ歌声だ。

「どこから聞こえるんだろう・・・」

俺は、フラフラと誘われるように声を頼って歩きだした。

「~~~~~♪」

「・・・」

声を辿っていったら、音楽室の前に出た。

歌を歌っているのだから、当たり前といえれば当たり前なのだが。

「誰か残って、歌の練習でもしてるのかな？」

扉が空いている。

俺は、そつと中の様子をうかがった。

「~~~~~♪」

・・・白河《しらかわ》ななかだ。

歌が上手で、顔もスタイルも良くて、学園のアイドルと言われている。

全男子生徒の憧れの的の1人だ。（フェイトとアリシアも該当する）

俺はあんまり喋ったことはないが、その人気が相当なものだということとはよく知っている。

それにしても・・・

「噂には聞いていたが、本当に歌が上手いなだな」

BGMもなにもなしでア・カペラ状態なのに、まったく音階が乱れ

ていない。

高いキーも、微妙なキーもきちんと声が出ている。すごい。

「ーえ？」

「あっ！」

目が合った。

途端に、白河が歌うのをやめてしまう。

俺は内心、残念に思ったが。

「……………」

「……………あ」

なんだか気まずいので、拍手をしよう。

「いやー、すごい。うまい」

「……………えっとお」

「ごめん。つい、君の歌に聴き惚れてしまって」

俺が必死に弁明していると

「義之くん」

なぜか、俺の名前を呼ばれた。

「え？」

俺は呆気にとられてしまった。

「桜内義之くん、でしょ？」

「え……なんで、俺の名前を？」

俺のことを知ってるなんてな……しかし、一体どうして？

「うふふ。さあ、なんででしょう？」

白河はそう言うと、無邪気な笑顔を浮かべた。

ほほう。全男子生徒が夢中になるのがわかるくらい、眩しい笑顔だ。

「義之くんって、いろいろ目立つからね」

その言葉を聞いた俺は、納得した

「あ、あははは……そ、そうだな」

俺の脳裏に、悪友ふたりの顔が浮かんだ。

確かに、イベントがあるたびに、何かしでかしてるからな。

先生方からも、生徒会からも風紀委員からも睨まれてる。(裕也は例外だが)

そりゃ、有名にもなるか……嬉しくないけど。

「そういう君は……えっと、白河……さん」

俺は、呼び方を気をつけながら言うよ。

「ななか」

「え？」

俺はいきなりのことと、呆気に取られてしまった。

「ななかでいいよ」

それで呼べるならば、呼びやすいけど

「いや、えっと」

いきなり呼び捨てってのも、少し気が引ける。

「な・な・か」

更に強く言ってきた……

「えくと、じゃ、ななか」

結局、俺が根負けした……弱いな

「はい、よくできました！」

そして、にっこりと笑う。

なんだか、不思議な子だな。

学園ナンバーワンの人気者は、実はこんなにも気さくだったんだ。

「で、義之くんはなにしてたの？」

「え、俺？俺はグラウンドに行こうとしてただけど、そうしたら、

歌声が聞こえてきて、誰かなあって」

俺は質問に返答した。

「わ。そんなに大きな声で歌ってたんだ、わたし」

ななかは、そう恥ずかしそうに言ったが

「いや、なんていうか。雑音をすり抜けて聞こえてきたっていうか」

俺は正直に言ったが

「ん？」

どうやら、少し分かりにくかったようだ。

意味がわからないのか、ななかが小首を傾げて俺の顔を覗き込ん

だ。

大きな瞳をクリクリさせて、興味津々といった様子だ。まるで、猫みたいだな。

そりや、この笑顔でこんな仕草されたら、男としては堪らんだろうなー

「上手かったし透き通るような声だから、聞こえたのかな？」

俺は素直な評価を口にした。

「本当に？」

「ほんとだよ。なんか感動した」

俺はもう一回言うのと。

「うゝむ」

なにか考えるような表情で、つかつかと近づいてくる。

「えいっ！」

「へ？」

って、

いきなり、ぎゅつと手を握られた。

手のひらに柔らかな感触。

包み込むように温かい。

すぐ側で、ななかの大きくてきれいな瞳に見つめられ、ドキリと心臓が跳ね上がる。

「……」

えっと、どうしると……

「ありがとう♪」

満面の笑顔を浮かべ、そして腕をぶんぶんと揺さぶられた。

「えっと……なに？」

俺は状況が飲み込めなかったので、聞いた。

「握手だよ握手。ふたりの出会いを記念して。よろしくね♪」
ぺこりと頭を下げるななか。

なるほどね

「あ、こちらこそよろしく」

俺はつられるようにして頭を下げる。

そしてふたりに顔を見合わせて、軽く嘖き出した。

「でも、初めてかな？ 学校でそんな風に褒められたの」

「そんなことはないだろ」

俺は、ななかの言葉に思わず突っ込んだ。

「ううん。ほんと、ほんと。誰もそんなことちやんと言ってくれないよ？ うん、義之くんが初めて」

自分の言葉に頷くように何度も首を振るななか。

歌が上手いのは学園内の評判になってるくらいだから、そんなはずはないと思うんだけどな。

「自分ではあまりわからないんだけどね。上手いかどうかなんて」
なるほどね、確かに自分では分かりにくいな

「すごい上手いよ。絶対音感持つてるんじゃない？ どのキーも外れてなかったし」

これは、本心だった。

息継ぎの場所も、伸びやかなで出しも、まるでプロのシンガーみたいに完璧だった。

「同じ年で、こんなすごい才能持つてる子がいたなんて。」

「いやー、それほどでもー」

ななかは赤くなつて照れながら、頬をぽりぽりと掻いた。

「でも、そういうのがわかるってことは、義之くんも歌が上手なんだね？」

「いや、俺は歌っていうよりは……その、ちょっと、ギターとかやってたから」

俺は内心、恥ずかしいが暴露した。

「わ、本当？ ん？ やってた……って、今は？」

ななかはどうやら興味を持ったのか、聞いてきた。

「やってるよ。独学で趣味程度なんだ。バンドとかやってないから」
そう、俺のギターは独学だから人前で披露するほどではない

「へー、すごい。じゃあ、曲とか弾けたりしちゃうの？」

「うん、まあ。譜面は読めるし、耳コピもある程度なら」

これは、俺の数少ない特技のひとつだ。（料理は別で）

「わー！ それってすごいかもー！」

ななかは、何が嬉しいのか俺を楽しげに見つめ、しきりに頷いている。

「いや、ほんとに興味みたいなものだから・・・」

俺は正直に言った。

ななかにそんな風に言われると、なんだか恥ずかしくなってくる。

「でもでもでも、ほら、義之くんって見た目が格好いいじゃない？」

臆面も無く、またそんなことを言う。

「ってか、疑問系で聞かれても返答に困るし。」

「その上ギターまで弾けるなんてますます格好いいなあって思ってた」

「かつこいいいかあ？ たかがギターでできるくらいで」

「かつこいいいよー。わたしは歌は歌えるけど、楽器はあまりできないから。なんか羨ましいいな」

「歌が上手いほうがいいよ、あ、そうすると両方できる奴が一番格好いいのかな？」

「あははは、そうかもしれないね！」

音楽の話は、誰かとちゃんとしたのはこれが初めてかも知れない。渉たちとはたまにするけど、すぐバカ話になるし。

音姉《おとねえ》と由夢《ゆめ》は、弾いてる音くらいは聴いたことあるだろうけど・・・

音楽の話はほとんどしなかったしな。

ななかとは初対面みたいなものだが、こうやって音楽の話ができて、ちよつと嬉しいぞ。

「じゃあさ、あの曲知ってる？ 最近よくテレビのCMに使われている・・・」

ん〜と、ななかは思い出そうとしている

「なんだっけ、携帯のCMのー、うーんと」

俺はそれを聞いて分かった

「ああ、『オレンジランチ』の新曲だろ。ちよつと切ない感じの」

それを聞いたななかは、両手をパンと叩いて

「そうそう！ あの曲いいよねー」

「確か、もうちよつとしたらアルバムが出るんじゃないかな」

俺は音楽雑誌の情報を思い出しながら言った。

「ほんとー？ わあ、買おうかなあ、あーでも、お小遣いちよびつとピ
ンチだし。んー、どうしよ〜」

「ああ。俺、買う予定だから、後で貸してあげるよ」

「ほんとに？ 絶対だよ？ 約束だよ？」

音楽の話は尽きない。

だがその時、音楽室の扉が遠慮なく開いた。

「……………」

「……………」

なんだ？

知らない生徒が数人、音楽室を見回している。

軽音楽部の連中ではなさそうだが。

「あ、やばい」

「え？」

ななかは何故か、俺の背後に隠れた。

「なに？」

俺は確認のために背後のななかを見た。

「しゅっ」

「？」

「白河さん見つけました」

「あちや〜！」

ななかは、驚いてピョンと跳ね上がると、俺の腕を引っ張った。

「な、なに、なに？」

「逃げるよー！」

なんでさ

ななかは、言い出すと同時に走り出した。

そして、立ちほだかる知らない生徒達の間を、俺を盾にしてすり抜
けていった。

「あ、あのーっ？」

「えへへへ」

俺は、ななかにされるがままに走った。
すると

「え!?! ななか!?! わ!?! 手芸部!?!」

小恋がこつちを見て驚いていた。

なに? 手芸部だと?

その手芸部(?)の連中は、両手を広げて俺たちの前に立ちほだかる。

「ごめんね、小恋!」

そうして、俺たちは校舎内を走り回って逃げ回った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「なあ、こつちって確か」

「うん、やばいかも」

俺たちは手芸部の連中から逃げ回り、気付いたら生徒会室の近くに
来ていたが。

「こつちに逃げたぞ!」

「反対側からも追ってる! 追い詰めたわ!」

どうやら、挟撃されたようだ。

俺たちが迷っていると。

ガラッ!

生徒会室のドアが勢い良く開いて

「うお!」

「うきや!」

中から手が伸びてきて、俺たちを生徒会室に引きずり込んだ。

『あれ? 何処に行った?』

『すぐ近くに居るはずよ!』

そうドア越しに聞こえると、数人の足音は遠ざかっていった。

「まったく、俺の予想通りに来たから助かったな」

俺は、その声を聞いて後ろを見ると

「裕也!」

俺たちを助けたのは、親友の防人裕也だった。

義之 side END

裕也 side

「なんだか、騒がしいな」

俺は、放課後になってもなかなかグラウンドに来ない義之を探すために校舎に戻ったが、なんか騒がしかった。

すると

「どうやら本校校舎に行ったようだ！」

「私達も応援に向かうわよ！」

俺は横を見ると、そこを数人の男女が走っていく、その顔に見覚えがあった。

「ありや、手芸部だな。・・・もしかして」

俺は予想した

「白河ななか、かな」

白河ななか、風見学園のアイドルと名をはせている美少女だ。その白河嬢に対して激しくアプローチをしているのが、手芸部の連中だ。

「もしかして、巻き込まれたかな？」

俺は逃走ルートを予想した。さっき本校校舎と聞こえたから、恐らく2階の渡り廊下から入ったのだろう

「ふむ、ならば・・・」

俺はとある場所に向かって、走り出した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

俺が生徒会室のドアの近くで待っていると

『なあ、こっちって確か』

『うん、やばいかも』

義之たちの声が聞こえた。

ドンピシャ！

俺は内心ガッツポーズをして、ドアを一気に開けた。

「うおー！」

「うきやー！」

少し乱暴かもしれんが、ご愛嬌で

俺はふたりを引き込むと、ドアを一気に閉めた。

『あれ？ 何処に行った？』

『すぐ近くに居るはずよ！』

そう聞こえると、数人の足音が遠ざかっていった。

「まったく、俺の予想通りに来たから助かったな」

俺がそう言うと、義之がこつちを見た。

「裕也！」

「よ、まったく。厄介ごとに巻き込まれてたか」

義之は立ち上がって、白河嬢に手を差し伸べた。

「裕也って、もしかして、防人裕也くん？」

白河嬢が俺を見て少し驚いている。

「ああ、そうだ。初めましてだな、白河」

俺は軽く頭を下げた挨拶した。

「へー、君がかの有名な剣使い《ソードダンサー》なんだ」

「ふむ、その名前も結構有名になってしまったな。まあ、そういう君は

歌ノ天使《セイレーン》だったか」

歌ノ天使《セイレーン》とは、白河嬢の二つ名だ。

「で、なんでここに居るんだ？」

義之が俺に聞いてきた

「あのな、お前がグラウンドになかなか来ないから、捜しに来たんだよ。そしたら、手芸部の連中が騒がしかったから、先回りしたんだよ」

「うおー！ 忘れてた!!」

こいつ、殴ったろうか

「巻き込んだじゃったみたいで、ごめんね」

白河嬢はかわいく謝ってきた。なるほど、これならば確かにアイドルと呼ばれるだろうな。

「少し待て、まだ居るようだ」

外ではまだ、走ってる足音が聞こえる。

「あちゃー、しつこいなー」

白河嬢が困ってるな、ふむ

「少し待ってろ」

俺はドアを開けて外に出た。

「先ほどから騒がしいぞ、廊下を走るな」

「す、すいません」

「あ！もしかして、剣使い《ソードダンサー》ですか!？」

「そうだが」

「お会いできて光栄です！ 握手いいですか？」

「構わんが」

「やった！」

ふむ、いわゆるファンと言う奴かな？

「で、先ほどからなにを騒いでるのかな？」

「はい、白河さんを捜してるんです。見ませんでしたか？」

「白河ならば、先ほど上に向かったようだが？」

「ありがとうございます！」

「よし！ 向かうぞ！」

男子生徒がそう言うのと、全員走り去った。

「だから、廊下は走るなど言っただろうが・・・」

まあ、これで目的は果たせたが

「もういいぞ?」

「助かったく、ありがとうね」

「構わん、帰るならば今のうちだぞ」

「そうするね、じゃあね♪」

俺と義之は、白河嬢を見送るとグラウンドに向かった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

第3者 side

「ようやく、来たわね」

グラウンドには既に、水越先生と天枷が待機していた。
グラウンドの一角は障壁が張られている。

「すいません」

「では、始めましょうか」

「ええ、天枷、これがあなたのデバイスのクロスよ」

水越先生は白衣のポケットから深い蒼の珠がついたネックレスを取り出して、天枷に渡した。

「これが、デバイスか、小さいな」

天枷はデバイスを見て驚いている。

「それはただの待機形態よ。それを胸の高さに持って、『クロス、セットアップ』って言ってみなさい」

天枷はその通りに、胸の高さに持って。

「クロス、セットアップ！」

すると、次の瞬間にはバリアジャケットが展開していた。（詳細は設定参照）

「どう？ 違和感はない？」

天枷は色々動かして確認している。

「無いな」

水越先生はそれを満足そうに聞いて

「そう、天枷。あなたにはリンカーコアが無いから、そのクロスには特殊な機構を使ってあなたでも魔法が使えるようにしたの。で、それはあなたが視認した魔法をデバイスに登録してストックするの。本当だったら、インテリジェントデバイスにする予定だったけど、搭載予定だったAIのMIAKIが起動しないから外したのだから・・・」

水越先生は説明を始めた。

以下略（詳細は設定参照）

「さてと、説明も終わったし、デモンストレーションを始めましょうか。裕也くん、お願いね？」

「はい」

裕也は素手で、障壁内に入った。

障壁の大きさは、広大なグラウンドの半分以上を包み込んでいる。

「さて、ガジェットの数はどうする？」

ガジェットとは、正式名称をガジェット・ドローンと言い、AI制

御の無人機で警備などに用いられる。

型式によつて性能が違い、現在3種類あるがもつとも使われているのが1型で楕円形のボディーをしている。

「お任せします」

「そ、じゃあ数は50で」

水越先生は、手元の携帯端末を操作した。

「ちよ!? 50つてAMFもハンパないですよ!」

義之は出現した数を見て驚愕した。

「AMFとはなんだ?」

「AMFってのはね、正式名称はアンチ・マジリング・フィールドつて言つてね、まあ要するに魔力が練りにくくなるのよ、簡単にいうとジヤミングね」

「ふむ、要するに魔法が使いにくくなるわけか」

「その通りね」

「ちよつと、大丈夫なんですか!」

義之は落ち着いている水越先生を見て、少し不安げに聞いた。

「大丈夫よ、忘れたの? 彼は“学園最強”なのよ?」

「なに? 学園最強?」

「ああ、あいつは付属生なのに本校生を差し押さえて総合ランクトーナメントで優勝したんだ」

天枷の質問に義之が返答した、その時だった。

「ホーロス・ホーロロ・ホーロギオン」

裕也の声が聞こえた

「え? あれは西洋魔法の始動キー?」

「へんね? 彼なら魔法の射手《サギタ・マジカ》くらいなら、無詠唱で使えるでしょうに」

義之と水越先生が、不思議そうに首を傾げると

「契約に従い、我に従え、高殿の王」

「なに!? あれはまさか!」

「最大級呪文!? 本校生でも使えるのは数人だけなのに!」

「来たれ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて、走れよ、

稲妻!!」

「やば！ 障壁最大出力!! 天枷、あんたは対閃光フィルター！ カメラが焼けるわよ!!」

「うおー」

『千の雷《せんのかずち》!!』

裕也が、上げていた手を振り下ろすと

とてつもない閃光と共に、数えるのが馬鹿馬鹿しい雷がガジェットに降り注ぎ全て熔《と》けた。

「しまった、やりすぎたかも・・・」

その声が聞こえたのは、数秒後だった。

「あんたね、使うなら言いなさい！」

義之たちの居る位置に歩いて戻ってきた裕也に、水越先生が怒つてると

「おい、裕也。左手から出血してる」

と、義之が指を挿した。

「む？」

裕也は、自分の腕を見て多少驚いているようだ。

「……………」

水越先生の眼が細くなる。

「天枷、クロスはちゃんと起動してる？」

「む？ ……ああ、大丈夫だ」

天枷は自分のデバイスの手の甲を見た。そこには、3つの宝石みたいなものが着いており、右手の真ん中の宝石が黄色く光っている。

これが、ストックした証だ。

「そう、桜内くん。悪いけど後お願いできる？ わたしは裕也くんの手当てするから」

水越先生は手短に確認すると、義之に聞いた。

「あ、はい。大丈夫です、魔法を使えばいいんですね？」

義之は頷き、要点を確認した。

「ええ、お願いね、裕也くん来なさい、手当てするから」

そう言うとき水越先生は、裕也を伴い保健室に向かった。



「はい、そこに座って」

「……」

裕也は無言で、指定されたイスに座った。

「裕也くん、スカリエツティ先生に話は聞いてるわ。あんまり無理しないの。あんた、ただでさえ寿命削って短いのに」

「……」

裕也は制服の上着を脱いでから、ワイシャツを脱いだ。

そこは、先日戦闘で撃たれた場所だった。

今回、最大系呪文を使った反動で出血したようだ。

「うーん、これはわたしだけでは無理ね。シャマル、神夜《かぐや》手伝って？」

水越は奥に向かって声をかけた。

「はいい♪」

「はい」

奥から2人の若い女性の声が聞こえて、姿を現した。

1人は肩の辺りで切りそろえた金色の髪に灰色に近い紫色の瞳に優しい微笑みの女性だった、名前はシャマルと言い、シグナムと同じくはやての所持している魔導書の「夜天の書」の守護騎士プログラムの1人だ。

もう片方は、膝下まで伸ばしている薄い青が混じった黒髪。そして、少しつりあがっている眼に整った顔立ちの美少女だった

名前は橘神夜《たちばなかくや》だ

「治療しますから、動かないでくださいね」

シャマルの領分は、戦闘よりも治療や索敵といった裏方を本領としている。

「シャマル先生、新しい包帯です」

「ありがとう♪」

「すまん」

「ワイシャツと制服の上着は、そこに予備があるから使いなさい。ワ

「イシャツは上げるから、上着はクリーニングして返してね」
「わかってますよ」

裕也は、シャマル達に治療されながら返答した。
「今、初音島の守護者《ガーディアン》にはあんたしか居ないんだから、無理しないでね?」

「……」

「あんたが死ぬと、悲しむ人が居るんだからね?」

「はい……まあ、少ないでしょうけどね……」

裕也は自虐的に笑った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

第3者 side (別視点)

廊下の保健室の前で、固まってる1人の影があった。

それは、金髪を腰まで伸ばしており髪先で黒いリボンで纏めた美少女だった。

腕には、生徒会を表す白い腕章を着けている。

「……裕也が、守護者《ガーディアン》?」

フェイトの言葉は震えていた。

「しかも、寿命が短い……?」

フェイトは、自分の言葉が信じられない思いだった。

「……どうして?」

その言葉には、誰も答えなかった。

幕間 由夢の夢

休日の朝7時、私は飛び起きた。

「あれって、どういうこと？」

“それ”は、私が見た夢が原因だった。

私には、特殊な能力が備わっている。

それは、確定未来視だ。

しかも、それは夢という形で見るのだ。

私は、見た夢を思い出して、手帳に書きとめた

それは、裕也さんとフェイトさんが居た。

しかし、それは平和とは懸け離れた夢だった。

見たのは力なくまるで死んだ様に倒れてる裕也さん

そして、倒れてる裕也さんの頭を抱きかかえながら泣き叫ぶフェイ

ト先輩

そして、焔に包まれている初音島

あれは…まるで…

「戦争みたい…」

私は小さく言った。

けれど、信じられなかったのは

「裕也さんの左目の眼帯が…外れてた？」

裕也さんは普段から左目に、眼帯をしている。

けれど、威圧感や怖さなどはなく、優しい雰囲気がある。

しかも、裕也さんの左目が納まっているはずの場所には何もなかった。

いや、あったのだが、消えたのだ。

「あの、金色の眼はなに？」

消える瞬間、私はその眼の色を見た。

裕也さんの眼の色は黒のはずだ。

けど見えたのは、金色だった。しかも……

「光ってた？」

そう、その金色の眼が煌々と光っていたのだ。

まるで、代償を受け取りその分力を分け与えているかのように。

「裕也さんが、死ぬ？」

なんで？

どうして？

私は、起きてからしばらくの間その思考の迷路に捕らわれていた。

準備と模擬戦。そして……………

12月18日土曜日

本来なれば今日は休日、家で寝てるかキャロとエリオの宿題の手伝いやバイトをやっている日だ。

しかし、俺たち付属3年3組は全員教室に集合していた、……約1名を除いて……

「桜内……」

「沢井よ。頼むから、その雰囲気を消してくれ」

俺、防人裕也は背後に阿修羅すら凌駕する存在の雰囲気を出している我らが委員長の沢井麻耶《さわいまや》に言った。

そして、なぜここまで沢井が悪鬼羅刹みたいな気配を出しているのかということ

「義之、絶対忘れて寝てるね……」

そう、義之がまだ来ていないのだ。沢井が義之に1分おきに電話をかけているのだが

（義之よ、頼む。早く来てくれ……）

先ほど渉が机で寝ていたなら、そのままご臨終にされた……

「……」

「ふむ、反応がない、まるで屍のようだ」

「それはシャレにならんぞ?」

俺は、思わず杉並に突っ込みを入れた。

「あははは……」

フェイトは苦笑いしか出来ないようだ。

そして、始まって数十分後

「悪い悪い。遅くなった」

義之がようやく到着したようだ。

「……」

（渉よ……）

俺は、未だに沈黙している渉を見ることしか出来なかった。

「つたく、桜内は。．．．何回電話したと思ってるの!？」

俺が数えてた限りだが、20は行つてたな。

「申し訳ない．．．」

義之は渉を見てから、申し訳なさそうに言った。

「ぐお．．．」

ようやく再起動したか．．．

そして、義之も机に着席したので、ようやく準備は始まったのだつた。

が

「沢井よ、俺とフェイトはすまないが生徒会に向かうぞ。まあ、ある程度は情報操作するが、あまり派手にやるなよ?」

「ええ、わかつたわ。お願いね」

「非常要員とはいえ生徒会なのに、いいのかな．．．」

「フェイト、いい加減諦めろ」

「うう．．．」

俺とフェイトは、そのまま生徒会室に向かった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「すみません、遅れました」

「すみません」

俺とフェイトが生徒会室に付くと、そこには主要な生徒会役員と意外な人物がいた。

「芳野学園長、おはようございます」

「おはようございます」

俺たちの目の前に居たのは金髪で小柄な、ここ風見学園の学園長の芳野さくらさんがそこにいた。

相変わらず小さいし、若い、いや若すぎる。

見た目は完璧、小学生だぞ。

「ん? なんか今、失礼なこと考えなかった?」

「気のせいです」

危ない!! 勘の鋭い人だ!

「まあ、いいや。僕は仕事が残ってるから、音姫ちゃん後頼んだよ」
さくらさんは、タツタカタと去っていった。

「はい、じゃあ裕也くんにフェイトちゃん紹介するね。今日新しく生徒会に入った子だよ」

音姫さんはそう言いながら、自身の右側に立っていた金髪の女の子を手で示した。

「あ」

「あ」

「あ」

3人揃って間抜けにも「あ」って言ってるし

「なに？ あんた達知り合い？」

まゆき先輩が面白そうって表情で、聞いてきた。

「ええ、先日ちよつと」

「はい」

「ええ」

「ふーん、あ、名前はエリカ・ムラサキちゃん。なんでも、東欧の国のお姫様なんだって」

「気にしないでください。ここに居るからには、一生徒として過ごしたいのです」

エリカ嬢はそう言った。

「そうか。ああ、俺の名前は防人裕也だ。好きに呼んでくれ」

「私は、フェイト・T・ハラオウン」

「よろしくお願いしますわ」

俺たちはお互いに挨拶してから、握手した。

「裕也とフェイトちゃんは非常要員だから、正式な生徒会役員じゃないけどね」

「非常要員？」

エリカは不思議そうに俺とフェイトを見た。

「そ、裕也はバイトもやってるからね」

「私は家の手伝いがあるから」

それを聞いたエリカは俺に顔を向けて

「バイトって、そんなことよりも生徒会に集中すべきではありませんの?。」

すこし怒った表情で言ってきた。

「俺には親が居ない。しかも、子供を引き取って育ててるから養育費が必要なんだ」

エリカはそれを聞くと、驚いた表情をした。

「親が居ないって、……まさか……」

「想像にお任せしよう」

俺はあつけらかんと言った。

のだが

「すいません、知らなかったとはいえ失礼なことを……」

エリカは申し訳無さそうに俯いた。

「かまわん、慣れてる」

「まあ、以後気をつければいいよね?。」

「ええ」

「ありがとうございます」

そう言って、お互い握手したタイミングで音姫が手を叩き

「それでは各員の担当ですが、まず裕也くんとフェイトちゃんは自分のクラスをお願いします」

「はい」

よし、これで情報操作ができる。

そうして、次々と担当が発表されていった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そうして、担当と以後の作業が発表及び配分された後だった。

「ねえ、裕也くん。エリカの実力を把握したいから、模擬戦をお願いします
ていい?。」

まゆき先輩がそうお願いしてきた。

「俺が、ですか?。」

「そ、やっぱりここは、学園最強にお願いしようかなって♪」
それを聞いたエリカは、驚いた顔をしてまゆき先輩に迫り

「学園最強!? 彼がですか!?!」

「そうなの、決勝戦でまゆきも負けたの」

それを聞いたエリカは、更に驚いた表情をして裕也を見ていると「すまん、遅れた」

「遅れました」

ドアを開けて入ってきたのは、アースラの隊長のクロノ・ハラオウン先輩を筆頭に、ギンガ・ナカジマさん、その妹のスバル・ナカジマ。そして、スバルの相棒を務めるオレンジ色の髪の毛のツイントールが特徴の少女のティアナ・ランスターだ。

「そういえば、クロノとギンガも負けたよね?」

「いきなり何の話だ? そして誰にだ?」

まゆき先輩の質問に、クロノさんが頭上に?マークを出していると「ほら、6月にやった魔法大会だよ。お兄ちゃん」

フェイトが補足して説明すると、ああと納得した表情をして

「確かに裕也に負けたな、僕は準決勝で負けたな、それとフェイトお兄ちゃんはよせ? もういい年だぞ、僕たちは」

「兄妹なんだから、気にしない」

「やれやれ・・・」

それを聞いていたギンガさんは、苦笑しながら

「私は3回戦で負けましたね」

「・・・本当なのですね・・・」

エリカは驚きながらも、事実を受け入れたようだな

「で、どうするの? やるの?」

まゆき先輩は俺とエリカを交互に見ている。

「俺は別に構いません」

「私もです」

それを聞いたまゆき先輩は、満足そうにうなずくと

「それじゃあ、生徒会全員、今からグラウンドに集合ね?」

「「「はい!」」」

今ここに、俺とエリカの模擬戦が決定した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

第3者side

約5分後

生徒会役員は全員、グラウンドに集合していた。

そして、グラウンドの高台には野次馬で一般生徒も見学している。

「両者バリアジャケット展開！」

まゆきはグラウンドの中央に立っている二人から離れた場所で大声を出して指示を出した。

「はい！」

二人は同時に返事をする

「阿修羅セットアップ！」

裕也は右手を前に突き出し

「ヘキサペンタ、セットアップ！」

エリカは右手の中指に填めていた指輪を見せる

〈承知！〉

〈はい！〉

次の瞬間には、バリアジャケットが展開していた。

「勝負は簡単。どちらかが降参するか、戦闘不能の時点で終了とします！」

まゆきは確認するように、二人に言う。

「はい！」

まゆきは、二人が返事したのを確認すると

「勝負開始！」

「私が奏でる円舞《ワルツ》で踊りなさい！」

エリカは始まると同時に、自分の周囲に10数個の魔力弾を形成する。

「魔力弾、アクセル・シューターか！」

裕也はすぐに、攻撃方法を特定した。

アクセル・シューター、現在最も普及している誘導弾魔法で、使い手の実力によっては数が増えて、全て別行動制御が可能な魔法だ。

「シュート!!」

10数個の魔力弾は、裕也に向けて複雑な機動を描きながら迫る。

「この程度!!」

しかし、裕也はその魔力弾を全て両手に持っていた刀で弾いた。

「まさか、全部弾くなんて!」

「はっ!… なのはのに比べたら全然弱い!」

裕也はそう言うと、刀を構えなおし

「さて、円舞《ワルツ》は踊れないが、剣舞《ブレイドダンス》なれば
一曲披露しよう!」

裕也は二本の刀を交差するように構えて

「防人裕也、推して参る!!」

一気に前に飛び出した

〈ソニック・ムーブ!〉

その瞬間には、文字通り“消えた”

「っ!」

エリカは首筋に悪寒が走った瞬間、六芒星のビットを外し、鎌のよ
うな魔力刃を形成して後ろに刃を回した

ガギン!!

その瞬間には、裕也がその場所に居た。

「ほう、防いだか、なかなかやるな」

(グラーマが教えてくれなかったら、危なかった!)

しばらく鏢迫り合いが続くと、裕也は距離を取った。

「阿修羅、カートリッジ・ロード!」

〈承知!〉

裕也が両手に持っている刀の峰の機構部分がスライドして、薬莖が
排出された。

すると、両手の刀の刀身に黒い焰が吹き出た。

「魔力の焰への変換資質!」

エリカは焰を見て驚いている。

「黒龍閃斬!」

裕也は距離が離れてるにも関わらず、二本の刀を交差させながら振った。

すると、黒焔は十字でエリカに飛んでいく。

「くっ！」

〈プロテクション！〉

エリカの前に、円形の障壁が展開されて黒焔を防いだ。

「グラーマありがとう」

〈いえ、しかし彼は強いですね〉

「ええ、学園最強というのもデタラメではなさそうですわね」

「来ないのか？ ならば、こちらから行くぞ？」

裕也は刀を突き出した状態に持つと

「阿修羅、モードツインガン！」

〈承知！ イクスプロージョン！〉

二本の刀の峰からまた葉莢が排出され、刀身が鏢《つば》の根元で曲がり、刀身が厚くなり、刃先が割れて中から筒が現れた。

そして、銃身になった刀身の刃の部分が前にせり出した。

「刀が銃に変わった!？」

〈変形機構ですよ、お嬢様〉

驚いているエリカを、グラーマが諭していると

「阿修羅、カートリッジ・ロード！」

〈承知！ イクスプロージョン！〉

葉莢が廃莢されると、銃身に今度は黒い雷が発生してバチバチと鳴っている。

「今度は電?!」

〈一体なぜ!?!〉

エリカとグラーマは驚いている。

「俺の希少技能《レアスキル》は、魔力の全属性への変換なんだよ！」

裕也は叫びながら銃を構える

「黒龍咆哮波!!」

黒電が龍の形をかたどって、エリカに迫る。

「グラーマ！」

〈はい、ビット展開!!〉

エリカの周囲に散開して浮遊していたビットがエリカの前に展開して、六角形のバリアーを発生させて裕也の一撃を防いだ

「鎖鎌展開！」

〈はい!〉

杖の先端に形成されていた魔力刃が離れて、杖と刃の間に魔力で鎖が形成されて繋がった。

「ほう、阿修羅、モード野太刀」

〈承知、イクスプロージョン!〉

裕也の両手に握っていた銃は刀に戻り、裕也が両手を合わせると一本の長い刀になる。

そして、その刀を左手に持ち右手は柄の辺りに半分開いて待機させ、左手の親指は鐙に当てた

足は右足を前にして、体は半身の状態にさせた。

「あの構えは？」

「居合い抜きの構えだね。でも、裕也くんは2刀流のほうが得意のはずだけど・・・」

フェイトの質問に、音姫は答えつつ疑問に思っている

「知らなかったすか？ 裕也は居合いも得意なんすよ？」

それに答えたのは、生徒会に所属しているウエンディだった。

(もしかして、あの技を使う気っすか?)

ウエンディは内心で心配だった

「エリカよ、俺が今から使う技は俺の居合いの技では最速かつ最強の技だ、阿修羅！」

〈承知、イクスプロージョン!〉

葉莢が排出されると、裕也が体に纏っていた魔力が跳ね上がる

「行きます!!」

エリカは裕也に肉薄した

その瞬間だった

「瞬華千斬!!」

裕也とエリカの体が交差する、

お互い技を放った状態で、固まった

裕也の肩の装甲が壊れる

そして裕也は、振りぬいた刀を左手に持っていた鞘に収めたその瞬間、エリカのバリアジャケットが弾けた。

そして、エリカは倒れた、
が

「裕也!?!」

何故か、裕也も倒れた

「やっぱり!」

「くそ!」

ウエンデイとクロノは、すばやく裕也に駆け寄った

エリカにはまゆきが駆け寄って、無事を確認している

「ちいっ! 出血してる! 担架!」

クロノは裕也の左脇から出血を確認すると、大声をだして担架を呼んだ。

「なんで、怪我してるの!? 非殺傷設定が外れてたの!?!」

フェイトは原因が分からないのか、混乱している

〈非殺傷設定は外れてません、原因は分かりません〉

グラーマは設定を確認してから答え、同じく混乱している

「裕也は、治りきっていない傷が開いたんすよ!」

ウエンデイは治療しながら叫んだ

「ウエンデイ!!」

「しまった!?!」

クロノがウエンデイの発言を諫めると、ウエンデイはしまったという表情をして口を押さえた。

「治りきっていない傷って、どういうこと?」

まゆきは、クロノとウエンデイを睨みながら聞いた

「.....」

「それは.....」

クロノとウエンデイが、言いずらそうにしていると

「.....ガーディアンが関係してるの?」

フエイトが恐々と聞いた

「っ!？」

「どこで聞いたんすか!？」

クロノとウエンディは、驚きながらフエイトを見た

「保健室前の廊下を通りかかったら、偶然聞こえたの。裕也と水越先生の会話が……」

フエイトは、信じたくないと思いつつ言った。

「ガーディアンって確か、今全世界で動いてる犯罪者狩りの武力団体だよな?」

「確か、ICPOの下部組織だっけ?」

まゆきと音姫が、思い出すように言った。

守護者《ガーディアン》

ICPOと聖王教会が共同で立ち上げ、さらに全国の警察機関も協力して生まれた一大武力団体だ。

ただし、規模や人数、誰が所属しているかなど一切謎で、実在しているのかも疑問視されている団体でもある

「そうだ。そして、ガーディアンは実在して、裕也はその一員だ……」

クロノは、言いくそうに俯きながら喋った

「クロノさん!？」

ウエンディは驚きながらクロノを見た

「仕方ないだろ……いつかはバレる、だったら早いほうが良い……」

「そうかもしれないっすけど……」

クロノとウエンディが話し合っていると

「やれやれ、クロノ。厄介なことを言ってくれたわね?」

「それを喋るのは、いささか早計だ」

声のした方向に全員振り向くと、そこに居たのは片方は件の水越先生と

ポニーテールにしてるピンクの髪が特徴の女性だった。

「水越先生、それにシングナムまで……」

「は〜い♪」

「学校では先生と呼ばんか・・・しかし、裕也はやはり無理していたか・・・」

シグナムは裕也の近くにしゃがみ、傷を確認しながら言った

「さつきスカリエツティ先生に連絡したから、今から私が車で運ぶわ」
「わかった、お前達は通常シフトに戻れ！」

シグナムは手を叩きながら、大声を出した

「シグナム！」

フェイトは真剣な表情で、シグナムを見つめた

「・・・終わったら、スカリエツティの診療所に行け。話しは通しておく・・・」

シグナムはフェイトに耳打ちして去った。

そして、クラスメイトにはシグナムが教えたのだった。

過去の語らい 始まり

時間はあれから数時間近く経過し、空は暗くなってきている。

付属3年3組は、裕也が倒れたと聞いて一時騒然としたが、フエイと麻耶が收拾して作業を進めた。

そのために、何とか期日にはギリギリ間に合うかもしれないというレベルである。

(書類は裕也がうまく誤魔化して音姫のハンコを通過している)

そして、今道を10数人の男女が歩いている。

先頭にはウエンデイとフエイト、アリシア、高町なのは、八神はやて、そしてユーノ・スクライア

その後ろには義之に杉並、渉、雪村杏、花咲茜、月島小恋、沢井麻耶

そして、その後ろには高坂まゆきに朝倉音姫にその妹の由夢にエリカ・ムラサキ、そして意外にも天枷美夏も居る。

尚その後ろには、スバルとギンガ・ナカジマ姉妹にティアナ・ランスター、そしてクロノ・ハラオウンが居る。

全員、真剣な表情をしていた

特に、フエイトは複雑な表情だ。

「裕也が守護者ガーディアンに所属していたなんて・・・」

「でも、それなら結構符合する場合が多いよ。裕也君、結構怪我してたみたいだし・・・」

フエイトとアリシアは、少し重い雰囲気話し合っていた。

「とりあえず、今はスカリエッティ先生の診療所に行こう?」

「せやな、話はそれからや」

「うん。そうすれば、裕也がどうして守護者に所属してるのかも分かるかもしれないし」

「それにしても、裕也が怪我したって聞いた時はマジで驚いた」

「ああ、あいつの強さはよく知ってるしな。俺たちは何回も」

「うむ。俺も、あいつだけは敵に回したくないな」

「それにしても、なんでスカリエッティ先生の診療所なのかしら」

「そうだねえー、本来なら水越総合病院のほうが良さそうなのに」
「スカリエツティ先生は全身医ジェネラリストつて聞いたから、それじゃないかな？」

「全身医ね。でも、スカリエツティ先生は確かに腕は良いわね。お母さんもお世話になってるし」

「ああ、そういえば確か先生は車で回診もしてるんだっけ？」
「ええ」

そして、後ろで真剣な表情なのが数名居る

「一体、裕也君になにがあるのかな」

「わからないなー。でも、考えてみれば私達裕也くんの事全然知らないよね・・・」

「はい。それに、裕也先輩はなんか私達に対して壁を作ってる感覚があるんです」

「私は会って間もないので良く分かりませんが、戦ってわかったのは、彼の瞳には深い悲しみがあるようでしたわ」

「あいつの強さは、はつきり言つて異常だ。一体なにが、あいつをあそこまで強くしたのか・・・」

全員がそうこう言ってる間に、目の前に見覚えのある建物が見えた。

「ごっちつす」

ウエンディは入り口ではなく、裏に回るように指示した。

「この名前は、どうにかならんのか・・・」

義之は看板を見て呟く

「変える気は無いようっすよ?」

ウエンディは裏口のドアをノックすると

「入りましたまえ、話は聞いています」

中から、紫色の髪と黄色の瞳が特徴の男が顔を出して言う。

そして、全員中に入りそして診療所を通過する。

「あの……裕也は、ここに居ないんですか?」

フェイトは、スカリエツティが診療所を素通りしたのを不審に思い聞いた。

「裕也くんは、こっちだ」

スカリエツティは関係者以外立ち入り禁止と書かれたドアを開けて、全員に入るように促す。

「あの、ここはロッカールームじゃ？」

まゆきは流石におかしいと思いついた

と、スカリエツティは一番奥のロッカーを開錠すると、そのまま開ける。

「「「あ!!」」」

全員、ロッカーの中に階段があるのに驚いた

「着いてきなさい」

スカリエツティは先に階段を数段下りると、全員に促した

全員は階段を下りていく、すると下に光が見えた。

「光だ!」

そして、全員光を超えると

そこは広大な空間だった。

「広い・・・」

「こんな場所があつたなんて」

「信じられませんわ・・・」

「ほお! 地下基地とは・・・」

美夏は若干眼を輝かせている。

「まさか、ここが?」

フェイトは、ある可能性に気づきスカリエツティに視線を向けた。

「そう。ここが守護者ガーディアンの初音島支部の基地さ」

「「「えー!!」」」

クロノ以外は全員驚いている。

「お兄ちゃんは知ってたの!?!」

「ああ・・・」

クロノはフェイトの質問に唖るようには返事した。

「あの、それで裕也くんは!?!」

なのはは、スカリエツティに迫りながら聞いた。

「裕也くんなら、あそこだ」

スカリエツティは左側の壁を指差した。

そこには発光する緑色の液体が充填されたカプセルがあり、その中に裕也は手術着を着たような格好で、口にはマスクが装着されて浮いていた。

「裕也くん!?!」

クロノ以外の全員は、そのカプセルに近づいた。

「流石に無理しすぎていたのですね、今回は治るまでは起きないよ」

「それで先生、話していただけなんですけどね?」

音姫は真剣な表情でスカリエツティに問いただした。

「すまんが、もう少し待ってってくれるかな? 役者が揃ってないのでね」

「役者? それって一体?」

スカリエツティの言葉にまゆきが不審に眉を上げた時だった。

全員が降りてきた階段を、更に数人の人間が下りてくる音が聞こえた。

全員、視線を階段に向けた。

そして驚いた、それは何故かと言うと

「お父さん!! それにお兄ちゃんにお姉ちゃんまで!?!」

「お母さん!?!」

「シグナムにヴィータ、それにシャマルにザフィーラまで!?!」

「それに、橘さんまで!」

なのは達は階段を降りてきた人物達をみて驚いた

「僕も居ますよ?」

「私もです」

そう言いながら2人は、リンデイの後ろから出てきた。

「エリオにキャロまで!?!」

フェイトが驚いていると、階段から新たに4人現れた。

「すいません、遅れてしまったようですね」

その人物は、腰まで伸ばした金髪に蒼眼が特徴のシスターだった。

「いやいや、丁度だよ。シスターカリムにシャツハ。そして、ヴェロツ

サに水越舞佳」

シスターカリムの後ろには、保健室の水越舞佳にシスター服を着た

ショートカットの紫色の髪の毛が特徴の女性のシャツハにスーツを着た腰まで伸ばした緑色の髪の毛が特徴の男性、ヴェロツサ・アコーズが居た。

それを確認したスカリエッツィは首をかしげた。

「む？ 騎士ゼストはどうしたのかね？」

「騎士ゼストでしたら、島の周囲を見回りしてもらってます。」

「裕也くんが倒れたので、念のために」

「ありがとう」

スカリエッツィは、シャツハとカリムに礼を陳べた

「それで、話すのかい？ スカリエッツィ、裕也くんの過去を？」

士郎はスカリエッツィを睨んだ。

「ああ、どうやら水越くんのミスでバレていたようだな。話すなら、早いほうがいいだろう？」

「そうね。そうすれば、裕也くんも救われるかもしれないわね・・・」

スカリエッツィの言葉を聞いたリンディは、腕を組みながら頷く。

「それじゃあ、役者も揃ったし、話すとするかね、過去を・・・」

そう言うとスカリエッツィは机に座る。

そうして、過去が語られるのだった・・・

過去の語らい その1

「さて、話す前に君たちに聞くが。君たちの中で、翠玉碑と言う物を知ってる子は居るかな？」

スカリエツティは、視線をなのは達に向けて聞いた手を挙げたのは、音姫、まゆき、クロノ、ギンガ、杏、杉並、フェイト、ティアナだった。

「ふむ、これだけ知ってれば十分だが、一応説明しておこう。翠玉碑というのは、別名『翠色の賢者の石』とも言われている伝説のマジックアイテムだ。まあ、今は無いと言われているが、それは誤りだ」

スカリエツティは、そこで一度区切った

「翠玉碑は、エジプト第3王朝の王妃が砕いて世界中に散った」

それを聞いて疑問に思ったのか、スバルが手を挙げた

「あの、なんで砕いてしまったんですか？」

それを聞いたスカリエツティは、頷いて

「いい質問だ。それはね、翠玉碑は得ると最強の魔力と全ての魔法を使えるようになると言われているね、それを危惧した王妃が砕いたんだ」

「なるほど・・・」

「そして、砕いた欠片はそのまま世界中に散って各地の地脈に沿って埋まった。そしてそれにより、全て別々の能力と名前を得た」

そう言いながらスカリエツティは、キーボードを操作した。すると、巨大な画面に映像が映りそこに様々な色と形の物体が映る。

「今把握されているのは、ヨハンナの神名碑、アイオン劫の眼、パロール王神、クリフオート虚無の魔石、アニマペルラ魂白珠、カーバンクル竜紅珠、アニマアメテイスター魂紫珠、シエロクリスタ天白晶、ファイアマクリスタ紅水晶、後は翠玉碑の欠片だ」

スカリエツティは、また区切りをつけた

「しかし、現状は劫の眼と虚無の魔石は無い」

それを聞いて不思議に思ったのか、音姫が手を挙げて

「なんで無いんですか？」

「クリフオート虚無の魔石は砕けたんだ。そして、アイオン劫の眼は突如として消えた」

「そんな簡単に、砕けるものなんですか？」

スカリエツティの言葉に不審に思ったのか、ティアナが質問した
「いや、そう簡単には砕けんよ。しかし、因果操作には敵わなかったよ
うだ」

「因果操作？」

「そう、劫の眼の能力は因果操作なんだよ。自身の望んだ未来を選び、
絶対にその通りにする。それが、劫の眼の能力さ。しかし、劫の眼は
虚無の魔石を砕いた後、どこかに消えた。劫の眼は元々、使い手が死
ぬと無作為転移する能力があるのさ」

スカリエツティはそう説明すると、画面の黄色い眼球の映像が拡大
されてそこに色々な補足説明が映る

「それなら、その無作為転移で次の宿主に移っただけなんじゃ？」

まゆきはその能力を聞いて、消えた理由を推測した。が

「いや、それだったら分かるのさ」

「どうして、分かるんですか？」

「それはね、宿主は生まれつき必ず右目が虹彩異色症という盲目にな
るからさ。しかも、必ず金色のね。ここには世界中のデータが揃う
が、そういったデータは無い」

「虹彩異色症？」

「ああ、この眼はね生態融合型の魔道具なんだよ。だから、生まれつき
虹彩異色症で産まれるのさ」

「なるほど」

「そして、虚無の魔石の使い手は、不老不死になり無限の魔力を得る」
「不老不死やて!?!」

「それって、死なないし殺せもしないってこと!?!」

不老不死の言葉を聞いた全員は、驚いた。

「ああ。だが、それを殺したのが最後の劫の眼の使い手だったのさ。
因果操作を使い虚無の魔石を砕き、そして心臓を貫いた。そして、そ
の使用を最後に劫の眼は消えたのさ、それが今から約60年前だ」

「……………」

スカリエツティの言葉を聞いて、全員沈黙した

「しかし……その因果操作に着目した組織が存在した」

「組織？」

「それは、ヴァチカン法王教皇庁の禁書目録聖省。通称インデックス」

「インデックス……」

「インデックスは、劫の眼を人工的に作り上げることにしたのさ。約3万人の魂を選びすぐって、それを凝縮してね」

「3万人!？」

「それって、殺したってことかいな!？」

「いや、人柱さ。生きたまま分解して、凝縮したのさ。そして、その人工劫の眼計画、通称プロジェクトα・Ω《アルファオメガ》が始まったのさ、今から16年前にね」

そう言つて、スカリエツティは鍵付きの引き出しから分厚い1冊のファイルを取り出して机の上に置いた。

「その計画がどうしたんですか？」

「ここを見てみなさい」

そう言つてスカリエツティは、ある1ページの項目を指さす

「尚、被験体には人工劫の眼を使いこなさせるために、様々な強化手術を施す……っ!」

「これつてつまり……」

「人体実験!？」

「その通りさ。そして……次はこの写真を見てくれ」

スカリエツティは付箋が貼つてあるページまで飛ばし、とある写真を見せた

「被験体NO、E-666……この赤ちゃんはまさか!？」

フェイトはその写真に写っていた赤ちゃんに見覚えがあるのか、スカリエツティを見つめた

「そうさ、その子はね……現在名は……防人裕也と言うのさ……」

「「「裕也!？」」」」

今ここに、防人裕也の過去が綴られる・・・

過去の語らい その2

「そして、完成した人工劫の眼を被験体に移植し始めたが、成功したのは……裕也だけなのさ……」

スカリエツティはそう言いながら、悲しい表情をした。
「他の子供たちは……死んだのですか？」

ギンガはスカリエツティの言葉から察して悲しい表情をしながら聞いた。

「ああ、延べ八千人がね……人工劫の眼に耐え切れなくて消えたよ」「消えた……？」

音姫はスカリエツティの言葉が信じられなかったのか、オウムのように復唱した。

「ああ、文字通り消えたんだよ……魂を吸収されてね」「魂を……吸収された……？」

まゆきは言葉が信じられないのか、首を左右に振っている
そして、その言葉を聞いて確信を得たのか

「劫の眼の能力の代償が、魂なんですね？ 正確には……魂の謙譲」「フェイトを見ながら、全員、驚愕に眼を見開いている

「ああ、その通りさ。劫の眼は魂を吸収して、その分の能力を発動する。劫の眼は因果操作もあるが、魂の箱舟の役割も持つのか」

「それじゃあ、能力を使えば使うほど、寿命が短くなるってことですか！？」

義之はスカリエツティの言葉に、叫んだ

「ああ、その通りさ。だが、今はまだ大丈夫だ。あの眼帯がある限り、魂の消費は限りなく抑えられる」

「あの眼帯ですか？」

全員、ポッドに入っている裕也をに視線を向けた

裕也の左目には、黒地に銀十時の刺繍があらわれている眼帯が着けられている。

「ああ、あの眼帯はね、私達の技術の粋を投入して作った封印なんだよ」

「封印……」

「あの眼帯をしていないと、能力が発動してしまうからね」

「……」

「そういえば、なんでスカリエッツィ先生がそんな詳細な情報を知ってるんですか？」

ふと疑問に思ったのか、ティアナがスカリエッツィに質問した。

「私も……かつては禁書目録聖省に所属していたのだよ……」

スカリエッツィは眼を細めながら言った。

「禁書目録聖省にですか!？」

小恋はスカリエッツィの言葉に驚いている。

「ああ……だが、11年前に脱走した」

「脱走？」

「ああ、防人夫妻と橘夫妻と共にね」

「裕也のお父さんとお母さんもですか!？」

「それに、橘さんの御両親も!？」

フェイトと由夢は、スカリエッツィの言葉を聞いて驚いた。

「ああ、彼らと私は同じ場所に居たのさ。そして、彼らが脱走計画を持ち出したから私も脱走する決意を固めたのさ……」

「そして、脱走計画のために私達を作ったのです」

スカリエッツィの言葉を引き継ぐように、ウーノが言った。

「作った？」

茜はウーノが言った意味が分からなかったのか、聞き返した。

「ええ、私達は人間ではなく戦闘機人です」

「戦闘機人？」

杉並は眉を顰めながら聞いた。

「ああ、人と機械の融合さ。分かりやすく言うと、サイボーグだね」

「脱走計画を計画し始めたのは13年前で、脱走したのは11年前です」

「11年前か」

「それからは私達はここ、初音島に住んでるのさ。そして私達は、禁書目録聖省の情報をICPOに渡して、さらに聖王教会と協力して守護

者《ガーディアン》を結成したのさ」

スカリエツティはそう言いながら、机の上に置いてあった写真たてを見る。

「守護者を……」

「最初は平和だったさ、幸せだった、だけど……幸せは長くは続かなかった」

「それってどういう……」

「2年後に追っ手が来たのさ、禁書目録聖省のね」

「その戦いで裕也の両親を含めて……9人死んだっす」

「9人も……」

まゆきは死んだ人数を聞いて、驚いてる

「防人幸也さきもりゆきやに彰子夫妻あきこ、八神明義やがみあきよしに絢子夫妻あやこ、橘博信たちばなひろのぶに美姫夫妻みぎ、プレシア・テスタロツサにアーネスト・テスタロツサ夫妻、クライド・ハラオウンが亡くなった」

「な!? ウチの父さんと母さんやって!?!」

「テスタロツサって、まさか……」

「それに、ハラオウンも……」

「橘も……」

「そう、君たちのご両親だよ。そしてそれを、裕也くんはずっと悔やんでるのさ」

「悔やんでる?」

「なんで、ですか?」

「自分が捕まらなければ、ってね」

「つまり、人質に取られてたってことですか?」

「ああ。更に、自分を助けるために士郎さんに大怪我をさせてしまったってね」

「へ!?!」

「なのは、私が昔入院していたのは覚えてるよね? あれがそうだったのさ」

「ふえええ!?!」

「その話、詳しく聞かせてもらえませんか?」

「いいだろう……」
スカリエツティは、ティアナの話に静かにうなずき、話し出した。

過去の語らい その3

「あれは13年前だった……」
スカリエツティは眼をつぶると、訥々と話し出した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

西暦2042年ヴァチカン法王教皇庁 禁書目録聖省<インデックス>地下図書館

「あの計画に関わり始めて、もう3年か……」

スカリエツティは1人、誰も居ない通路を歩いていった。

しかし、その表情は暗い。

「ヨハンナは一体、あのような計画を何時まで続けるつもりだろうか……」

“あのような計画”とは、それは人工劫の眼計画、通称プロジェクトα・Ωである。

その計画は西暦2039年から始動しており、既に犠牲者が7000を超えていた。

スカリエツティは最初、人体実験に参加できると聞いて乗り気だったが、途中で過ちに気付いたのだ。

泣き叫ぶ子供たちの声を聴いて“私は何をしている？”と思ったのだ。

「娘達も既に目覚めている……、どうするか……」

娘達とは、ウーノを含めた戦闘機人たちである。全員で12人居る。

上は勝手に、ナンバーズと呼称しているが……

「娘達のために、どうしたらいいのか……」

スカリエツティが1人悩んでいると……

「書架のバルバラ、どうした？」

「あなたが悩んでいるなんて、珍しいわね？」

「まったくだな」

「ええ」

書架のバルバラというのは、スカリエッツィの禁書目録聖省での名前だ

禁書目録聖省では聖名を本名にする。

「ああ、書架のスコラスティカに書架のベネディクトゥス。それに、聖銃のシオンに聖骨のセバステイアヌスカ・・・」

そこに居たのは、まさしく幸也に彰子。それに、橘博信に美姫だった

書架のスコラスティカが彰子の聖名で、ベネディクトゥスが幸也の聖名

そして、聖銃のシオンが美姫で聖骨のセバステイアヌスが博信だ

「なんなら、相談に乗るが?」

「そうよ、私達の仲でしょ?」

「うむ」

「水臭いわよ」

4人は微笑みながら言う。

幸也と彰子、スカリエッツィは腐れ縁で、幼少の頃からの付き合いなのだ。

そして、博信と美姫は同僚だが、気さくな仲なのだ

「・・・わかった、くれぐれも内密に頼む・・・」

スカリエッツィは周囲の眼を気にして、彼個人の研究室に案内した。

「それで、内密の話とは?」

幸也はスカリエッツィの雰囲気で、ただ事ではないと気付いたのだろう。真剣な表情で聞いてきた。

「実はな、私は禁書目録聖省から逃げようと思う・・・」

「なに?」

「あなた・・・」

「お前・・・」

「正気?」

幸也と彰子は驚いた表情で、スカリエッツィを見つめ
博信と美姫は絶句していた

「見逃してくれとは言わない、だけど、これは本気だ」

スカリエツティは真剣な表情で、4人を見つめた

「理由は、あの子達か……」

幸也の言うあの子達とは、ウーノ達のことである。

「ああ……」

「あなたも人の子と言うわけね……」

「親心か……」

「そうね」

スカリエツティの言葉に4人は頷いた

「悪くても、死ぬのは1人だけだろう、忘れてくれ……」

そう言って、スカリエツティが立とうとした時だった。

「待った」

彰子に止められて

「俺たちも、実は逃げようと計画していたのさ」

幸也が衝撃的なことを言った。

「なに!？」

スカリエツティも流石に驚いている。

「本気かね?」

スカリエツティは、念のために確認した。

「ああ」

「本気よ」

「うむ」

「ええ」

4人は即答した。

「しかし、なぜ?」

スカリエツティは納得出来なかった。

4人には、子供は居なかったはずだが……と

「実はな……」

「子供が居るのよ」

「俺達もな」

「そうなのよ」

「な!？」

スカリエツティは大口を開けて驚いて、

「い、何時の間に産まれた!？」

思わず掴みかかった。

「いやー、去年産まりました!」

幸也は、恥ずかしそうに頭をかきながら言い、

「今は外部の家に預けてるの、禁書目録聖省《ここ》には内緒で」

彰子は、口元に人指し指を立てて「秘密ね?」とジェスチャーをしながら言った。

「こちらは2年前だが」

「知り合いに預けてるの」

博信と美姫は頬を染めている

スカリエツティは思考が停止しているのか、中腰で固まっている。しばらくして

「まあ、禁書目録聖省に内緒というのは賛成する。下手したら、魔道人形にされているしな・・・」

魔道人形というのは、人としての肉体を捨てて人形の身体に脳髓を入れて思いのままに動かす技術で、体が動かない術士用に考えられたものだが、命令を聞かない術士を無理やり操る事もできるのだ。

「ああ……だから俺たちは、外部の知り合いに子供を預けたんだ」

「子供を実験動物モルモットにさせないためにね」

「俺達も話していい」

「子供には……そんな重荷、背負わせたくないのよ」

4人はそこで一旦話を区切ると

「それで、被験体No. E-666は覚えているな?」

「む? ああ、私が最後に手がけた強化人間の子だな・・・」

スカリエツティは苦い表情で喋る。

「あの子とE-1088はね、銀十字のアガタの子なのよ・・・」

「なんだと!？」

銀十字のアガタ、そいつはスカリエツティ、幸也、彰子の最後の幼
馴染だ
が

「確か、あいつは昨年任務中に戦死したと聞いたし、しかもあいつが誰
かと結婚していたとは聞いてないが……」

スカリエツティは口元に手を当てて思い出しながら言う。

「あの子はな……」

「外部との子なの、しかも、戦死つてのも嘘よ。本当は始末されたの、
背信罪で……」

「それで、アガタの伴侶は……」

「始末されてるわ……、それであの子は戸籍を抹消されて、実験動
物《モルモット》扱いで連れてこられたの……」

彰子は暗い表情で俯き、膝の上に置いた両手を白くなるほど握る。

「それを私は……知らず知らずにあんなことを……」

スカリエツティは両手で顔を覆い、ヨロヨロと椅子に腰掛けた。

幼馴染の息子を人体実験で強化したのを悔いていた。

「子供には罪はない、それなのに……上は背信者の子など人では無
いって……」

それを聞いたスカリエツティは、顔を上げて

「それで、脱走計画はいつ行うのかね？」

スカリエツティは真剣な表情で聞いた。

「今はまだ未定よ……」

「だが、必要ならば今すぐにでも発動できる」

それを聞いたスカリエツティは、少し考えると

「2年、待つてくれるか？」

「え？」

「なにを考えている？」

彰子はスカリエツティの言葉を聞いて驚き、幸也はスカリエツティ
の考えが分からないのか聞く

「あの子達の専用武装を完成させる。2年あれば十分だ」
そう言つてスカリエツティは、研究スペースに向かい開発に専念した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、2年後

「脱走だー！ 書架のベネダイクトウスとスコラスティカ、聖銃のシオンに聖骨のセバステイアヌス。それに、バルバラとナンバーズが逃げたぞー！」

地下図書館のあちこちから火の手が上がり、煙が充満している。

「ちくしよー！ 猿どもが！ 我々に楯突くなんて生意気なんだよー！」

更に外でも同時に攻撃が行われているために、指揮系統が混乱していた。

そのころ

「ウーノあの子達は!?」

「トーレとセインが保護しました！」

スカリエツティたちは裕也を保護して、走っていた。

「トーレ、セイン！ その子達は大事に扱ってくれよ！ 死なせたら、アガタに顔向けできない！」

「分かっています！ 私もアガタには世話になりましたので！」

「右に同じく!!」

トーレは産まれてからは度々、アガタに模擬戦の相手をしてもらっていたのだ。

セインは戦闘技法などを指導してもらった

すると前方に

「バルバラこっちだ！」

幸也と彰子、それに博信と美姫が居た、4人は禁書目録聖省の制服

の白い法衣を脱いでおり、動きやすい服を着ている。
「救難十四聖が来る前に早く逃げるわよ！」

救難十四聖とは

ヴァチカン法王教皇庁が認めている聖人は数百に上るが、その中でも特に偉業を成し遂げた14人の聖人が居るのだ。

雷光のバルバラ

聖樹のブラシウス

車輪のカタリナ

鉄腕のクリストフォロ

封魔のキリカス

青炎のエラスムス

幻影のエウスタキウス

虹のゲオルギウス

博愛のジャイルス

聖十字のマルガリタ

銀刀のパンタレオン

聖獣のヴィトウス

篡奪のアカキウス

不朽のディオニシウス

この名前を受け継いでいるのが、救難十四聖なのだ。

その存在は外では伝説級の扱いをされており、禁書目録聖省《インデックス》の使徒の中でも大幹部なのだ。

尚、その上には2人しか居ない、禁書目録地下図書館の司書長と教皇のヨハンナだ。

その実力は戦闘機人の12人を凌駕しているので、会ったら確実に殺されるのだ。

だが、その強さ故に長期任務に就いている場合が多く、今現在は1人しか居ないのだ。

しかも、救難十四聖のうち4席が空席になっている。

その理由は、選定の基準が高いので簡単には見つからないのだ。
現在、空席なのは

車輪のカタリナ

青炎のエラスムス

虹のゲオルギウス

篡奪のアカキウス

が空席となっている。

しかも、在籍となっている10人のうち、9人は長期任務から未だ戻っていない。

まさしく、今が絶好のチャンスだった。

しかし、残っているのは1人だけとはいえ、樂觀出来ないのだ

1人でも、十分に脱走しようとしているスカリエツティたちを殺せるのだ。

そのためにこれは、時間との戦いでもあった。

計画を開始して10数分が経過している。そろそろ危ない時間となってきた。

「外はどうなっている!?!」

「ああ、友人達が頑張ってくれている!」

「東門のほうがもうすぐ制圧できるみたいだから、そこから逃げるわよ!」

「二二」おう（ああ）（うん）!」二二」

そうして、計画を開始して約40分後

「これで私達は脱走者ね・・・」

スカリエツティたちは、外に無事に出られていた。

そして、今はヴァチカン市国の中の協力者の家に隠れている。

ここからローマに逃げ込んで、そこからは飛行機に乗って日本の初音島に向かうのだ。

「初音島なら、奴らも簡単には来れないだろう・・・」

「しかし、なぜ初音島なのだ?」

スカリエッツィは逃亡先が初音島なのを疑問に思ったのか、4人に質問した。

「初音島に私の友人が住んでてね、そこに私達の子供を預けてるの」
「それに、あそこには偉大な魔法使いが住んでる」

「あいつらも、相手にしたくないでしょ」

「そうか。それで、名前は考えたのかね？ 聖名はおかしいだろ？」

「当たり前だ、俺は幸也、防人幸也だ」

「私は防人彰子ね」

「俺は、橘博信だ」

「私は橘美姫ね」

「私はジェイル・スカリエッツィだ」

「それで、この子達はどいうするのですか？」

トールとセインは、両手で抱えている裕也と神夜を見ながら言う

「その子、私達で引き取っていいかしら？」

「男の子が欲しいと思っていたのでね」

「女の子は私達が」

「構わんよ、防人家は生まれた子供は女の子で、橘家は男の子か？」

「ええ」

「それで、こいつは兄貴になるわけだな。名前は考えてある」

「こちらもだ」

「ほう、聞いてもいいかね？」

「ええ、構わないわ」

「こいつの名前は」

幸也と彰子はそこでお互いの顔を見て、息を合わせて告げた

「防人裕也だ（よ）」

「いい名前っすね！」

「ああ、優しく育つだろう。」

「ありがとうね」

「うむ、で、そちらは？」

「俺達のほうはな」

博信と美姫は見つめあうと、息を合わせて

「神夜だ（よ）」

「そうか」

「綺麗な子になりそうだね♪」

こうして、裕也と神夜は名前を得て、防人家と橘家の一員となった瞬間だった。

しかし、まさか僅か2年後にあのような事件が起きるとはこの時誰も予想だにせずに居た。

過去の語らい その4

2年後、西暦2046年、日本 初音島

脱走してから2年が経過した。

脱走して、初音島に来てから幸也たちがまず行ったのは、預けていた我が子の防人美樹と橘蓮華たちばなれんかを、初音島に住んでいたハラオウン夫妻とテストアロツサ夫妻から引き取った。

そして、その後はかねてから計画していたとある組織の設立を迅速に行ったのだ。

まずは、聖王教会のシスターのカリム・グラシアに会い禁書目録聖省のことを話した。

そして、カリムが自分の弟分でICPOで捜査官を勤めているヴェロツサ・アコースに連絡を取って、ある3人との面会の場を設けたのだ。

その3人とは

法務顧問相談役のレオーネ・ファイルス

武装隊の名誉隊長のラルゴ・キール

統幕議長のミゼット・クローベル

の、3人である。

幸也と彰子、博信と美姫。そしてスカリエツテイ達は自分達の知る限りの禁書目録聖省《インデックス》の情報を公開した。

それはもちろん、人体実験や目的のために厭わない拉致、暗殺、強攻策など、全てだ。

それを聞いた3人は、対禁書目録聖省の組織の設立を決定

全世界の警察機関に連絡し、一大武装組織を設立したのだ

それが守護者ガーディアンなのだ。

尚、守護者は基本的に対禁書目録聖省だが、現地の警察からの協力要請があった場合それに応じるように決められている。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、設立してから他の国では度々に渡り禁書目録聖省と激突し

だが、初音島では平和だった。

幸也たちはそれにより、平和に、そして幸せに過ごしていた。しかし、その幸せも長くは続かなかつたのだ……

「くそ……まさか、救難十四聖が来るなんてな……」

幸也は袖で自分の口元の血を拭いながら、呟いた

幸也の隣にはもちろん、彰子の姿がある。

そして、近くにはクライド、リンディのハラウン夫妻、アーネスト、プレシアのテストアロツサ夫妻に明義に絢子の八神夫妻、博信に美姫の橘夫妻。そして、高町士郎がその場に居た。

「話には聞いていたが、ここまで強いとはな……」

士郎は両手に握っている2本の小太刀を油断なく構えながら、唸るように呟いた。

全員の前には、白地に金色の刺繍が施された法衣を着ている人間が1人だけ立っている。

その手には、何も書かれていない黒皮の表紙の本が所持されている。

「しかも、空席だった虹のゲオルギウスなんてね……」

目の前の人物は、現れた際に「自分は虹のゲオルギウスだ」と名乗ったのだ。

「しかも、あの本は魔道書ね、原点級の……」

リンディは、虹のゲオルギウスが所持している本から漏れ出ている魔力を感じて分かった。

「あれほどの魔道書を扱うとはな……」

クライドは右手の杖型のデバイスをゲオルギウスに向けているが、冷や汗を流している。

「スカリエツティ？ どうした、応答しろ?!」

明義は、耳に装着しているヘッドセットに大声を出している。

「どうしたの?」

絢子は大声を出している明義に質問する。

「裕也君と美樹ちゃん、蓮華君と神夜ちゃんを護衛していたスカリ

エツティたちから連絡が途絶えた！」

スカリエツティは戦闘向きではないため、拳闘タイプのクイント・ナカジマ、メガーヌ・アルピーノと共に裕也と美樹、蓮華と神夜の護衛に着いていた。

しかし、そのスカリエツティからの通信が途絶えた。

直前に「現在交戦中だ」

という、通信を残して
すると

ドサツ！

という音が連続して背後から聞こえた、全員は反射的にそちらに振り向く

そこには7人の白い法衣を着ている男達が居て、その足元にはスカリエツティとクイント、そしてメガーヌが倒れていた。

「スカリエツティ、クイント、メガーヌ！」

幸也は3人の名前を叫んだ

「すまない……」

「ドジっちゃった……」

「ごめんね……」

スカリエツティとクイント、メガーヌは傷の痛みを堪えながら謝罪してきた。

7人の使徒のうち、4人の男が裕也と美樹、蓮華と神夜を抱えていた。

「お父さん……ごめん……」

裕也と蓮華も最後まで抵抗したのだろう。服は破けており、顔にはアザが浮いている。

美樹と神夜はダラリと力なく抱えられているところを見ると、気絶しているようだ。

「貴様ら、このガキと実験動物共の命が惜しかったら抵抗するな！」

男の1人が裕也の首筋に刃物を当てながら、大声を出した。

幸也たちは各々、武器を仕舞って地面に置く。

すると、虹のゲオルギウスは開いていた魔道書を閉じた。

「ゲオルギウス様？」

魔道書を閉じたゲオルギウスを見て、不思議に思った使徒の1人がゲオルギウスを見た。

「興が乗らない……」

どうやら、所謂興ざめしたようで、少し後ろに下がった。

それを使徒の男達は肩をすくめながら、裕也を抱えていた男が美樹を抱えていた男に渡そうとした瞬間だった。

「このっ！」

裕也は最後の悪あがきとでも言う様に、身をよじって暴れた。

「この実験動物が!!」

怒った男が裕也を殴ろうとした時だった。

小太刀二刀流御神流 歩法の極み 奥義 神速

士郎の姿が消えて、気付けば裕也と美樹を抱えていた男の近くに立っていた。

「な!？」

士郎は袖の中からすばやく鋼糸を取り出し、鋼糸で男の首を切断、次の瞬間に近くにいた残りの男達の急所に飛針を投げて刺し殺した。

それを見た博信も、ブリツツアクションで近づいた

そして、士郎はすばやく裕也と美樹を、博信は蓮華と神夜を両脇に抱えて幸也たちの近くに戻った。

この間、僅から秒にも満たない。

そして、次の瞬間には士郎と博信以外の全員は、置いていた武器を再度構えていた。

「っ！」

ゲオルウスは、すぐに魔道書を開いた。

「天に輝く裁きの星よ、かの罪人達に正義の剣を振り下ろせ！」

ゲオルギウスは瞬く間に詠唱する。

「マズい！ 全員障壁を最大展開！」

高位の魔道士でもあるプレシアは、ゲオルギウスが唱えた魔法の危険さを直感で気付き警告を発した。

それにより、プレシア、アーネスト、リンデイ、クライド、幸也、彰子、美姫の7人が障壁を多重に展開し、明義と絢子、そして士郎と博信の4人が裕也と美樹に覆いかぶさった。

「裁きの星の剣！」

ゲオルギウスが魔法を唱えた瞬間、幸也たちの居た場所に数多の閃光の剣が降り注いだ。

そして、閃光が止まると、しばらく土煙が舞った。

そして、土煙がやむと、全員倒れていた

「ふっ、貴様ら異端者の猿が我ら人に勝てるわけがなからう？」

ゲオルギウスは、蔑みの眼を倒れている幸也たちに向けた。
すると

「お父さん・・・お母さん・・・」

裕也だけは意識があつたようで、4人の中から出てきた。

ゲオルギウスはそれを見ると、ため息を吐いて右手を裕也に向けた。

「死ぬ、実験動物が！」

裕也に向けて、禍々しい赤色の収束砲を放った。

「っ！」

裕也は近くに落ちていた長さ4、50cmの小太刀を掴み、全力で投げた。

ゲオルギウスはそれを見て一瞬驚いたが、すぐに表情を戻した。

「その剣もろとも消え去れ！」

ゲオルギウスはその刀ごと裕也を殺すつもりで、収束砲の威力を上げた。

その表情は笑っており、自身の勝利を確信していた。

が、その表情が驚愕に変わった。

「バカな！ 我が収束砲が斬られてるだど!？」

裕也が投げた刀は回転しながら収束砲を切り裂き、ゲオルギウスに向けて飛んでいる。

裕也が投げたのは鉋切長光かんなぎりながみつと言い、その昔、大工に化けた妖怪を鉋ごと切り捨てたと言われる業物だ。

そして、それにより、鉋切長光は対魔としては最強の切れ味を誇る概念武装なのだ。

ゲオルギウスは、収束砲を放っている途中のために動けない

そして、裕也が投げた鉋切長光は収束砲を切り裂きながらゲオルギウスに向かい飛んでいき……

「バ……かな……」

ゲオルギウスの額に突き刺さったのだ……

ゲオルギウスは背中から倒れた。

その後、聖王教会から派遣された教会騎士達が倒れている幸也たちを回収したが

生き残ったのは、高町士郎とメガーン・アルピーノ、クイント・ナカジマ、ジエイル・スカリエッティ、そしてリンディ・ハラオウン、そして、裕也と妹の美樹。そして、蓮華と神夜だけだった……

過去の語り 閑話

「ここらで、一旦休憩にしよう。チンクお茶を」

スカリエツティは息を吐くとイスに深く座って、チンクにお茶を頼んだ。

「……んだよ……」

「ん？ なんだね？」

義之の声が聞こえなかったので、スカリエツティは聞き返した。

「インデックス禁書目録聖省は何がしたいんだよ!!」

義之は感情をあらわに怒鳴った。

「そうだよ、こんなの人がやることじゃないよ！ 人をまるで物みたいに!!」

フェイトは涙を流しながら、叫ぶように言い放つ

「裕也先輩……」

由夢は涙が眼の幅まで溜まっており、俯いている。

「裕也君……、一人で……」

音姫は泣くのをこらえようとしているが、肩が震えている

「裕也……だから……あんな表情で戦うんだ……」

まゆきは思い出しながら言ってるのか、眼を閉じている。

「人の命をなんだと……」

エリカは俯きながら、拳を白くなるほど握り締めている。

「これが人間なのか……」

美夏は怒りを堪えながら呟いている

「スカリエツティ先生よ、ひとつ質問があるのだが」

杉並は真剣な表情でスカリエツティに対して質問する。

「何だね？ 答えられるなら答えよう」

スカリエツティはチンクからお茶を受け取り、一口含んでから杉並に聞く

「インデックス禁書目録聖省の目的は……何なのですか？」

杉並の質問を聞いた全員の視線が、杉並を見てからスカリエツティに集中する。

「禁書目録聖省の目的は、異端と認められた魔法、魔術の蒐集だ。そのためならば、一族の皆殺しくらい平気でやる」

スカリエツティの言葉を聞いた義之達は全員、目を見開いた。

「一族皆殺しなんて……そんな……」

小恋は信じられないのか、首を左右に振るう

「事実だよ……キャラロの一族がそうだった……」

スカリエツティの言葉を聞いた生徒全員の視線が、キャラロに集中した

「はい、その通りです。私の一族は龍の召喚を扱う遊牧民なのですが、1年前に私以外全員殺されました……」

キャラロは下を向いて、辛そうに言った

「僕は両親を目の前で殺されて、強化手術を施されて、1年前に助けられました」

エリオもキャラロに続くように言った、その言葉を聞いてフェイトはハツとした

「2人を助けたのが……裕也なの？」

「……え？」

義之たちの視線がフェイトに集中した。

「ちょうど一年前に、裕也が一週間くらい学校を休んだ時期があったんです。確か……5月頃」

フェイトは口元に手を当てながら言う。

「うむ、その通りだ。その時、裕也にはイギリスに行ってもらった」

「イギリスかよ……」

渉は行った場所を聞いて驚いている

「そーいやあ……裕也くんは一体、何時からガーディアン守護者に所属しとるんや？」

はやてはふと思ったのか、スカリエツティに質問した。

「裕也が守護者に所属したのは、小学校1年生からだ」

「な!? 小学校1年からかよ!!」

義之は予想外に早かったために驚いている

「なんで、そんな小さいころから……」

はやては分からないのか、首をかしげている

「それはね、『守りたいから』と言っていた」

「守りたい？」

「ああ、君たちを守りたいと言ったんだ。彼は……7歳の頃にね」

スカリエツティは少し暗い表情をしながら、言った。

「なんで？」

「裕也くんはね、罪を償うとも言ったわ」

「罪？」

「ええ、『僕のせいで、はやて、アリシア、フェイト、連華、神夜から両親を奪ってしまったし、なのはとリンデイさんには寂しい思いをさせちゃったから、僕が守りたい』って」

リンデイは複雑な気持ちなのか、苦い表情をする

「それに、裕也が提案したんだ。アリシアとフェイトをハラオウン家に引き取って欲しいって」

「え？」

フェイトはクロノの言葉を聞いて驚いている

「ハラオウン家とテストタロットサ家は部屋が隣同士だから、昔から家族ぐるみの付き合いでな」

「裕也くんも一緒に住むって聞いたんだけど……僕は戦うから、何時死ぬかわからないのに一緒に住むなんてかわいそうですから、って」

「そんな……」

「それに、はやてのボルケンリッターズの覚醒を手伝った」

「シグナムたちが!？」

「ええ、まずは自分のリンカーコアを提供しまして、それから蒐集を手伝ってくれました」

「それに、防衛プログラムも消してくれました……劫の眼を使って」
「……」

はやては胸元にある剣十字架のペンダント、待機形態のデバイス〈シユベルト・クロイツ〉を強く握り締めた

「士郎に関しては、私に執刀してくれと頼んできた。まあ、私も治るのに時間が掛かってしまったがね」

「おかげで、なんの障害も残らなかったがね」

「裕也くん……」

「アホやな……むしろ、その状況でウチの親だけが生きてたら、親を軽蔑しとつたで……」

はやては涙を堪えながら言い放った

リンカーコアの蒐集には激痛を伴い、さらには劫アイオンの眼を使って、暴走していた防衛プログラムまで消した

つまり魂を削った

「感謝しか……沸かんわ……」

はやてはポッドの中で浮いている裕也を見た。

「さて……続きを話そうか」

スカリエツティは、持っていたマグカップを机に置きながら言った

過去の語らい その5

西暦2050年 6月某日

封鎖結界内

そこは…激戦区だった。

「美樹よすんだ！ 眼を覚ませ！ 美樹ー！」

そこでは、望まれない兄妹対決が起きていた

だが、美樹のほうは目が虚ろで焦点が定まっていない。

「……」

裕也は美樹を殺したくないから、直撃コースで攻撃が出来ない。

「あはははは！ 兄妹で戦うなんて、面白いでしょう？ 存分に殺し

あいなさい！」

美樹の10mほど後ろでは、白い法衣の使徒が醜く笑っている。

「お前ー！ー！！」

「この外道がー！！」

裕也は使徒に向かい刀を構えて突撃する

蓮華はアームドデバイスの〈グランヴェル〉の戦斧モードで、ゴレムと戦っている

「私をその身をもって守りなさい！」

使徒が命じると美樹は裕也の前に滑り込んできて、何処からともなく鎖で裕也を攻撃してくる。

「がああ!？」

裕也は最低限のダメージで済むように避けるが、それでも鎖は容赦なく裕也の体を切り裂く

「裕也くん！」

クイントとメガータは使徒のゴレムと交戦しながら、裕也を気にかけて

「裕也、離れろ！」

空にはオレンジ色の髪をポニーテール状にしている男性、ティード・ランスターが両手に拳銃型のデバイスを展開して使徒を撃とうとしているが

「ハエがウルサイんだよ!!」

使徒が睨むと同時に、美樹が鎖をティーダに向けて放った
「がはー!」

その鎖は……無慈悲にも、ティーダの胸部を貫通した。

「ティーダさん!!」

ティーダは血を噴出しながら、落下して地面に激突する。

「ティーダさん!!」

ティーダは裕也達にとって、兄に等しい人物だった

両親が死んでから、優しく接してくれた

「ティーダ君!!」

クイントとメガーヌの二人は、ゴーレムを破壊すると、裕也の方に
向かった

「邪魔だ、異教徒の猿が!!」

使徒は手に持っていた剣をデタラメに振った

しかも、距離も離れているのに

しかし、剣はまるで蛇腹のように伸びた

「くう!」

クイントはシールドを展開して耐えて

「はあ!」

メガーヌは姿勢を低くして回避した

「うお!」

「くう!」

蓮華は斧を楯にして、神夜は後退して回避した

「それは聖遺物ね!」

「ほう、異教徒の猿でもわかるのだな。これの神々しさが」

使徒の男は、剣を見せびらかしながら言った

聖遺物、それは昔、偉業を成し遂げた聖人が所持及び使用していた
武器や書物、衣類を指す

そして、使徒の男が持っているのも、その1つだった。

「この聖遺物の名は、龍骨剣だ」

「龍骨剣！ あの伝説上の生き物、龍の骨を使って作ったとされる剣ね！」

メガーヌは出自を知っていたようで、身構える

「その通り、直撃を食らえばタダでは済まんぞ？」

使徒はさらに剣を振るう

「くっ！」

裕也は左手に持っていた妖刀、濡れたカラスの羽のように黒い刀、こがらすあまくに小烏丸天国で剣の軌道を逸らす

「野郎！」

蓮華は伏せるように、姿勢を低くし避け

「この！」

クイントはかろうじて避ける

が

「がはっ！」

クイントの胸部を、鎖が貫いた

「クイントさん！」

クイントは力なく、地面に倒れ付した

「クイント！」

メガーヌはクイントが倒されたことに、意識が集中した

「隙あり！」

使徒は剣を振った

「しまっ！」

メガーヌの体を、龍骨剣が逆袈裟懸けに切った

「かはっ！」

メガーヌの口から鮮血が溢れる

そして、メガーヌは仰向けに倒れた

「メガーヌさん！」

裕也は刀で鎖をはじいて、クイントとメガーヌの近くに寄った

「クイントさん……」

クイントは即死だった

メガーヌは生きているが、早く治療しないと危ない
裕也はメガーヌの傷口を自身の服を脱いで、キツく縛った

「ぶっ殺すー!」

蓮華はグランヴェルを変形させて、弓モードにして、狙撃しようとしたが

「邪魔なんですよ!!」

使徒が指差すと、美樹の鎖が伸びた

「くうー!」

それを、蓮華の前に滑り込んだ神夜が自身のデバイスへシャーリーズ<の鉄扇形態〈花月〉で防ぐ
が

「仕舞いですー!」

そこを狙って、使徒が蛇腹剣を振るった

「しまっー!」

蛇腹剣が神夜に迫った

(駄目! 避けきれない!)

神夜はそう直感でわかり、凶刃がゆつくりと迫った
が、そこに割り込む影

「があー!」

それは……蓮華だった

「な!?!」

「蓮華!!」

蓮華は、仰向けに倒れた

防御に使ったのだろう

グランヴェルは途中で折れていた

「そんな……兄さん!!」

神夜は涙目で駆け寄った

「カフツ! なんだ……初めて……だ……兄さん……呼んでくれんの……」

「そんなことどうでもいいです! なんで私を!」

神夜は花月の回復魔法で治療するが、血が止まらない

「なんでって……たった一人の妹を……守るのに……理由が……いるか？」

「私は本当の妹じゃないんですよ!? それなのに!」

「そうかも……な……だけどな……俺にとっては……大事な妹なんだ……」

「兄さん……」

神夜は全力で治療に専念している

本来、蓮華には再生系の希少技能があるが、扱いが難しいために、この時はまだ扱いきれずにいた

「どうだ? 被験体よ、我々の元に戻らぬか? まあ、行き着く先は戦

闘人形だがな!」

使徒は倒れている全員を見て、笑いながら言い放つ

裕也は使徒を睨む

「美樹……」

その時、美樹の顔が見えて気付いた

「泣いてる……」

美樹の両目の端から涙が溢れているのだ

「ん? まだ精神が保っているのか。わざと自我は残してやったというのになあ」

使徒はつまらなさそうに言う

「お前は……」

つまり、美樹は自分の能力でティータとクイントを殺してしまったことを理解しているのだ

それで美樹は泣いているのだ

「……」

裕也は両手の刀、鉋切長光と小鳥天国を構える

「貴様……なんのつもりだ?」

使徒は眉を上げて、裕也を睨んだ

「お前を殺して、美樹を取り戻す!」

裕也はあらん限りの殺意を込めて、使徒を睨んだ

「ああ……私を殺した所で、戻りはしないさ」

「なに?」

「この娘を操っているのは私ではなく、教皇のヨハンナ様だ。まあ、今は私が操っているがね」

「なん．．．だど?」

「だから、私を殺したところで無意味だ!　そもそも、私に勝てると思っていることが愚かなのだよ!!」

使徒は大声を上げながら、笑っていた。

「そんな．．．」

「．．．」

美樹は涙を流しながら、虚ろな表情で見ている

「ごめんね、美樹．．．」

裕也は両手の刀を握りなおす

「約束したのに．．．守るって約束したのに．．．」

裕也は泣きながら美樹を見る

そして思い出す

両親が死んで1年経って、守護者に入った後の夏に両親の墓前で美樹と両親に約束したあの時を

『僕が美樹を、皆を守る!』

と、約束したのに

「守れなかった．．．」

「ごちやごちやとウルサイですね」

使徒は裕也の言葉が耳障りなのか、表情をゆがめた

「せめて、僕が．．．」

裕也は俯いていた顔を上げる

その眼には覚悟の光が宿り、左目に意識を集中する

「ええい!　捕まえなさい!」

使徒が命じると、美樹の鎖が伸びて裕也に向かう

「タイムアクセセル時間加速!!」

その瞬間、裕也にとっては全てが2重にボヤけるように遅く見えた

裕也が使ったタイムアクセセル時間加速も劫の眼の能力、因果操作の派生だ。

これは、使い手に周囲の全ての行動の先を見せつつ、さらに使い手

の時間を数10倍から最大で数百倍まで延ばして本人は普段通りに動けるのだ。

「僕は自分の罪を肯定する、受け入れる、これから僕が犯す罪もだ！」
裕也は走りながら言い放つ

「だから、美樹。恨むなら約束を守れなかった僕だけを恨んで、憎むなら僕を憎んで」

裕也は涙を流しながら走る

「僕は、僕に向けられた全ての恨み憎しみを受け入れる。悲しみは僕が背負う、僕は戦う！」

裕也は、右手の小太刀の鉋切長光で美樹の胸を刺した

「ごめん……」

そして、目の前でゆっくりと龍骨剣を振っている使徒が居る

裕也は躊躇ためらいなく、龍骨剣を持っている手の手首から切り落とした

そして、その瞬間に時間の流れは戻る

「あ？ いぎっ、ぎやああああ！」

使徒は最初、なにが起きたか分からなかっただろう

数10メートル離れていた裕也が気付けば目の前に居て、さらに気付けば自分の手が手首から切られていたのだ

「貴様アアア！」

使徒は残った手で龍骨剣を握ろうとしたが、それを裕也が許すはずがなかった。

「死ね……」

裕也は左手の小烏丸天国で背中を刺して、右手の鉋切長光で首を切り飛ばした

「……」

裕也は無表情に使徒の死体を見る

そして、両手の刀を空間魔法で仕舞うと

裕也は背後で倒れ付している美樹に、ゆっくりと歩み寄り

「……」

美樹の遺体を両手で抱えた

美樹の顔は……安らかだった

「ごめん……これで、最後にするから……」

裕也の肩が震える

「う、ひっく、うあああああああ！」

裕也の慟哭が……封鎖結界の解けた蒼天に響く

スカリエツテイたちが着いた時に見たのは、美樹の遺体を抱き抱えながら泣き叫ぶ裕也の姿だった。

この戦いでティーダ・ランスター、そしてクイント・ナカジマの両名が戦死

そして、メガーヌ・アルピーノは意識不明の重体

橘蓮華も重傷を負った

メガーヌはそれから2年近く意識不明に陥り、意識が戻った時は目の前に泣いていた自分の娘のルーテシア・アルピーノが居た

過去の語り 終

「これが、君達の知りたかった裕也くんの過去さ」

部屋の中を、沈黙とすすり泣く音が交互に覆った

「そりゃ……強くなるはずだよ……」

まゆきは、涙を目元に溜めながら呟いた

「あの目も……納得ですわね……」

エリカは、裕也の目に納得して

「ずっと……1人で……戦ってたんだ……」

音姫は、涙を拭きながら、呟いて

「ずっと……私達の……ために……」

フェイトは、胸元で両手を合わせて、泣いていた

「そして、1年前にイギリスに行き、エリオくとキャラちゃんを救助した」

「はい」

「そうです」

エリオとキャラの二人は頷くと、顔を見合わせて

「先生、僕とキャラの話をしてもいいですか？」

「なに？　しかし、いいのかね？」

スカリエツティは、エリオ達の提案に驚いている

「はい。裕也義父さんの事を知るには、私達の事も話すべきだと思います」

キャラはスカリエツティを見ながら、毅然と言った

「………わかった。しかし、私は君達に関しては、詳細を知らないのですね。お願いしていいかな？」

スカリエツティは、数瞬黙考すると、エリオたちをお願いした

「はい、構いません」

「それでは、話しますね。裕也義父さんと私達の出会いを」

そして、エリオから話だした

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

エリオの始まりは、西暦2052年だった。

「ただいまー!」

友達と遊んでから帰ってきたエリオは、ドアを開けながら、中に居るはずの両親に帰ってきた報告をした

しかし、両親からの返事はない

「? 買い物に行ったのかな?」

エリオは首を傾げながら、靴入れを見た

すると、靴入れには両親の靴が置いてあった

「お父さん? お母さん?」

エリオは両親を呼びながら、電気の点いていたリビングに向かった

「エリオ! 来てはいかん!」

エリオは、その声を聞いて慌ててドアを開けると

数人の白い法衣を着ている男達が、両親を囲んでいて

「黙れ!」

「お父さん!? お母さん!?!」

エリオの目の前で、両親は

切り殺された

エリオは、倒れている両親に駆け寄ろうとしたが

エリオの腕を、法衣を着た男が掴んで、乱暴に持ち上げた

「あなた達は誰ですか!? お父さん達に何をしましたんですか!?!」

エリオは痛みを堪えながら、男に叫ぶ様に問いかけた

が、男達は質問には答えずに、頷きあうと

「こいつは連れていくぞ。貴重な実験素材だ」

と言うと、エリオの頭を掴み

「スタン」

「がっ!?!」

エリオに電撃を当てて、気絶させた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして

そこからは、エリオにとっては地獄だった

何度も調整と言われて、体を弄ばれ

何度も、訓練と言われて、同い年の子供と戦わされて

気付けば、2年経っていた……………

2054年 5月某日

「さて、今日も訓練をするぞ。立て、11番」

と、男がエリオの入っていた牢屋の鍵を開けた時だった

牢屋に、いや、牢屋だけではなく、施設中に甲高い警報音が鳴り響いた

「何事だ!？」

「敵襲です！ 恐らく、例のガーディアンと名乗る異教徒共かど！」

「なに!? ちい！ 異教徒のサル共が！ 我らの崇高な目的を邪魔するか！」

部下なのだろう、新たに現れた使徒からの報告を聞いた男は苛立った様子で声を荒げた

「すぐに殺せ！ 神の御心のままに、殲滅しろ!!」

「はっ！」

男が敬礼して、振り返ろうとした

その時だった

男の胸部から、刃が生えた

「な……………に……………」

使徒は、驚愕に眼を見開いていたが、刃が消えると、鈍い音を立てながら倒れた

「貴様、我らを禁書目録聖省の使徒と知っているのか！」

「ああ、知っているさ。そして、貴様らに相応しいのは、死だけだ！」

エリオが見たのは、使徒の着ている白い法衣とは真逆の黒いローブを纏っている人だった

声で男というのは、エリオにもわかった

「異教徒のサルが!!」

使徒が、魔法を放とうとしたが

「遅い」

気付けば、使徒の後ろに立っていて、刃が煌いた

そして、刀を鞘に仕舞うと、使徒から血が噴出して、使徒は倒れた
「死んで償え」

死んだ使徒を見下ろしながら、呟いた
すると、別の通路から、血に濡れた槍型デバイスを持った中年の男性

ゼスト・グランガイツが現れた

「終わったようだな。こちらは、融合器を1体保護した」

「融合器ですか、珍しいですね」

「ああ、古代ベルカ式みたいだ」

と、二人が話していると、別の通路のドアが開いて蓮華が現れた

「あ？　なんだ、俺が最後だったか」

「蓮華か。そちらはどうだった？」

ゼストからの質問に、蓮華は苦い表情で首を左右に振った

「そうか……こちらは、あの子ですね」

と、黒いローブを着た若い男がエリオを見た

顔には、白地に血の涙のペイントが施された仮面が装着されている

エリオは改めて、怖くなった

保護と言ってるが、ここと同じ扱いにならないとは限らない

そう思うと、エリオの体は震えた

エリオは、素早く視線を左右に巡らせると、足元に使徒が持つてき

ていた剣型のデバイスが見えた

エリオはそれを素早く掴むと、切っ先を向けた

「？　ああ……しまった。仮面を着けてるから怖がらせっちゃったか」

若い男はそう言いながら、仮面を外した

見えたのは、丹精な顔立ちに黒い髪

そして何よりも、左目に着けた眼帯だった

その時は知らなかったが、それが裕也との初めての出会いだった

裕也は仮面を仕舞うと、ゆっくりとエリオに近づいた

「来るな……来るな！」

エリオが言っても、裕也は止まらなかった

そして、エリオの前で止まると、片膝立ちになって、エリオに手を伸ばした

が

「僕に触るなー！！」

エリオは恐怖から、剣を振り下ろした

エリオは振り下ろした剣は、裕也の右肩あたりから腰まで切つていて、血が流れた

「防人！」

「裕也！！」

ゼストと蓮華が慌てて、近寄ろうとするが

「大丈夫です！」

裕也は、声で制した

そして、裕也は微笑んで

「遅くなって、ごめんな……怖い思いをさせて、ごめんな……でも、もう大丈夫だ」

と言いながら、裕也は優しくエリオを抱きしめると

「これからは、1人じゃない。俺が居る。だから……泣いてもいいんだよ？」

と優しく、エリオの頭をなでた

それを聞いたエリオは、目元に涙が溜まった

「あ、うあ……」

そして、手から剣が離れて、カランと音を立てて、地面に落ちた

そして、両手を裕也の背中に回し、顔を裕也の胸板に押し当て

「怖かった……怖かったよう……」

エリオは

久しぶりに、泣いた

心の底から泣いた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

場所は変わって、輸送機内

「助けられたのは、エリオ・モンディアル君と融合器だけでしたね……」

裕也は悲しそうに、眠っているエリオを見ている

エリオは泣きつかれて、眠っている

裕也は、そんなエリオの頭を優しくなでている
すると、輸送機内に警報音が鳴り響いた

「何事だ！」

ゼストは大声を張り上げて、操縦席のパイロット。ヴァイス・グラ
ンセニツクに問いかけた

「近くに展開している、友軍からの援軍要請です！ インデックスの
強襲部隊がルシエ族を襲っているらしく、向かったのですが、敵の戦
力が予想より多いらしく、近づけないようです！」

「ルシエ族といえば……………」

「龍召喚を扱う、遊牧民ですね……………あいつらは……………」

裕也は、表情を怒りに染めた

「一番近くの部隊は!？」

「我々だけです！ どうしますか!？」

ゼストの問いかけに、ヴァイスは笑みを浮かべながら、問い返して
くる

「決まっているだろう？ 行くぞ！」

「了解！ 進路変更します！ 少し揺れますよ！」

ヴァイスの言うとおり、輸送機は揺れた

すると、それで気付いたのか、エリオの瞼が開いた

「ど、どうしたんですか？」

「インデックスの連中が、遊牧民を襲ってる。それを助けるのさ」

不安そうにエリオが問いかけてきたが、裕也はエリオの頭を撫でな
がら、答えた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「はあ…はあ…はあ」

ピンク色の髪の毛の小柄な女の子が、キャロ・ル・ルシエが走っていた
「キョクル〜？」

そんな彼女の僅か上に、白い子龍が飛んでいる

「うん、大丈夫だよ。フリード」

キャロは心配してくれたフリードを安心させるために、笑顔で返事
した

(お父さん……お母さん……!)

キヤロは自分が逃げるために、残って使徒と戦っている両親が心配だった

そして、背後の集落は燃え盛っており、怒号と悲鳴が途切れ途切れに聞こえてきた

キヤロはそれを聞いて、涙が溢れた

(どうして、こんなことになったの？ あの人たちはなにがしたいの!?)

キヤロは、突然現れて襲撃してきた使徒達の目的がわからなかった
そして、考えることに意識を割いたためか、キヤロは転んでしまっ
た

「もう……もう嫌だよう……お父さん……お母さん……」

キヤロはうつ伏せで泣きながら、呟いた

すると、近くで土を踏みしめる音が聞こえた

「お父さん！ お母さん！」

キヤロは、それが両親が来た音だと思った

しかし、そこに居たのは

血に塗れた使徒だった

「あ……うあ……」

キヤロの心中は、絶望に覆いつくされた

「たつく、こんな所まで逃げやがって。さてと、さっさとこいつを殺して帰るか」

使徒は気だるそうに言いながら、腕を上げた

「キュクルー！」

フリードリヒが攻撃しようとするが、使徒が手を無造作に振るうと
フリードは地面に叩きつけられた

「フリード!?!」

「やれやれ、邪魔なトカゲめ。これで、終わりだ」

使徒は再び、手を上げた

その手には、赤い魔力弾が出来上がり、徐々に大きくなっていく
(あ、私……ここで死んじゃうの?)

キヤロには、目の前の現象が遅く見えた
がそこで、神も救いの手を差し伸べた

キヤロの背後

つまりは、集落の方から刀が飛来して、使徒の頭に突き刺さった

「……………え？」

使徒は、仰向けに倒れた

キヤロは、目の前の現象が信じられなかった

キヤロが呆然としていると、背後から誰かが走ってくる音が聞こえた

キヤロは、ゆっくりと背後に振り向いた

そこには、黒いローブに白地に血の涙のペイントが施された仮面を被った人物が走ってきていた

「はあ……………はあ……………間に合った……………」

その人物はキヤロの隣に片膝立ちになると、仮面を外して放り投げた

「キヤロ・ル・ルシエちゃんだね？」

「はい……………そうです……………あなたは？」

「俺の名前は、防人裕也だ……………すまない……………俺達が来るのが遅かったから……………」

裕也はそう言いながら、キヤロを助け起こした

そして、近くで横たわっていたフリードを抱き上げると

「親御さんのところに行きたい？」

と、悲しい表情で言った

「……………行けるんですか？」

「ああ……………インデックスの連中は殲滅したからな。もし居ても、俺達が排除する」

裕也はそう言いながら、キヤロに手を差し伸べた

キヤロは、裕也の手を握った

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「お……………父さん……………お……………母さん……………？」

キヤロの目の前には、血まみれで倒れている両親の姿があった

「俺達が来た時には既に、虫の息だった……」

キヤロは呆然と両親を見ながら、ヨタヨタと覚束ない足で歩み寄ると、両膝を突いた

「そんな……そんな……っ！」

キヤロは首を左右に振ると、額を地面にこすり付けて泣いた

あの優しかった両親に、もう会えないなんて

あの暖かい手に、もう2度と触れないなんて

キヤロの心中を、悲しみが覆いつくした

すると、泣いているキヤロの肩に、裕也の手が優しく置かれた

「君の母親の遺言で、君を、『キヤロをお願いします』って、言われた

……だから、一緒に来るか？」

と、裕也は悲しそうに微笑みながら首をかしげた

その数十分後に、ガーディアンの本隊が到着

ルシエ族の遺体は、丁重に葬られた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

その後、エリオとキヤロは裕也とフェイトの養子となったのである

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「以上が、僕達の話です」

エリオが話し終わると、学生組みはほぼ全員が泣き崩れていた

フェイトは泣きながら、エリオとキヤロに走り寄ると、両腕で2人

を抱きしめた

「それからは、裕也義父さんは、約束を守ってくれています」

「はい、授業参観にも来てくれました」

しばらくの間、地下室内を沈黙が覆った

すると

「さて、これで裕也くんに関する過去話は終わりだ。そして、私から君達に提案がある」

スカリエツティの言葉に、全員が視線を向けた

「裕也くんは、恐らく今後も戦う道を選ぶだろう。だけど、君達だけ

は、今まで通りに接してほしい」

そこまで言うと、スカリエツティは学生組みを見回して

頼む

と、頭を下げた

それを聞いた学生組みは、1回全員で顔を見合わせると

「「「もちろん！」「」」」

と、笑顔で親指を立てた

そして、全員が帰った後

「ふむ……念のために、彼を呼び戻すか」

と言いいながら受話器を取って、どこかに電話をかけた

学校、復活、準備

翌日、日曜日の付属3年3組の教室、本来は休みで誰も居ないはずなのに教室内には生徒の姿がたくさんあった。

理由は簡単だ、付属3年3組は決まったのが遅かったので日曜日も準備に出ないと正直間に合わないのだ

その為に、付属3年3組の生徒達は裕也以外は全員登校していた。

「委員長、材木届いたぜ！」

大道具係りの渉が角材を担ぎながら、教室内に入ってきた

「じゃあ、カウンターの製作をお願い！」

委員長こと、沢井麻耶は渉の材木を確認すると手早く指示を出した。

「了解！ よっしゃー、お前ら丁寧かつ、すばやく作るぞ！」

「おうよ！」

「時間無いしな！」

渉が言うと、大道具係りの男子達は全員工具を手にとってカウンターを作り始めた

「杉並、ネタの方はどうなってるの？」

麻耶は杉並にネタのことを聞いた

「ふむ、このくらいで仕入れられそうだ」

杉並は電卓を（何処からか）取り出して、麻耶に見せた

「安く仕入れるのはありがたいけど、鮮度は大丈夫なんでしょうね？」

麻耶は杉並が出した金額を見て、疑問をぶつける

「安心しろ、そこらへんは徹底する。俺とて、手は抜かん」

杉並はニヒルな笑みを見せると、電話を取り出して何処かに連絡を取っている

すると、廊下を誰かが歩く音が聞こえて

ガラッ！

と、ドアが開くとそこには左手を三角巾で吊っている裕也が居た

「裕也！」

1番最初に、フェイトが駆け寄り

「二三防人（裕也）（君）！二三」

クラスメイト達が裕也の前に集まった

「よ、許可が出たから来たぜ。とは言っても、まだまともな作業は出来ないけどな」

と、裕也は笑顔で言う

「来ただけでも十分よ」

麻耶は裕也に近づきながら言った
すると

（スカリエツティ先生から話は聞いた）

と、裕也から義之たちに念話が届く

（聞いたからにはしようがないが、選択肢がある）

（選択肢？）

（なに？）

義之とフェイトは聞いた

（俺から離れて、普通の生活を送るって選択肢だよ）

（な!?!）

（はあ!?!）

（なんだと!?!）

（どういうつもりかしら?）

裕也からの言葉を聞いて、全員驚いた表情をするが杏は気を取り直して聞き返す

（俺と一緒に居るってのはな、命を狙われるんだよインデックス共にな。俺はもう慣れてるし、覚悟もある。だけど、お前達は普通の学生だ。死ぬ必要は・・・）

そこまで言った時だった

（それは無いんじゃないかな、裕也くん?）

（そうだよ!）

（そうですわ!）

（あんな奴らに負ける美夏達では無い!）

（そうですよ!）

（はあ!?! まさか音姉達にも繋がってるのかよ!）

義之は突然聞こえた声に驚いた

(ああ、個別に話すより一編に話したほうが楽だし)

裕也はどうやら、横着したようだ

(あんな話を聴かされて、今更戻れるわけ無いよ)

(そうそう、裕也にだけ重荷は背負わせないわよ！)

(そうですわ！)

(美夏は人間が嫌いだが、あいつらの方がもつと嫌いだ!!)

(裕也さんはもう、幸せになってもいいんです!!)

(いいのかねえ、俺みたいな罪人が・・・)

(裕也は罪人なんかじゃ・・・)

(俺は皆から肉親を奪ってしまった。フェイト、アリシア、クロノさん、リンディさん、はやて、スバルにGINGAさん、ティアナのお兄さんまで・・・)

(それは裕也先輩だつて同じですよ!!)

(裕也君はご両親だけじゃなく、妹さんまで……)

(兄は裕也さんを助けるために死んだんです。むしろ、誇りに思いますよ)

(今度はスバルたちもか、GINGAさんまで居たのは以外だったな)

(私達は風紀委員会の見回り中です)

(そしたら、聞こえてきたので)

(繋げておいてよかった)

(裕也は自身を優先してもいいんっすよー)

(そうだぞ、ドクターもそう言っていた)

(今度はウェンディにノーヴェもか!?)

(あれ？ 二人には繋げてなかったはずだが……)

裕也は内心首を傾げた

(戦闘機人をなめないでほしいっす！)

(近くの念話くらいは聞けるように作られている)

(プライベートもへつたくれもないな!? おい!!)

因みに、こうして念話している間も作業は同時進行でしている
裕也は魔法を使って作業しているが

理由は、時間が無いからである（大事な事なので2回目です）
教室内には金槌の音が響く

平和なひと時だ、だがこの平和も一体いつまで続くのかそれは誰にもわからない

へせて、この平和だけは俺の命に代えても守る……

裕也は窓の外で舞う桜の花びらを見ながら、そう思った。

ほぼ同時刻、ある空港

「ん~~~~！ 久しぶりに帰ってきたぜ、日本！」

空港の到着口出口で、濃い黒髪に琥珀色の瞳

全体的に女性のような見た目の“少年”が、背伸びをしていた

「さつと……確か、ここに迎えが来るっつー話だったな……まさか、神夜じゃあるまいな!？」

少年は眼を細めて、周囲を警戒した
すると

「着いたようで……なにをしてるんですか？」

そこに現れたのは、スカリエッティの秘書的立場のウーノだった

「おお！ ウーノさんだったか！ いやー、迎えに来るっていうのが神夜かと思っつな」

「神夜でしたら、きちんと学校に行ってますよ……あなたと違って」

「おう……結構響くな……」

ウーノの言葉に、少年は落ち込む仕草をするが、すぐに立ち直った
「んで、俺が呼ばれたのは…裕也がミスって怪我したからなんだよな？」

「ええ、ですので、風見学園に復学という形です」

「おお！ 残ってたんだ、俺の学籍」

「当たり前です。あなたはまだ、基礎学習を終えてないんですから」

「まあ、確かに……そんじゃあ行きますか……懐かしの初音島に！」

少年がそう言うと、ウーノが歩き始めた

こうして、裕也たちにとって、懐かしい仲間が戻るのだった

風見学園の日常と帰ってきたアイツ (12月19日
編集)

翌日、月曜日

「くぁー、眠い」

裕也は、あくびをかきながら歩いていた

「ほら、裕也急ぐよ！ 今日だって準備に生徒会の用事があるんだから」

フェイトは裕也を急がせるために走らせていた。

現在時刻7時45分

なぜ、こんなに早く登校しているのかと言うと

まず第一に、自クラスの準備が全然終わってないのが理由に挙げられる

さらには、生徒会では対杉並警備が強化されるからだ（本来は対非公式新聞部だが）

その為に、裕也たち非常要員まで駆り出されたのだ。

「一応エリオたちの朝食は作ったけど、マジで眠い……」

流星に何時もより30分近い登校は眠いらしい

すると、前に見慣れた姿が2つ、しかも片方はある意味珍しい姿だった

「沢井さんと義之だ」

「珍しい組み合わせだな」

フェイトと裕也は珍しく思った

それは何故かと言うと、義之はどちらかと言うと遅刻寸前に滑り込みするタイプで、沢井は言わずもがな余裕で到着するタイプだからだ。

「あ、沢井さんが走り出した」

視線の先では、沢井が義之の姿を確認したら突然走り出した。

「多分、遅刻だと思ったんだろうな」

裕也が冷静に分析すると、義之も走り出していた

「朝から騒がしいなあいつは」
裕也は微笑みながら見送った

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

登校して裕也とフェイトは先に生徒会室に入った

「おはようございます」

「おはようございます」

裕也とフェイトが入ると、中にはすでに主要なメンバーが揃っていた

「おはよう〜」

「はい、おはよう」

「おはようございますわ」

「おはよう」

「おはようございます」

「おはようございます!」

「おはようございます」

「おはようっす!」

「おはよう」

「おはようさん」

全員から挨拶された

すると、音姫がタイミングを見計らってホワイトボードを裏返す

そこには

〈裕也くん今までありがとう!〉

と書かれていた

「……はい?」

裕也は呆けた表情で首を傾げた

「あ、あのー…一体これは…」

フェイトも訳が分からないようで質問した

「いやほら、今まで知らなかったとはいえ、裕也はさ私達のために戦ってくれたわけでしょ? それこそ命がけで」

「はあ」

まゆきの言葉に、裕也はあいまいな反応しか出来ない

「だからこそその感謝なんだよ」

「はい」

「そうなんです！」

「あんたは落ち着きなさい」

「やれやれ」

「あはは、スバルは元気だね」

因みに、エイミーはクロノの彼女である

閑話休題

「さてと、ここから本題だよ」

ホワイトボードをもう一回裏返して、まゆきは「対非公式新聞部会議」<

と書いた

「取り合えず、まゆきは今まで通り杉並君をマークで」

「あいよ！」

「エリカちゃんは慣れるために、校内を警邏でお願いね」

「了解しましたわ」

「裕也君とフェイトちゃんは、自分のクラスと警邏をお願いね」

「了解」

「わかりました」

と、音姫は次々に役割を分担していく

「最後にクロノ君は、アースラ隊を率いて遊撃でお願いね」

「わかった」

すると

「それでは、皆は自分のクラスに戻って準備に戻ってください！」

と、音姫は手を叩いて指示を出したので解散して教室に戻ったのだ

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
付属3年3組教室

「おーっす」

裕也はドアを開けながら挨拶をした

「あら、防人にテスタロッサさん。生徒会のほうはいいの？」

沢井は裕也とフェイトを見ると聞いてきた

「ああ、問題ない」

「うん、大丈夫だよ」

裕也とフェイトは沢井の質問に返答した

「そう、じゃあ準備のほうお願いね。あ、防人は無理しない程度に」

「わかっているさ」

「わかった」

裕也は魔法を使つて、材木を採寸通りに切断していき

フェイトは雪月花の居るほうに行つて、裁縫を手伝っている

「裕也、お前器用だな。どうしたらそんなに上手く使えるんだ？」

渉は裕也が風で切断した材木を金槌を使つて、カウンターの形に作

り上げている

「まあ、慣れだな」

裕也はそつけなく答えた。

「まあ、防人は文字通り血の滲む修行だろうがな」

杉並は電話を片手に言い放つ

「確かにな」

杉並の言葉に義之が賛同した

と、その時だった

ガラッ！

と、ドアが一気に開いて

「おー、やってるねー」

と、まゆきが来た

「まゆき先輩」

「どうしました？」

すぐにフェイトと裕也が対応する

ま「いやなに、杉並がちゃんと居るかなーって、思ってたさ」
まゆきは手をひらひらさせながら言い放つ

それを聞いた裕也は

「杉並ならそこに……」

と、先ほどまで杉並が居た地点を指差したが

「居ない……」

杉並はいつの間にか消えていた

杉並が居ないことを確認したまゆきは

「おのれ、逃げたな」

と、後ろに振り向いて

「杉並を探すよー 全員散開ー」

後ろに居た生徒会役員に命令した

「「「はい!!」」」

生徒会役員はまゆきの命令に従って、バラバラに走り出す

「じゃ、お騒がせしたね」

と、まゆきはドアを閉めてから

『杉並、何処だー！』

と、走りだしたのだった

「相変わらず元気だなー」

と、裕也はドアを開けてまゆきの後ろ姿を見送りながら呟く

「そうだね……」

フェイトは苦笑いしながら同意するしかなかった

そして、帰りのHR

「あー、お前達に転校生……いや、復学生を紹介する」

教壇の位置に立ったシグナムが、苦い表情をしながら告げた

「復学生……ですか？」

「ああ、そうだ……お前らもよく知っている奴らだよ」

沢井の質問に、シグナムは頷いた

すると

(裕也、構えとけ)

(? どういうことだ?)

(帰ってきたのは……アイツだ)

(アイツって……まさか!?)

裕也は思い当たる人物が居るのか、頬を引きつらせた

「では、入れ!」

と、シグナムがドアのほうを見ながら言うと、ドアが開いたが……

「タスラム・アロー!!」

ドアの向こう側から、炎の矢が裕也に迫った

「うおわっ!」

裕也はそれを、右手で掴んだ

「だっはっはー! やるな、裕也!!」

笑いながら入ってきたのは、女性に見える少年だった

「やっぱりお前か! 蓮華!!」

「おうよ! 久しぶりだな!」

と、蓮華が笑っていると

「二なにをやっているか(んの)!!」

蓮華の頭に、シグナムとショートカットの赤混じりの金髪が特徴の少女が拳を振り下ろした

「痛えええええ!!」

蓮華は頭を抑えて、床を転げまわっている

「まずは自己紹介をせんか! いきなり魔法を撃つバカがいるか! しかも、けが人相手に!」

「そうよ! 戻ってきていきなり問題起こすバカなんて、初めて見たわよ!」

シグナムと少女が怒っていると、蓮華は頭をさすりながら立ち上がって

「って訳で、久しぶりだな! 橘蓮華、ただいま帰ってきたぜ!」

ニカと笑いながら、挨拶した

「はあ……久しぶりね。アリサ・バニングス、帰ってきたわ」

「あははは……えつと皆、久しぶりです。月村すずかです」

最後に、腰まで伸ばした青紫の髪が特徴の少女。月村すずかが、苦

笑いしながら挨拶した
すると

ドアが勢い良く開いて……

「魔法が発動する気配がしたから誰かと思えば……お前か、蓮華！」

そこには、額に血管を浮かび上がらせているクロノが居た

「あ、クロノさん。どもつす！」

「どうもじゃない！ お前はいきなり問題を起こしてくれて！ 来い

！ お前は特別に40枚書かせてくれる!!」

「ちよ!? それは勘弁してくださいよ！」

「やかましい！ 僕だって忙しいのに、仕事を増やしやがって!!」

クロノは蓮華の襟を掴んで、引きずり出した

あまりの事態だったのか、クラスの大半はポカンとしていた
すると

「裕也、大丈夫?」

フェイトが裕也に近づいてきた

「ああ、大丈夫だ。あー、ビックリした」

と裕也は、右手を振りながら呟いた

「お前、よく掴めたな? しかも、素手で」

「ああ、手に凍結の冷気を集めてたからな」
と話していると

(ねえ、裕也)

(なんだ?)

(もしかして、蓮華くんも守護者に所属してるの?)

念話でフェイトが裕也に質問してきた

(ああ、今までは教導と戦力維持の意味を兼ねてイタリア支部に行つてたんだ)

(そうなんだ)

(ああ、あいつはプチバトルマニアだけど、何気に面倒見はいいからな)

(なるほど……)

(それに、アリサとすずかは俺と蓮華が守護者に所属してるの知って

る)

(え!? そうなの!?)

(ああ、昔に俺達が助けたからな……)

(そうなんだ……)

裕也とフェイトがそう念話している横では、アリサとすすかが、なのはやはやてと話していた

そして廊下からは、蓮華の叫び声とクロノの言い合っている声が響いていた

風見学園は今日もにぎやかだった……

美夏危機一髪！ （黒ヒゲじゃないよ！） & 赤っ恥

「ふう、食った食った」

と、俺、桜内義之は『ちよつと、食いすぎたかな？』

と、思いながら学食を出て歩き、教室を指していた

「ん？」

すると、どこからか、妙なアラームが鳴っているのが聞こえる

なんか、聞き覚えがあるような無いような・・・

「あっちのほうか？」

俺は耳を澄まして音を聴きながら

音源に向かった

「この辺みたいだが・・・」

音は階段付近が一番聞こえる

俺は階段付近を見回す

「ん、んん・・・」

見ると、誰かが倒れていた

「あ、おいおい・・・大丈夫か・・・」

俺は慌てながら倒れていた女生徒に近づき、助け起こした

「んん・・・」

「天枷・・・」

お前かよ・・・

女生徒は天枷だった

「一体、どうしたんだよ。天枷？」

俺は支えながら聞いてみる

すると

「ば、バナナ・・・」

は？

「ばなな？ あ、そうか、バナナか」

どうやら、バナナミンが切れかけているようだ

「お前、今、バナナを持ってないのか？」

「きよ、教室のバッグ・・・」

教室か

たしか、天枷は由夢と同じクラスだったな

ここからはちよつと遠い

だったら、学食に一旦戻って、なんか仕入れてきたほうが良さそう
だ

「ちよ、ちよつと待つてろ。すぐ持つてくるから。そこ、動くなよ?」

「す、すまん……」

俺は天枷に念を入れてから、学食に向けて走り出した

え、えーと、バナナ、バナナ……

俺は学食に到着すると、周囲を見回した

「あつたよ、おい……」

学食に、幸運なことにバナナが売っていた

イツツ・ミラクル!

『バナナはおやつに入りません!』

等と書かれたポップが飾られている

(どうでもいいわ!)

俺は一目散に券売機まで近づき、『今日のフルーツ』と書かれたポ
ンを押した

再び踊り場にたどり着くと、例の警告音が早くなっていた

「あ、天枷、バナナ買って来たぞ。ほれ、食え」

「ぎ、桜内……」

うお、動けないくらいヤバイのかよ!

俺は急いでバナナの皮を剥いてやると、天枷の口元に差し出した

「すまない……」

天枷は謝ると、バナナを咀嚼し始めて

「……」

天枷は一心不乱にバナナを頬張り、そして飲み込んだ
すると、途端に、天枷の腕輪からの警告音がピタリとやんだ

「うう、マズい……」

天枷は唸るように言うが

「文句言うな、折角買ってきてやったのに」

「マズいものをマズいと言って、何が悪い」

と、天枷はパイとソツポを向く

「まあ、いいけどね」

無事なら

「まあ、そのなんだ。すまなかつた、ありがとう」

天枷は、視線を逸らしたまま礼を言った。

天枷は俺に対して邪険な態度を取るが、こういうところは礼儀正しい。

厳しくしつけられたか？

「バナナ代は、あとで支払うからな」

「はいはい」

俺は天枷の律儀な態度に少し、笑ってしまった

「な、笑うな。なにがおかしい？」

「別に笑ってないって」

「嘘をつくな！ 今確かに笑っていたぞ!!」

「だから、笑ってないって」

「そんなに美夏が滑稽か!? 嫌いなものを食べないと生きていけない美夏が、そんなに滑稽かあ!？」

いや、確かに笑ったかもしれないが、それが理由で笑ってないから……

俺が内心、どうしようか思っていたら

「あら、桜内……」

げ

俺達は言い合っていたところへ、委員長があらわれた

「わ、わぁ……」

「い、委員長……。どうしたんだ、こんなところで……」

「ううん、なんかこつちの方で変な音がしたから」

「へ、変な音？」

ヤバイかも……

「うん。ピコーン、ピコーンって、変なアラーム音みたいな音が……
まずいな……」

妙な詮索されたらやつかいだ。ここは適当にごまかすとするか……

「き、聞いたか、天枷？」

（ごまかせ!!）

（わ、わかった!）

「い、いや。美夏は知らんが……」

「嘘、確かに聞こえたのよ。警告音みたいなのが」

そう、言いながら委員長は周囲を見回して

「こつちじゃなかったのかしら？」

「……」

（なんとかしてくれ!）

天枷から悲鳴じみた念話が聞こえて

（任せろ!）

俺も念話で返事しながらうなずいた

「あ、そーだ、委員長!」

「へ?」

俺は、委員長に近づいて、その肩に腕を回した

「俺、委員長に聞きたいことがあったんだっく」

「な、何よ……」

すまんが、このまま連行する!!

「こつちじゃまずいから、ちよつとこつちに來てくれよ」

俺は委員長の肩を抱きながら、自分の教室へ向かった

「じゃーな、天枷。俺、ちよつとこいつと話があるから、失礼するわ!」

俺はシュタツと右手を挙げながら言った

「あ、ああ。じゃあ、またな!」

俺は天枷にウインクして、その場を立ち去った。

（今のうちに逃げとけ）

（桜内、すまない……）

（いいってことよ……）

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
俺はそのまま委員長を無理やり、俺達の教室前まで連れてきた。

ここまで連れてくれば大丈夫だろ……

(ふう、冷や冷やさせやがって……)

「ちよつと……」

委員長が顔を真っ赤にして俺に抗議してきた。怒り心頭つてところか？

「え？ ああ、悪い悪い、聞きたいことってのはさ」

さて、どうするか……

なにも考えてないんだが……

「桜内……あんた、いつまで私の肩、抱いてるつもり？」

「へ？」

俺は、今の自分の状況を再確認する

現在地は？ ここは、3年の教室ばかりの廊下です

体勢は？ 俺の左手は今、委員長の肩に回ってます、更に体はある意味、密着したままです

「え、えーつと……」

教室内からはクラスメイト達が好奇の目で俺達を見ている

そして、よく見れば、委員長の顔は真っ赤です

怒りだけじゃないよね、この状況は……

「わお、義之くんってば大胆♪」

あ

「ふふ、いいトコ見ちやった……」

はい、俺、オワタ

「……(顔真っ赤)」

「あ、あはははは……」

こ、これは、誤解を解くのにかなりの時間を使いそうだなー
ガラッ！

「あ、裕也にフェイト。それに、蓮華」

教室のドアが開き、そこにはようやく三角巾が取れた裕也とフェイト、それに蓮華が居た

「義之、委員長と大胆に逢引か？」

な!?

「(ボソリ) 私は裕也にしてほしい……」
「なんですか？ 聞こえなかったが……」

「おーおー、大胆だな義之！」

蓮華……お前、楽しんでるだろ？

「蓮華……」

「げえ!? 神夜!? お前、何時の間!?」

気付けば、神夜が蓮華の背後に居た

「ふふ……何時からでしょうね？ 蓮華、私は何時でもいいですよ？」

「待て、なんの話だ!? そして、迫るんじゃねえ！」

「ふふふふ……蓮華」

「来るんじゃねええええ!!」

蓮華……ぎゃあ

「あう……」

さて、この状況。どうしよう……

俺はこの状況を打破するのに気付けば放課後までかかってい
た……

準備完了！　そして……………

(12月19日編集)

「なんとか、間に合ったな」

と、裕也はタオルで汗を拭きながら言う

「そうね、後は……………」

沢井は答えつつ、ある方向を見ると

「衣装なんだけど……………」

と、額に手を当ててため息をした

その理由は

「えー、そんなの嫌だよー」

「何言ってやがる、セクシーと言ったらやっぱりランジェリーだろ！」

と、渉が自分の欲望を全開に叫んでいた

因みに、ランジェリーとは下着の意味だ

*フェイトは生徒会の手伝いに行っている

「それは、渉くんの都合でしょー」

と、茜は渉に抗議するが

「いや、セクシーと言ったらランジェリーしかない！」

渉は力説する

それを聞いた裕也は頭を抱えて、蓮華は大笑いしている

アリサは渉を殴ろうとしているが、さすががそれを必死に抑えている

「あのバカは……………」

すると、裕也に義之が近づき

「裕也、渉を黙らせるぞ」

と、言ってきたので

「オーライ」

と、裕也は即断する

そして、裕也は渉の後ろに行く

「渉、一応生徒会の役員として言うが……………」

「あんだよ？」

裕也は無言で、渉の首に腕を回す

「下着はアウト、だ！」

「ぐえー！」

渉はカエルが潰されたような声を出すと、気絶した

「防人、ありがとう」

「いいってことよ」

義之は渉を頭からゴミ箱に入れた

「それで、衣装は決まった？」

「どうやら、渉に関してはスルーを決め込んだようだ

「ううん、全然渉くんが邪魔だったから決まってる」

と、花咲は口先を尖らせる

すると

「あ、あれは？」

「なに、小恋？」

「パジャマ、去年の卒パで茜たちが着てたのを見て、羨ましかったんだー」

「ですって、委員長どうする？」

「そうね……一応、多数決をとりましょう」

と、沢井は他のクラスメイト達のほうに向くと

「パジャマでいいという人は、手を挙げてくださーい！」

と、聞くと全員手を挙げた

「決まりだな、そういえばネタは？」

義之は気になったのか、沢井に聞いた

「ネタは明日の朝に、新鮮なのが届く手はずになってるわ」

沢井は義之の質問に答えた

「んじゃあ、今日はこれで解散だな」

義之の言葉に納得した麻耶は、頷くと

「皆さん、今日までお疲れ様でした。今日は解散して、明日万全の体調で挑みましょう、解散！」

その言葉で、クラスメイト達は三々五々に散っていく

因みに、蓮華は神夜と追いかけてっこを開始していた（それをアリサ

が猛追)

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
教室内には、珍しい2人だけ残っていた
それは

「よ、委員長。珍しいパターンだな」

「そうね、この2人っていうのは珍しいわね」

義之と沢井の2人だ

義之は一回帰ろうとしたが、教室に忘れ物があるのを思い出して戻ってきたのだ

沢井は最後の確認をしていたらしい

裕也は現在、生徒会の手伝いをしている

「で、なにしてんだ?」

「ええ、練習で使ったシャリが少し残ってたのよ。だから、練習ね」

「なるほど・・・」

沢井はクラスの中で唯一寿司を握れるので、握り方を女子に連日レクチャーしていたのだ

「なあ、それ俺が食っていいか?」

「ええ?」

「いや、残すのももつたいないだろ? それに、委員長の腕知りたし」

それを聞いた沢井は少し考えると

「しかたないわね」

と、言うのと練習用なのだろう、薄切りにされたキュウリを出して握り始めた

「手際がいいな」

義之は素直に賞賛する

「ありがとう、・・・はい」

と、沢井は握った寿司を出す

「そんじゃ、いただきます・・・お、美味い!」

義之は出された寿司を口の中に入れると、驚いている

「お世辞はいいわよ」

沢井は顔を赤くして言う

「お世辞じゃないって、本当に美味しいよ。キュウリでこれなんだから、ちゃんとしたネタだったら、どんだけ美味しいんだ？」

義之は素直に言うと思像している

「……ありがとう……」

沢井は顔を赤くしながら更に握っている

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、時は経ち空が暗くなったので義之と沢井は校舎を出た、すると

「おや、弟くんに沢井じゃん」

「あー、弟くん♪」

「義之に沢井か、随分遅かったな」

「ごめんね、最後に手伝えなくて」

「あら」

「いやまあ、ちよつと」

「ええ」

すると、義之はとある人物に気付く

「なんで、なのはたちまで居るんだ？」

そこには、なのはにはやてアリシアにユーノ、小恋に杏に茜に渉。

果てにはアリサとすずかが居るのだ

蓮華は肩で息をしていて、あきらかに疲れている

「私は、お父さんとお母さんに差し入れを頼まれたから」

と、なのはは手に持ったバスケットを見せる

「ウチは、シグナムたちに差し入れや」

はやてもバスケットを持ち上げる

因みに、はやての隣にはヴィータが居る

「私と渉くんは、軽音部の他のグループの手伝い」

「おうよ、それにしても義之。ゴミ箱はひどくネ？」

「私は演劇部の指導ね」

「私は手芸部の出し物の最終確認よ」

「なるほど」

すると

「ん?」

と、裕也がなにかに反応して、制服のポケットから小さい箱を取り出す

「どうしたの?」

「少し待ってくれ」

裕也は箱を開くと、中には片眼鏡モノクルが入っており、裕也はそれを右目に装着する

そして、今度は携帯を出す

「裕也の普段の携帯と違う?」

裕也は普段、蒼い携帯を使うがそれは黒だった
裕也は携帯を開くと

「ブリアー・アクセス・イエッツエラー・コード」

と、言うとき携帯の画面に幾何学的な模様が浮かび上がった

「サテライト・ビューイング!」

「広域探査の魔術っすか」

ウエンディは裕也のやっている魔術に気付くと

(クア姉)

(はいはい、なんですかー?)

(デイエチとトーレ姉をよこしてもらえっすか?)

(どうしたの?)

(どうも、侵入者らしいっす。裕也が広域探査の魔術を発動したっすから)

(わかったわ、すぐに行かせるわねー)

(ありがとうっす)

すると

「風見大橋に子供?」

「子供だあ?」

裕也の言葉にノーヴェが胡散臭そうに聞く

「ああ、風見大橋をボロ布を纏った金髪の小さな子供が歩いて……」

!!

「どうしたつすか?」

ウエンディは裕也が驚愕の表情をしたので質問する

「その後方にインデックス!」

裕也は大声を出す

「ええ!」

「インデックス!」

全員の表情が驚愕の一色にそまる

蓮華と神夜は眼を細めて、警戒心をむき出しにしている

「子供を追っているのか!」

「どうするの!?! ここから風見大橋まで距離があるよ!」

なのはは慌てた様子で裕也に聞く

すると

「仕方ない。全員、近くによつてくれ」

と、裕也は手招きする

全員、裕也の指示に従つて裕也に近寄る

すると

「影よ、我に従い我らをかの場所へと送れ」

裕也の足元の影が膨らみ全員を覆った

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ほい、到着」

気付くと、なぜか風見大橋の入り口辺りに到着していた

「ふええ!」

「早!」

「今のは・・・」

「影を使った転移魔法?」

「ええ、それでは俺達は戦闘準備と行くか」

と、裕也が言う

「裕也」

「装備だよ」

近くにトールとデイエチが着地して、トランクを渡してきた
ウエンデイとノーヴェには固有装備を渡した

裕也は制服の上着を脱ぐと、黒いマントを羽織り白地に赤い涙模様が描かれた仮面を着ける

ウエンデイとノーヴェは固有装備を装着する

蓮華と神夜はデバイスを展開して、非殺傷設定を解除した
アリサとすずかは無言で、眼を細めた

「じゃあ、全員ここで待っててくれ」

と、裕也が行こうとすると

「嫌だよー」

フエイトが大声を出した

裕也が後ろを見ると、全員の視線が裕也に集中している

「裕也くんは今まで、一人で頑張ってくれたんだよー！」

「せや、それにもう一人じゃない！」

なのはとはやては、バリアジャケットを展開した

「私たちが居る！」

「そうだよー！」

フエイトとアリシアも、続いて展開した

「もう、一人で背負わせない」

「私たちが居る」

音姫とまゆきも展開して

気付くと杏や茜、小恋や渉も展開している

「俺達は友達だろ？」

義之も展開する

「ええ、そうね」

沢井もストレンジデバイスを展開する

「ここから先は、まさしく殺し合いだぞ」

裕也は仮面で見えないが眼を細めている
すると

「裕也、これ以上は言っても無駄だ」

トーレは裕也の肩に手を置く

「そうっすよ」

ウエンデイはどこか嬉しそうに言う

デイエチは長大な棒状のものから、布を剥ぎ取った

「仕方ない、全員無理はするなよ？」

「「「おう（うん）（はい）！」「」」」

裕也の言葉に全員、返事をした

「行くぞ！ 子供を助けるんだ！」

裕也たちは、戦場に向けて走り出した

裕也たちの運命の歯車は加速し始める、行き着くさきは破滅かそれとも……

救出作戦!!

き風見大橋の遊歩道を、ボロ布を纏った1人の小さな子供が懸命に走っている

「はあはあはあ……」

子供は肩で息をしながら前だけを見て走っているが、その後ろに複数の白い法衣を纏った奴らが子供を追いかけている

「近辺に居るはずだ、探し出せ!」

それは禁書目録インデックス聖省の使徒達だった

「誰か、助けて……」

子供はただ懇願することしか出来ない
すると

「ようやく見つけたぜ」

と、子供の後ろに近づいていた使徒が子供の腕を掴もうとした瞬間だった

「させるかよ!」

「おらっ!」

と、黒い2つの影が間に割り込んだ

「貴様ら、何者だ!」

使徒は邪魔されたのを怒りながらも、体勢を整えた

「お前達を地獄に落とす者だ!」

「てめえらは、生かしちやおけねえ!」

(ユーノ、封鎖結界を頼む、範囲は風見大橋を囲うくらいで)

裕也は念話でユーノに頼む

(わかった!)

すると、風見大橋を覆うように翡翠色の封鎖結界が展開される

「これは、封鎖結界だ?!」

「さてと、自分たちの罪を数えろ。モグラ共」

裕也が宣言すると、蓮華も戦斧を向けた

(モグラって?)

裕也の言った言葉に疑問を覚えたのか、なのはが念話で聞いてきた

(インデックスの蔑称だよ。地下に潜ってることからの呼び方)
(なるほどねー)

「貴様、我らをインデックスと知ってて言うか！」
使徒は裕也の言葉に激怒する

「ああ、知ってて言うさ」

「つか、てめえらと一緒にしたら、モグラがかわいそうか」

裕也は空間魔法で刀を2本呼び出して、構えた

右手には、おなじみの小太刀の鉋切長光

そして、左手には紫色の刀身の刀、銘は蜘蛛斬くもきり

この刀はその昔、妖怪の土蜘蛛つちぐもを斬ったとされる刀で、通称破軍の太刀と呼ばれる妖刀だ

「たった2人で挑んだことを、後悔するがいい！」

と、言うと同時に使徒達10人は裕也達に向けて魔法の矢を乱れ撃ちしてくる

「誰が2人だつて言った？」

裕也が宣言すると同時に使徒が放った魔法の矢に向けて、色とりどりの魔力弾が当たり相殺されて、爆発が起きた

「ちい！・仲間が居たか！」

使徒は舌打ちと同時に宙に舞う

(ええ?!・空をデバイス無しで飛んだ!?)

(俺達にとっては必須項目です)

裕也は念話で言うと同時に、右手の人差し指と中指を立てて口元に持っていく

「青魂青龍、乙卯いつぼうの気色もを以もつて天翼てんよくを得ん！」

と、裕也が呪文をつむいだ瞬間、裕也も空を舞った
蓮華も裕也に続いた

「貴様らもか！」

使徒はどうやら、裕也達が空を飛べたことを驚いているようだ
「空を飛べるのが貴様らだけとは思うな！」

「空中戦は得意なんだよ！」

裕也達は高速で使徒達に接近する

「ほぞけー！」

使徒は裕也に向けて集束砲を放つ、が、裕也はそれを冷静に見ると右手の鉋切長光で簡単に切り裂いた

「なに!? 私の集束砲を切り裂いただと!？」

(フェイト今のうちに子供を!)

(わかった!)

裕也はフェイトに念話で子供の回収を頼んだ

あのメンバーの中で1番速いのはフェイトだ

フェイトの速度ならば使徒たちに追いつかれることもないだろうと考えたのだ。

「遅くなってごめんね? 今助けるから!」

フェイトはソニックフォームで一気に子供の隣まで移動すると、子供を抱えて初音島方面に高速移動した

「しまった、素体が!」

使徒は子供がフェイトに子供が連れて行かれたことに意識を割いた瞬間

「IS発動、ライド・インパルス!」

と、トーレが眼にも留まらぬ速さで近づき両手両足に着いている専用武装ヘインパルス・ブレードで使徒1の首を切り裂いて、使徒の首があつた場所からは鮮血が噴水のように噴出す

「貴様!!」

使徒2は仲間が殺されたことを怒ったのか、意識を裕也から外してトーレを見る

「余所見してる場合かよ!」

「行くぜ!」

「連撃!」

裕也の蜘蛛斬に電撃が迸り、蓮華のグランヴェルにも電撃が現れた
「雷神独楽!!」

裕也と蓮華が回転し始めると、その名前の通り、まるで電撃を纏った独楽のように高速回転し始めて、使徒を2人、細切れにした

「ちい! このガキが!」

使徒3はこれ以上犠牲を出せないと判断したのか、距離を取ろうと後退するが

(まゆき先輩、今です！)

(了解！)

「ウイング・ロード！」

風見大橋から、白い道が使徒達の逃走経路を遮るように走った

そこを高速で走ってくるのは、もちろんまゆきだ

「はああああ！」

まゆきは自身のデバイスであり、武器のエクスカリバーを振りかざす

「ちい！」

使徒は右手を突き出して障壁を張るが

「バリアブレイク！」

まゆきの大剣は障壁を破壊して、使徒に迫った

「なめるな！」

使徒はまゆきに向けて、魔力弾を近距離で放った

「うわっ！」

まゆきはそれを間一髪でかわす

「ふん、雑魚が！」

使徒は追撃をまゆきに放とうとするが

「おせーんだよ！」

まゆきの反対側から迫っていたノーヴェが、自身の専用武装の〈ジェット・エッジ〉で使徒の手を蹴り上げると、体を回して足を使徒の首に巻きつけて

「おらよー！」

と、一気に体を回した
すると

ボキッ！

と、音がして使徒の首はありえない方向を向いていた

「くそっ！ こんなにこんな強さの奴が居るなんて、聞いてないぞ！」

残りの6人の使徒は必死に逃げようとするが、それを裕也達が許す

わけが無かった

『IS発動、ヘヴィ・バレル』

無線でデイエチの声が聞こえて、使徒の1人を極太の砲撃が葬った
それを呆然と立ち尽くしていたら

「ソード・レクイエム エクスキューション・シフト!!」

と、裕也が唱える声が聞こえた

気付くと、数多の魔力刀が逃げようとしていた使徒達を360度
囲っていた

「これは!？」

「死ね、ファイア!!」

裕也が宣言すると、数多の漆黒の魔力刀は切っ先を使徒に向けて高
速で射出された

「くそーー!!」

使徒達の悲鳴が聞こえたが、裕也は魔法を止めなかった

いや、裕也が使徒に対して情けなどかけようはずが無かったのだ

「貴様らにふさわしいのは、地獄だ……」

裕也と蓮華は、魔法が終わり肉塊になって落ちていく使徒の残骸を
焰で跡形残さずに焼き払った……

戦闘後の診察

裕也たちの戦いが終わり、数分後

裕也たちは、風見大橋の初音島方面に到着していた

「フェイト、救助した子は？」

裕也は仮面を外しながら直接、救助したフェイトに聞いた

「あの子なら、なのはが抱っこしてるよ」

と、フェイトはバリアジャケットを解除して、子供を抱っこしているのはを指差した

「今ようやく寝たところだから、あんまり大声出しちゃだめなの」

と、なのはは若干小声で喋る

「よく、無事に逃げてくれたよ。この子」

と、裕也は微笑みながら子供を見る

「だな……そういう意味なら、昔のキャロもだろ」

蓮華はデバイスを待機形態に戻して、体をほぐしている

救助した子供は、なのはに抱っこされた状態で健やかに寝息をたてて、寝ている

「とりあえず、ドクターの所に連れて行くぞ」

「そうっすよ、診察しないといけないっすよ」

「そうだな。なのは、すまないがそのまま連れて行こう」

「大丈夫だよ」

裕也たちは子供を起こさないように歩いて、診療所に向かった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ふむ……少し衰弱しているが、大丈夫だな」

スカリエツティはイスに腰掛けながら、言った

「……………」

子供は診察所に到着した際に起きてしまっている

それで、なのはが下ろそうとすると大泣きしたので、なのはが抱っこしたままで診察した

「本来ならば、入院してほしいが……それは、難しそうだな……」
スカリエツティは、なのはに抱きついてる子供を見ながら少し苦笑

いした

「さて、どうしたものか・・・」

と、スカリエツティが頭を掻いていると

「話は早いわよ。要は、なのはちゃんの家に取り返してもらえばいいんだから」

と入り口の所に、気付くとリンディ・ハラオウンが立っていた

「え？ いいんですか？」

なのはが呆けた顔で見ると

「ええ。先ほど、土郎さんには連絡しておいたから大丈夫よ」
すると

カラン♪

と、ドアに付けられているカウベルが鳴って表れたのは

「お父さん、お母さん！」

なのはの父親の高町土郎と母親の高町桃子だった

「懐いてるなら、我が家で預かりましょ。無理やり引き離すのも可愛そうだし」

と、桃子は微笑みながら言った

「それで行きましょう、俺はエリオとキャロで精一杯ですし」

それを聞いたなのはは、子供を見つめて

「私の家に来る？」

と、尋ねると子供は頷く

「そういえばお名前は？」

なのはは名前を聞いてないことを思い出して、子供に尋ねた

「・・・ヴィヴィオ」

子供はなのはを見ながら、呟くように言った

「そっか、ヴィヴィオちゃんか！ いい名前だね♪」

なのははヴィヴィオを抱え上げて

「高町家によろこそ、ヴィヴィオ♪」

と、笑顔で言った

裕也たちは、それを微笑みながら見ていた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

裕也たちが帰った後、1人で暗い診療所のイスに座るスカリエツ
テイ

「あの虹彩異色症の色は……確か……聖王の特徴だったな……」

スカリエツテイは、診察したヴィヴィオの目の色を思い出した

右目が緑で左目が赤の虹彩異色症

「しかし、聖王の血筋は随分昔に途絶えたはず……」

スカリエツテイは険しい顔をした

「禁書目録聖省は一体なにを考えている……」

スカリエツテイは1人黙考を続ける……

ヴィヴィオを交えた裕也たち、一体これからどうなるのかまだわか
らない……

PS

「待て、神夜！ 落ち着け、早まるな!!」

蓮華は自分のベッドの上で、後ずさっていた

「ふふ……落ち着いてるわよ?」

神夜はイイ笑顔で、蓮華に迫っている

「だったら、ちゃんとパジャマを着てくれ!! なぜに、ワイシャツ一枚
!？」

「え? これが、男のロマンなんですか?」

と神夜は、妖艶な笑みを浮かべて更に迫った

「確かにそうかもしれないが! それは恋人や彼氏彼女がやるもので
あって、俺達みたいな兄妹がやるものではない!!」

「だったら、大丈夫ね。愛に兄妹もなにも無いもの……」

と神夜は、蓮華のベッドに乗った……

「なんでだああああああ!!」

蓮華の安眠は……訪れるのだろうか……

それは、神のみぞ知る……

クリスマスパーティー開会式

翌日 12月23日クリスマス・パーティー当日

場所 体育館

「ーということ、本日の14時からクリスマス・パーティーが開催されます」

今壇上で演説しているのは、学園長の芳野さくらさんだ

尚、身長が足りないので木箱を台にしている

「パーティーには、一般のお客さんなど学園外からの来訪者もたくさん訪れます。なので、風見学園の学生として、恥ずかしくない行動をするように心がけてください」

今、さくらさんがしているのはクリスマス・パーティーの注意事項を言っている

こういった通達がされると、いよいよクリスマス・パーティーも本番だなーって一気に気持ちが高ぶってくるなあ。

周りの生徒達も一緒なのか、ざわざわとざわついた空気が流れている

「おい、義之。お前、今日の放課後どうするんだ？」

俺の隣に立っていた渉が聞いてきた

「どうするって、きつとSSPで大忙しだぞ？」

「それは俺もわかってるよ。でも、休憩時間があるだろ？ その貴重な時間をどうつかうよ？」

「んー、特に決めてないけど・・・」

ってか、いつ、どのくらいもらえるかもわからない休憩時間に予定なんて立てられないし。

俺の言った言葉を聞いた渉は興奮した様子で

「バカかお前は！ せっかくの彼女ができるチャンスなんだぞ！ 今日頑張らなくて、いつ頑張るんだ！」

拳を握り締めて、力いっぱい宣言された

そんなこと言われてもな

適当に、ぶらぶらするくらいしかできないだろうが

「あ、そういうことですか？　もう余裕ってことなんですね、この義之さまは」

「別に余裕ってわけじゃないけどさ」

「ってか、義之さまってなんぞや」

「まあ、特別クリスマス・パーティーでどうこうってのはないんだよな」

「ってか、今回はどう考えても、そんなムードになりそうもないし」

「SSPでヘロヘロになりながら委員長に叱咤されるか、俺のことを目の敵にしているムラサキに付回されるか」

「楽しい展開なんて、期待できないよな」

「俺の顔を見ていた渉が頷きながら」

「ふーん。お前の中には、何人か候補が居そうな感じだな」

「候補？　って、なんのだよ」

「んなもん、決まってるだろ。恋人候補よ」

「はあ？」

「恋人候補なあ？」

「委員長とムラサキがか？」

「ばかか、何言ってるんだよ。そんなんじゃないって」

「へへ。なんか真剣な顔してたから、てっきり誰かのことを考えてるんかと思っちゃったよ」

「そういうお前は、どうなんだよ？」

「俺か？　俺は・・・まあ、なんだ・・・」

「渉にしては、珍しく歯切れの悪い回答だな」

「なんつーか、今回はちよつとまじめに決めてみようかと思ってさ」

「微かに照れたような表情を浮かべる渉」

「その瞳は真剣だった」

「そろそろさ、俺もちゃんとした彼女が欲しいからさ。ま、お互い頑張ろうぜ」

「おう」

「俺と渉はお互いにやりと笑みを浮かべて、こつんと拳同士をぶつけ合う」

彼女・・・かあ

俺はどうなんだろうか・・・

気がつくと、開会式 of 言葉は閉会 of 言葉を迎えていた

クリスマスパーティー 1日目その1

「いらっしやい、いらっしやい。噂の風見学園名物セクシー・寿司・パーティーはこちらですよ」

学園祭が一般開放されはじめたのは、14時

SSPは期待されていたのか、杏の狙い通り。クリパが始まってすぐに、クラスの出し物は大盛況となった

店のコンセプト上、接客や寿司を握るのは女子に任せるしかないの
で、俺達男子は裏方だ。(裕也とフェイトは生徒会の方を手伝っていると同時に、情報操作をやっている)

そして、俺には、予想通り『呼び込み』の仕事が回ってきた

・・・とは言っても、この盛況っぷりだと、呼び込みの必要は特に
ないと言ってもいい

「最後尾はこちらです」

俺は〈最後尾〉と書かれた看板片手に、呼び込み改め、行列整理を
行っている

「おーい、義之!」

俺が整理していると、教室内から蓮華が出てきた

「おお、蓮華」

「そろそろ交代だぜ。休憩に入りな」

俺は、それを聞いて

「おう、わかった。そんなじゃ、あつちが最後尾だから、割り込みとか無
いように気をつけてな」

俺は蓮華に看板を渡しながら、連絡事項を言った

「おうよ! って、そこ! 割り込みすんじゃねえ!」

俺は蓮華に行列の整理を任せると、教室へ戻った

頼もしいよ、ホント

「うわ、予想以上に混んでるな・・・」

教室内は満員だった

もちろん、客の大部分は、女子のセクシー衣装目的の男子生徒だっ
たが、意外と女子の生徒の姿もちらほらと見えた

女子のかわいい衣装は、女子も好きってことか？ それとも単に寿司目当てか・・・

ま、どっちでもいいか。

「あら、桜内。休憩？」

「まあな」

俺の近くに来たのは、意外にも委員長だった

委員長のパジャマは薄い紫色を基調に白い水玉模様が特徴で、清楚な印象を抱いた

「すいませーん、こっちはいいですか？」

すると、席に座っていた客が手を挙げている

「あ、はーい。じゃ、私、行くから」

委員長はそう言うのと、小走りでカウンターに向かった

「おう・・・」

俺は何故か、心中モヤモヤしていた

「義之くん、義之くん」

際どいパジャマ姿の茜が、声をかけてきた（胸元が大きく開いたネグリジエ）

「おお、茜。どうだ、調子は？」

俺が聞くと茜は嬉しそうに

「んもう、大盛況だよ。杏ちゃんの狙いどーりって感じ♪」

「それじゃあ、売り上げも見込めるな・・・」

明日の打ち上げは盛大に行うか・・・

「すいませーん、こっちは、カップ巻きお願いしまーす！」

「はーい、少々お待ちください。小恋ちゃん、お願い」

「あ、うーん！ すぐ握りまーす」

カウンターで小恋が手を振っている

忙しそうだな

「んじゃ、邪魔しちゃう悪いから俺はしばらく、外で休んでくるよ」

と、俺がドアのほうを向こうとしたら

「あ、それで、なんだけどね」

「あん？」

呼び止められた

「もう始まつてからずっと、沢井さん働きづめなのよ」

「委員長？」

そういえば、さつき忙しそうにしてたな

「沢井さんの握るお寿司が大好評で、休む暇なしって感じ」

「そうなのか・・・」

俺は以前に試食した時のことを思い出した

実際に試食したので分かるが、委員長の握った寿司は他の女子が握った寿司に比べて段違いに美味しかったのを覚えている

人気が出るのも、頷ける話だった

「私や小恋ちゃんたちはローテーションで休みをとってるからいいんだけどね、沢井さんってば、なかなか休みを取ってくれなくてね」

俺と茜の視線の先には、今も寿司を握っている委員長が居る

「あいつ、妙なところで頑張り屋だからなあ・・・」

これは、最近一緒に居たからわかることだ

「そうなの。でも、休憩とってもらわないと、いざと言うときに困っちゃうでしょ？」

「確かになあ」

頑張りすぎて倒れられたら困るし、順番に休みをとらないと、他の休みたい子たちも気後れしてしまうだろう

こういうときの空気の読めなさは、委員長らしいちゃあ、委員長らしい

「それで、なんだけどね」

「うん」

「義之くん、ちょっと沢井さんを連れ出してくれないかな？」

ハ？

「お、俺が？」

「うん、で、クリパでも回って、リラックスさせてあげてきて。そういうのお願いできるの義之くんくらいしか居ないから」

「他にも居るだろう？ 涉とか杉並や、裕也とかユーノ。それに蓮華とか」

俺の言葉を聞いた茜は首を振り

「杉並くんはどこ行っちゃったか分からないし、渉くんじゃ女の子のメンタルケアには向かないし、裕也くんじゃフェイトちゃんに悪いし、ユーノくんはそこで倒れてるし、蓮華くんは……」

『げえ!? 神夜!?!』

『ふふふ……蓮華、一緒に学園祭を回りましょう?』

『待て! 俺は今、クラスの模擬店を手伝ってんだ!』

『そんなの関係ありません……蓮華♪』

『来るなああああああー!!』

蓮華……

「あいつは、何処に行こうとしてんのよ!」

「ア、アリサちゃん! パジヤマ姿なんだよ!?!」

お前ら……

てか、待て

「は? ユーノが倒れた?」

あ、本当だ。ユーノはバックヤードで倒れてなのはに看病されてる

「ユーノに……一体、何があった?」

「えっとね、なのはちゃんのパジヤマ姿見たら、顔を真っ赤にして倒れちゃったの」

「純情だったんだな、あいつ……」

蓮華は無事かわかんねーし

てか、さすがの拘束を振り切って、アリサも猛追したよ

「そういうわけで、義之くんしか居ないのよ。消去法、消去法」

「そういうもんか?」

「すいませくん、こつち。エビで!」

「あ、はくい! じゃ、お願いね♪」

茜はにつこりと微笑んでから、客の方へと行ってしまった
んく、茜なりの気遣いってやつかな?

ま、仕方ない、委員長を連れ出しますか

俺は委員長の居る所まで移動した

「おす、委員長。大人気なんだって?」

俺が声をかけて、委員長は俺が近づいた事実気付いて

「あら、桜内。なくに？ 私用ならあとにしてくれない？」

あちら、これはまじめな対応だな

だが、それは予想の範疇だ

「私用じゃねーよ、業務命令デス」

「何？」

「お前に休憩を取れって命令が出てる」

それを聞いた委員長は、軽く俺を睨み

「何言ってるの？ この混み具合見れば、休憩する暇ないってことくらい、わかるでしょ？」

そう言うとき委員長は戻ろうとする

「それでも、休憩とらないといけないの。順番に休まないし他の女子が休めないだろ？」

すると

「それじゃあ、私の番は飛ばしてくれて構わないわ」

と、手をヒラヒラさせながら去ろうとしたので

「いいから。お前を連れ出すように、他の女子に頼まれたんだよ。来いって」

俺は委員長のパジャマを掴んで引つ張った

「ちよつと、引つ張らないでよ、パジャマ脱げちやうでしょ?!」

そう、これが俺が即興で考えた委員長対策だ!!

「公衆の面前でパジャマがはだけた姿を晒したくなければ、来なさい」

「わかった！ わかったから！」

「お願いね〜！」

俺と委員長は茜の声を背後に教室を出た

数分後

俺は女子達が着替えに用いてる教室の前で、待っていた
すると

「お待たせ……」

委員長が制服に着替えて出てきた

「よし、んじや行くか」

「行く？ 行くってどこに？」

「俺とクリパへ」

「桜内と!？」

「委員長を連れてクリパに行ってくれって、頼まれたんだよ」

それを聞いた委員長は眉をひそめて

「私ひとりでも行けるけど？」

「お前、目を放すと戻って寿司を握るだろ？ それじゃあ、ダメなんです」

「うっ、そ、そんなことないわよ？」

「目が泳いでるから」

人前で変な格好をするのをあんなに嫌がってたのにな、寿司を握るのが楽しいのかな？

「わかった、わかったわよ・・・一緒に回ればいいんでしょ？」

「分かればよろしい」

「で、何処に行くのよ」

「ん、行き当たりばったりで」

「そう来ると思った・・・」

こうして、俺と委員長のクリパ巡りは始まったのだった

義之 side END

裕也 side

俺とフェイトは、生徒会の仕事で学園を警邏していた

「ふむ、ここも異常ないな」

「そうだね」

俺とフェイトは確認が終わると、次のフロアに向かおうとしたが

prrr!

「んあ？ 誰だ？」

携帯が鳴ったので見ると

「まゆき先輩？ (ピッ) はい、裕也です」

『あ、裕也？ 今大丈夫？』

「はい。とりあえず1フロア終わったので、次のフロアに向かおうか

としてましたが」

『そ、よかった。あのさ、今から旧ゴミ焼却場に来てくれる?』

「旧ゴミ焼却場?」

『そ、そこに黒尽くめの怪しい連中が居るのよ。もしかしたら、杉並かもしれないから』

「なるほど……、少し待ってください」

俺は一旦、携帯から顔を離した

「どうしたの?」

フェイトが気になったのか聞いてきた

「いや、どうやら旧ゴミ焼却場に黒尽くめの怪しい連中が現れたらしいんだ。まゆき先輩は、もしかしたらそれが杉並なんじゃないか、つて言ってたんだが……」

俺は、そこでようやく視線をフェイトに向けて

「あの杉並がそんなハマすると思うか? 簡単に足がつくようなハマを」

俺が聞くと、フェイトは即行で首を振り

「しないと思うよ」

「だよな」

俺は携帯に顔を近づけて

「すいません、先に情報の確認をするので、なんなら先に突撃してください」

『花咲に聞くのね? わかった』

その言葉で通話が切れたので、俺は携帯をポケットに仕舞った

「一旦、教室に戻るぞ」

「茜に聞くんだね? わかった」

俺達は杉並のことでクラス内に協力者を作っていた
それが茜なのだ

俺達は教室を目指して移動した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「おっす、調子はどうか?」

俺とフェイトが教室に戻ると、杏が近づいてきた

「フッフ、計画通りの大盛況よ……」

因みに杏のパジャマ(?)は、セーターオンリーである

時々、ヤバイ視線が向いているのを、俺とか蓮華が牽制している(蓮華は、かなりクタビれているが)

「そうか、それはなによりだ、それでなんだが茜は何処に居る？ちよつと聞きたいことがあるんだが……」

俺は教室を見回すが、茜は何処にも居ない

「茜なら、さつき休憩に入ったわ。恐らく、休憩室に居るんじゃないかしら？」

「わかった、あんがと」

俺はそれを聞くと、廊下に出た

休憩室は2つ隣の教室だ

俺とフェイトは着くが……

「裕也、どうしたの？ 開けないの？」

「ちよつと、嫌な予感がするから、フェイト頼む」

俺は体をずらして、フェイトに道を譲った

「わかった、待ってて」

そう言うとフェイトはドアを開けて中に入った

『あれ、フェイトちゃん、どうしたの？』

『着替え中にごめんね？ ちよつと聞きたいことがあるんだけど……大丈夫？』

(セーフ!! 俺の予感は当たるんだよ……)

俺はフェイトに任せて良かったと、心底思った……

『ちよつと、待ってね……つと、よしこれで大丈夫!』

『それじゃあ、廊下に来てくれる?』

『うん』

ガラッ!

「裕也、予感当たったね」

「そうだな……」

入ってたら……(ガタガタ)

「それで、聞きたいことって?」

俺が安堵のため息を吐くと、茜が聞いてきた

「ああ、杉並に関しての新しい情報なんだが、聞いてないか？」

俺が聞くと、茜は悩み始めた

「杉並くん？ なにも聞いて・・・あ、ちよつと待って、確か、お昼ごろなんだけど・・・」

「なに？」

「携帯で、確か・・・放送室がどうたら言ってたような・・・」

「放送室か・・・裕也」

「ああ、そつちが恐らく本命だろうな。行くぞ！」

「うん！ あ、茜、情報ありがとうね！」

「別にいいよ、頑張ってるね♪」

俺とフェイトは、茜の声を背後に走り出した

もちろん放送室へ向けて・・・

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

俺とフェイトは、走って本校2階の廊下に到着した時だった・・・

「うわあ・・・」

俺は廊下の先を見て思わず唖ってしまった、その理由は・・・

「杉並くんやるね・・・」

そこには、天井まで積み上げられた机の山

ようするに、バリケードがあつたのだ

と、その時だった・・・

「はーはっはっはっはっはー」

「む・・・」

「間に合わなかつたね・・・」

「放送室は我々ノエルの悪夢が占拠した！ 手薄だったから制圧はいつも容易かつたぞー」

「やられた・・・」

と、その時だった、再び携帯が鳴つたので出ると

『裕也くん！ 今・・・』

「ええ、わかつてます。今、放送室の手前でござつてます」

『あれ？ わかつてたの？』

「ええ、気になる情報があったので向かってたんですが、間に合いませんでした。そちらはどうでした？」

俺は確信があったが、一応、聞いてみた

『うん、捕まえたけど、困だねこれ、やられたわ・・・』

「やつぱりですか。とりあえず、俺達が一番近いのでこのまま突撃します」

『うん、お願い、あたし達は連中を拘束したら向かうから』

「はい、では」

俺は通話を切つて、ポケットに仕舞うと

「フェイト、通れるだけどかすぞ！」

「うん！」

フェイトは身軽に登るが・・・

「フェイト・・・パンツ見えるぞ・・・(顔逸らし)」

「ふえ!? ほ、他に誰か居る?」

「いや、居ないが・・・」

「じゃあ、問題ない!!」

「いやいや・・・気にしろ」

俺達はそんな会話をしながら、机とイスを1個ずつどかしていく
すると

「よいしょ・・・(カチッ!)へ? カチ?」

「どうした?」

「なんか、スイッチ押しちやった・・・」

「なに!?!」

すると

ガコガコッ!

机が崩れた!! ヤバイ!!

「キヤーーー!」

〈ソニック・ムーブ!!〉

俺の体感時間は一気に遅くなり、文字通り音速で落ちてくる机や壁を足場に跳んだ

そして、空中でフェイトをキャッチした。もちろんお姫様抱っこで

俺はその勢いのまま、通れるようになった隙間を通って反対側に着地した

「つとお・・・危なかった！、フェイト大丈夫か？」

「うん、大丈夫ありがとう・・・」

「これを仕掛けたのは、あの杉並率いる非公式新聞部だぞ？ 罨に気をつけないと」

俺は、お姫様抱っこのままフェイトに注意した

「そうだったね・・・ごめん、気を抜いてた・・・」

「まあ、無事だったから良かったけどな」

俺はゆっくりフェイトを着地させた

「(ボソリ) ちょっと、残念・・・んん！ 放送室はもうすぐだよね？」

「ああ、急ぐぞ！」

俺とフェイトは放送室へ向けて再び走り出した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ドバンツ!!

「生徒会だ！ おとなしくしろ!!」

俺が施錠されていたドアを蹴破って突入すると、フェイトも続いて入ってきた

「逃げられた後みたいだね、大丈夫ですか？」

室内のイスには、眼鏡をかけた男子生徒が猿轡さるくつわを噛ませられた状態で縛られていたのをフェイトが助けた

「助かりました・・・」

「非公式新聞部あいつらが何処に逃げたか、わかりますか？」

「すいません、ずっと縛られてたので・・・」

「そうだな・・・」

「これ、録音だね」

「フェイト、止めろ」

「うん！」

フェイトが機械を操作すると

〈それでは続いて、恋する・・・〉

放送が止まった

「やれやれ」

「やられたね・・・」

「だな・・・お！ そうだ」

俺はある閃きに従い、放送機材に近づき

「えっと、確かこうだったな・・・っと」

「裕也？」

操作をしてから、マイクの部分を軽く叩くと

〈ボーン〉

と、聞こえたので

「よし、・・・んん！ こちら生徒会です。暴動は開始5分で鎮圧しました。繰り返します・・・」

「わっ！ 勝利宣言だ」

「それでは、引き続きクリスマス・パーティーをお楽しみください」

そして、俺はスイッチを切った

「なかなかやりますね？ 裕也とは、もしや、あなたがかの有名な
ソードダンサー
剣使いですか？」

俺はその言葉を背中に聞くと

「さて、どうでしょうか？」

俺とフェイトは、そうして放送室を後にした

まだまだ、終了時刻までは多少時間がある

「さてさて、あと何回やりあうのかね・・・」

「さあ？」

俺とフェイトは、まゆき先輩たち本隊に合流したのだった・・・

追記

蓮華は無事、神夜から逃亡に成功したとか

ただし、アリサによって黒こげになってたとか

クリスマスパーティー 1日目その2

俺と委員長は、まずは校庭に来ていた

そこにはステージが設営されてて、ステージ上ではバンドチームがジャカジャカと弾いていた

「こういうのを聞いてると、学園祭だなーって気になるよな」

俺が言うと、委員長は

「そう？ あまり上手くないし」

「確かにな」

俺も弾いてるから分かるが、今やってる連中は確かにあまり上手では無い

あれは、チューニングをサボってるな？

『チキショーキー!!』

『ふふふ……逃げさないわよ?』

『あんたら、待ちなさーい!!』

なんか幻聴が聞こえたが、気にしない

そして、俺と委員長は校庭を後にした

次に来たのは

「へー、いろいろ出てるのね」

売店コーナーだった

「まあ、俺達のが一番意外だろうがな」

恐らく、誰もすし屋なんて考えないだろう

「それもそうね」

「何食べたい?」

俺は近くの店を見ながら、委員長に聞いた

「それじゃあね……」

委員長は周囲の店を見ながら悩むと

「焼きそばが食べたい」

と、言ったので

「OK、そんじゃ」

俺は近くの焼きそばを売ってる売店に近づくと

「焼きそば2つ、お願い」

「あいよ」

そうして、俺はお金を払い、焼きそばを2つ貰った
すると

「あ、お金は払うわ」

と、委員長がポケットから財布を出そうとしたが

「ああ、いいよこんくらい」

「でも……」

委員長は渋るが

「いいからいいから」

俺は押し切って、焼きそばを委員長の手に渡して移動を開始した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、移動した先は中庭だった

そこは意外にも人は少なく、静かだった

「ここでもいいな」

「そうね」

立ち食いは行儀が悪いからな

そうして、黙々と焼きそばを食べて

「で、この後はどうするの？」

と、聞いてきたので俺は

「あのさ……」

「なによ」

「委員長さえ良ければさ……」

「うん」

「この後さ……」

模擬店サボって2人で回ろうと、言おうとした瞬間だった

「はーっはっはっはっはー！」

「……」

「放送室は我々ノエルの悪夢が占拠した！ 手薄だったから制圧はい

ともたやすかったぞー！」

「この声は……」

「間違いなく、杉並ね……」

あの野郎……

〈それではDJ杉並がお送りする聖なる夜に最適なトラディショナルなダンスナンバー！ ザ・盆踊りメドレー!! だ！〉

その声の直後に、雰囲気をぶち壊す盆踊りの曲が流れ始めた

「……………」

雰囲気ぶち壊しじゃねーか……

「……ぷっ！」

「はははははー！」

俺と委員長は、ひとしきり笑うと立ち上がり

「それじゃあ、教室に戻りましょうか」

「そうだな」

焼きそばの器を、ゴミ箱に捨てて教室に戻った

義之 side END

裕也 side

「さてと、これからどうすっかな……」

「一回休まない？ さっきので少し疲れちゃった」

「そうだな」

俺はフェイトの提案に乗って、移動を開始した

「そんじゃあ、何処に行く？」

「そうだね……あ、ここは？」

フェイトが指差したのは、天文学部が出展している

「プラネタリウムか、いいかもな」

俺とフェイトは、そこに入った

「席は空いていますか？」

俺は案内役の女子生徒に聞いた

「はい、空いていますよ、好きにどうぞ」

中を見ると結構座っており、盛況なのが伺えた

「裕也、あそこに座ろう」

フェイトが指差した場所に丁度、2人分空いている場所があったの

でそこに座る

そして、上を見ると見事に満天の星空が見える、まあ機械だけだな
「これは冬の星座だね」

「の、ようだな、お？ あそこにさそり座発見」

「あ、本当だ、真ん中の星赤いからわかるね」

その後も俺とフェイトは、色んな星座を見つけながら天文学部の説明を聞いていた

『助けてエエエエエエ！』

『あきらめてください、蓮華…』

『いい加減に生まれー！』

『それは君もだ!!』

なんか、聞き覚えのある声が……

フェイトもなのか、少し、頬が引きつっている

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

俺とフェイトは、しばらくしてからプラネタリウムから出た

「ふむ、そろそろ食事にするか、軽く済ませよう」

「そうだね」

そうして、向かった先は……

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「よ、相変わらず大盛況みたいだな」

付属3年3組の教室だった

「おお、裕也。凄い人気だぜ」

俺達に答えたのは、義之だった

「ふふふ、さっきの勝利宣言、聞いたわよ……なかなかやるじゃない

い……」

「そりやどうも」

そう言いながら俺は手近な席に座る

フェイトは俺の隣に座った

「そんじゃあ食べるか」

「そうだね」

「イカとタコ、それとマグロの赤身頼む」

「私も、マグロの赤身とハマチお願い」

「わかったわ」

俺達は沢井が握った寿司に舌鼓を打った

蓮華が教室の端で、屍のように黒こげで倒れていたが、視界から意図的に外す努力をした

まだまだ、1日目が終わったばかりだ、明日はどうなるのやら……

クリスマスパーティー 2日目その1

12月24日

クリスマス・パーティー2日目当日 朝

場所 集合団地 防人家 裕也の部屋

「起きてないよね……?」

現在時間 朝6時

「裕也はいつも、6時半に起きるのは分かってる」

「フェイトがなぜこんな行動を取っているのか、それは先日家に帰ってきて家族でご飯を食べていた時である」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ねえ、フェイト」

「フェイトに話しかけてきたのは、相変わらず年齢不詳の母親のリンデイ・ハラオウンである」

「なに、母さん?」

「フェイトは顔をリンデイに向けた」

「クリスマス・パーティーに、裕也くんは誘ったの?」

「爆弾が投下された瞬間だった」

「ふえ!? な、なに言ってるの母さん!! わ、私は!!」

「動揺しまくりである」

「フェイト、別に、おかしい話でもないだろう」

「そう言ったのは、オレンジ色の髪に尻尾と耳、小柄な体躯が特徴の女の子だった」

「あ、アルフまで!」

「アルフとはフェイトの使い魔である」

「なんでも死に掛けてたのをフェイトが見つけて契約したとかで、フェイトに恩義を感じているのだ」

「それが理由で、少し過保護ともとれる行動を取ることも多い」

「因みに、現在は子供形態を取っているが、他には大人形態に、狼形態（本人が狼のため）、それと子犬形態が存在する」

「フェイトも、そろそろ彼氏作ったらどうかしら? いい年なんだし」

見た目では、リンデイも充分若いが

「それに裕也、結構人気だぞ？ アタシが聞いた限り、子供から大人まで大人気だ」

「それは……裕也、優しいし」

フェイトは、口ごもりながらも言った

「けどね……裕也くんは一人で悲しみを背負ってるの」

それを聞いたフェイトは、スカリエツティから聞いた話を思い出した

「そろそろ、他人だけじゃなくて彼も幸せになっていいと、思うのよ」
「うん……」

フェイトが頷いたのを確認した、リンデイは微笑んで

「それがフェイトだと、いいと思うのよ♪」

「あう……（顔真っ赤）」

「あー！ フェイトちゃん。顔真っ赤だー」

「もう、姉さん!!」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

以上回想終了

で、今にいたるわけである

因みに、鍵は何故かリンデイから渡された

「母さん、なんで鍵なんて持ってたんだろう……」

フェイトは、渡された鍵を不思議そうに見ながら首をひねった

そして、フェイトは寝ている裕也を見る

「…泣いてる？」

フェイトは、裕也の目元に涙が溜まってるのに気付いた

第3者side END

フェイトside

裕也の目元に、涙が流れている

なんで、泣いてるの？

私は裕也の口が動いているのに気付いて、耳を近づけた

「ごめん……父さん母さん、美樹を守れなかった……」

「裕也……」

ずっと、悔やんでるんだ

美樹ちゃんを、助けられなかった、守れなかったことを……

「裕也……」

私は、裕也の涙を見て思った

「裕也……裕也は一人じゃないんだよ？ 私も居るから……」

私は、裕也の涙を指で拭いながら思った

「裕也は、私が……」

幸せにする！

フェイトsideEND

第3者side

「来るな！ 来るなあ！」

「ふふふ……蓮華……いい加減に諦めたらどうかしら？」

蓮華はパジャマ姿で、窓際まで後ずさっていた

目の前には、ワイシャツ1枚の神夜

そして気付くと、蓮華の眼の下にはクマが出来ている

どうやら、夜通しでやっていたようである

「あの小娘には蓮華は渡さないわよ？」

「待て、誰のことだ!? てか、眼が怖ええよ！」

「さて、これから既成事実を作りましょうか……」

「来るんじゃないええええええ!!」

蓮華は全力で窓を突き破って、外に飛び出した

「逃がさない……」

それを猛追する神夜

この追いかけては、アリサとすずかに見つかって終わった
が、蓮華は、アリサの炎を纏った拳によって吹っ飛んだとか……

S・Y

.....

「.....きて、.....つてば」

む？ なんだ？

「.....くらいってば」

暗い？ そりやそうだ、目瞑ってるからな

あつれ？ なんで目瞑ってるんだっけ？ まあ、いいや。

今は、素敵な睡眠を.....

「起きなさーい!!」

「うおお!」

いきなり、耳元で大声を出されたので、俺は慌てて跳ね起きた
なんだ! 敵襲か!? それとも、なのはの砲撃か!!??

「な、なんだ!」

そして、周囲を見回すと...

「.....」

何故か、委員長が居た

「あ、起きた?」

チツチツチ・ポーン!

「なんだ、夢か.....」

俺はそう思って、再び布団にもぐりこんだ

「あー、こらこら、夢じゃないってば起きなさい」

「大抵の夢は、みんなそんな反応なんですー、.....つて、夢じゃない?」

俺は、いやにリアリティがあつたので起き上がった

「夢じゃないわよ、大声だしちゃったのは謝るから、起きなさい」

そこには、確かに委員長が居た

「なんで、委員長が居るんだよ」

俺は素直な疑問を、ぶつけてみた

「桜内に用があるからに決まってるじゃない、なに言ってるのよ」

「だったら、電話すればよかっただろ？」

「かけました。でも、出ないから来たのよ」

「家には？ さくらさんが居たはずだぞ」

「家にもかけたわよ、それなのに、出ないから気になって見に来たのよ」

俺は手元の携帯の画面を見ると

不在着信 14件

と、なっていた

「あー、それは悪かった。だったら、どうやって中に入った？ 鍵が掛かってたはずだが……」

俺は気になってた質問をした、すると

「開いてたわよ？」

「は？」

なんですと？

「だから、開いてました」

「マジで？」

おいおい、なんでだ

「嘘言ってるのよ。扉開けたら鍵が掛かってなくて、怪しんで中に入ったら、あんたがグースカ寝てるから、無用心にもほどがあるわよ……」

委員長は、呆れながらため息を吐いた

嘘は言っていないみたいだな

これはようするに、今日は珍しく、さくらさんが早起きして出たときに鍵を忘れちゃったってことか？

やれやれ、勘弁してほしいぜ……

と、俺が額に手を当てて唸っていると

「ほーら、それよりも制服に着替えて、遅刻しちゃうでしょ」

「ああ、そうだな」

確かに、飯の時間を考えると、ギリギリだな

俺は委員長に言われて、上に着ていたセーターを脱いだ

すると

「ちよつと、いきなり脱がないでよー!」

しまった、委員長の目の前で脱いってしまったな
気付くと、委員長の顔は真っ赤だった

「ああ、悪い」

「もう……」

委員長が部屋から出たのを確認した俺は、今度こそ着替え始めた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「で、用って?」

俺は、家から出てから隣を歩いている委員長に聞いた

(俺が手早く作った料理を食った委員長は、かなり驚いてたが)

「え?」

おいおい、忘れたのかよ

「俺に用件があったから、来たんだろ? で、その用件ってのはなんだ?
?」

「ああ、そうだったわね。用件は、今日の休憩時間んだけどね」

「休憩時間?」

なんざんしょ?

「ええ、折角だから……時間合わせて休憩しない?」

……なんですと?

「なんでまた、俺と?」

これは、予想外だな

俺が聞くと、委員長は顔を赤くして

「さ、桜内と一緒に居たほうが、いろいろ都合がいいのよ!」

「さいですか……そんな用件だったら、電話で話してくればよかったです
のに」

「電話に出なかったから、家に行ったんでしょ……」

「そうでした。もしくは学校で待ってればよかったろ? 態々ウチに
来なくても、学校で会えるんだし」

「ギリギリに来るつもりだったでしょ? それじゃあ、ダメなんです
むう

「確かに、で、何時ごろにする？」

俺は、委員長の希望の時間帯を聞くことにした

「そうね、それじゃあ……」

こうして、俺と委員長は休憩時間を決めた後、学校に着くまで取り
とめも無い会話を続けたのだった

VIPルーム開店!

「いらつしやいませ〜」

「お客様、こちらにお並びください〜!」

クリパ2日目の我がクラスは、大盛況という言葉では表現しきれないほどの大盛況ぶりだった

昨日の混み具合なんて、混んでるうちに入らない、といった風情だ。

「すごいねえ……。まさに寿司詰めって感じ」

「なんでこんなに……」

俺は、思わず呟いてしまった、すると

「何でも、昨日来てくれたお客さんからの口コミらしいよ。特に沢井さんのお寿司が人気……」

と、茜が教えてくれた

「口コミねえ……」

女子達のコスチュームもさることながら、リーズナブルな値段で、価格以上の味の寿司が食べるとなれば、そりゃ混雑もするか

「義之くん、涉くんたちの方、手伝ってきてくれないかな?」

「廊下で列整理か、了解……」

俺は茜の指示に従って、整理券を持って廊下に出た

こりや、今日はクリパを見て回る暇なんて、ないかも知れないな

……

俺は内心、委員長とのクリパの休憩時間の約束が守れないのを残念に思った

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「では、整理番号の順番に並んでくださいー!」

俺は今、列の最後尾に立って列の整理をしている

「あの、すみません」

列の整理をしていると、クリパを見物していた他校の生徒に声をかけられた。

「はい?」

見たことない制服だな……

本島のほうから、わざわざ見に来た連中かもしれない。

「これって、今並ぶとどのくらい待つんすか？」

「そうですねえ……………」

俺は列を見て

さすがに、俺でも正確なところは分からないけど、さっきまでの感じだと……………」

「だいたい30〜40分待ちって、とこですかねえ」

俺がそう答えると

「どうする？」

「並ぶしかないだろ、すみません、整理券をください」

「はい、わかりました、どうぞ」

俺は整理券を2枚取り出して、他校生に渡した

ってか、並ぶのかよ

俺なら、待てて、大体15分……………いや、10分が限界だな

「義之」

気付いたら杏が教室から出てきてて、俺に声をかけてきた

「どうした？」

正直、杏の格好はかなり刺激的過ぎるので、並んでいる他校生や、生徒達の視線が集中する

因みに、こいつのパジャマはセーターのみである

そんな杏の姿を写真に収めようと、携帯やデジカメを構える連中が居たが、蓮華が睨んで黙らせた

「ちよつと、こじや話しづらいから、こつちに来て」

と、杏は着替えに使っている空き教室を指差した

「わかった、ヤマモト、蓮華。悪いけど、後頼んだ！」

俺は、列整理をクラスメイトのヤマモトと蓮華に頼んで、教室に入った

「うん、わかった」

「おう、任せろ！　って、そこ！　横入りすんじゃないー！」

頼もしい奴だよ

すると、教室内には既に先客が居た

「委員長？ 顔色悪いけど、大丈夫か？」

そこには委員長ごと、沢井が居た。けど、顔色が悪く、蒼白と言える

「ちよつと、フラフラするけど……、大丈夫……」

確かに、委員長はフラフラしている、これは……

「杏、どういうことだ？」

俺は、理由を杏に尋ねた

「ええ、お客の数が予想以上で、沢井さんに結構負担が掛かってるのよ。それで、強制的に休ませただけ……」

「大丈夫よ、少し休めば……また、握るから……」

と、委員長は気丈に言うが

「正直、沢井さんの負担を減らしたいのよ」

「なるほどね」

確かに、俺もずっと列整理をやっているからわかるが、列が途切れたことがないのだ

休む暇すらないからな

「一応、俺達の方で回転を下げることも出来るが、焼け石に水だな……」

「ええ、だから」

俺が唸っていると、杏は笑みを浮かべて

「沢井さん、あれ”持ってきたわよね？”」

と、委員長に聞いた、なんだ？

「？ ええ、一応持ってきて、って、言われたから……って、ええ!? まさか”あれ”をやるの!?”」

なんだ？ 委員長はわかってるみたいだが……

「何をやる気だ？」

俺が聞くと、杏は笑って

「VIPルームの開始よ」

と、言った

VIPルームだあ？

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「VIPルームって、ようするに、特別料金制か」

俺達は、もう一つの教室に居た

内装は3年3組と同じになっている

「よく借りれたわね。教室って、競争率高いのに」

「フフフ、そこは少しコネがあつてね、特別に借りれたわ」

と、杏は笑った

どんなコネかは聞かぬーよ。直感でヤバイと感じる

因みに、2人の姿はと言うと……………

「まさか、水着とはな」

そう、水着なのだ

因みに、杏が所謂スク水で、胸元には何故かひらがなでへゆきむらゝ

と書かれている（しかも、なぜか旧スク水）

そして、委員長は……………

「ちよつと、恥ずかしいから、あんまり見ないでくれる？（テレ）」

競泳水着である

「いやいや、似合ってるぞ」

「ありがとう……………（顔真っ赤）」

俺が褒めると、委員長は顔を真っ赤にした

「で、杏よ、これで本当に客は来るんだろうな？」

俺は値段設定を見ながら言った

だって、向こうの5倍だけ？

こんなんで、来るのかよ

「大丈夫よ、お客は選ぶから。これで沢井さんの負担は減るし、売り上

げも増える、一石二鳥ね」

と、杏は笑うと

「さ、VIPルームの開催よ！」

と、高らかに宣言した

させて、どうなるのやら

生徒会の仕事

「見張り番お疲れ様。裕也」

フェイトが出店で買ってきた、フランクフルトを俺に渡してきた
「おう、サンキュ」

俺は受け取ると、早速口に運んだ
うむ、うまい

「で、どう？」

フェイトは、曲がり角から少し離れたドアを見る

「ああ、何人か出入りしたな。今は誰も居ない」

俺達が見張っているのは、非公式新聞部の部室だ
部室と言っても、奴らは非公式なために、あらゆる空き部屋が部室
に変わる

そして、今回は俺達の見張っている部屋と言うわけだ

「やっぱり、今回はアソコだったね。まゆき先輩の言うとおりだ」

俺達はまゆき先輩に指示されて、部屋を見張っていたのだ

「だな。恐らく、そろそろ援軍が」

と、俺が言った時に、ポケットの中の携帯が鳴った

「連絡が着たな、包囲完了したか」

メールには、包囲完了

とだけ、書かれていた

「よし、潜入するぞ」

「うん」

俺が先にドアに近づき、鍵を開錠してから、中に入った

「暗いね」

「電気は点けるなよ、気付かれたらまずい」

「うん」

俺とフェイトは暗い中、部屋の中をいろいろ調べる
すると

「ねえ、裕也。これなにか？」

と、フェイトが机の上の紙を指差す

「む？ 設計図だな」

それは、なにかの設計図だった

俺は、それをとりあえず携帯で撮影すると、まゆき先輩に送信する

「見た感じ、円筒形だね」

「ああ。しかも、台座まであるから、発射台かな？」

と、考えていると

ガチャガチャ！

と、ドアを開けようとする気配がした！

「隠れるぞー！」

「うんー！」

とはいえ、準備室程度の狭い部屋に隠れる場所など、そんなにあるわけなど無く

結果

バタン！

俺とフェイトは、掃除用具入れに隠れた

「狭い……」

「仕方ないだろ!？」

俺とフェイトは、掃除用具入れの中で小声で叫ぶという離れ業を行った

すると

ガチャ！

と、ドアが開いて黒尽くめの奴が数人入ってきた

「3、いや4人だね」

「ああ、1人、身長的に杉並みたいなのが居るが、判別できないな」とすると

「ふえ!？」

フェイトが珍しく慌てている

「どうした?」

「っー！」

フェイトは震える指で、1箇所を指差した

俺はそこを見ると

「虫？」

そこには、大体3，4cmくらいの虫が居た
カメムシかな？
すると

「ひっ！ ひう！」

フェイトはジタバタし始めた、って、ヤバイ!!

「落ち着け、フェイト！（小声で）」

俺がフェイトを落ち着けようとした

その時だった

ブーン！

先ほどの虫が、こちらに向けて飛んできた

「————っ！」

どうやら、フェイトの我慢も限界に到達したようで

「いや————!!」

と、掃除用具入れから飛び出してしまった

俺とフェイトは前転すると、一気に体勢を整えて

「生徒会だ！ 大人しくしろ!!」

と、機先を制した

「!?!?!」

俺とフェイトの声を合図に、包囲していた生徒会役員が一気に突入
してきた

「とりあえず、その被り物を脱いでもらおうか」

と、俺が言うと

「ふっふっふ……」

ん？ この声は……

「まさか……」

「はーっはっはっはっはー！」

と、笑っていた奴は一気に黒マントを脱ぎ捨てた

そいつの正体は

「呼ばれてないけど、ジャジャジャジャーン!!」
涉^{バカ}だった

「おい、もう脱いでいいのか？」

渉が脱いだのを皮切りに、他の奴らも全員脱いだ

こいつら、非公式新聞部でもなんでもない、軽音楽部の連中じゃねーか

「渉くん……なにしてるの？」

「ふっふっふ、俺はただの囷だ！ さあ、杉並の花火の発射まで、5秒前！」

なに!? 花火だと!?

「5, 4, 3, 2, 1! ドーン!!」

シューーン……

「あれ？」

渉が首をかしげた時だった

prrrr

「ん？ 誰だ？」

俺の携帯が鳴った

「はい、防人です」

『あ？ 裕也？ さつきは大手柄！ おかげで、杉並捕獲!!』

「おおー！」

「やった！」

「マジで!?!」

なんと！

『さつき裕也が送ってくれたのは、花火の発射台の設計図！ 実は以前にもあいつ、同じような物を製作してたのを押収したことがあるのよー!』

なるほど

『そして、小山の大将はお高い所が好き!』

「ようするに?」

『奴さん、屋上に居たのよ』

「あ、なるほど」

確かに、屋上ほど花火の発射に適してる場所は無いな
すると

「ぎーてつと、これで杉並の要求は終わったし、クラスの模擬店は安泰だな！」

と、渉が逃げようとしたので

「待った」

俺は渉の首筋を掴んだ

「ぐえ!？」

渉が変な声を出したが、気にしない

「クラスと杉並がなんだって？ お前の言葉は携帯でまゆき先輩も聞いたから、言い逃れは出来んぞ？」

「えー、えつと……」

渉は視線を左右に流して、どう言い訳しようか考えていると

スル

「え？ 縄？」

窓際に縄が垂れ下がってきた
すると

ダンツ！

と、誰かが、*ラペリングしてきた

りから降下してくることに

*縄で屋上や、へ

それは

「板橋く、正直に話さないと……」

まゆき先輩だった

まゆき先輩は、拳を鳴らして

「ぬっ殺すわよ？」

笑顔だが、視線は笑っていない

「……えつと、模擬店で使用するネタを杉並が格安で提供する代わりに、この囷役を引き受けてまして……」

こいつ、クラスを売ったよ

「よーし、聞いたね!？」 全員付属3年3組に突撃！」

「「「はいー」「」」」

まゆき先輩を筆頭に、他の生徒会役員達は部屋を出て行く

「そんじゃ、俺はこれで……」

と、渉は逃げようとするが

そうは問屋が卸さない!!

「お前も来るんだよ!!」

俺は渉にバインドを放って、連行を開始する

「あー、やっぱり? あふーん……」

やれやれ、あんまり派手じゃないといいが……

クリスマス・パーティー 2日目 突撃・撤収・思い

「あんまり、ジロジロ見ないでくれる？ 恥ずかしいんだけど……」
義之が見つめていたのに気付いた沢井は、顔を赤くして恥ずかしがる

「ああ、悪い……」

義之も同じように顔を赤くして、視線をそらした

今現在、教室内には義之と沢井だけである

さきほど、最後の客が帰ったためだ

そのため、義之は手持ち無沙汰になり、椅子に座って沢井を見ているのだ
すると

「今は、あっちも一段落したところだから休んでみましょう」

と、気付けば雪村が教室内に居た

その後方には、蓮華とアリサとすずかが居る

アリサは赤いビキニを着ており、すずかは紫色のビキニで腰にパレオを巻いている

「了解」

と、義之が返事をした

その時だった

ガラツ！

「動くな！ 生徒会だ!!」

まゆきが強襲してきた

「な!?!」

「そんな……、気付かれたなんて」

「うげえ！ まゆき先輩!?!」

義之たちは慌てるが

「うーん、届出と違う出店内容に、値段設定の高額さ。これだけ揃っていると、幾らお姉ちゃんでも庇えないかなあ?」

と、音姫も入ってきた

(バカな、生徒会のほうは裕也が情報操作している……答?)

義之は、大量に入ってきた生徒会役員の後方に、何故かボロボロになっっている渉を引きずっている裕也に気付いた

裕也「……………」↑ あー、庇えないなーって顔

フェイト「……………」↑ 額に手を当てている

(状況から察するに、渉が杉並関連に協力して、捕まり、吐いたってことか?)

(その通りだ。恨むなら、渉を恨め)

義之と裕也は、念話で会話をしている

「うーん、それじゃあ。とりあえず、先に処罰を下すとすると、まずは模擬店の即時中止、さらに撤収を行ってください。なお、これはもう1つの教室も同じです」

「……………」

こうして、付属3年3組の模擬店、セクシー・寿司・パーティー
コードネーム
暗号名SSPは、呆気なく幕を閉じた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
で、数時間後

付属3年3組は、裕也とフェイトと杉並を除き

全員廊下に正座していた

「体がすっげー痛い……………」

「ちくしよー、まさか気付かれるなんて……………」

渉は、あれから10数分後に目覚めた

「申請とは違う出店内容に、あきらかに校則違反の姿での接客に値段設定。しかも意図的な情報操作まで……………」

音姫はあまりの内容に頭が痛いのか、額に手を当てている

「まー、さっきの先生方の話を鑑みるに、あんた達の冬休みは無いは決定だね」

「……………」

クラスメイト達は悲鳴を上げるが

「やかましい!! あんた達がやったのは、そんならい大変な事だったのよ! むしろ、芳野学園長に感謝しなさい。学園長が説得してなかったら、もつと重かったんだから」

まゆきは、腕組みしながら言い放った

「あ、はいはいはいー！」

渉が何かに気付いたように、手を挙げた

「なによ板橋。一応言っておくけど、あんたが一番罪が重いんだからね?。」

「なんで、裕也にフェイト、杉並は正座してないんだ?。」

「それに関しては、まず杉並くんは、花火はきちんと安全策が実施されてましたし、安全も確認したので、不問にしました。裕也くとフェイトちゃんは確かに、情報操作をしていたとはいえ、生徒会の仕事はまじめにやっていたので、同じく不問にしました」

裕也とフェイトは、気まずそうに顔をそらしていた

「ふっ、すまんなあ、板橋。裏の裏の裏の、もう一つ裏をかかせてもらった」

杉並はそう言いながら、髪を掻き揚げた

「ちくしょー」

「それと、杉並くんが打ち上げようとしていた花火ですが、先ほど地域の方々に連絡して、もうすぐ打ち上げます」

音姫は腕時計を確認しながら宣言した

「よかったー、あれ、楽しみにしてたんだよなー!。」

「楽しみね」

「うんうん、そうだね〜♪」

すると、杉並が腕時計を見て

「ふっ、そろそろカウントダウンと行こうか、10」

音姫&まゆき 「「9!。」」

茜&杏&小恋 「「8!。」」

渉&蓮華 「「7!。」」

アリサ&なのは&はやて&すすずか 「「6!。」」

ユーノ&アリシア 「「5!。」」

クロノ&エイミィ 「「4!。」」

ギンガ&スバル&ティアナ 「「3!。」」

義之&麻耶 「「2!。」」

裕也&フェイト「1ー!」

全員「「「0!!」」」

ドーン! ヒューー…… パーーン!!

0の宣言と同時に爆発音が響き渡り、数瞬後には、空に色とりどりの花が開く

「わああ〜!」

「綺麗ねー」

「ふふ、絶景…」

「うわー」

「わお」

「たーまやー!」

「かーぎやー!」

と、皆がそれぞれの反応をしていると

へただいまをもちまして、第59回風見学園クリスマス・パーティーの一般開放を終了します。繰り返します、……

という、放送が聞こえた

「それじゃあ、処分ですが。」

と、音姫は花火を背景に付属3年3組のクラスメイト達を見る

「弟くん、沢井さん、裕也くん、フェイトちゃんの4人を生徒会預かりとさせていただきます♪」

「「「え?」」」

何気に、爆弾が投下されている

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

クリスマス・パーティーが終了して、数10分後

「ふむ、終わったな…」

裕也は1人で、屋上に居た

すると

「裕也!」

と、声が聞こえたので振り向くと

「それ!」

と、フェイトは缶を投げた

「サンキュ」

裕也はそれを片目で確認すると、キャッチした

「それと、はい。クレープ」

フェイトは、手に提げていたビニール袋から紙に包まれたクレープを取り出して、裕也に手渡した

「ん、あんがと」

裕也は貰うと、背中をフェンスに預けてクレープを食べ始めた

フェイトも同じように、フェンスに背中を預けて裕也の隣で、クレープを食べ始めた

「ねえ、裕也……」

フェイトは下を向きながら、裕也に聞く

「なんだ？」

裕也は上を向いている

「あとのくらい……生きられるの？」

フェイトの声は震えていた

「わからないな、10年か、1年か、半年か……でも、長くは生きられないな」

裕也は淡々と告げている

「……なんで」

「ん？」

「なんで……そんなになつてまで戦うの？」

フェイトは涙を滲ませながら、裕也を見る

「それはね、もう失いたくないからだ。俺は何人も守れなかった、救えなかった、助けられなかった。」

裕也の目に宿るは、悲しみの光

「だからな、せめて皆は守ると誓った。例え命に代えても」

そう呟く裕也の目に宿るは、決意だった

「嫌だよ……」

「え？」

「裕也と一緒に居ないと、嫌だよ！」

フェイトは涙を流しながら、頭を振る

「フェイト……」

裕也は、泣いているフェイトを見つめた
「裕也にだって、生きる権利はあるんだよ!? 辛い経験したから、幸せになる権利があるんだよ!?!」

フェイトは裕也に抱きつく

フェイトが落とした缶が、中身をこぼしながら転がる

裕也は、手に持っていた缶とクレープを魔法で浮かべてフェイトを受け止める

「だけどな、俺は俺自身の幸せは望まない」

そう裕也が告げると、フェイトは勢いよく頭を挙げて、裕也を見つめる

「だったら、私が裕也の幸せを望む! 裕也を幸せにする!」

フェイトの瞳に宿るのは、強い決意だった

「なんで、そこまで?」

裕也は困惑した表情で聞く

「私ね……」

フェイトは顔を赤くしながら、裕也を見つめる

「裕也のことが好きなんだよ?」

それを聞いた裕也は、目を見開く

「フェイト……」

「裕也は、何時も私達を支えてくれて、しかも、守ってくれてた」

「だけど、俺のせいで、フェイトたちの両親を奪ってしまった……」

「そうだけど、裕也は両親だけじゃなくって、妹の美樹ちゃんまで……しかも、美樹ちゃんは操られて……」

「ああ、俺が殺した。だから、あれは俺の罪だ。いや、あれだけじゃない、俺は俺が殺した人たちの全ての罪を背負う、それしか、俺には……」

と、裕也が視線を逸らす

が

「だったらー!」

フェイトは裕也の顔を両側から掴み、無理やり視線を合わせさせた
「私も一緒に背負う! 裕也にだけ背負わせない!」

フェイトは、そう宣言すると

「んっ！」

首筋に抱きついて、唇を重ねた

「んっ!？」

裕也は驚いて、固まった

そして、5秒間ほどキスして

「えへへ…、キス…しちゃった……」

と、顔を赤らめながら裕也を見つめる

「ふえ、フェイト！いきなりなにを！」

裕也は（本人にしても）珍しく、顔を真っ赤にして、慌てている

「言ったでしょ？ 私は、裕也が好きだって。だからね、裕也を支えた

いの」

フェイトは手を後ろで組みながら、クルクルと回る

「フェイト……」

「恋する乙女は強いよ？ 知ってた？」

フェイトは先ほどとは打って変わって、満面の笑顔だった

「そのようだな……」

裕也は微笑みながら、フェイトを見つめた

すると

「あ、雪だ……」

深々と雪が降り始めた

「本当だな……なあ、フェイト」

「なに？」

フェイトは裕也が呼ぶと、回るのを止めて、裕也に近づくと

「メリー・クリスマス！」

「うん、メリー・クリスマス！」

2人は、雪の中で手をつなぎ、踊り始めた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

少し時は戻り、場所は桜公園

「悪いな、委員長。今まで優等生で通してたのに……」

義之は桜公園の桜並木道を歩いていた

なお、隣には委員長ごと、沢井麻耶が歩いていた
今まで、職員室で先生から説教されていたのだ

「今更、なに言ってるのよ」

沢井はそつげなく返事をした

「それに、私も結構楽しかったしね」

麻耶は思い出したのか、微笑む

「そう言ってもらえると、助かる」

しばらくの間、義之と沢井は無言で歩く
すると

「処分、どうなるのかしらね」

と、沢井が義之に尋ねた

「さあなー、音姉がなんか考えてるみたいだけどわからん。多分冬休
みに入ったら、連絡がくると思うぜ」

と、義之は適当に返事をする

「それもそうね」

沢井が返事をする、また無言の時間になった

気付くと、T字路に差し掛かっていた

ここで、右に曲がると、沢井や裕也、フエイトたちが住む集合団地
に行けて、左が義之の家の方角だ

「今日一緒にクリパ回れなくて、残念だったな」

義之はガードレールに腰を下ろして、沢井に話しかけた

「そうね。でも、昨日は楽しかったわ、ありがとうね、桜内」

「あれくらいだったら、幾らでも」

義之は沢井の言葉に手をヒラヒラさせながら、返事をした
すると

「ん？ わあー！」

と、沢井は上を見上げた

それに気付いた義之も、上を見上げる

「これは」

「雪ね」

大粒の雪が深々と降ってきた

「ホワイト・クリスマスね」

「そうだな。なあ、委員長？」

「なにかしら？」

「メリー・クリスマス！」

義之の言葉を聞いた沢井は、しばらく義之を見つめると

「ええ、メリー・クリスマス！」

微笑みながら、そう告げた

PS

その頃、蓮華は……

「待て待て待て！ なぜに水着になってる!? しかも、なんだその露出は!?!」

蓮華の目の前には水着を着た神夜が立っているが、その露出が半端ない

「フッフ……あの小娘の水着を見といて、なにを慌ててるの？」

「だから、小娘って誰だ!?! てか、会話が繋がってねええええええ!!?!」

蓮華は必死の逃亡を開始した

神夜は猛追を開始

結果は……蓮華がアリサの屋敷に逃げ込み、アリサに説教させました

ここから、物語は一気に加速する

生徒会合宿編！

呼び出し

12月29日

冬休み、朝、10時

「ふあああああ……」

誰も居ない通学路を、義之は1人悲しく歩いていく

「たつく……まゆき先輩は、一体なんの用だ？」

それは、今から約10数分前のことだった

回想開始

『今から、生徒会室に集合！ わかった？』

と、電話が掛かってきたのだ

以上、回想終了

「結局、連絡はあれだけだったし」

連絡とは、クリスマス・パーティーで義之たち付属3年3組がやったことへの、通達である

冬休みに入って、既に2日経っているが、教師や、学園長であり、養母の芳野さくらからも何も言われてないのである

その矢先に、あの連絡である

「まあ、学校に行けばわかるけど」

と、義之は一人ごちながらトボトボと、学校目掛けて歩いた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

風見学園 本校生徒会室

「ちわーっす、呼ばれたんですけど……」

と、義之がドアを開けると

「あー、遅いぞー。弟くん！」

「待ちくたびれましたわ！」

「あー、弟くん♪」

「遅かったじゃない、桜内」

「よっ！」

「待ってたよ!」

義之が最後だったらしい

そこには、生徒会役員を含めて全員が集まっていた

「早く閉めてくださらない? 寒いですわ」

「ああ、悪い」

義之は言われて、ドアを開けっ放しだったのを思い出して、慌てて閉めた

すると、まゆきが立ち上がり

「そんじゃあ、本日の主要目的を話し合いますか」

「はーい!」

と、音姫がホワイトボードに書き込み始める

その内容は

〈生徒会反省合宿!!〉

と、書かれている

「ちよい、待って! なんで、俺まで!」

義之は思わず突っ込んだ
すると

「つまりね、沢井と弟くん、それに裕也にフェイトちゃんはね、生贄、人柱、人身御供」

全て同じ意味である

「つまりは?」

「あんた達は、生徒会に差し出されたってことね」

沢井の質問に、まゆきが腕組みしながら答えた

「えーっと、俺達に拒否権は?」

義之は、恐る恐ると聞くが

「あると思ってる? 因みに、あんた達が参加しないと、クラスメイト達がどうなるかな?」

まゆきは、ニヤリと笑いながら言い放った

「汚えー」

「まゆき先輩、それって脅迫じゃ……」

義之は頭を抱えて、裕也は思わず突っ込むが

「なんか、反論ある？（ゴゴゴゴゴ）（黒笑い）」

「ありません、ママ!!」

裕也は、まゆきのあまりの迫力に敬礼しながら、背筋を伸ばした
「よろしい」

「軍隊じゃないんだから……」

まゆきは頷き、フェイトは裕也に突っ込みを入れる

「そんじゃあ、集合場所と集合時間だけど、場所は弟くんの家の前で、
時間は明日の朝7時ね」

「明日!?!」

「了解」

「随分と急ですね」

義之はあまりの早さに驚き、裕也は普通に頷き、沢井は急なことに
驚いていた

「いやー、もともと決まってたんだけどね」

「ちよつと、変更の手続きしてたら手間取っちゃってね」

「因みに、今回の趣旨は、今年の生徒会は打率不振、投手はよかったん
だけどねー」

何故か、野球に例えて話し始めるまゆき

「対非公式新聞部相手に要所要所は抑えられて、良かったんだけどね、
豪快な逆転ホームランとまでは行かなかったのよ。それが、裕也の活
躍で成功したから、この成功の秘訣を忘れないうちに復習しよう」と
思ってたね、そのための生徒会旅行なのよ」

「「なるほど」」

「それじゃあ、解散！各自荷物を纏めて明日遅れないように集合し
ましよう!」

と、音姫は手を叩きながら言う

「待った、音姉。日程は何時まで?」

と、義之が質問した

「来年の2日まで」

「長! せめて、大晦日までかなー、と思ったのに」

「皆で年越し! まあまあ、学校のお金で旅行出来るんだから、楽し

みなさいな！」

「はあー、了解…」

「家はどうしよう………」

日程を聞いた沢井が、不安そうに呟いた

「家がどうした？」

「お母さん寝たきりなのよ、それに、小さい弟も居るし………」

「あらら、弟くん幾つなの？」

「まだ5歳なんです」

沢井の言葉を聞いた裕也は、フェイスとアイコンタクトを交わす

「それならば、俺と」

「私に任せて」

「え？ 悪いよ………」

「構わん。エリオとキャロはしっかりしている。それに」

「うん、母さんも居るし、アルフも居るから大丈夫だよ」

それを聞いた沢井は、しばらく黙考すると（え？ アリシア？ ア

リシアは少し天然なために除外しました）

「それじゃあ、お願いしてもいいかしら？」

「ああ、大丈夫だ。それに遠慮するな？」

「そうだよ、私達友達でしょ？ 友達なら、助けるのは当たり前だよ
！」

「ありがとう」

こうして、生徒会メンバープラスαの生徒会合宿が決まったので
あった……

PS

「ふむ、司法取引か………」

「そ、悪い話じゃないでしょ？ 学校に閉じ込められるよりかは、有意
義だと思うけど？」

「ふむ……いいだろう、その話乗った！」

「俺もいいぜ！」

「私も行きましょう」

「あんたたちはどうする？」

「」「行きます！」「」

「OK！ 交渉成立ね！」

という、やりとりがあつたとか……

到着！ その場所は……

翌日、朝7時

場所、芳野家前

太陽もまだ昇りきっていない時間に、芳野家の前にバスが止まった
「全員居る？」

まゆきが最後の確認のために、周囲を見回す

「何気に、由夢も来るんだな」

音姫の隣には、妹の由夢が荷物を持って立っていた

「おじいちゃん、なんでもお友達と温泉に行くんだって。それで、由夢ちゃん1人だけになっちゃうから、ついでに一緒に連れて行こうってなったの」

音姫が、義之の疑問に答えた

「沢井、家のことならば、エリオとキヤロに任せておけ」

裕也は家族が心配なのか、先ほどから家の方向をチラチラと見ている沢井をたしなめる

「そうだよ。それに、母さんにアルフも居るから大丈夫だよ」

「そうね、ごめんなさい」

沢井が2人に謝っていると

「それじゃあ、荷物を搬入したら乗って！」

と、指示がされたので、全員荷物を入れてから、バスに乗った

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

現在、バスは高速道路を走っている

因みに、席順は以下の通り

バス前

出入口

音姫 まゆき 通路 先生

義之 麻耶 フェイト 裕也

エリカ 由夢 クロノ エイミィ

スバル ティアナ ギンガ 役員

以下略

まあ、現在全員好き勝手に移動しているので、基準にならず以降は音声でお楽しみください

「由夢先輩、色んなものを持ってきたんですね」

「はい、道中暇つぶしにいいかな？ と、思いました」

「おっしや！ 裕也、そっちにジンオウガ行った！」

「任せろ！ くらえや、気刃斬り！」

「ふむ、S2Uはこんなもんか」

「あ、このお菓子美味しい」

「でしょー？ 頑張って作ってみたの！」

「ほー、今度作り方教えて？」

「それで、ここなんだけど」

「ああ、そこはこの公式を当てはめればできるよ？」

「負けないよ、ギン姉！」

「かかってきなさい！」

「うっさい、バカスバル！」

「ふふふ、行くぞ同志よ」

「わかっとなるわ」

「うーん、いいのかな？」

「気にしたら負けなの」

「狭い…」

「楽しみだぜ！」

「あの場所では、私の独壇場ですよ？」

「上等よ！」

「もう少し静かにして！」

「ん？ なんか変な声か？」

「そうか？ 気のせいだろ？」

数10分後

「はい、皆聞いて！ 次のSAが最後の休憩所になります！ トイレとか行っておいてねー」

と、バスが止まった

「ちよつと、トイレに行くか」

「俺も」

裕也と義之を始めとして、次々に降りていく生徒会の面子
そして、トイレ休憩も終わり、出発して数時間後

「着いたー!」

場所は……

「うおー、一面銀世界! って、待てい!!」

スキー場だった

義之は、思わず突っ込みを入れた

「ん? なに?」

「なんでスキー場!」

「防人から聞いてたけど、本当だったのね……」

「なー!? 反省旅行って聞いて、禅寺とでも思ってたの?」

「ええ、正直そう思ってたよ」

「まあ、反省旅行っていうのは建前で、本当は生徒会役員に対する慰安
旅行が目的なんだ」

「なんなら、あんた達だけ禅寺に放り込んでもいいけど?」

まゆきが、ニヤリと笑いながら言う

「「いえ、遠慮します!!」」

問題児4人は同時に拒否した

「スキー旅行なら、言ってくればスキーセット一式あったのに」

義之は腰に手を当てながら、ため息を吐いた

「そういえば、弟くんってスキー上手なんだっけ?」

「そりゃーもう、上手だよー♪ 私達に教えてくれたの弟くんなんだ
から!」

まゆきは義之に聞いたのに、何故か自慢げに胸を張る音姫

「そうなんだ、桜内、去年のスキー旅行、風邪で欠席してたから知らない
のよね」

昨年、風見学園の付属2年生全員で行った修学旅行で行ったのがス
キー場なのだが、義之は高熱を出してしまったので、欠席したのだ
「そんじゃあ、貸し出しセットを借りる人たちも借りたら、着替えて、
ファミリー用のゲレンデに一回集合ね?」

「「「はい!!」」」

こうして、生徒会プラスαのスキー旅行が始まったのだった
その後

「ほれ、あんたたち。降りるなら今のうちよ?」

「あー、狭かった」

「本当ね。腰が痛いわ」

「うー……胸が……」

「ごちそうさまでした!!」

「　　ちゃん……」

「相変わらずのおっぱいソムリエめ……いっぺん捕まえるべきか?」

どうやら、追加がいるようである

スキー開始！

貸し出しセットを借りて、着替えて、ファミリー用ゲレンデに集まった一同

「そんじゃあ、今から全員の腕の確認をするから順番に滑ろうか」

「「はい！」」

「そんじゃあ、最初はスバルから！」

「はい！」

スバルは元気よく返事をする、ゴーグルを装着して

「スバル・ナカジマ行きます!!」

と、滑り出した

以下省略

で、結果は

上級者 桜内義之 高坂まゆき フェイト・T・ハラオウン 防人

裕也 ギンガ・ナカジマ

中級者 スバル・ナカジマ ティアナ・ランスター 朝倉音姫 朝

倉由夢 クロノ・ハラオウン 沢井麻耶

初心者 エリカ・ムラサキ エイミイ・リミエツタ

こうなった

「エイミイ……相変わらず、よくこけるなお前」

クロノは、転んで雪まみれになっているを見てため息を吐いた

「見てないで起こしてよー！」

エイミイは逆さ状態で、クロノに助けを求めた

「エリカちゃんも、無事でよかった」

「だって、下手に転んだら骨折すると聞いたものですから……」

「まあねー、確か知り合いで膝を骨折した奴が居たなー」

「桜内、本当に上手ね」

「まあな、昔からやってるし。俺の料理の他の数少ない特技だな」

「裕也も上手だね」

「うむ……1年ぶりだが、案外うまく動けたよ」

と、それぞれ話していると

「そんじやあ、時間的にもちようど良いし、1回お昼休憩にしようか」

「「「はーいー!」」」

で、お昼

「ギンガさんとスバル、本当によく食べますね……」

裕也は2人が持っているトレイを見て、頬が引きつっていた

理由は、2人が持っているトレイにあった

両手に持っているトレイには、それぞれ

スバル 右手 カツカレー（大盛り） ミートスパゲッティ（大盛

り） 左手 ラーメン（大盛り） チャーハン（大盛り）

ギンガ 右手 ピラフ（大盛り） カツ丼（大盛り） 左手 月見う

どん（大盛り） ペペロンチーノ（大盛り）

を、持っているのだ

「え？ まだ少ないほうですよ？」

「どんだけだよ!!」

「見てるだけで胸焼けしそう……」

「一体、どこに消えるんですの？」

義之、沢井、エリカの3人からは、三者三様の言葉

「あははは……、相変わらずだなー」

「確か、前に行った焼き肉屋の店長が土下座したよな。『もう勘弁して

ください!!』って」

「なぜだろうか、その店長さんに同情したくなるのは……」

「ギンガとスバルだけ、ピンポイントで立ち入り禁止になった店って

幾つだったか」

「えっと、8店だね。しかも全部バイキング形式」

（なぜかな、眼から涙が……）

クロノとエイミイの言葉を聞いた義之は、目頭を押さえた

そんなこんなで、昼食も終わり

「そんじやあこれからだけど、チェックインまでまだ時間があるから、

自由時間にしますー!」

「「「おおー!」」」

すると

「ねえ、桜内」

「んあ？　なんだ？」

「コツを教えてほしいんだけど……いいかしら？」

「おお、いいぜ！」

「裕也、一緒に滑ろう！」

「OK！　行こうか！」

「5時までには戻るんだよ！」

と、それぞれ別れた

ここから、恋の物語はどう進むのか

それは、誰にもわからない

「ひゃっはー！　俺に追いつけるなら、追いついてみやがれー！　！！」

「何処のスピード狂よ、あんた！！」

「あれは最早、イノシシだな……」

「わわわっ！　もう少し遅く！」

「……相変わらず、運動神経鈍いんだね……」

「むう、こうか？」

「そうそう、上手ね」

「いやー、絶景やね！」

「待って、こっちは来ないで！」

「眼が怖いよ」

「すまねえ、止めてえが……巻き込まれたくねえんだ」

「こちらは、楽しんでる模様」

それぞれの時間

義之 side

俺は今、委員長と一緒に中級者コースを滑っていた

「桜内どうかしら？」

「少し、膝が堅いかな？ もう少し柔らかく動かそう」

「わかったわ」

俺は少し、周囲を見ると

「お？ ちょうどいい見本が来るぞ」

と、委員長に教えた

「え？ あれは、防人とフェイトさん？」

そう、上の上級者コースから裕也とフェイトが滑ってきたのだ。

因みに裕也は青地に黒いラインのウェアを着ていて、フェイトは黒

字に黄色のラインが入っている

「二人の足を見てみ、柔軟に動いてるだろ？」

「本当ね」

2人の足は、右に左に動き、時々ショックを受け止めるために、膝が曲がっている

「あれがベストだな」

「なるほど」

「委員長だって、運動神経は悪くないんだ。あれくらい出来るようになるさ」

そう、委員長は決して運動神経は悪くないのだ。（悪いのは、なのはと小恋だ）

それは、春先の運動会で分かっている

「ありがとう、それにしても桜内も教え方が上手ね。慣れてるの？」

「ん？ ああ、まあ、慣れてるな。音姉と由夢に教えたの俺だし」

「そうなの？」

「ああ、ガキの頃から一緒に育ったからな」

「なるほどね」

委員長は微笑んだ

「そんじやあ、下まで滑ろうぜ！」

「ええ！」

そうして、俺達は時間まで滑った

義之 side END

第3者 side

「悪い、少しトイレ行ってくる」

「うん、わかった」

裕也はそう言うと、スキー板を外して、トイレに向かった

フェイトは、裕也のスキー板の近くのベンチに座った

「ふう、久しぶりだから疲れちゃった」

と、フェイトが休んでいると

「彼女！俺と一緒に滑らないか？」

と、フェイトの机の向かい側に男が座った

「すみません、人を待ってるので」

と、フェイトは言うが

「君みたいな、かわいい子を待たせる奴なんかほっといてさ、一緒に行こうぜ！」

と、男はしつこく言い迫り、フェイトの肩に手を置こうとしたが

ガシッ！

と、その手は掴まれた

「人の連れに、なにしようとしてんのかな？」

掴んだのは、裕也だった

「裕也！」

「ああ!? なんだてめえ!？」

「彼女の連れだが？」

男は、勢い良く裕也に掴まれた手を振りほどくと

「おい！俺はAAランクの魔導士だぞ!?! てめえみたいなガキに負けるわけねーだろ!!」

と、懐からデバイスを取り出す

「AA? それがどうした? そんなの、俺の通ってる学校にはウジャウジャ居るが？」

裕也は阿修羅を外して、フェイトに渡す

「ふざけたこと又かすんじやねー！ ブレイズキャノン!!」

男はデバイスを展開すると、裕也に砲撃魔法を放った

「裕也ー!」

「ふん」

裕也はつまらなそうに、片手で上に弾いた

「……は？」

男は目の前の事態が信じられないのか、茫然自失になっている

「魔力の密度が弱い、集束もお粗末。魔力が高くてもこれじゃあ、宝の持ち腐れだ。それと、相手の力量もわからないのか？ ド三流」

「んだと!? 片目のガキが!!」

と、男が追撃を放とうとしたら

「おい！ 誰だ！ さっきの魔法は!!」

と、数人の山岳警備隊の姿

「ちっ!」

男はデバイスを仕舞うと、慌てて走っていく

それを追う山岳警備隊。しかし、1人は裕也に近づくと

「すまないが、君も着いてきてくれるかな？」

裕也は懐に手を入れると

「ちよつと」

と、手招きする

「なんだね？」

裕也は周囲に見えないように、なにかを見せた。すると

「失礼しました!!」

と、警備隊は敬礼した

「大丈夫です、気にしないから」

と、警備隊は裕也から離れた

それを見たフェイトは、裕也に近づいた

「なにを見せたの？」

と、小声で聞いた

「これ」

と、フェイトに見せたのは、手帳だった

その手帳には、楯の上に交差する銃と剣のマークが書かれていた

「これは？」

「ガーディアンズの紋章。警察や警備隊の人たちは知ってるからね、外交特権に近い」

「要するに、裏技だね」

「うむ、あまり使いたくないけどね」

裕也は手帳を懐に仕舞いながら、呟いた

すると、フェイトに振り向き

「そんじゃ、滑りますか！」

「うん！」

こうして、2人は時間まで滑ったのだった

「はーっはっはっはっは！ 俺、最速!!」

「いい加減に止まれー！」

「最早、ただの暴走機関車だな」

「捕まえようか？」

「ううん。それより、O☆H A☆N A☆S H I☆なの！」

「やめて！ 雪崩が起きるから！」

「誰か、この魔砲少女を抑えて！」

少し、大変な事態になっていた

夕食と会議

夜 場所 ペンション食堂

「さーて、晩飯だ。腹減った〜」

と、義之は背伸びしながら食堂に入ってきた

「んあ？」

義之の視線の先には、窓辺に立つまゆきの姿があった

「……………」

まゆきの視線の先に見えるのは、ライトアップされたゲレンデ
このペンションは、スキー場の近くに建っているのだ

「まゆき先輩」

「ん？ あー、弟くん」

まゆきは視線を義之に向けた

「どうしたんですか？」

「ん〜？ ここを合宿場にして良かったなーって」

まゆきは外を見ながら、義之に答えた

「そうですね。スキー場も近いですから、すぐに行けますからね」

「あはは、そうだね」

と、2人が話していると

「お待ちせ〜」

「お、お姉ちゃん。歩くの速いです」

「あ、ああ。ごめん」

と、ゾロゾロと他の生徒会の面子が現れたが……

「なんか、音姉の後ろにお年寄りが居るんだが？」

と、義之の視線の先にいたのは

「誰がお年寄りですか！ あぐっ！」

腰に手を当てている、エリカだった

「エリカちゃんね、最初の1時間くらいで派手に転んじやつてね」

「あらら。まあ、打撲くらいですんで良かったじゃん」

「は、はい。あぐっ！」

エリカは冷や汗を流しながら、席に座った

エリカに続き、全員椅子に座る

「それじゃあ、明日も私が教えてあげるからね」

「お姉ちゃんの教え方、あんまり上手じゃないですけどね……」

「がっがーん!!」

音姫は頭を抱えた

「こ、こらこら?」

妹のあんまりな言葉に、義之も突っ込みを入れるが

「だって、『足をこーして、こーしたら、すーっていけるから』とか、そんな説明ばかりなんですよ?」

某女尊男卑の世界の1st幼馴染のような、説明だったようだ

「多分、教わるほうは全然わからなかったと思います……」

わかつたら凄いなと思う

「だ、だって、だって、本当だもん! 足をこーして、こーしたら、すーと行けるんだもん!!」

子供か

と義之は、内心突っ込みを入れた

「確かに、ちよつとわかりづらかった……かも」

「あ、あははは……」

まゆきは苦笑いしか出来ないでいた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、夕食後

生徒会はペンションの食堂を借り切って、会議を始めた

義之と麻耶、由夢は実質的に関係は無いので、端つこの椅子に座っている

「じゃ、このプリントを順番に回して」

順番にプリントを回していく役員達

そして、全員にプリントが行き渡つたのを確認すると

「そこに書いてある通り、今回の議題は本年度の反省と来年3月の卒業パーティーに於ける運営。それと、非公式新聞部対策です。前回のクリパの反省点と、今後も活かすべき点をレクチャーしていきたいと思います。まず、反省点なんです……」

「兄さん……」

由夢が小声で義之に声をかけた

「ん？」

「こないだのクリパ、今後の生徒会の模範になるような取り締まり方だったんだって？」

「そうなんか？ あんまり詳しくは知らないんだけど。委員長は？」

「私も知らないわよ」

「そうなの？ お姉ちゃん騒いでたよ？ 実際はしやぎすぎて怪我をする人が、今年はほとんど居なかったし……、それだけ、生徒会の目が厳しく、羽目を外す人が少なかったってことだよ。保健委員としては、今年のクリパほど楽なものは無かったなあ……」

由夢は遠い眼をして上を見る

「そうなんか」

「ふーん」

と、3人が話している

「非公式新聞部のアジトは、今押さえているのが、この箇所と、この箇所」

と、まゆきが机の上の地図を指差して説明している

「でも、ここを使う可能性はもう低いわね。今後は、どこに奴らが新しくアジトを作るか、目を光らせる必要があるわね」

「今のところ、怪しいのはこの箇所と、3階のこの部分で……」

会議は、音姫とまゆきの指揮の元、テキパキと進む

「……そんな訳で、今後、弟くんの協力が必要かもね？」

「はい？」

義之は、いきなりの事態に目が点状態になっている

「えっと、拒否権は……？」

義之は、恐る恐る手を挙げて聞くが

「あると思ってる？」

まゆきのイイ笑顔

「ですよね」

義之はあきらめたのだった

「まあ、杉並に関しての情報があつたら教えてちようだい、程度でいいから」

「了解…」

「えっと、私は？」

「まあ、沢井さんは有事の際に弟くんの補佐くらいかな？」

「私ですか？」

沢井は驚いた表情をしている

「そ、沢井もなんだかんで、要注意人物達に近しいからね」

「なるほど」

「それじゃあ、続きですが……」

この後9時近くまで話し合つて、風呂になつたのだ

PS

「ねえ、これって生きてるの?」

「まあ、兵糧丸を入れておけば復活しますよ」

「ふむ、あれは見事なコンボだったな。バーニングフィストで打ち上げてからの、フレアシューター。そして、トドメのプロミネンス・ブレイカー。流れるような見事なコンボだった」

「完全に黒焦げになつてるんだけど!」

「まあ、これでも隊長格を任せられる人物ですから、この程度では死にませんよ。あ……ほら」

「俺、復活!!」

「うわあ……台所の黒い悪魔並なの……」

「俺をイニシャルGと一緒にするんじゃないやねええ!」

「本当に、元気だね」

こちらは、無事だったようだ

王様ゲーム!!

夕食&会議後

場所、義之の部屋

「俺だけで使っていいのかな〜」

義之は、くじ引きで自分の部屋になった部屋を見回す

その部屋は本来、2人部屋なのだが、人数の都合上1人になったのだ

因みに、他の割り振りはこうである

- 1、音姫・由夢
- 2、まゆき・エリカ
- 3、スバル・ティアナ
- 4、クロノ・エイミィ ↑付き合っているので、大丈夫と判断
- 5、ギンガ・麻耶
- 6、フェイト・裕也 ↑これは、どうやらまゆきの陰謀のようである
- 7、義之

因みに、他の役員は省略します

そして、義之がボーっとしていると

「お邪魔〜!」

と、まゆきが勢い良くドアを開けて入ってきた

「まゆき先輩? それに、音姉達まで」

「やつほー、弟くん」

まゆきの後ろには、音姫に由夢、裕也、フェイト、麻耶、ギンガ、スバル、ティアナ、クロノ、エイミィが居た

「全員来るなんて、どうしたんですか?」

「ん〜? ちよっと、お戯れ(イベント)のお知らせをば」

「イベント?」

「そ。ってなわけで、移動しようか」

部屋を移動して、オーナーさんに空いていた6人部屋を貸してもらった

そして、始まるのは……………

「王様ゲームー！」

「「「イエー!!」」」

王様ゲームだった

テンションは無理やりである

「てなわけで、裕也！・説明!!」

「了解」

まゆきに指名された裕也は、空間魔法で箱と紙を出した

「ここに、王と書かれた紙と、数字の1〜11の数字が書かれた紙があります。これを、この箱に入れて、それを各自に引いてもらいます。そして、王と書かれた紙を引いた人物は1〜11の数字の中から番号で指名して、命令が出来ます。なお、誰が何番を引いたかは絶対に宣言しないでください。言った場合は、やり直しとなります。そして、これが最大のルールです。王様の命令は？」

「「「絶対!!」」」

「はい、その通りです。ただし、節度は守ってくださいね？」

「「「当たり前!」」」

「それでは、第1回目を始めます！　せーの!」

「「「王様だーれだ!」」」

全員紙を引くと、開いて確認する

「よっしゃ！　あたし!」

最初はまゆきのようなだ、まゆきの手には〈王〉と書かれた紙があった

「では、まゆき先輩。命令をどうぞ」

「につひつひら、なんにしようかな」

と、腕組みしながら笑うまゆき

「なにを命令されるんだろ」

「ドキドキします…」

「さすがに、緊張しますわね…」

と、全員が見ていると

「そんじゃあ、3番が自分の恥ずかしい過去話を暴露!」

と、言うのと

「えー!? 私だー!!」

と、音姫が頭を抱えた

「よっしやー! 大当たり!!」

まゆきはガッツポーズをして、喜んでいる

「よかった、私じゃなくって…」

フェイトは露骨に安堵していた

「そんじゃあ、話してもらいましょうか!」

「あううう。え、えーつと、通学路にマキタさんってお家があるの知ってる?」

「ああ、知ってる知ってる」

「確か、大型犬を飼っている家ですね」

「そ、何時もは登校する時に頭を撫でるんだけどね、その日は少し寝坊しちゃって」

回想開始

「うわーん! 寝坊しちゃったー!!」

と、件のマキタさん宅を通り過ぎると

「バウバウバウバウ!!」

と、追いかけてきて

「きゃー! ゴめ、(ゴン!!) あ痛っ!」

以上

「追いかけられたから驚いちゃって、前を見ないで走ってたら、電柱に顔をブツけちゃったの」

「あはははははは! ええ、マジで!」

まゆきは、お腹を抱えて大笑いしている

「ああ! だから、あの日おでこが赤かったんだ!」

エイミイは手をポンと叩いて納得している

「そう。しかも、ぶつかった所を、バスを待ってた幼稚園の子供達に見られて……、凄い笑われたの」

「お、お姉ちゃん……」

「だはははははははははー!」

義之は大爆笑で、お腹を抱えて転がっている

「義之よ、笑いすぎだ」

裕也は、義之をたしなめている

「ううう〜！ 今度は私が命令してやる！」

音姫は恥ずかしかつたのか、目元に涙を溜めているが、決意の光を瞳に宿した

「だったら、王を引かないとな」

「私も引きたいですね！」

「なにを命令しようかなー」

「取らぬ狸の皮算用を、しないの」

と、各自言い合っている

「そんじゃあ、2回目始めるよ！ セーの！」

「「「王様、だーれだ!!」「」」」

すると

「僕だな」

と、クロノの手に王のクジ

「ふむ、そうだね。11番が全員分のジュースを買ってくる」

「げ！ あたしだよ……」

まゆきは近くのカバンから財布を取り出すと

「行って来るわ、勝手に進めてて」

と、ドアを開けて出て行った

「了解。それじゃあ、3回目だ。セーの！」

「「「王様だーれだ!!」「」」」

「あたしですね。それじゃあ、8番が9番にイタズラで」

と、言う

「む、僕が喰らうのか。相手は誰だ？」

クロノの手には9のクジ

すると

「クローノくん」

と、エイミイがクロノの肩を指で叩いた

「エ、エイミイ？ まさか……」

と、クロノは顔を蒼くする

エイミイはゆつくりと、クジを見せた

そこには、8のクジが有った

「最悪だ……」

クロノは、綺麗なorsとなった

「ただいまー！ って、クロノどうしたん？」

まゆきが両手にジューズを抱えて入ってくるが、orsになっているクロノを見て眼をキョトン、とさせた

「えつとね、ティアナちゃんが8番が9番にイタズラするって、命令しただけどね。9番がクロノくんで、8番がエイミイちゃんだったの」

「あー、なるほどね。エイミイのクロノいじりは強烈だからねー」

まゆきはジューズを置きながら納得している

「ふふふ……、それじゃあ、始めようか。クロノくん」

と、笑いながらクロノに迫るエイミイ

それをクロノは、絶望した表情をしながら後ずさり

しばらくお待ちください……

ギャー……！

そんなもって
閑話休題

クロノは言葉では表現できない状態で、倒れている

「そんじゃあ、次始めるよ。セーのー」

まゆきは、そんなクロノを無視して始めた

「「王様だーれだ!!」「」」

「あたしですー!」

高々と掲げたスバルの手には、王のクジ

「変な命令しないでよね」

ティアナは罪悪感からか、クロノから視線を外している

「うーん、それじゃあ。1番が好きな人の名前を暴露する!!」

と、言う

「え!? 私!？」

沢井が驚いた表情で、スバルを見た
もちろん、沢井の手には1番のクジ

「ほほおー。ここで沢井に当たったか〜」

まゆきは腕組みしながら、ニヤニヤしている

「えつと、言わなきやダメ?」

沢井は顔を赤くしながら、周囲を見回す

「二「当たり前!」二」

「うう……」

沢井は恥ずかしがって俯き

「私の好きな人は……」

「好きな人は?」

「い」

「言えない、っていうのは無しな?」

「うぐっ!」

沢井は、裕也に言われて凶星だったようで、ため息を吐くと

「言うわよ。私の好きな人は」

「好きな人は?」

「………さ」

「さ?」

「………桜内よ」

「へ?」

沢井の言葉に、全員しばらく黙っていると

「二「なんだってえええー?」二」
!!「二」二」

全員の叫びが夜天に響いた

「ふっふっふ、王様が2番の胸を揉む!!」

「誰だ! 王様ゲームをしようと言った奴!!」

「よりによって、最悪な人に王様が……」

「さて、2番は誰だ?」

「うう〜…あたしだ〜」

「私じゃなくって、よかった……」

「さすがは、おっぱいソムリエ……眼が怖い……」

こちらも楽しんだ

王様ゲーム！ その2

「ま、マジか……」

「いやー、これは……予想外だね」

「うう……」

「まさか……沢井さんが義之くんが好きなんてねー」

現在、王様ゲーム真っ最中である

「あ、でも、まだわからないからね!？」

「あいよ、それにしても義之が静かだな」

裕也は義之が静かなのを不振に思い、振り向くと

「兄さん？」

「……………」

「うお!? 処理落ち仕掛けてやがる!!」

義之は目が点状態で固まっていた

「あー、義之くんにとっては初めての事態だからね」

「仕方ない、起きろ!!」

裕也は何処からか大きなハリセンを取り出して、義之の頭を叩いた

「はっ!? 俺はいつたい!!」

「お、起きた」

「これでよし、あれ? そういや、音姫先輩は？」

「……………」

「うわ! 音姫先輩まで!？」

「お姉ちゃん!!」

「あー、音姫は弟くんLoveだからねー」

まゆきはそう言いながら、音姫の後ろに回り込み

「音姫を起こすには、これが手っ取り早いよねー」

と、悪い笑顔をしながら両手の人差し指をピンと立てて

「音姫ー起きろー!」

ドスッ!

と、音姫の脇を刺した

「にゃ!？」

音姫は、まるで猫のように叫びながら飛び上がった

「まゆき！ 脇の下刺すの止めてって、いつも言ってるでしょ！ 脇の下弱いんだから！」

「音姫がフリーズするのが悪いんでしょ？」

「え？ フリーズ？ どうして、フリーズしたんだっけ？」

「どうやら、フリーズした理由を忘れてるらしい」

「まあ、忘れてるなら、いつか。無理に思い出す必要もないし」

「そうだな。それと、時間的に次が最後だ。」

時計を見ると、既に10時を指している

「うお！ 俺まだ風呂入ってねー」

義之以外は全員パジャマである

「じゃあ、ちようどいいね。せーの！」

「「「王様だーれだ！」「」」」

「私だね」

「おお、フェイトか。結局俺は無しかよ」

裕也は肩を竦めながら言った

「うーん、それじゃあねー」

と、フェイトは悩み始めた

(裕也にお姫様抱っこしてほしいけど。そのためには、番号を当てないとね)

と、考えていると

〈5番が裕也だ〉

(へ?)

誰かから念話が聞こえた

〈そして、ついでに7番が9番にお姫様抱っこも追加で〉

「へ？ へ？」

フェイトは視線を左右に振った

「どうしたフェイト？ 周囲を見回したりして」

クロノは、いきなり周囲を見回したフェイトをいぶかしんだ

「う、ううん。なんでもない！」

フェイトは首を左右に振って否定すると

(言ってみようかな)

先ほど聞こえた念話を、信じてみることにした

「それじゃあ、5番が王様をお姫様だつこと、7番が9番をお姫様抱っこでペンションを1周！」

「俺がフェイトをお姫様抱っこか」

「どうやら、先ほどの念話は本当だったようだ

「俺もか、9番は誰だ？」

「どうやら7番は義之だったようで、9番は……」

「わ、私……」

沢井の手には9番のクジ

「お、おう……」

義之は、あからさまに緊張している

「わーん！　なんで私じゃないのー！ー！」

音姫は涙目で、床を叩いている

「はいはい、これは完全に運なんだから。あきらめなさい」

まゆきはそう言うのと立ち上がり

「そんじゃあ、裕也にフェイトちゃん、弟くんと沢井以外は片付けを始めようか」

「「「はーい」」」

「それじゃあ、裕也。お願いね♪」

「あいよ」

「さ、桜内もお願いね？」

「お、おう」

裕也はフェイトを、ヒョイとお姫様抱っこして、義之はギクシヤクしながら沢井をお姫様抱っこした

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ほんじゃ、途中で会わないように時間差で出発な」
「おう」

と、話すと、裕也は先に出発した

「……………」

「……………」

2人の間に気まずい沈黙が訪れた

「あ、あのさ」

「お、おう。なんだ?」

見えて、微笑ましいのである

「私、重くない?」

「大丈夫だぞ? むしろ、軽いくらいだ」

「そ、そう」

そして、また沈黙が訪れた

そして、3分ほど経過すると

「そんじゃあ、そろそろ出発するか」

「そ、そうね」

2人も出発した

「ふう…ふう…」

現在位置は居間である

「結構恥ずかしいわね、これ」

「俺だつて恥ずかしいから、お相子だ」

「そ、そうね」

次

「ここは、別に来なくてもよかつたんじゃないのかしら?」

露天風呂である

「まあ、そうなんだがな。1周つて話だったしな、っと誰か入ってるな」

「そうみたいね…ねえ?」

「なんだ?」

「一緒に…:…:入る? (顔真っ赤)」

「ぶふっ!!」

沢井の一言に義之は思わず吹いた

「お、おまつ!!」

「じよ、冗談よ」

「頼むから、心臓に悪い冗談は止めてくれ…:…」
次

「ぎ、寒いんだけど……」

玄関付近である（外）

「流石に外は止めておこう、寒すぎる」

そして、中に入り

食堂

「大体1周したな」

「そうね」

と、その時だった

バツン!!

と、電気が消えた

「きゃ!?!」

「おっと? 停電かな?」

すると

「すいませくん! こちらのミスでブレーカーが落ちてしまいましたー!」

「あ、大丈夫です!」

義之は勤めて明るく返事をした

そして、数秒後

電気が点いた

「お、点いたな。委員長、大丈夫!?!」

気付くと、沢井は義之に抱きついていて

「あー、ご、ごめん……」

沢井は抱きついてることに気付いたらしく、顔を赤くしながら両腕を放した

「だ、大丈夫だ。まあ、突然暗くなったら誰だって怖いだろ」

「ありがとう……」

そして、義之は沢井を当てられた部屋の前まで運んだ

こうして、1日目は終了したのだった

そんでもって

「待て！ その命令はさすがにシャレにならねえ!!」
「えく？　なんで？　私は、全員の好きな人言うって、命令をしただけだよ?」
「今、この場においては、それは爆弾以外なんでもねーんだよーー!!」
「ふむ……俺は居ないな」
「僕は……………」
「え!?　　くん!?」
「私は……　よ!!」
「あたしは……………誰やる?」
「あ、私は…………　　くんだよ?」
「二二「え!?　マジで!!」二二」
「ちくしよーー!!　俺は言えるかーー!!」
「逃がすかーー!!　フレアシューター!!」
「アイシクルキャノン!!」
「ちきしよーー!!」

こちらは、修羅場を迎えていた（笑）

非公式新聞、参上!!

翌日 昼

場所 スキー場食堂

生徒会一行が昼食を食べていると
バンツ!

と、ドアがもの凄い勢いで開き、2人の生徒会役員が走りこんできた

「会長、副会長大変です!!」

さうとう慌てているようで、転びそうになりながらも駆け寄ってきた

「どうしたの、落ち着きなさい。他のお客さんに迷惑でしょ」

「す、すみません。しかし、緊急なんです!」

役員は謝りながら、手に持っていた紙を机に叩きつけるように置いた

そこには

〈非公式新聞部 参上!!〉

の文字があった

「「「なんだってー?」」」」?!!」」」

全員の声が、食堂に響き渡った

「これ、どこにあったの?」

まゆきは紙を指差しながら聞いた

「はい、入り口付近のボードに貼ってありました」

「そっか、音姫!」

まゆきは頷くと、音姫を見る

「うん、了解」

音姫はうなずいてから、立ち上がると

「生徒会の皆、お休みは一時中断! これから、対非公式新聞部行動を開始します! いいですね?」

「「「はい!」」」」

役員全員の様子は変わり、真剣な表情になっている

「ちよい、待ってくれ！ 音姉、杉並は確か学校で反省合宿中じゃ!?」
と、義之は手を挙げて聞くが

「弟くんはさ、あの問題児が素直に勉強すると思ってるの?」

「思いません……」

「思えないわね……」

まゆきの言葉に、義之と麻耶は俯いた

「杉並だからな……」

「杉並くんだから……」

裕也とフェイトは腕組みして、唸るように呟いた

「それじゃあ、今から組み分けします!」

音姫が組み分けを開始した

で、結果は

- 1、音姫&まゆき
 - 2、ノーヴェ&ギンガ
 - 3、クロノ&エイミイ
 - 4、由夢&エリカ
 - 5、裕也&フェイト
 - 6、義之&麻耶
 - 7、ティアナ&スバル
- と、なった

「それじゃあ、担当区域を発表するから全員覆えて!」

「「「はいー」」」」

そして、発表された区域は

音姫&まゆき E地区の全ロツジの確認

ノーヴェ&ギンガ 上級者コースの確認

クロノ&エイミイ ファミリーコースの確認

由夢&エリカ 中級者コースの確認

裕也&フェイト B地区の全ロツジの確認

義之&麻耶 旧火口付近の確認

ティアナ&スバル 初級者コースの確認

「全員、担当区域は覚えたね!」

「「「はい！」「」」」

「それじゃあ、なにも無かったら2時間後にまたここに集合をお願いします！ なにかあったら携帯で連絡を！ いいですね？」

「「「はい！」「」」」

「それじゃあ、全員散開!!」

まゆきの号令を聞くと、全員走って外にでた

「行くぜ、委員長！」

「ええ！」

「なんとしても、見つけっぞ！」

「うん！」

この日、時間ギリギリまで全員で探したが、結局見つからなかったのだった

「ふっふっふ……さあ、雌伏の時は終わりだ！」

「おうよ！ 楽しみだぜ！」

「さてと、暴れるで！」

「うう………気が重いの………」

「まあまあ、がんばろうよ」

「あんななんかには、絶対負けないわよ！」

「ふふふ………望むところよ」

「はあ………ごめんね？　　くん」

さて、どうなるのか

それぞれの年越し

12月31日

夜 コテージ

「寒いな」

もうすぐ0時になろうとしている時、義之は外に出ている理由は、なんとなく星空が見たくなっただからだ

吐いた息は白くなって、すぐに消える

そして、義之は周囲を見回す

すると、1箇所で見つけた顔を見つける

「おーい、委員長」

「あら、桜内。どうしたの？」

沢井麻耶だった

「ん？ まあ、なんとなく星が見たくなっただけ。そう言う委員長は？」

「私も似たようなものよ。……ねえ、一緒に見ない？」

「いいぜ」

と、答えた

「ありがとう」

沢井は返事をする、上を見上げた

義之も見上げる

上げた2人の視線の先に広がるのは、満点の星空
冬で空気が澄んでいるからか、はっきりと見える

「綺麗ね」

「だな」

2人は言葉少なげに話す

すると、遠くから

ゴーン

と、鐘の音が聞こえた

「お？ 除夜の鐘だな。ってことは、新年明けたか」

「そうみたいね」

2人は顔を見合わせて

「あけましておめでとうございます」

と、同時に頭を下げた

これぞ日本の挨拶である

「ま、明日……いや、もう今日か？ 今日はどうせまた、杉並搜索だろうな。お互い頑張ろうぜ」

「そうね。せめて、桜内の足手まといにならないように頑張るわ」

「おいおい。委員長もそう悪くないぜ？ そんなに謙遜するなよ」

「あら、ありがとう。」

義之の言葉に沢井は、微笑む

2人はその後、しばらくの間とりとめも無い会話をしていた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

時は少し戻り

露天風呂

「あー、いい湯だ……」

そこには、裕也が1人で入っていた

両手はヘリの岩にかけて、両足は広げて入っており

視線は上に向けて、星空を見ている

「はー。しかし、まさか杉並が現れるとはなー」

と、愚痴っていると

カラララ

「んお？ 誰だ？」

裕也は背後を振り返って、人物を確認した

そこに居たのは………

「お邪魔しまーす♪」

なぜか、フェイトだった（笑）

「待てー！ーい！ なんて、居るんだー！ー！！」

裕也は思わず、心から叫んだ

「え？ あれ」

が、フェイトはある看板を指差した

そこに書いてあったのは

〈この露天風呂は混浴です〉

という、衝撃的（裕也にとって）な文字だった

「見てなかった……………」

裕也は思わず、顔を両手で塞ぐ

「ねえ、私も入っていい？ 流石に寒い」

と、聞いてきた

裕也はビクツツ！ と、震えて

「おお！ 入つとけ、風邪を引いたら困るしな」

と、入るよう促した

「それじゃあ、入るね」

フエイトはかけ湯をしてから、足からゆつくりと入った

「はあ、いい湯だね」

「おう」

「星空も綺麗だし」

「そうだな」

「このまま、平和だったらいいのにな……………」

フエイトは星空を見上げながら、辛そうに呟いた

「フエイト……………」

すると

ゴーン

と、聞こえた

「除夜の鐘だね」

「ああ、そのようだな」

すると、2人はお互い正面に座って

「あけましておめでとうございます」

「今年もよろしくおねがいします」

と、挨拶した

まあ、場所が場所なので少し違和感がするが

「まあ、俺達は杉並探しが最初になるな。やれやれ、慌しい」

「ふふ、そうだね」

と、また星空を見ていると

「ねえ、裕也」

「なんだ？」

「背中洗ってあげようか？」

フエイトの爆弾発言に裕也は慌てて

「ちよい待て!! なにを考えている!？」

ズザザ! と、距離を取った

「別に、何も考えてないよ?」

と、笑いながら裕也に近づくとフエイト

裕也はジリジリと後ろに下がって、ドアにぶつかったので後ろ手で開けようとするが

「あ、あれ!? なぜに開かない!？」

裕也がガチャガチャと回すが、開かない

「さつき、バルディッシュに頼んで鍵を締めてもらったの」

フエイトは満面の笑みを浮かべながら、告げた

「バルディッシュ……!!」

へすいません。主の命令は絶対ですので

「裕也、いい加減諦めたら? (満面の笑顔)」

「……………そうします……………」

裕也は諦めて椅子に座ったのだった

んで、こちらでは

「……………そろそろ、諦めなさい」

「待て待て! お前らはなにがしたい!？」

「二ひ、姫始め?」

「誰だー!! こいつらに、こんな入れ知恵したのはああ!!」

「あたしや!!」

「お前かああああ! このおっぱいソムリエ狸ガアアアア!!」

「誰が狸や!!」

「お前だああああ! お前の血の色は何色だー!!」

「ふむ、この狸のことだ。黒に違いない」

「誰が腹黒狸や!!」

「そのまま言っていないの」

ある意味、修羅場を迎えていた

それぞれのチェイス

翌日 午後

場所 スキー場

「次は……B地区第2地点の無人ロッジだったな」

「そうだね」

俺達は、昨日の担当区域だったB地区のロッジを確認していた

昨日調べた限りでも、2箇所ほど使用した形跡があった

その1つが次のロッジだった

「しっかし、アイスバーンになってやがるな。フェイト、大丈夫か?」

「うん、大丈夫。それに急ごう、天気も大分崩れてきてる」

「そうだな、急ぐか」

俺達が滑っているのは、正規のコースではなく木々が生い茂る、山の中だ

下手にスピードを出したら、崖の下に一直線なんてこともあるのだ
「裕也、見えたよ」

フェイトの指差した先には、昨日調べたロッジが見えた

さて、調べるか

裕也 side END

第3者 side

裕也達は板を外して、音を立てずにドアの両端によった

裕也は、無言でドアノブを握るとフェイトを見てうなずく

フェイトも無言でうなずいた

ドバンツ!

裕也は一気にドアを開けて、中に入った

「動くな! 生徒会だ!」

「うわっ!」

「あかん! 逃げるで!」

「うわっ!」

「わわわ!」

そこに居たのは、裕也たちにとっては見慣れた存在だった

「え!? アリシア姉さんにはやて!？」

「ヴィータにすずか!? なんて!」

何故か、はやてとアリシア、ヴィータにすずかが居て、まさに窓から出ようとしていた

「待て! くそっ! 追うぞ!」

「うん!」

裕也とフェイトは、慌ててドアから出るが

はやてとアリシア、ヴィータとすずかは既に、板を装着して滑り出していた

「待て!」

「待てと言われて、待つ奴はおらんわ!」

「そのとーり!」

「戦略的撤退だ!」

「なんか、意味違うような気がする……」

裕也の制止を振り切って、はやてとアリシア。それにヴィータとすずかは颯爽と滑っていく

「フェイトは無事か!? って、居ねー!？」

「こっちだよ!」

と、フェイトは、はやてとアリシア近くの横の高台から現れた
「うっそ!？」

「わわ! フェイトちゃん、大胆!」

はやてとアリシアは広がって避けて進む

ヴィータとすずかは、裕也が追っている

そして気付けば、森を抜けていた

「いい加減に止まれ!」

と、裕也がすずかの肩を掴もうとした。

その時だった

「裕也、止まって!!」

「っ!」

裕也はフェイトの制止に従い、スキー板を横にして止まった
が

「せーの！」

「とーう！」

「おっしやー！ー！ー！」

「えい！」

はやてとアリシア。ヴィータとすずかはなんと、崖を飛んだのだ。裕也は気付いてなかったもので、下手したら落ちていたのだ

「あ、危ねー……………」

裕也は冷や汗をたらしている

「裕也、大丈夫!?!」

「あ、ああ。あ、あの四人は?!」

と、裕也が視線を崖の向こうに向けると

「ほなな〜」

「まったね〜」

「あばよ〜」

「怖かった……………」

と、四人して手を振ってから反転して、消えた

「あんにやろ〜」

と、裕也は悔しそうに拳を握る

「裕也。1回、正規のコースに戻ろう。天氣が……………」

と、フェイトは上を見る

雪が降ってきていて、風が強くなっていた

「そうだな、戻ろう。これ以上は無理だ」

裕也はそう判断すると、フェイトと共に、反転して戻った

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

少し時を戻し、義之と麻耶グループ

「着いたな」

「そうね」

義之と麻耶は、担当区域の火口付近に到着していた

「ここだと、スキー板は邪魔だな。外すぞ」

「ええ」

義之の判断で、2人は板を外した

理由は、足元が岩場でゴツゴツしており、更には雪も少ないのだ
「本当に、ここに居るのかしら？」

「さあな。でも、杉並なら来てそうだな」

と、視線を左右に振っていると

「ん？ ねえ、あれ、なにかしら？」

と、麻耶が指を差した

「ん？ 誰か居るな……あれは……」

と、義之が注意して見てみると

「ちい！ 気付かれたようだな！ 撤退するぞ！」

「合点承知！」

「OK！」

「退きましよう」

居たのは

「蓮華にアリサ!？」

「それに、天枷さんに神夜さん!？」

義之の悪友の蓮華と、牛柄の帽子に赤いマフラーが特徴の天枷美夏。それにアリサ・バニングスに神夜だった

美夏は最近、以前よりも接し方が柔らかくなっており

義之たちに対しても、普通に接するようになっていた

「なんで、天枷さん達がここに!？」

「さあな、追うぞ！」

「ええ！」

と、逃げようとしている蓮華たちを追いかけようと、足を踏み出した

その時だった

「あ！」

義之の後ろで麻耶が転んだ

「委員長！」

義之は慌てて振り返って、戻ろうとしたが

「私は平気！」

と沢井は手で静止すると、立とうとしたが

「痛っ！」

と足首を抑えて、うずくまった

「足を捻ったのか!？」

義之は駆け寄るが

「私はいいいから、橘と天枷さんを！」

義之は振り返って、四人が居た地点を見るが

「くそっ！ もう居ないか！」

影も形も無かった

「早く追いましよう！ まだ追いつけるはずよ！」

と、麻耶は立ち上がろうとするが

「っ！」

ガクツと転びそうになって

「無理するな、座ってろ」

それを、義之が抱えた

「でも……」

「無理して動いて、大怪我するほうがヤバイつての」

と、義之は麻耶の足元に膝たち状態になると

「脱がすぞ」

と、スキー靴を脱がした

そして、靴下も脱がすと

「こりや、ひどいな」

麻耶の足首は、赤くなっていた

「ごめんね、桜内。私のせいだ……」

麻耶は俯いて、謝ってくるが

「なに言ってるんだよ、あいつらが居るってわかったただけでも上出来だろ。」

と言いながら、義之が足首に触れると

「痛っ！」

「ちっ、こりや捻挫してるかもな」

とまた靴下を履かせてから、スキー靴を履かせた
「それじゃあ、歩くのも無理そうだな」

「……そうね」

麻耶の返事を聞くと、義之はしばらく頭を搔きながら考えて「仕方ない、俺がおぶって歩くか」

と、呟いた

「ええ!? いいわよ、肩を貸してくれたら自分で歩くわよ!」

と、麻耶は反論するが

「あのな、無理して悪化させるわけにはいかないだろうが! それに、たまには頼れ!」

と、義之は麻耶に背中を向けてしやがみこむ

「え、えつと……」

「遠慮すんな」

「わ、わかった……」

麻耶は義之の背中に乗ってから、腕を首元に回した

「しつかり掴つかまってるよ?」

「ええ。あ、スキー板どうしよう……」

「ああ、そうだな。桜花おうか」

義之は自身のデバイスの桜花に頼んだ
すると

へはい、魔法で浮かせます」

「ああ、頼む」

義之が頼むと、2対のスキー板とストックが浮かび上がった
「そんじゃあ、行きますか」

と、義之は長い道のりを歩き始めた

避難 救われる少年

裕也とフェイトは、スキー板を外して森を歩いてきたが「こりや、これ以上は無理だな」

「うん、吹雪で完全に視界が見えない」

天候は悪化して、強烈な吹雪になっていたのだ

「仕方ない。阿修羅、近くに避難用のロッジはあるか？」

「先ほどのロッジが、一番近いです」

「行こうか」

「ああ」

裕也とフェイトは、B地区第2ロッジに向かった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ほれ、先入れ！」

「うん！」

裕也が暴風に負けないように、力を込めてドアを開けて、フェイトを先に入れた

「さてと、まゆき先輩か音姫先輩に連絡いれないとな」

「うん、携帯で……あ、ダメだ。ここ電波状況が悪い」

フェイトは震える手で、携帯をポケットから取り出すが、圏外になっっていた

「仕方ない、念話だな」

「まゆき先輩！ 聞こえますか？」

「あ！ 裕也!? 良かった、なかなか帰ってこないから心配してたんだよ！」

「すみません。はやとアリシア、それにヴィータとすずかを発見したんですが、逃げられました。戻ろうと思ったんですが、吹雪になってしまっ、動けなくなっしまいました」

「そう。フェイトも無事なんだね？」

「はい。今はB地区の第二ロッジに避難してます」

「了解。今、こつちでも地図で位置を確認したよ。この吹雪、なんでも夜明けまで続くみたいだよ」

〈そうですね。こりや、ここで寝泊まりするしかないか〉

〈そうして。それと、確かそこには非常食として、缶詰があったはずよ？〉

それを聞いた裕也は、視線をフェイトに向けた

「フェイト、缶詰を探してくれ。非常食として保管されてるらしい」「わかった」

フェイトは、キッチンに当たる場所を探し始めた

〈まあ、そっちは無事でよかったよ〉

〈どういう意味ですか？〉

裕也はまゆきの言葉に、眉をひそめた

〈実はね、弟くんがまだ帰ってないのよ〉

〈義之がですか？〉

〈そうなのよ。それで、さっきから音姫がうるさくって〉

〈それはご愁傷様です。まあ、あいつなら心配いらないでしょ。なんせ、あいつは付属最強ですから〉

〈そうだよねー〉

そう、裕也が総合ランク最強ならば、義之は付属ランク最強なのだ
因みに、本校最強は音姫だが

付属ランク決定戦

最初は誰もが疑わなかった、フェイトの優勝

だが、決勝戦で勝ったのは義之だった

義之は決勝戦で、フェイトを一撃で撃破したのだ

そのため、義之には〈桜花の瞬剣〉の2つ名が与えられている

余談だが、まゆきは生徒会長の懐刀

音姫は、優しき華

フェイトは心優しき閃光

なのはは、エース・オブ・エース

はやては、夜天の王

等々の2つ名が存在する

〈そういえば、向こうは沢井も一緒でしたね〉

〈うん。まあ、弟くんが居るから大丈夫でしょ？〉

〈はい、沢井の実力は未知数ですがね〉
と、話していると

「裕也！・缶詰あったよ！」

と、フエイトが教えてきた

「わかった！」

〈それでは、俺達はここで休みますね〉

〈あいよー。あ、変なことはすんなよ？〉

〈しません!!〉

〈あはは、じゃあねー〉

「ったく」

裕也は念話が終わると、頭を掻きながらフエイトの方に向かった

「あるのは、焼き鳥の缶詰とレトルト物のカレーだね。ご飯は水を入れると作れるタイプみたい」

フエイトは食料保管庫の中から、缶詰やレトルトパックを取り出す

「まあ、有るだけラッキーだな」

と言いながら、裕也は水道の蛇口を回すが

「ちつ、やっぱ出ないか」

水道からは、一滴も出ない

「凍ってるんだ……どうする?」

「幸いにも火は着く。それに、水ならば外に大量にあるだろ?」

と裕也は、親指で外を指差した

「あ、雪!？」

「おうよ。つてな訳で、取ってくる」

と裕也は、備え付けのバケツを持って出た

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「あー、寒かった！」

あれから裕也は、何往復もして必要量を回収して、冷え切った体を暖炉で温めていた

「お風呂の分まで、ありがとうね」

そう、このロッジにはお風呂もあったのだ

それに気付いた裕也が、お風呂の分まで回収したのだ

「別に構わんさ。流石に、汗を掻いたままっていうのも嫌だろ？」
「うん、嫌だね」

即答である

まあ、花の10代乙女に風呂に入るな。と言うのは、かなり酷だろ
う

「それより、ご飯も大分炊けたし、焼き鳥とカレーも大分暖まったよ
！」

「あいよ。それじゃあ、ご飯にすつか」

裕也は暖炉から離れると、テーブルに近寄った

テーブルの上にお皿とコップを並べると丁度良く、ご飯は炊けて、
缶詰とカレーも暖まった

「いただきます！」

裕也とフェイトは、向かい合わせで座って食べ始めた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして

「ごちそうさまでした」

と、言うと2人でお皿やコップをキッチンに持っていく

「俺が洗うから、フェイトは先に風呂に入れ」

「え？ でも、暖まってないんじゃない？」

「実は、さつき阿修羅に頼んで魔法で暖めておいた」

と裕也は、親指で風呂の部屋を指した

「え？ ……あ、本当だ。しかも、適温だ」

「おお、そこまでやったのか。GJだ阿修羅」

〈恐縮です〉

「じゃあ、お言葉に甘えて先に入るね」

「おう」

フェイトは、備蓄されていたタオルを手にとって中に入った
「さてと、洗うか」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「裕也、上がったよ」

「あいよー。そんじゃあ、俺も入ったら寝るか」

「うん、布団は敷いておくね」

「悪い、頼むな」

「大丈夫」

裕也は同じように、備蓄されていたタオルを持って入った

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

で、出ると

「マテや」

裕也は思わず、突っ込みを入れていた

「な、なに?」

フェイトは、なるべく裕也の方を見ないようにしている

「なんで、布団が1組しかないんだよ?」

そこには、大きめの布団が1組だけ敷かれていた

「わ、私に言われても……」

フェイトは顔を赤くしていた

「どないせーと!?! 他には無かったのか?」

裕也は頭を抱えながらも、フェイトに問いかけた

「う、うん。探したけど、それしかなかったよ」

「そうか。仕方ない、一緒に寝るぞ。冷えて風邪をひくよりはマシだ

!」

「う、うん! そうだね!」

こう意気込んで言っただけはいるが、2人とも顔が真っ赤である

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

で

「寝れない……」

「右に同じく……」

2人仲良く、起きていた(笑)

「バルディッシュと阿修羅は?」

「スリープモードで寝てやがる」

そこで二人は盛大にため息を吐いて

「うらやましい……」

見事に一致している

すると、しばらく沈黙が続く

「なあ、フェイト」

「なに？」

「あの時の返事、してなかったな」

「えっと、クリパの時の？」

「ああ」

クリパ終了後、フェイトは裕也に告白しているが、裕也は返事をしていない

「はう…」

フェイトは顔を真っ赤にして、恥ずかしがっている

「返事はな」

「待って」

裕也が言おうとした。その瞬間、フェイトが待ったをかけた

「な、なんだ？」

「言うんだったらさ、正面向き合おうよ。背中合わせじゃなくてさ」

そう。現在、2人は恥ずかしいために背中合わせになっている

「わ、わかった」

2人は同時に、正面に向き合った

「ど、どうぞ…」

フェイトの顔は真っ赤である

「あ、ああ。……」

裕也は深呼吸しているが、同じように顔は真っ赤である

「お、俺だってフェイトのことが……好きだよ」

裕也の言葉を聞いたフェイトは、嬉しそうにするが

「だけどさ、俺は……フェイト達の両親を……」

裕也は肩を震わせながら、俯く

裕也は罪の意識で、これ以上先には進めないのだ

「バカだね」

気付くと、裕也の頭をフェイトが抱きしめていた

「フェ、フェイト？」

裕也は驚いて、固まるが

「言ったでしょ？ 裕也だけが背負う必要は無いつて。私も一緒に背負うって」

「だけど……」

「人って言うのはね、1人じゃ生きられないんだよ？ 2人で支えあつて生きていくものなの。だから、裕也は私が支えてあげる」

フェイトは裕也の顔を両手で挟み込むようにして、自分の顔の前に持つてきながら言う

「いいのかな……、俺が人を好きになつて……」

裕也は両目に涙をためている

「いいんだよ。もう、裕也は十分辛いことを耐えてきたんだから」

フェイトは微笑みながら、うなずいた

「フェイト……」

「裕也……」

2人は、しばらく見詰め合つと

「ん……」

お互い抱きしめあいながら、唇を重ねた

こうして、重い鎖に囚われた少年は

ようやく、救われる

ここから、どう進むのか

それは

まだ

2人には

知る由もない

帰還

「桜内。もう降ろして！ このままじゃ桜内まで遭難しちゃう！」
「うるせえ！ こんなところで降ろせるか！」

「でも、こんな吹雪じゃ桜内まで！」

「それはこっちのセリフだ！ こんな吹雪の中に1人置いていけるか！」

義之は猛吹雪の中、麻耶を背負って歩いていた

空は既に暗く、視界は最悪と言っている

背後の雪原には、一人分の足跡しか残ってない

義之は、休火山の火口付近からずっと麻耶を背負って歩いているのだ

だが、歩いてる途中で吹雪になり更には、日が暮れてしまったのだ
周囲には、人影は一切ない

麻耶は、このままでは義之まで遭難すると危惧して降ろしてと言うが、義之はそれを一蹴した

「それに、委員長は怪我してんだろ！ 早く診せたほうがいい！」

麻耶は火口で足を挫いたのだ

義之が確認した時は、足首は赤くなっていた

(捻挫だったらまずい)

「そ、そうだけど……」

「だったら、おとなしくしてくれ！ そうすれば、俺だって疲れずにすむ！」

「わかったわ……」

麻耶はようやく観念したのか、おとなしく義之の背中に体を預けた
「もう少しの辛抱だ。距離的にはそろそろのはずだ」

「ありがとう……」

それから義之は、黙々と歩き続けた

正直に言えば、義之だって休みたい

足はまるで、棒のようで。既に感覚も麻痺している

だけど、休んだら、麻耶の怪我を診せるのが遅れるし、音姫や由夢、

まゆきたちも心配する

だから、疲れたなんて言えない

その一心で義之は歩き続けた

そして、10数分歩き続けると……

「お？ おい！ 光が見えたぞー！」

義之は、背負っている麻耶に教える

「え？ あ、本当だー！」

2人の視線の先には、確かに光が見えた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

コテージ ロビー

「ウヴァー、疲れた……」

義之はロビーで両足を伸ばして、ソファアーに座っていた

到着してから義之は、それはもうモミクチャにされた

音姫なんか、涙目で抱きついたほどだ

その後に、食事をしてから温泉に浸かった

「まあ、無事に済んでよかったかな？」

と、義之が首を傾げていると

「そう思ってるのは、弟くんだけだよ？」

と背後から、まゆきが肩を掴んだ

「ほんつつつつつとに、心配したんだからね？」

まゆきは肩から手を放すと、義之の前に回って義之の顔を覗き込んだ

その表情は、怒り半分、心配半分と言ったところか

「すいません」

義之は素直に頭を下げた

「あたしも、したんだからね？ 弟くん達をあそこに向かわせたの、あたしだし」

と、まゆきは義之の隣に座った

「責任感じちゃった……」

まゆきは両手を組むと、その上に額を当てた

「……すいません」

たわ」

「そっか。そりやよかった」

義之は笑みを浮かべながら、麻耶の横に座った

「……桜内、あのね……」

「待った、謝るのはナシな」

麻耶が謝ろうとしたのを、義之は片手を挙げて制した

「でも……」

「あれは誰のせいでもねーよ。それに、謝るなら俺のほうだ」

「どうして、桜内が謝るのよ」

「あれは、少し考えれば予測できたことだ。それなのに、俺がフォローしなかったからな」

「そんな……」

「それにさ、委員長は少し一人で抱え込み過ぎなんだよ。裕也とフェイトが言ってただろ？ 友達なら、助けるのは当たり前前って。だからさ、少しは頼れ」

「……うん」

「まあ、俺じゃ頼りないかもしれないけどさ、相談くらいならのるぜ」
「ありがとう……」

しばらく沈黙が続くと

「さてっと。それじゃあ、そろそろ寝るか。おやすみ」

「お、おやすみ……」

麻耶は顔を赤くしながら、返事をした

(ま、これなら大丈夫かな?)

義之はそう思いながら、自室に戻ったのだった

夜の会話

「んあ……」

深夜の1時頃

義之は唐突に眼が覚めた

寝なおそうと思い、布団を被ったが

「眠れん……」

なかなか寝付けなかった

「しゃーない。なんか飲んで、トイレに行くか」

気を取り直して、義之は布団から出ると財布を持ってドアを開けて

廊下に出た

そして、階段を降りて自販機の置いてある部屋に着くと

「うん……そうね」

そこには沢井が居て、携帯電話で話していた

「委員長？」

「あら、桜内。あ……うん、なんでもない。……うん、うん。明日には帰るから……うん、早く寝なさい。うん……おやすみ」

沢井は義之に気付いたが、すぐに意識を電話に戻した

そして、会話が終わったのだろう

携帯を置むと、ポケットに仕舞った

「よ、委員長。弟からか？」

「ええ、勇斗って言うんだけど、寂しいから電話してきたみたい」

そう言う委員長の表情は、義之が今まで見たことのない、姉としての優しい表情だった

「五歳だっけ？ 仕方ないだろ」

「エリオくんとキャロちゃんが居るのに、申し訳ないわね」

「むしろ、あの二人はしっかりし過ぎだろ」

そう言いながら義之は自販機にお金を入れて、コーヒーをかうと「ほれよ」

と、沢井に投げ渡した

「わっ！ え？ え？」

危なげなくキャッチすると、呆けた目つきで義之とコーヒーを交互に見た

「奢ってやるよ」

「そう言いながら義之は、もう一本コーヒーを買った

「でも……」

「いいからいいから」

「なおも返そうとする沢井に、義之は構わずソファアに座った

「……………ありがとう」

「沢井はそう呟くと、義之の隣に座った

「そして二人は缶を開けて、コーヒーを含んだ

「しばらくの間、沈黙が二人を覆った

「すると

「桜内、ありがとうね」

「んあ？　なんだ、いきなり」

「ほら、火口からずっと運んでくれたじゃない。そのお礼を言っただけでよかったな、って思っただけ」

「なに、気にすんな。当たり前のことをしたまだけだよ」

「義之はそう言いながらも一口、コーヒーを含んだ

「でも……………」

「それに、裕也だったら迷わず同じことをやってたろうぜ」

「そうね」

「二人はそう言うと、コーヒーを飲み干して、部屋を出た

「そして、トイレに行き

「桜内」

「んあ？」

「おやすみ」

「ああ、おやすみ」

「そして、二人は部屋に戻った

「そのころ

「……………」 ↑普通に寝てる蓮華

「あんだ、なんでそんなに近いのよ」

「そちらこそ、近いわよ？」

「……………」

「フ、フフフフフフ……………」

「こ、怖いなく」

「あかん、煽りすぎたか」

「もはや、石油化学コンビナートに大引火レベルに達しているぞ」
「怖くて、眠れない……………」

なにやら、修羅場と化していた（笑）

タネ明かし&帰宅。少し事件

翌日 朝七時半

俺とフェイトはドサリと言う、なにかが落ちた音で起きた
そして、視線を音のした方向に向けると窓から外が見えた
どうやら、雪が落ちた音らしい

俺達は知らない内に詰めていた息を、吐いた
で、ふと気づいた

俺達は、お互いを抱きしめる形で寝ていた
つまりは、顔が近いのだ

しかも昨日、少しばかり恥ずかしいことがあったからか、顔が赤く
なったのを自覚した

フェイトも同じだったらしく、俺と同じように顔が赤くなった
それから俺達は、イソイソと布団からはい出て

「お、おはようございます……」

なぜか、正座した状態から、挨拶してた
んで、落ち着いてから俺達は布団を畳んで外に出た
吹雪は止んで、空模様は快晴だった

俺達は、立て掛けて置いたスキー板から雪を払い落として

「準備は？」

「完了してるよ」

お互いに、スキー板を履いたことを確認して

「ゴー！」

俺達はロッジを後にした

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
で、滑ること数分

俺達は、宿泊先のペンションに無事到着した

「あ、裕也！」

「無事だったか！」

「良かったです！」

「心配しましたわ」

「無事で良かった」

等々言いながら、皆が近寄ってきた
だけど、なんだろう……

なんか違和感が……

「よ、無事で何よりだ防人」

「よ、裕也！ 無事で良かったぜ！」

「せやな」

「ええ」

「無事で安心したわ」

「アハハハ……」

「安心したの」

「そうだね」

…

……

……

ヨシ、わかった

「二「お前ら（あなたたち）が原因だ（でしょ）ー！二」」

俺、義之、沢井、フェイトの視線の先には、杉並、蓮華、神夜、アリサ、すずか、はやて、ヴィータ、天枷、なのは、ユーノが居た

普通に混じってたから、思わずツツコミを入れたほどだ

「杉並！ お前、ここで会ったが百年目だ！」

「蓮華、遺書は書いたか？ 祈りは済んだか？ 部屋の隅でガタガタ

震える覚悟はOK？」

「はやて……フアランクスシフト、行こうか」

「高町さん……残念だわ」

そう言いながら、俺達が各々武器を構えた

その時だった

「あー、待った待った！」

「四人とも落ち着いて！」

俺達と杉並たちの間に、まゆき先輩と音姫先輩が両手を広げながら
立った

「なんでですか!」

「そいつらは、反省合宿を抜けてここに来てるんですよ!」

俺とフェイトが怒鳴るように聞くと

「あー、はいはい。落ち着きなさい」

「杉並君たちがここに居る理由を説明するから、中に入る?」

まゆき先輩と音姫先輩に止められて俺達は、納得してないけど、ペンションに入った

裕也 side END

第3者 side

「二はあー!? 実戦訓練!」

ペンションを裕也たちの驚愕の音が揺らした

「そ、クリパの感覚を忘れないうちに、復習しとこうって思ってたね」

裕也達の驚いた顔を見て、終始ご機嫌なまゆきがそう告げた

それを聞いた裕也は頭を抱えながら

(その対象で実戦訓練って、意味あるのか?)

と悩んでいて

「由夢! 由夢は知ってたのか!」

と、妹分の由夢の肩を掴んでいた

実は、これを知らなかったのは裕也達だけらしい

「私も昨日の夜に知らされました。不本意ながら、私も利用されてたみたいですよ」

由夢は、少しムクれながらため息を吐いた

すると

「二「四人とも、ありがとう! おかげでいい訓練になりました

!」」

と生徒会役員達が、異口同音に告げると

「二「嬉しくない!」」

四人は同時に叫んでいた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

で、十数分後

「いーっほーっほー!」

「あー！ まゆき、待ってよ！」

「ヤーハー！」

「待ちなさい！」

「相変わらずの暴走機関車ね」

「わわっ！ 由夢さん、早いです！」

「大丈夫ですか？」

「ユ、ユーノくん！ もう少しゆっくり！」

「なのは、これでも遅いほうなんだけど」

「おっしや、行くで！」

「はやて、元気だな」

裕也たちはスキー場に居た

「防人に同志桜内よ、どうした？ そんなに肩を落として」

気付くと、裕也と義之の近くに杉並が立っていた

裕也と義之は二人して、肩を落としていた

「ちくしょう……まさか利用されるとは……」

「音姉に騙された……」

二人の落ち込みようは、凄まじかった

「ふふん、流石は我がライバルだ。まさか同志桜内と防人の二人を騙すとはな。しかし、そうでなければ張り合いがない！」

杉並はそう言うと、颯爽と滑り出した

すると、落ち込んでる二人に沢井とフェイトの二人が近づいてきた

「桜内、落ち込んでないで滑りましょ」

「裕也も、ほら！」

沢井とフェイトは、義之と裕也の手を引つ張った

「待て、いきなり引つ張るな！」

「危ないからな！」

裕也と義之はそれぞれ文句を言いながら、滑りだした

そして、午後3時

「……ありがとうございます……」

風見学園生徒会一堂と α は全員、ペンションの前に集まって頭を下げていた

「いえいえ、またいらしてください」

ペンションのオーナーは朗らかに笑いながら、頭を下げた

そして、生徒会一堂と α は全員、バスに乗って、初音島に向かったのだった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

午後六時半過ぎ

バスはようやく、風見学園前に到着した

帰りは全員、終始寝ていた

やはり疲れていたのだろう

そして、到着して荷物を下ろしていたら

「あら、誰かしら?」

沢井の携帯が突然鳴った

沢井は携帯を取り出して画面を見て驚いた

「え? 家?」

そして、携帯を耳に当てた

「はい…あ、お母さん。どうしたの? ……え? 勇斗? まだ居な

いけど……え? こっちに向かったの!」

どうやら、電話の相手は母親だったらしく、母親からの言葉に驚いていた

「うん……うん、わかった。探してみる!」

沢井は通話を切ると、心配そうに周囲を見回した

「どうした、委員長?」

「なにがあつたの?」

すぐに義之とフェイトが問い掛けた

「弟の勇斗が私を迎えに、家を出たらしいの」

すると、裕也が頭を抱えていた

「裕也はどうしたの?」

「エリオ達も勇斗くんを見失ったらしい…」

と裕也がある方向を見た瞬間だった

(な、なに?)

裕也の左目、劫の瞳が幻視を見せた

それは、車が電柱に突っ込んで煙を上げてて、その近くでは
沢井が少年を抱いて、泣いていた

その時だった

「お姉ちゃんー！」

と子供の声が聞こえた

全員が声のほうに視線を向けると、そこには一人の少年が走ってき
ていた

「勇斗ー！」

沢井が心配そうに走り出した

その時だった

「勇斗くん！ 来るなー！」

裕也が大声で叫んだ

「え？」

勇斗はその声に驚いて、その場で止まった

その瞬間

スリップする音と共に、車がもの凄い勢いで突っ込んできた

「勇斗ー！」

沢井が走るが

誰もが、間に合わない

と思った

が

〈ソニックムーブ！〉

義之の姿が、一瞬にして消えて

轟音が轟いた

全員があまりの事態に呆然としていると

「だあー！ びっくりしたー！」

と義之が、近くの生け垣から現れた

「お、音くん！」

「ちよつと、大丈夫なの!？」

「兄さん！」

「義之！」

「同志桜内！」

「大丈夫かよ！」

全員、口々に義之に駆け寄った
すると

「ああ、俺も勇斗くんも大丈夫だ」

と義之が両腕に抱えていた少年を下ろした
すると

「勇斗！」

沢井が勇斗を抱きしめた

すると、勇斗の目元に涙が溜まり

「う、うわーん！」

勇斗は沢井に抱き着いて、泣き出した

そんな時

「おい、出ろや、オッサン！」

裕也が車のドアを刀で切っていた
すると

「うお！ 酒臭！ あんた飲酒運転かよ！」

裕也は車の中から中年男性を引きずり出して、バインドで拘束した
すると、ノーヴェが近寄って

「飲酒運転は法律違反だ！」

と、中年男性を片手で持ち上げた

そして数分後、パトカーが到着して事情聴取が始まった

その結果、帰宅したのは9時過ぎになった

「ごめんね、桜内。勇斗を負ぶってもらって」

「こんくらい構わないよ。それに勇斗くんも無事だったし」

義之の背中には勇斗が背負われており、少し眼が赤い

「ねえ、お兄ちゃん」

「んお？ なんだ？」

「お兄ちゃんはお姉ちゃんの彼氏なの？」

「ちよっ!? なんてことを聞くのよ、この子は!？」

沢井は弟の爆弾発言に、慌てて否定した

「違うの？」

「ん〜、残念ながら違うな〜」

義之は勇斗の言葉に、微笑みながら否定した

「ぎ、残念って……」

「あ、ほら、あれですよ？ 言葉のアヤってやつですよ？」

なぜか、変な言葉遣いになりながらドモる義之

「そ、そうね……でも、桜内、本当にありがとう」

「あ？ この程度なら気にすんなよ」

「いえ、負ぶつてることじゃなくつて、勇斗を助けてもらったことよ。おかげで無事に済んだし」

「ああ、裕也が叫んだからなにかあるって思ったんだ。まさか車とは思わなかったけどな」

義之は苦笑いしているが、少し考えてみた

（しっかし、俺もよく動けたよな。それに下手したら死んでたし）

そう、タイミングが悪ければ死んでたのは義之だったのだ

それを思うと、少しばかり怖かったが、なによりも怖かったのは

（子供を守れないってのが、俺としては一番怖いんだよな）

それは裕也の話を聴いてから思ったことだった

裕也は妹を守れなかった

義之は一人っ子のために、その思いはわからなかった

「ただ、もし沢井が同じように目の前で弟を失ったらどうなるのか？」

それは、筆舌できるものではないだろう

それこそ、自分の世界が壊れてしまうほどだ

「勇斗もよ！ 今回は桜内が間に合ったからよかったけど……」

「ぐめんなさい……」

「まあまあ、無事に済んだんだし、終わり良ければ全て良しで」

義之はそう言うのと、よいしょつと言いながら、勇斗くんを背負いなおした

こうして、最後に波乱はあったが生徒会二泊三日の合宿は終わったのだった

PS

「ねえ、フエイト」

「なに、母さん」

「裕也くんとは上手くいっただのかしら？」

「ブツ!? ちょっと待って!? なんで知ってるの!？」

「え？ アリシアからこんな画像が」

「アリシア姉さーん!!」

「こちらは、少しばかり荒れそうだった

新学期編

幕間 渦巻く陰謀

場所 ???

そこは薄暗い部屋だった

分かるのは、広い部屋に大きな机が置かれていて、その周囲に10人近くの影があるということだけ

「……………それで、器は？」

「は……………どうやら、初音島に行ったようです」

若い女の声が聞こえた

その女の問いに答えたのは、渋い男の声だった

「また初音島ですか……………」

「は……………しかも、追跡に向かわせた者達の消息も絶ちました……………恐らくは……………」

「ええい！ 忌々しい異教徒の猿共が！ 我々の崇高な目的もわからんとは！」

イラついた若い男の声と共に、鈍い打撃音が聞こえた

どうやら、机を叩いた音らしい

その音を皮切りに、周囲がざわめいたが、

手の叩かれる音がして

「お静かに……………それで ◆◆◆ の様子は？」

「は……………発掘作業及び、修復作業は終了しております。あとは器を手に入れれば十分です」

「そうですか……………」

女は報告を聞くと、しばらく黙った

周囲の人物達はその間、ずっと黙っていた

そして、数分後

「任務から戻り次第、鉄腕のクリストフオロと使徒を数人送り、器を回収させなさい。器は最大限に我々が使うのです」

「はっー」

「では、今日はここまでとします……より良き世界の為に」と女が言うと

「」「神の御心のままに」「」

その場の全員の声が、部屋に響いた

まるで、当然のように

ここから、戦いは加速する

ミーティング 兆し

それは、新学期が始まって早々だった
どんっ！

勢いよく教卓が叩かれた

叩いたのは彼女

「みなさん、静かにしてくださいー！」

付属3年3組の委員長こと、沢井麻耶である

「今日は、卒業パーティーについていろいろ決めたいと思います」

「え？ もう？？」

「早くないかな？」

麻耶の言葉に、小恋とフェイトが驚きの声を出した

まあ、それも仕方ないだろう

卒業パーティーまでは、まだ2ヶ月もあるのだ

麻耶は（表面上は）にこやかに、説明を始めた

「前回のクリパでは、ギリギリまでなにも決まらなかったからね。なので、その反省を活かして、今回は実行委員を決めようかと思っています」

確かに、前回のクリパでは、決まったのは本番一週間前である

よく間に合ったものだ

「いいんちよが仕切るんだからさ、いいんちよが兼任すればいいんじゃないの？ 去年の卒パはどうだったんだよ？ やっぱ、いいんちよが決めてたんじやないのか？」

そう言ったのは渉である

渉は去年、義之達とは違うクラスだったので、なにが起きたのかわからないのである

「去年かあ……」

「俺は学校に居なかったが、どうだったんだ？」

裕也は思い出したのか、遠い目をしていて、蓮華は肘を突きながら問いかけた

「去年は確かに、私が中心になって準備を進めていました」

「だろお？ だったら……」

麻耶の言葉に、渉が何かを言いかけた時

「でも！ 私と同じクラスだった人は覚えてると思いますが……………」

そう言った麻耶の額に、青筋が浮かんだ

「直前になって、桜内と杉並が出し物の内容を勝手に変更してしまったのです！」

その言葉に、教室中がうーむと唸り

「義之くお前か、諸悪の根源は」

「お前、なにやってんの？」

渉と蓮華の非難の眼が義之に向いた

「いや、あれは主に杉並がな……………」

「やだ、なんのこと？」

義之は視線を逸らしながら、頭を掻いていて、杉並はすつとぼけている

とはいえ、二人がそんな行動を取ったのにも理由がある

当時の生徒会長は磯鷲という女生徒だったのだが（音姫は普通の役員だった）

その会長が『この卒パで優勝したクラスには、豪華商品を与えるわ！』

と言ったのである

それを聞いた義之と杉並（ほとんどが杉並だが）が、出展内容を事後承諾の形で変更したのだ

「あの時は、もう決まっていた仕入れ先に謝ったりとか、大変だったんだからね！」

麻耶が頬を膨らませながら怒ると

「フーン！ では、去年の責任をとって、桜内を委員長をサポートにつければよかろう？」

と、杉並が提案する形で発言した

それを、麻耶は睨みながら

「どういうこと、杉並？」

「なあに。最初から桜内が実行委員になっていれば、卒パ直前になって企画を変更しよう。などとは言わないだろう？」

「おいおい、俺だけかよ。おまえは？」

むしろ、諸悪の根源はお前だろ？ という目つきで義之は杉並を睨むが

「卒業式はなにかと忙しいのでな。辞退させてもらおう」

何を企んでいるのか、杉並はニヒルに笑っている

去年の磯鷲会長と違って、今年は杉並にとっても手強い音姫が会長なので、杉並も正面きつての戦いは避けたいのだろう

「じゃあ、とりあえず桜内が立候補ということぞ」

なんと、麻耶は杉並の提案をアツサリと受け入れてた

「俺、立候補してないんだけど……」

義之がせめてもの抗議をするが

「まあ、いいじゃない。たまにはみんなの役に立ってみるのも悪くないわよ」

義之の抗議を麻耶は軽くスルーして、黒板に書き出した

「お前も、沢井の苦勞をしておけ」

「うんうん。ついでに、私達の苦勞もね？」

裕也とフェイトの言葉に、義之はうなだれた

「あと一人、女子で立候補する人はいますか？」

「委員長でいいじゃない？」

「異議なくし！」

麻耶の言葉に、杏と茜が即答した

「……まあ、いいけど。ちゃんと協力してよね？」

麻耶は自分の名前を黒板に書いて、実行委員決定と書いた

黒板には、二人の名前が仲良さげに並んでいる

義之には、麻耶がどこか上機嫌に見えていた

そして、放課後

さっそく、麻耶の提案でホームルーム後にミーティングとなったのだ

「今の内に方向性だけでも決めちゃえば、あとあと楽でしょ？」

それは如何にも、麻耶らしい合理的な思考だった

夏休み前半に、きちんと宿題を終わらせるタイプだ

と義之は思った（義之はギリギリまで残すタイプである）

義之も家に帰ったところで、ヒマなので承知した

「やっぱ、模擬店で行くわけ？」

「そのほうが楽だとは思うけど……」

義之の質問に、麻耶は唸った

「それとも、教室借りて喫茶店みたいな感じにすつか？」

「なにを売るかによるわね。だって、いろいろあるでしょ？ 鉄板や

火を使うなら外でやったほうがいい……とか」

麻耶の言葉に義之も、そうだなと思った

「じゃあ、なにをやるかを先に決めないと話しが進まないな。ほら、ク

リパのときに杏や杉並がプッシュした企画があつたら？」

「人形劇とお化け屋敷だっけ？」

「ああいう出し物系もいいと思うんだよね。健全さをアピールするな

らさ」

生徒会対策も必要だった

前回のクリパのように、裕也やフェイトに情報操作を頼むわけにも

いかない

だが、麻耶は気が乗らないようだった

「人形劇はともかく、お化け屋敷は……最初の動機を考えると、健全と

は言えないでしょ？」

「ああ、そういえば……」

なにしろ、発案者の杉並のあおり文句が

『気になるあの子を誘って、暗闇で告白できる！ 二人の密着度M A

X！』

という、煩惱全開の不健全さである

「それに、私達は卒業生サイドなのよ？ ほとんどの人が本校に進学

するだけだけど、あまり準備するヒマないと思うのよね」

「まあ、確かにそうだな」

「人形劇なら稽古が必要だし、さすがに手がまわら……くしゅつ！」

麻耶が可愛らしく、くしゅつした

「どうした？」

「な、なんでもない。ちょっと……調子がよくないだけ」

麻耶は恥ずかしそうに顔を赤くしながら、鼻の先を手で押さえた
「風邪か？ 帰って横になったほうがいいんじゃないか？」

「ありがと。でも、そういうわけにもいかないから……」

麻耶の気丈な言葉に、義之は苦笑して

「無理はするなよ？ 俺だって、無理なら無理って言うし」

「ええ、そうよね。うん……気をつける」

麻耶は微笑むが、少しだけ辛そうだった

こういうところが彼女は真面目すぎるのだ。責任感が強く、少しく
らいのことなら歯を食いしばって頑張ってしまう

義之としては、そこがほっとけなかった

意地になりそうだが、義之がさらに帰宅するように促そうとした

その時だった

「優しいじゃない、義之くん♪」

茜と杏がニヤニヤしながら近づいてきた

「なんの話だよ？」

「あの義之が、委員長のために立候補するなんてね……」

杏が眼を細めながら、意味深に呟いた

「お前らが押し付けたんだろ？ ま、誰かがやんなきゃいけないこと
だけだよ」

「でもでも、さつきも杏ちゃんとアヤシイよねって噂してたんだよ」

「アヤシイ？ なにが？」

「だからあ……」

茜は、そのグラマラスな身体でモジモジとしてから

ズバリと切り込んだ

「義之、委員長のこと好きなんじゃないの？ ……ってこと」

それに対して、義之がコメントしようとした

その時

「な、なに言ってるの！ んもう、そんなことあるはずないじゃない」

なんと、麻耶が否定の言葉を叫ぶ様に言っていた

しかも、顔を真っ赤にしてそっぽを向いている

「あらら、私は義之くんをからかってただけなのに……」

「そうね……」

茜と杏は呆れたように、顔を見合わせた

(どつちにしろ、これじゃミーティングにならないな)

義之はセクハラ二人組みを無視して、麻耶に提案した

「なあ、外でミーティングしないか？ 模擬店とかやるんだったら、商店街とか参考になるかもしれないし、いいアイデアが生まれるかもよ」

義之の言葉に、麻耶は小首を傾げると

「いいわ。私は話さえできれば、どこでもいいから」

麻耶の言葉を聞いた義之は、かばんを掴んで椅子を立った

「最近の義之、委員長と仲がいいわね」

「沢井さん、ちよっと戸惑ってるようにも見えるけどね」

「委員長は、義之の何気ない気遣いの言葉とかに慣れてないのよ。言うでしょ？ たまに、女殺しの一言……」

「あー、言う言う。慣れてる私達でも、たまにキュンってなるヤツ。でも、本人は自覚ないんだよね」

「そういう意味では、義之って女の敵よね」

「免疫のない娘は、コロツといっちゃうよね」

(好き勝手言いやがって……ってか、女殺しの一言ってなんだよ)

義之の背後では、小悪魔のようにクスクス笑いが聞こえた

義之と麻耶の二人が、揃って教室を出た時

本当に熱があるのか、麻耶は耳まで真っ赤になっていた

喫茶ミーティング

あれから俺と委員長は、意見を出し合いながら商店街を歩いていた
やはり参考になるのがあるからか、結構練ることが出来た
そして、歩いていたら、視界の隅にある物が写った
それは

「μか」

μだった

ショーウインドウ内にはμが屹立していた

μは天枷研究所が開発・生産しているメイドロボットだ

現在、市販されているが、まだ値段が高いから俺みたいな学生で買えるわけもなく、一部の金持ちが持っているくらいだ

「なに、桜内。μに興味あるの?」

気づけば、委員長が怪訝そうな表情で俺を見ていた

「まあ、あるっちゃあるな」

「あつそ……どうでもいいけどそれ、イミテーションよ」

「え?」

委員長に言われて俺は、ショーウインドウのμを見た

確かに、よく見れば間接が固定されているマネキンだった

「よくわかったな、委員長」

「外装だけは、μの人工皮膚と似たものを使ってるけどね。これは動かないわ。ただの等身大フィギュア」

「委員長、詳しいんだな。ひよつとして、ロボット好き?」

俺は期待を込めて聞いてみた

そうすれば、天枷がロボットとバレても問題なさそうだからだ

だが、委員長の反応は

「だ、誰が……」

委員長は、そこで一瞬表情を陰しくすると

「ロボットなんてものに、私が興味あるわけないでしょ?」

そう言いながら委員長は、興味無さそうに肩をすくめた

(あれ? 委員長つてもしかして……)

俺は委員長の態度に少し違和感を覚えた

なんだろう……

なんか、無理をしているような……

とその時、店の自動ドアが開き、中からメイド姿の女性が出てきた

(おっ？ 本物のμだ)

μは店の前に立つと、チラシを配り始めた

「どうぞ、よろしくお願いいたします」

μはそう言いながら、チラシを配っている

すると

「行きますよ、桜内」

委員長が突然、早歩きで歩きだした

「お、おい」

俺は慌てて、委員長を追った

委員長は、しばらく早歩きで歩くと

「ここに入りますよ」

と、一軒の喫茶店に入った

あれ？ なんか見覚えが……

俺が首をかしげている間に、委員長は中に入り

「二人です」

と、ウェイターに告げた

「なにボケっとしてるのよ。早く来なさい」

「お、おう」

俺は委員長に言われて、喫茶店の中に入った

「奥の席へどうぞ」

三つ編みにしたロングヘアーに、眼鏡を掛けた女性がそう言いながら、案内してくれた

俺と委員長は、案内された席に座った

すると、俺達の前に水の入ったコップが置かれ

「注文が決まったら、お呼びください」

と、金髪の女性が去った

待て、なんか見た事あんで、今の女性！

「歩きすぎて喉渴いたわね。桜内、なに飲む？ 私はアイスコーヒーにしようかなー。あ、でも、この寒いのにアイスコーヒーもないか」
(なんだ？ なんか、誤魔化すみたいにな……)

「委員長って、ロボット嫌い？」
「え？」

委員長は軽く驚いていたが、瞳がYESと言っていた
限りなく人間に近いロボットの開発は、人類の夢のひとつに挙げられる

絶対に裏切ることもなく、信頼できるパートナーとして
だけど、前に水越先生から聞いたし、授業でも習った

技術の発展とともに精巧さを増して、人型の理想像に近づくほど、
ロボットに嫉妬や脅威を感じた人が出始めた

その人達はマスコミや人権団体を扇動して、ロボットの規制や弾圧
さらには破壊事件などを起こしていた

その一方では、ロボットを擁護して、ロボットの権利を認めさせよう
という動きもあるそうだ

だけど、今の時代では、ロボットは社会的なバッシングの対象で、
まだ偏見が大きい

そのせいで、兵器への違法改造もあるくらいだ

「そうね……正直、ロボットはあまり好きじゃないの……」

委員長は言いづらいのか、ぼつりと呟いた

「さっきのμには、いかがわしい機能もついてるって話だし……」

それを聞いた俺は、内心頭を抱えた

委員長は『真面目なロボット嫌い』の一人らしい

これじゃあ、天枷がロボットだって言えないな……

こりゃ、この話題は避けたほうがいいな

俺と委員長は青紫のロングヘアーが特徴の人に注文を終えると、卒
パのミーティングを再開した

「やっぱり、出すのは模擬店が妥当だと思うのよ」

「だな。だとすると、喫茶店辺りがいいんじゃないか？ クリパのイ
メージを払拭するには」

「そうね、それで詰めていきましょ」

と、委員長が言った時だった

「お待たせ致しました。シュークリームセットでございます」
と、頼んだものが置かれた

……………つて待て

今の声は

「高町さん!?!」

「なのは!?!」

「ニヤハハ、気づいてなかったんだ……」

驚いてる俺達に、なのはは苦笑いだ

そうか、ここに、喫茶翠屋だったか

「しかも、卒パのことだよな? お疲れ様」

「今決めといたほうが、楽だからな」

「ええ」

俺と委員長の言葉を聞いたなのはは、視線を上に向けて多少悩むと

「もし喫茶店をやるなら、翠屋が全面的に協力するよ」

と、笑顔で提案してきた

「え? いいの?」

「うん! 喫茶店の娘が居るのに、使わない手はないでしょ?」

と、委員長になのはが言う

「そうだね。娘のなのはに、息子同然の裕也くんが居るんだ。協力するさ」

と気付けば、土郎さんが近くに居た

息子同然か……

「そういえば、土郎さんは裕也を小さい時から見てるんですよ」

「ああ、この島に来た時から知っているよ」

俺の言葉に、土郎さんは懐かしむように言った

「だから、裕也くんが楽しく学生生活を送れるなら、我が家は協力を惜しまないよ」

そう言ってる土郎さんの表情は、正しく親の顔だった

「それじゃあ、次のLHRで発表しましょうか」

委員長の言葉に、高町家は全員頷いたので

「おう」

俺に拒否する理由はない

俺達は、あいつに長年守ってもらってたんだ

あいつが普通の学生生活を送れるなら、全面的に協力するさ

だけど、俺達は気付いてなかった

あのへしゆうまつ戦争が近づいてたなんて………

約束

「ありがとうございますー！」

俺と委員長はあれから、注文していた物を食べ終わりお金を払うと、店を出た

気付けば、外は暗く、人影もまばらになり始めていた

「時間も大分遅いし、送っていいこうか？」

と、俺が聞くと委員長は一瞬驚いた顔をして

「そんなことを言う桜内、なんか気持ち悪い」

「……失礼なやつちやな」

酷い言われ様である

「あはは、怒った？ でも、ホントにいいから」

委員長は笑いながら、手を左右に振った

「そうか？ んじゃ、またな」

「うん、また明日」

俺と委員長は、そこで別れた

と、その時

「くしゅんー！」

と、委員長のかわいらしくしゃみが聞こえた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

翌日 放課後

俺はなぜか、委員長の住むアパートの前に立っていた

理由は、委員長は朝から体調不良だったんだが、昼に早退

で、授業後の掃除中に小恋が委員長のプリントを拾ったんだ

でなぜか、俺が届けることになったんだ

理由は杏曰く

『義之は、委員長のアパートに行ったことがあるでしょ？ 知ってる人が行くのが当たり前でしょ』

とのこと

だったら、裕也やフェイト。アリシアもだろって言ったら

『防人とフェイトは生徒会だし、アリシアなら、リンディさんの所に行
くって、帰ったわ』

だってさ、詰んでたよ

で、掃除が終わったから来たんだ

「えつと……ここだな」

目の前の表札には

沢井の文字

まあ、前に来たから知ってるけど

「なんか、緊張するな……」

俺は深呼吸をしてから、インターホンを押した
少しすると

『はい！』

と、聞き覚えのある子供の声

「あ、勇斗くん？ 俺だけど」

『あ、お兄ちゃん？ 入って！』

少しすると、鍵が開いた

「お兄ちゃん、いらっしやい！」

少ししたどたどしい言葉遣いで、出迎えてくれた

「おつす、勇斗くん。お姉ちゃんは？」

「寝てるよ」

と、勇斗くんは奥の部屋を指差した
なるほど、あそこが委員長の部屋か

「お兄ちゃんは、どうして家に？」

おつと、そうだった

「これを届けに来たんだ」

俺は、鞆の中からプリントを取り出した

「お姉ちゃんに渡してくれるかな？」

「わかった」

俺は、勇斗くんが受け取ったのを確認すると

「それじゃあ、俺はこれで」

と帰ろうとしたら

「お兄ちゃん……帰っちゃおうの?」

と勇斗くんが、寂しそうに俺の制服の裾を掴んでいた
考えてみれば、勇斗くんはまだ5歳なんだよな

「OK、遊んでやろう」

「ホント!?!」

うん、やっぱり子供は笑顔が似合う

とはいえ、外では無理だから中だがな

俺が中に入って、机に座ると

「はい、どうぞ」

と、勇斗くんが牛乳を入れたコップを置いてくれた

「ありがとう」

なぜに牛乳と思ったが、5歳の子供が火を使うのも危ないので仕方ないと納得しとく

「そういえば、お母さんは?」

確か、委員長の家は母子家庭だったはず
仕事かな? とも思ったが、聞いてみた

「寝てるよ」

「寝てる?」

思わぬ答えに、聞き返してしまった

「うん。はたらきすぎで、からだをこわしちゃったんだって」

いかにも頑張ってる感じが、たどたどしく答えてくれた
れた

なるほど……

それなら確かに、委員長が心配するのもわかる

以前、スキー合宿に行くと決まった時、委員長は家のことを心配していた

その時に、母親が寝たきりとは聞いていたが

ここまでとはな……

「お父さんは?」

一応、念のために聞いてみたら

「死んじゃったんだって。僕は覚えてないけど」

俺はその言葉に愕然とした

離婚したのかな？ とは思っていたが

「でもね、ハツメイとかしてたエライ人だったんだって」

そう言ってる勇斗くんは、少し誇らしげだった

初音島には、天枷研究所を含めて、研究機関が多数あるからそこで働いてたんだらう

(女手一つで、ここまで二人を育てたのか……)

俺には正式には両親は居ない

代わりに、朝倉家の人たちが俺を育ててくれた

だからか、朝倉家の人たちには感謝してるし、頭が上がらない(音姉と由夢は兄妹みたいな感覚)

だから、委員長の母親にも自然と尊敬の念を抱いた

すると、勇斗くんが

「ねえ、お兄ちゃん。なにかオハナシしてよ」

一瞬、なのはのO☆HA☆NA☆SHI☆が頭に浮かんだが、振り払って

「よっしゃ！ 俺の面白い友達のことを話してやろう！」

「うんー！」

それから俺は、風見学園に入学してから起きた(もしくは起こした)、いろいろな事件を多少の脚色を含めて面白おかしく話した

「あはは！ お兄ちゃんのお友達は面白いね！」

ふむ、この笑顔だけでも話した甲斐があったな

「まあ、お前の姉ちゃんも十分、面白い奴だがな」

と、俺が言った瞬間

「誰が面白い奴ですって?」

聞き覚えのある声が聞こえた

「あ、お姉ちゃん！」

「おお、委員長。起きたのか?」

俺の後ろには、SSPで見慣れたパジャマ姿の委員長が居た

「それはあんだだけ笑い声が聞こえれば、起きるわよ」

そう言いながら、委員長は俺の隣に座った

「で、桜内はなんの用？」

「忘れ物を届けに来たんだよ。明日までに出すプリントがあったら？」

俺が言うと、勇斗くんが

「はい、お姉ちゃん」

と、プリントを渡した

「あ、これ忘れてたんだ。ありがとうね、桜内」

「いいってことよ」

「お兄ちゃんに遊んでもらってたんだ！ お兄ちゃんのお友達って、面白いね！」

勇斗くんの言葉に、委員長は申し訳無さそうにして

「勇斗と遊んでもらって、ありがとうね。私もどこかに遊びに連れて行きたいんだけど、なかなか行けないのよ」

「なるほどな……………」

この家庭環境なら、仕方の無いことだろう

俺は少し考えると

「俺が連れて行ってやろうか？」

「え？」

「おせっかいかもしれないけどさ、きつと楽しいぜ？ あ、勇斗くんは、へさくらパークへ行ったことあるか？」

さくらパークは初音島にある巨大テーマパークだ

「さくらパーク！ ボク、行ったことないよ。お兄ちゃん、連れてってくれるの？ ホント？」

勇斗くんは子供らしく、目を輝かせて俺を見つめてきた

が、委員長は正反対に渋い顔をして

「ちよつと、悪いわよ」

「え？ ダメだったか？」

「ダメ……………なの？」

委員長の言葉に、勇斗くんのつぶらな瞳が揺れた

「ダメってわけじゃないけど……………いくら桜内でも、悪いわよ……………」

その言葉を聞いた勇斗くんは、俯いて

「わかった……ボク、行かない……」

そう言つて、椅子に座つた

その顔は達観していて、諦めること、我慢することに慣れてるみたいだ

(悪い、ぬか喜びさせちまったみたいだな……)

と、俺が念話を委員長に送るが、委員長から返事はなくつて
そして、数瞬後

委員長は勇斗くんの隣まで歩いていくと、肩に優しく手を置いて

「わかつた。遊園地、行きなさい」

と、微笑んだ

「……いいの?」

勇斗くんは信じられないのか、再び委員長に問いかけた

「ただし、お姉ちゃんも付いていきます。それなら大丈夫よ」

と、俺が今まで見たことの無い姉の顔で笑っていた

「やったあ! お姉ちゃん、ありがとう!」

勇斗くんが委員長に抱きついて、委員長は勇斗くんの頭を撫でながら

(ありがとうね、桜内)

と、念話を送ってきたので

(いいつてことよ。ただし、土曜までには治せよな?)

(わかつてるわ。それに、明日には治ってるはずよ)

(それは重畳。つてわけで、俺は帰るぜ)

(ええ)

そこまで言つてから、俺は勇斗くんと委員長に見送られながら、帰宅した

デート前のヤリトリ？

金曜日

放課後の教室

「ねえ、桜内」

「ん？」

卒パ関連の話しをしていたら、麻耶が頬を染めながら話しかけた

なお、教室内は人影は無い

「遊園地って……どういふ服装で行けばいいの？」

「……………はい？」

質問の意味が分からず、義之は首をかしげた

「私って遊園地初めてだから、どういふ服装で行けばいいのかわからないのよ」

麻耶の言葉に納得したのか、義之は頷いて

「そんなの普段の服装で十分だよ。めかしく必要もないし」

と、言ったら

「制服？」

義之は思わずコケそうになりながらも

「なんでだよ！ 私服だよ！」

机を叩きながら、言った

「あ、ああ。そうね……………」

と、麻耶が頷いた瞬間

「なーにをしているのかな？」

二人の近くに杉並が現れた

「おわあ!？」

「ひゃっ!？」

二人は胸元を抑えながら、飛びのいた

「す、杉並……………」

「お前は、いきなり脅かすなー!」

麻耶と義之が抗議するが、杉並は何処吹く風で

「ふふん。それよりも、我がクラス一位二位の頭脳の持ち主が、二人で

ヒソヒソと〜」

と、鼻歌交じりで視線を麻耶と義之に向けて

「一体、なにを企んでいるのだ？」

と、問いかけた

「お前じゃあるまいし」

「なにも企んでないわよ」

と、二人は返答するが

「では、聞きなおそう！ 二人で、何を計画しているのだ？」

ほぼ同じ内容である

「同じだろうが」

「なにも計画してません」

二人が否定するが、杉並は諦めず

「では！ なにを企てているのかな？」

と聞くと、麻耶が目を吊り上げて

「しつこい！」

と、麻耶は叫んだ

が、義之は黙って麻耶の肩に手を置いて

「委員長、やめとけ」

と、首を左右に振った

「桜内……」

義之は視線を杉並に向け

「杉並、詮索は無しにしようや」

「ほほう？」

「俺達の信条は『利用されたほうが悪い』だろ？」

義之の言葉を聞いた杉並は一瞬笑うと

「そうだったな。では、本題に入ろう」

と、二人に近づいて

「デートの話ならば、人が来ない場所で話したほうがいいぞ？」

と、囁いた

「ぶふっ!？」

「す、杉並!？」

義之と麻耶の二人は、杉並の言葉に動揺していたが、義之は素早く立て直して

「何が望みだ？」

と、問いかけた

「ふふん。口止め料はバーニイちゃんのキーホルダーで十分だ」

因みに、バーニイちゃんというのは、さくらパークのマスコットである

「あそこは毎月、バージョン違いが発売されるからな。それを所望する」

そう言うのと杉並は、身を翻して

「頼んだからな!!」

と、走り去った

それを、義之と麻耶は呆然と見送って

「……………な、なんだったのかしら？」

「本当に、バーニイちゃんのキーホルダーが欲しいだけだったりして……………」

ただ、二人の中で決まったことがあった

それは

絶対に、バーニイちゃんのキーホルダーは買っておこう

と、決めた

そうしないと、周囲にバラすことぐらいは平気ですが、杉並である

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

その頃、喫茶翠屋

「ありがとうございますー！ またのご来店をお待ちしてまーすー！」

裕也はそう言いながら、頭を下げた

すると、そんな裕也の近くに桃子が寄ってきて

「裕也くん、裕也くん」

と、肩を叩いた

「はい、なんですか？」

「フフフ……じゃくん！」

桃子が裕也の目の前に出したのは

「さくらパークのペア招待チケット？」

裕也にとっては、見慣れない物だった

「そうなのよ。商店街の福引で当たったのよ♪」

と、桃子は嬉しそうに語った

「それで、それをどうするんですか？」

裕也は士郎と行くのかな？　と思っただが

「うん？　裕也くんにあげる」

「……………ホワッツ？」

流石に予想外だったから、裕也は思わず英語で聞き返してしまった

「ん？　だって、フエイトちゃん付き合ってるんでしょ？」

「なんで、知ってるんですか？」

もしやと思いつつも、裕也は問いかけた

「ん？　なのはから聞いたのよ♪」

桃子の言葉に、裕也は顔をなのはの方向に向けた

その先では、なのはが舌を出していた

「なーののーはーはー!!」

「ごめんなさーはーはー!!」

そこから、裕也となのはの追いかけてこが始まった（結果は見えて
いるが）

少々お待ちください……………

「ごめんなさい」

裕也の視線の先では、なのはが頭を下げていた

「夕食時に暴露するって、お前な……………晒し者かよ」

なのはは帰ってきた日の翌日、夕食時に暴露したそうで、高町家の
全員が知っていることらしい

裕也は一回ため息を吐くと、視線を桃子に向けて

「でも、俺が貰っていいんですか？　桃子さんも士郎さんで行ったら
どうです？」

と、問いかけた

「ん？ 別にいいのよ。それに、息子同然の裕也くんに彼女が出来たんですもの。応援したいじゃない♪」

それを聞いた裕也は、一瞬固まってから

「それは、ありがとうございます」

と、頭を下げた

「日曜日にでも、行って来なさい」

そう言いながら、桃子はチケットを差し出した

「あ、ありがとうございます……」

日曜は元々、裕也は休みである

裕也は頭を下げながら、チケットを受け取った

「そろそろ、第二波が来るわよー」

と、桃子は腕まくりの仕草をしながら、キッチンに入っただけ

気付けば、時刻は六時半を指していた

「なのは、気張るぞ」

「うん」

裕也となのはも、気合を入れた

翠屋のかきいれ時の時間である

最近は特に、大盛況である

理由としては

「いらっしやいませ〜♪」

この金髪女性

フィアッセ・クリステラの影響が大きいだろう

フィアッセ・クリステラは世界的に有名な歌手で、イギリスに彼女

の母親が校長を勤めるCSSSへクリステラ・ソング・スクールが建っ

ている

しかし、彼女は家ぐるみで昔から高町家とは懇意の間柄で、時々遊

びに来ていた

今現在、歌手は長期休業しているらしく、療養を兼ねて高町家に来

たらしい

そんな彼女が来ているのだ

集客効果は絶大である

こうして、喫茶翠屋は大盛況を迎えるのであった

おまけ

「おい、なんで俺はこんな状態になってるんだ!？」

逆さ吊りの蓮華

「ふふふ……………」

目の前には、魔女の格好の神夜

「質問に答えろ!」

「蓮華を私のものにするためよ……………」

「つてことは、そのデカイ鍋はほれ葉なんかか!？」

蓮華が指し示した先には、大きな鍋があつて、紫色の煙が上がつていた

「その通りです……………あの中に蓮華を入れれば……………フッフッフッフ……………」

「お前、ヤンでるだろ! 絶対にヤンでるだろ!？」

「いえいえ、私は普通ですよ?」

「んなわけ、あるか……!!」

蓮華は全身を縛つていた縄を引きちぎり、脱出

そのまま、窓をぶち破つて逃走を開始した

「逃がしませんよ。蓮華……………」

神夜はデバイスを起動すると、蓮華の追跡を開始した

蓮華の逃走劇は三時間にも及び、アリサとすずかの二人によって、止められたらしい

デート前のヤリトリ？ その2

曜日は変わり、土曜日

朝8時半頃

義之は目覚ましの音で目が覚めて、すぐにカーテンを開けて外を見た

そして、口をあんどりと開いた

理由は……………

「一面真っ白かよ……………」

外では雪が降っていたからだった

しかも、大雪と言っても過言ではないレベル

すると、義之は携帯を開きある番号をコールした

その相手は……………

『はい。沢井です』

委員長こと、沢井麻耶だった

「あ、委員長か？ 俺だ」

『あ、桜内』

「外、見たか？」

『うん、見た。どうする？』

麻耶からの問い掛けに、義之は数瞬悩むと

「今からそっちに行くから、そうしたら決めよう」

『ええ、わかった。待ってる』

義之は通話を終えると、私服に着替えて家を出た

そして、雪に滑りそうになりながらも歩いていると

「およ、弟くんじゃない」

アパートから、高坂まゆきがジャージ姿で現れた

「あ、まゆき先輩。これからランニングですか？」

「こそ。大会も近いしねー！」

義之に返答しながら、まゆきはストレッチをしていた

それを見た義之は、途中で足が滑りそうになったのを思い出し

「雪が結構積もってるので、滑らないように注意してくださいね？」

それを聞いたまゆきは、まるで猫みたいな顔をしながら「おやおやく？ あたしを心配してくれてるのかにやく？」

と、義之に聞いた
すると、義之は肩を竦めながら

「そりや、音姉の大事な友人ですし。俺にとっても、大事な先輩ですからね」

と、義之は返した

まゆきは義之の返しが予想外だったらしく、一瞬驚くが

「ありがとうね。でも、安心しなさい。実は、靴に摩擦力の強化の魔法が掛けてあんのよ」

と、まゆきは靴を見せた

「なるほど、それなら安心ですね」

義之がうなずくと、まゆきはストレッチを終えたのか視線を義之に向けて

「弟くんは、沢井に会いにきたんでしょ？ 早く行ってあげなよ」

「よくわかりましたね？」

義之はまゆきには用件は言ってないのにな、と思つて軽く驚いた
「そりやあ、アパートの前に沢井んとこの小さい弟が待つてたしね」

「なるほど……そりや、早く行かないとな……」

まゆきの言葉に、義之は頭を掻いた

「そゆこと、じゃあね！ 弟くん！」

「気をつけてー！」

まゆきと別れると、義之はアパートに近寄つた

アパートの前には、確かに、勇斗と麻耶が待つていた

義之はそのことに苦笑いしながら近づき

「わざわざ外で待つてなくてよかつたのに……」

と、二人を見た

「私もそう思つただけど、勇斗が……」

と麻耶は苦笑いしながら、隣に立っている勇斗を見た

「だって、待ちきれなかつたんだもん!!」

勇斗は眼を輝かせながら、はしゃいでいた

初めての遊園地だから、はしゃいでいるのだろう
だが、義之と麻耶は視線を合わせて

「この大雪だぜ？ アトラクションが動いてるかどうかも、怪しいぞ？」

「やっぱりそうよね……」

と、話していると

「無理なの？」

と、勇斗が少し悲しそうな表情で聞いてきた

「この天気だからね、動いてるかわからないんだ」

「そうなんだ……」

義之の言葉に、勇斗は少し悲しそうに俯いた

(なあ、委員長)

勇斗の悲しそうな顔を見た義之は、麻耶に念話を飛ばした

(なに、桜内)

(さすがに、このまま解散は味気ないだろ)

義之の念話に、麻耶は頷き

(さすがにね……それに、桜内に悪いし)

と、後半は黙考して

意を決して、麻耶は視線を上げた

「桜内、どうせだから家に上がって」

「は？ いいのか？」

「ええ。さすがに、この雪ですぐに帰って。なんて言えないし、勇斗の遊び相手になってくれると嬉しいし」

麻耶の言葉を聞いて、義之は視線を勇斗に向けた

勇斗は子供故の純真そうな目で、義之を見ていた

それを見た義之は、微笑んで

「遊園地は今日は無理だけど、一緒に遊んでやるよ」

と、勇斗の頭を撫でた

すると、勇斗は目をパアツと輝かせて

「ありがとう！ お兄ちゃん！」

と、義之に抱き着いた

義之はそんな勇斗を見て微笑み

麻耶は慈しむような目で、弟を見ていた

その光景は他の人から見れば、まるで夫婦のようであった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

場所は変わり、時は進んで喫茶翠屋

「裕也くん。フェイトちゃんは誘えたの？」

「それが、まだなんです……………」

桃子からの質問に、裕也は苦い表情をしながら返答した

すると、桃子は頷いて

「そんなことだと思ったわ」

と、頭を左右に振ってから、なのはを見て

「なのは、お願い」

「はい」

返事をするとなのはは、バックヤードに入っていく

出てきた時には、一人の少女と一緒に出てきた

それを見た裕也は思わず

「なんでさ……………」

と、呟いていた

その理由は、至極単純

なのはと一緒に出てきたのは、喫茶翠屋のエプロンを着けたフェイ

トだったからだ

「朝起きたら、母さんから『喫茶翠屋のお手伝いをしてね』って、言わ

れて……………」

フェイトはそこで黙ったが、裕也には予想できた

エプロンを着けて出たら、なのはと桃子に捕まったのだ

「というわけで、今ここで言っちゃいなさい」

「どういう晒し者ですか」

裕也は抗議するが、桃子は何処吹く風であった

せめてもの抵抗に裕也は、視線を士郎に向けたが

「……………」

士郎は両手を合わせて、頭を下げていた

(つまりは、無理っわけですか……)

裕也はそう思いながら、視線を上に向けてため息を吐いた
「ゆ、裕也?」

フェイトが訳が解らないとばかりに、視線を裕也に向けた
「あー……フェイト、明日空いてるか?」

「え? う、うん……空いてるけど……?」

裕也からの問い掛けに、フェイトは一瞬キョトンとしながらも答え
た

フェイトの返事を聞いた裕也は、一回深呼吸すると

「明日、さくらパークに行かないか?」

と、聞いた

「え? え? それって、つまり……デー」

「頼む、皆まで言うな」

裕也はフェイトの言葉を途中で遮った

「それで、いいのか?」

裕也が改めて聞くと、フェイトはしばらく沈黙してから

コクリとうなずいた

裕也はそれを確認すると、視線を桃子に向けて

「これで満足ですか? 桃子さん」

と、聞いた

すると、桃子は満面の笑みを浮かべて

「もちろん♪」

と、うなずいた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

第三者 side END

義之 side

俺と委員長が勇斗くんと遊んでいた時だった

「麻耶ちゃん。誰か来てるの?」

と、奥の部屋から女性の声が聞こえてきた

「うん! 友達が来てるの!」

委員長は大声でそう返すと、俺を見て

「ねえ、お母さんに会ってくれるかしら?」

と、言ってきた

って、待てい

俺が会うのかよ……

よしっ! 男は度胸じゃ!!

「わ、わかった……」

ドモってるよ、俺……

義之sideEND

第三者side

義之は麻耶に案内されて、ある部屋に入った

そこには布団が敷かれていて、一人の女性が上半身を起こした状態で寝ていた

それを見た麻耶は、慌てて駆け寄り支えようと

「もう、お母さん。無理しないで……あ、桜内。私のお母さんの」

「こんな格好でごめんさいね? 沢井綾さわいあやです。よろしくね、桜内くん」

女性、沢井綾はゆっくりとした動作で頭を下げた

その雰囲気は、ほんわかした空気を纏っていて、顔は似ているが、麻耶とは正反対の印象だった

「桜内義之です。娘さんにはお世話になってます」

義之は頭を下げると、綾は微笑みながら

「あなたが桜内くんね? 麻耶からいろいろ聞いてるわ」

綾の言葉に義之が首をかしげていると、麻耶が少し慌てた様子で

「もう、余計なことを言わないでよ。お母さん」

と、綾を制した

「ごめんね。麻耶。そういえば、今日はお出かけする筈じゃなかったかしら?」

話しておいたのだろう、綾が家に居る理由を聞いてみた

「あのね、お母さん。外は大雪なの。だから、明日になったの」

「え? ……あら本当」

綾は麻耶に言われて外を確認すると、それで初めて雪が降ってるの

に気付いた様子だった

そして、綾は姿勢を正すと

「勇斗を遊園地に誘ってくれて、ありがとうね。これからもうちの子達と仲良くしてね、桜内くん」

と、軽く頭を下げた

「こちらこそ、よろしくお願いします!」

と、義之は緊張した様子で頭を下げた

そして、部屋を出て義之が緊張したところぼしたら

「なんで、うちのお母さんに会うのに緊張するのよ。変な桜内」
と、言われた義之だった

それぞれのデート？

日曜日

場所 さくらパーク

沢井家で勇斗と遊んだ翌日。義之達はさくらパーク前に来ていた祈りが通じたのか、天気は雲一つない快晴

不安の種だった雪も、技術の進捗故か、ほとんど残っていないなかった「さくらパークだ！」

勇斗は目を輝かせながら、さくらパークの入り口ゲートを見ていた初めてだからだろう、かなりはしゃいでいる

「やだ、どうしよう……私までドキドキしてきちゃった」

麻耶もひさしぶりだからだろう、胸に手を当てている

麻耶の服装は、軽快はジーンズ姿だ

見慣れた制服ではないので、義之にとっては新鮮だった

「そんじゃ、チケットを買うか。委員長達はここで待ってるよ？」

「あ、割り勘だからね？」

義之がチケット売り場に向かおうとすると、麻耶が財布を取り出しながら提案した

が、義之は首を振って

「大丈夫。俺が払うから」

「でも……」

義之の言葉に、麻耶が躊躇していると

「実はさ、朝にさくらさんから貰った金がさ多かったんだよね」

回想開始

『それでは、いってきます』

『あれ？ 義之くん、どこに行くの？』

義之は靴を履いて立ち上がると、背後に現れたさくらが首を傾げた『はい。これから、さくらパークに行こうかと』

『え？ 今日も？ 昨日、行ってなかった？』

義之の言葉にさくらは、首をかしげたまま問いかけてきた

『ほら、昨日は雪だったじゃないですか。だから、今日にしたんです』

義之の返答にさくらは納得したのか、うなずくと

『なるほど、なるほど♪ それじゃあ、義之くんに今月のお小遣い♪』
さくらは着ていたドテラの袖の中から、封筒を取り出して義之に渡した

『えっ…でも……』

『ノンノン♪ 何事も遠慮が美德とは限らないんだよ！ 特に、ボクの前じゃね♪』

さくらの言葉に、義之は封筒を見つめて

『わかりました。ありがたく貰っておきます』

と、封筒を懐に仕舞った

『よきかな、よきかな♪ ではでは、いってらっしやいませませ〜♪』

義之はさくらに見送られながら、扉をくぐった
すると

『お土産、よろしくね〜！』

という、さくらの声が聞こえた

以上、回想終了

そして、バスで封筒の中を確認したところ、諭吉さんが10枚くらい入っていた

(やれやれ、さくらさんは学生の平均的な小遣いを知ってるのかな)

と、義之が内心でため息を吐いてると

「……わかったわ。甘えさせてもらうわね」

と麻耶は、少しためらいがちに頷いた

「おう、任せろ。勇斗君、待ってるよ」

「うん！」

義之の言葉に、勇斗は嬉しそうに頷いた

義之はそれを確認すると、チケット売り場に向かった
すると、そこで

「あ」

「あ」

裕也と出会った

「裕也！」

「義之！」

二人はお互いを指差しながら、名前を呼んでいた

「何でここに！」

と、二人が同時に聞いた時、裕也には麻耶と勇斗が、義之にはフェイトがそれぞれ視界に見えた

お互い、それで状況を察して

「裕也はデートか」

「そういう義之もだろ」

そこまで言うのと二人は、ため息を吐いて

「見なかったことにしようか」

「そうだな」

お互いに、忘れることにした

その後、裕也が先にチケットを購入して二人で入場した

そして

「お待たせ」

義之もチケットを人数分購入して、麻耶と勇斗に渡して入場した

「そんじゃあ、どこから行くか」

「ジェットコースターから乗りたい！」

義之たちは行動を開始した

こうして、二組のデートは始まったのである

オマケ

「あ、ありのまま起こったことを言うぜ!? 俺は昨日、寝巻きで普通に寝ていたはずなのに、起きたら私服に着替えていて、さくらパークに居た! 手品なんてチャッチいものじゃねえ! もっと恐ろしいモノの片鱗を味わったぜ!!」

〈それは魔法ですからね〉

「メタ発言すんじゃねーよ、グランヴェル！」

「さーて! 今日にはあたしとデートよ! 光栄に思いなさい!」

「つつか、俺は許容してねえよ! そもそも、どうやって転移した!?

アリサ! お前、転移魔法は使えねえだろ!」

「ん？ ルーちゃんに頼んだのよ」

「ルーテシアアアアア!! グランヴェル！　なんで教えなかった!?

お前なら気付けるだろうー!」

〈直前にアリサ様から連絡がありました、蓮華には教えないようにと〉
「お前は俺のデバイスだろうが！　なんでアリサの指示に従ってんだよ!!」

〈……………ああ、そういえばそうでした〉

「デバイスに主扱いされない俺って……………」

「はいはい、そんな所で両手を突いてないで、とつとと行くわよ!」

「俺の休日があ！　R G O ガン O ムを作ろうと思ってたのにいいいいいい!!」

〈我が主がすまん。何度も嗜めたのだが、聞き入れてくれなくてな〉

〈いえいえ、こんな蓮華は見てると楽しいので、OKですよ〉

〈君もなかなか、いい性格だな〉

〈いえいえ、それほどでも〉

訂正、三組であった

そのころ、橘家

「あの小娘……!!」

蓮華の部屋に侵入した神夜が、怨嗟の雄たけびを上げていた

それぞれのデート その2

俺と委員長は、勇斗くんの望んだジェットコースターに向かっていた
た

(でも、勇斗は乗れるのかしら?)

(確かになあ……身長制限もギリギリっぽいなあ)

俺達はジェットコースターの入り口に到着したので、入り口に立っていた係員に声を掛けた

「あの、すみません。この子、乗れますかね?」

俺が問いかけると、係員は首をかしげて

「一回測ってみましようか。悪いんだけど、これに乗ってくれるかな?」

「うん!」

勇斗くんは係員の示した台座に乗った

すると、勇斗くんの周りを光が包んで上に勇斗くんの身長が表示されたが

「あー、ごめんね。5mm足りないから、乗れないんだ」

どうやら、僅かに足りなかったらしい

「残念だけど、勇斗。勇斗はこれに乗れないんだって」

と、委員長が言ったら

「じゃあ僕、ここで待ってるから。お兄ちゃん達、乗ってきてよ」

本当に、いい子だね。この子……

「勇斗を残して、乗れるわけないでしょ?」

「そうだよ、勇斗くん。今回は、勇斗くんのために来たんだからな」

俺と委員長が言っても、勇斗くんは苦い表情をして

「でも……」

本当に、いい子だ

「大丈夫。また今度来た時に、一緒に乗ろうな」

俺がそう言うと、満面の笑みを浮かべて

「うん!」

俺と委員長は、勇斗くんが領いたのを確認すると

「それじゃあ、どこに行きましようか」

「そうだなあ……」

マップを見ながら、考え始めた

その時

「フハハハハ！ 俺の目を回したければ、この三倍は持つて来い！」

「どこの英雄王よ！」

心なしか、聞き覚えのある声が……

委員長も聞いたのか、俺に視線を向けて

(桜内、移動するわよ)

念話で提案してきた

(オーライ)

俺はその提案に乗って、勇斗くんの右手を掴んだ

それを見た委員長が、勇斗くんの左手を掴み、勇斗くんに浮遊魔法を掛けると

視線を合わせて頷いてから、足早にこの場を離れた

義之 side END

第三者 side

その頃、裕也とフェイトは……

「なあ、フェイト。一つ聞いていいか？」

裕也は自分の腕に抱きついてるフェイトに視線を向けて、問いかけた

「な、なに……？」

フェイトは涙目で、裕也に視線を向けた

「確かフェイトは、オバケとかが苦手だよな？」

「そ、そうだよ……？」

裕也の質問に、フェイトは声を震わせながら答えた

「じゃあ何故、ここに入った？」

裕也&フェイトINオバケ屋敷

裕也とフェイトの二人は、フェイトからの提案で最初にオバケ屋敷に入った

「だ、だって……」

「だつて？」

裕也が首を傾げて先を促すと、フェイトは目を俯かせて

『遊園地に来たなら、最初はオバケ屋敷やろ！』って、はやてが……」

「なんでお前は、あのタヌキの言葉を真に受けた？」

フェイトの言葉に、裕也は思わず突っ込みを入れていた

「なのはは忙しそうだったし、すぐかとアリサは電話が掛からなかったし……消去法で考えたら、はやてしか……」

フェイトの言葉を聞いた裕也は、首を振って

「そこでなぜ、忍さんとかが出なかつた？」

「あ……」

裕也の言葉に、フェイトは口を開けた

「どうやら、忘れていたらしい」

「まあ、一旦入ってしまったからには、出口を目指すか」

「う、うん……」

裕也の言葉にフェイトは頷くが、足の進みは遅い

因みに、二人が入ったオバケ屋敷の名前は〈惨劇の館〉といい、なんでも旧水越病院をモデルにしたらしく、所々に病院らしいキヤスターや包帯、薬品のビンなどが転がっている

出口は暗証番号を入力しないと出れないらしく、暗証番号は四箇所
のチェックポイントに隠されていると説明を受けていた

裕也とフェイトは数分間歩いて、第一チェックポイントに到着した
「薬品保管室か……」

目の前には扉があり、その扉の上には《薬品保管室》と書かれたプレートが斜めに掛かっていた

「は、早く終わらせようね……」

「あいよ」

涙目で震えてるフェイトを見て、裕也はそう返事したものの、内心では、どうなるんだろ？ と首を傾げてから、中に入った

それから、数十分後……

「ゆ、裕也？ 大丈夫？」

「な、なんとか……」

二人はオバケ屋敷の外に出ていたが、裕也はベンチにグツタリと座っていた

理由は至ってシンプルで、フェイトが恐怖で度々暴走しかけたからである

その度に裕也が全力で食い止めていたので、かなり神経をすり減らしたのである

「おっし、次はどのアトラクションに」

行こうかと言いかけて、裕也は止まった

「裕也？ どうしたの？」

動きが止まったことを不審に思ったフェイトが、声を掛けたが、聞こえてきたのは……

「あ、が……」

苦しそうな、裕也の声だった

その声に気付いたフェイトが、顔を見ると右目は見開かれていて手は胸部を抑えていた

「裕也!? どうしたの!? 裕也!」

その時、フェイトは気付いた

裕也の左目に着けられている眼帯

その下が、薄く発光していることに

(まさか、劫の眼の暴走!?)

それは、考えられる限りで最悪のパターンだった

劫の眼は魂を糧に能力を発動する、呪われた魔道具

つまり一度暴走すれば、裕也の魂が全て消える

(どうしよう! どうすれば!?)

フェイトがパニックに陥っていた時だった

〈フェイト様、落ち着いてください!〉

裕也のデバイス《阿修羅》が、フェイトを諭した

「阿修羅! でも!」

〈今は主を休ませてください!〉

阿修羅の言葉を聞いて、フェイトは逡巡するが

「わかった……」

阿修羅に従い、フェイトはすぐ近くのベンチに裕也を寝かせることにしたが、そのまま寝かせるよりかはマシかと思い、裕也の頭を自分の膝に乗せた

いわゆる、膝枕である

「阿修羅、裕也は大丈夫なの?」

「はい。いつもの発作です」

阿修羅の言葉を聞いて、フェイトは眉をひそめた

「発作? でも、裕也は大きな病気なんて……」

フェイトが知る限り、裕也はガンなどは患っていないはずなのである

「劫の眼の侵食の発作です」

「劫の眼の……」

阿修羅の説明に、フェイトは苦い表情をした

「はい。以前は数ヶ月は空いたのですが、最近は短いです」

「それって、つまり……」

「もう、長くはないかと……」

その言葉に、フェイトは寝ている裕也を見下ろした

裕也は大分落ち着いたのか、呼吸も安定している

これを端から見たら、仲の良いカップルに見えるだろう

だが、誰に想像できようか

今、この瞬間にも、裕也という少年の魂が削られて、少しずつ死に近付いていることを

(裕也……)

それを思うとフェイトは、胸が締め付けられる思いだった

本当は、今からでも戦いから身を引いてほしい

だが、それは裕也が望まないだろう

だったら、自分出来ることは?

それは……

(少しでも長く、裕也と一緒に居よう)

それは、至って普通のことかもしれない

だけどそれで、裕也の心が安らぐならば、それで構わない

なんせ

「私は、裕也の彼女なんだから……」

フェイトはそう呟きながら、裕也の頭を撫でていた

追記

裕也は目覚めた後、フェイトに膝枕されてると気付いた直後に、顔を赤くしながらジャンピング土下座を敢行したとか

オマケ

「お、お願いだから離さないでよ!？」

「OK、わかったから落ち着け! 関節が極まってるし、俺の腕が大変ジューシーなこと!？」

〈王手です〉

〈む、これは……〉

〈待ったは無いですよ?〉

〈むう……〉

こちらもオバケ屋敷に入っていたが、カオスな状況になっていた

それぞれのデート その3

あれから義之と麻耶はメリーゴーランドに乗り、降りてから歩いていたら

「ポップコーンだ！」

と勇斗くんが、嬉しそうな声を出して突然駆け出した

「あ、こらー！ 勇斗ー！」

突然駆け出した勇斗を見て、麻耶は慌てて追いかけた
そして勇斗の手を掴むと、義之の隣に戻って

「もう……いきなり走ったら危ないでしょ？」

麻耶は優しい様子で、勇斗を叱った

「ごめんなさい……」

叱られた勇斗は、少ししよんぼりした様子で謝った

そんな二人を見て義之は、微笑んでいた

そして、ふと気づいた

先ほどまで、自分が握っていたのは勇斗の手だったが、今自分が握っているのは麻耶の手

そのことに義之が固まっていると、麻耶が首を傾げ

「どうしたのよ、桜内」

と義之の視線を追った

「あ……」

そして、麻耶も気づいた

自分が直接、義之の手を握っていることに

二人は少しの間、そのことに沈黙していたがどちらからか、手を握り直した

今更、急に手を離すのも変だからか、二人はそのまま歩き続けた
すると

「ねー、お腹すいた！」

と、勇斗が声を上げた

すると二人は、ビクンと震えて

「わ、わかったわ。確かに、ちょうどいい時間だしね……」

「良かったあ……」

フェイトは安心して、安堵のため息を吐いた
すると裕也が、タマゴサンドを取り出して

「なあ、これ隠し味になに入れてるんだ？」

と、フェイトに問い掛けた

「あ、それはね、スイートチリソースを入れてあるの」

裕也の問い掛けに、フェイトは素直に答えた

「え？ たったそれだけなんか？ それで、この味が……今度試してみつか……」

フェイトの言葉に裕也は驚くと、顎に手を当てて唸りだした

そんな様子の裕也に、フェイトは微笑むと籠を押して

「ほら、もつと食べて」

と、裕也に勧めた

「ああ、いただくよ」

勧められた裕也も、微笑みながら食べ続けた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

場所は変わって、軽食コーナー

そこでは、勇斗を挟む形で麻耶と義之の二人も食べていた

勇斗は初めての外食ゆえか、興奮気味に食べている

「こういう所だと、味はお粗末に量も少ないと思ってたけど、おいしいしボリユームもあるな」

「そうね。しかも、値段も良心的だし」

義之の言葉に麻耶は頷いた

ちなみに、義之がミートソーススパゲッティ、麻耶がピラフ

勇斗がお子様ランチである

すると、義之が

「あー……ほれ、勇斗くん。ご飯粒が付いてるぞ」
と、勇斗のほっぺに付いていたご飯粒を取った

「あ、ありがとう桜内……勇斗、そんなに急がなくてもご飯は逃げないわよ」

麻耶が注意すると、勇斗は頷き

「わかった！」

再び食べ始めた

その様子を見た二人は微笑み、自分達も食べ始めた

その風景はさながら、遊園地に遊びに来て、仲良く昼食を取っている家族のようだった

三人は食べ終わると、食器を返却して軽食コーナーから離れた位置は勇斗を中心にして、右側に義之、左側に麻耶だ

そして、義之と麻耶の二人はそれぞれ、勇斗の手を握っているそれから三人はマップを見ながら、どこに行こうか考えていた

オマケ

「なかなか美味しいな！　アリサ、お前はいい嫁になれるぜ！」

「あ、ありがとう……」

〈青春だな……〉

〈青春ですね……〉

こちらも昼食を取っていた

オマケその2

「蓮華をどこに送ったああああ！」

「ああもう！　なんで私ってわかったのかしら!?!」

「義父さんから、蓮華関係だと神夜は不可能を可能にするって聞いたことがある！」

「神夜さん、落ち着いてくださいい〜!!」

「ルーお嬢！　大丈夫か!?!」

「双子！　神夜を押さえて！」

「了解！」

「IS、ツインブレイズ！」

こちらは、修羅場になっていた

それぞれのデート 終

あれから時は経ち、午後五時になった

日は暮れて、既に暗くなってきた

さくらパークのゲートには、義之と麻耶。そして、勇斗の姿があった

「いいのか？ なんなら、パレード見てもいいんだぞ？」

義之はさくらパークの目玉のパレードを見ないで、外に出た麻耶に問いかけた

「勇斗が居るのに遅くまでいれないし、お母さんも心配だしね」

「そっか……」

「でも……」

麻耶はさくらパークのゲートを見上げると、眩しそうに目を細めて

「一回でいいから、見たかったな……」

と、眩いた

それを聞いた義之は数秒間黙ると

「なんなら、今度二人で来るか？」

と、麻耶に問いかけた

「え？」

問いかけられた麻耶は数秒間啞然としていたら、顔を赤らめて

「……うん」

嬉しそうに微笑みながら、頷いた

その顔を見た義之の心臓がバクバクと鳴っている

「なにしてるの、ふたりとも！ バスがきちやうよ！」

と、バス停に居た勇斗が大声を上げた

「今行くー！ 桜内、行きましょ」

「オーライ」

麻耶に言われて、義之は頷いた

そして二人は、勇斗が待っているバス停に向けて走り出した

場所が変わって、さくらパーク内の観覧車

そのゴンドラの一つに、裕也とフェイトは乗っていた

「いい眺めだな」

「そうだね……そういえば、裕也」

「なんだ？」

「そろそろ帰らないでいいの？」

フェイトが問いかけると、裕也はポケットから携帯を取り出して

「ほれ」

と、画面を見せた

そこには

f r o m エリオ

義父さんへ

今日はキャラロと二人でルーラーの家に泊まるので、ゆっくりと楽し

んできてください

と、書かれていた

「んで、キャラロからは」

裕也は携帯を操作してから、再びフェイトに画面を見せた

f r o m キャロ

義父さんへ

たまには、ゆっくりとフェイト義母さんと一緒に羽を伸ばして下さい

い

と書かれていて、裕也は再び携帯を操作してから、再度フェイトに

見せた

f r o m ルーテシア

裕也さんへ

エリオとキャラロはホテル・アルピーノにお任せ！ 裕也さんはフェ

イトさんにごゆっくり♪

と、書かれていた

補足説明だが、ホテル・アルピーノというのはルーテシアの家が経

営している初音鳥唯一のホテルである

美人若女将でルーテシアの母のメガーヌと看板娘のルーテシアが

中心となっている

このホテルの目玉は、ルーテシアが召喚獣のガリユールと一緒に偶然

掘り当てた温泉である

しかも凄いのが、このホテルは年々増改築されており、その設計をルーテシアがしているのである

その腕はもはや、本職の方も脱帽の域で、年々売り上げを上げていくのである

なにより恐ろしいのは、その設計は本人曰わく

「まあ、これも趣味だけどね♪」

とのことである

それを聞いた裕也は思わず、突っ込みを入れたのを覚えている

閑話休題

三人からのメールを見たフェイトは微笑んで

「いい子達だよね……」

と呟いた

「ああ、俺にはもったいないくらいにいい子達だよ……」

フェイトの呟きに裕也は同意しながら、目を細めて外を見つめた

「裕也……」

フェイトはそんな裕也の言葉を悲しく思った

気づくと、ゴンドラの高さはかなり低くなっていた

それに気づいた二人は、手荷物を掴み、落とし物がないか確認した
すると、扉が開き

「足下に^ご注意くださいませ」

と、係員が注意を促した

そして、裕也とフェイトは時間もあつて先に夕食を軽食コーナーで
食べた

そして、ひとつのアトラクションを終えて歩いていると

『まもなく、ナイトパレードを開始します。ご覧になるお客様は中央
通りまでお集まりください。繰り返し……』

という放送が、二人の耳に聞こえた

それを聞いた二人は、互いの顔を見合せて

「行きますか」

「そうだね」

と、頷きあつた

それから二人は、マップを頼りに中央通りまで歩いた
すでに中央通りは人だかりが出来ていて、二人の入るスペースは無
いように見えた

「うーん……どうしよう……」

と、フェイトが悩んでいると

「フェイト、こっち」

と、裕也がフェイトの手を引いて歩き出した

「裕也？」

フェイトは裕也がいきなり、中央通りから離れ始めたことに首を傾
げた

「裕也、どこに行くの？ 中央通りから離れてるよ？」

「すぐそこだよ」

フェイトからの問いかけに裕也はそう言うだけで、どんどん歩いて
いった

すると、進行方向の先に城を彷彿させる建物があつた

そこもアトラクションだが、パレード中は立ち入りが制限されてい
るらしい

裕也はそんなことお構いなしに近づき、ドアの近くに立っていた係
員にパスを差し出した

すると、視線をフェイトに向けて

「ほら、フェイトもパスを出して」

と、催促した

フェイトは内心で首を傾げながらも、パスを取り出して係員に渡し
た

すると、係員はパスの表面に印刷されているバーコードを機械で読
み取り

「確認が取れました。どうぞ」

とドアを開けて、二人を中に入れた

「どうも」

「ど、どうも……」

裕也は普通に、フェイトは戸惑いながらも中に入った
すると、少し先にエレベーターのドアが見えた

裕也はフェイトを先導するように歩いていき、スイッチを押した
すると、すぐにドアが開いた

裕也は中に入ると、フェイトを中に呼んだ

フェイトは首を傾げながら、中に入った

フェイトが中に入ると、裕也はドアを閉めて上のボタンを押した

「裕也？ いい加減に、教えてくれても……」

フェイトが不機嫌そうに問いかけた

その時

「着いたな」

ドアが開いた

そこは……

「わあ……綺麗……」

中央通りを一望出来るテラスだった

「裕也、これって……」

フェイトが問いかけると、裕也は恥ずかしそうに鼻を掻きながら

「桃子さんから貰ったあの特別ペアチケットにはな、特典があつたんだ」

「特典？」

裕也の言葉にフェイトは首を傾げた

「ああ……あの特別ペアチケットで入場したペアは、ナイトパレードの時にこの場所を貸し切りに出来るって特典がな」

それは、チケット販売所のことだった

裕也が特別ペアチケットを出して、チケットを購入しようとしたら
「お客様、このペアチケットには特典がございますが、いかがいたしますか？」

と聞かれたのである

裕也が詳細を聞いたなら、ナイトパレード時にここを貸し切りに出来るというものだったのだ

それを聞いた裕也は、フェイトに内緒で貸し切りにしたのだった

回想終了

「そうなんだ……ありがとう、裕也」

裕也の話を聞いたフェイトは、嬉しそうに感謝を述べた

「いや、これは桃子さんから貰ったチケットがあったからだ」

「でも、貸し切りにすることを決めたのは、裕也だよ」

裕也が首を振って否定するが、フェイトは事実を述べた

すると、そのタイミングで明るい曲が流れ始めた

「あ、来たよー！」

「お、本当だ」

二人の視線の先に、煌びやかな装飾を施された山車とコスチュームを着たダンサー。そして、さくらパークのマスコット達が現れた

それは、さくらパークの目玉と言うだけあって、まさしく一見の価値アリというべきものだった

二人はそれを特等席から、手を繋ぎながら見ていた

そして、パレードが通り過ぎると二人はさくらパークから出て帰宅の途についた

こうして少年は、短い時間の中で青春を謳歌していく

オマケ

「まさか、白天王まで召喚するはめになるなんて……」

「というか、六人＋召喚獣二体でようやく……」

「バーサーカーここに極まれりだな……」

「双子、壊れた所を直すよ」

「はい……」

「疲れました……」

「こちらは、修羅場を終えたようである

オマケその2

「ねえ……あんたの家で、なにがあったの？」

「そんなん、俺が聞きたいよ……」

〈これは神夜だな……〉

へ神夜ですね……
こちらは半壊した家を見て、アリサは呆れて、蓮華は呆然としていてデバイスは把握していた

ドキドキの同居生活 その1

デートが終わり、一月も後半に入ったある日

義之と麻耶の二人は教室に残り、卒業パーティーのことで話し合っていた

その時

「あー、居た居た。よかった、居てくれて」

という声が聞こえて、二人は振り返った

そこに居たのは

「水越先生に天枷さん？」

風見学園保険医の水越舞夏と天枷美夏だった

「桜内くん、ちよつと……」

どうやら、用があるのは義之らしい

義之はなんだろう？ と首を傾げながら、二人に近寄った

「ちよつとこつち」

すると水越先生は、義之の首に腕を回して義之を近づけた

「ど、どうしたんですか？」

義之はいきなり首に腕を回されたことに驚くが、問い掛けた

すると、水越先生は義之の耳元で囁くように

「実はね……天枷を預かって欲しいのよ。一週間ばかり」

「はあ!?! 天枷を預かる!?!」

義之は水越先生の言葉に驚愕して、大声を上げた

すると

「ええ!?!」

麻耶も驚愕の声を上げた

義之と水越先生が二人して麻耶を見ると、麻耶は顔を赤くして

「す、すいません……」

謝ってから、椅子に座った

それを見た二人は、視線を戻して

「桜内くん、声が大きい」

「すいません……それより、なんで俺なんですか？」

水越先生に注意されて、義之は謝るが何故自分なのか問い掛けた
「杉並君だと、なににするかわかったもんじやないし、裕也君はエリ才君とキヤロちゃんて精一杯だからね」

水越先生の言葉を聞き、義之は納得した
いわゆる、消去法である

「理由はなんなんですか？」

「私ね出張に行かないといけないのよ」

水越先生が理由を言っていると、義之は片眉を上げて

「は？ 保健室の先生が出張ですか？」

と聞くと、水越先生は手をひらひらと振りながら

「いやいやいや。そつちじゃなくて、本業のほう」

「……ああ」

水越先生に言われて、義之は水越先生が天枷研究所の研究員であることを思い出した

「そういえば、天枷って水越先生の家に住んでるのか？」

「いや、美夏は一人暮らしだ」

義之の問い掛けに、美夏が答えた

「天枷たつての希望でね、研究所の所有するアパートの一つに住まわせてるのよ」

二人の言葉を聞いた義之は、首を傾げて

「だったら、うちで預からなくてもいいのでは？」

そもそも、水越先生の要請はかなり無茶である

美夏はロボットと知られていないため、傍から見たら後輩の女の子が先輩の家に泊まる。といったシチュエーションにしか見えないのだ

すると、義之の考えがわかってるのか、水越先生は苦笑して

「まあ、気持ちはわかるんだけどね……天枷って、一日に一回だけ、簡単なメンテナンスを受ける必要があるの」

「メンテナンスって、俺、そんなのできませんよ？」

いくら義之でも、メカニックマイスターの資格は有しておらず、普段のメンテナンスも最近はずかしく頼んでるくらいである

すると、水越先生は

「だから、言ってるでしょ？ 簡単だって」

水越先生は、義之の頭にヘッドロックをかましながら言った
その影響で、義之の頭蓋骨がミシミシと軋んだ

「ど、どのくらい簡単なんですか？」

「ゼンマイ巻くだけよ」

水越先生の言葉に、義之は一瞬驚くが、以前渡されたマニュアルを
思い出し

「そういえば、マニュアルに書いてありましたね……」

内心で本当にゼンマイだったことに驚きながらも、呟いた
すると、美夏がフンつと鼻息荒く

「美夏は、一人でも大丈夫だと言ってるんだがな」

と腕組みしながら言うのと、水越先生が視線を美夏に向けて

「天枷、あんた一人じゃ、背中に手が届かないでしょ」

「う……」

水越先生に一蹴されて、美夏は口を噤んだ

「どうやら、ゼンマイの穴は背中にあるらしい」

「そんなわけで、お願い」

「まあ、さくらさんが良いって言うなら……」

義之が頬を掻きながら言うのと、水越先生が

「そう言うだろうと思って、学園長の許可はとってあるのよ。かなり
軽い口調で『義之くんがいいって言ったなら、いいよ』ってさ」

義之の考えを予測していた水越先生は、先に家主であるさくらの許
可を得ていたようである

「でも、他の研究員の方々はどうなんですか？」

「皆も忙しいのよ。私みたいに二足草鞋も居るし」

「ここまで言われたら、しようがないか。と義之は思い
「わかりました。うちで預かります」

と、願いを聞き入れた

「ありがとうね、桜内くん」

「すまないな、桜内。迷惑をかける」

「気にすんな」

と三人が話し終わったら、麻耶が近づいてきて

「で、天枷さんを預かるって、どういうこと?」

すっかり蚊帳の外となっていた麻耶が、若干不機嫌そうに聞いてきた

「いや、なんでも、水越先生がこれから出張に出るらしいんだがな。その間、水越先生が預かってる天枷をうちに預かることになったんだ」
「ちなみに、今日から今週末の金曜日までね」

今日は月曜日なので、丸々5日間ということである

「さてと、これから天枷の荷物を取りに行つて、帰りに買い物しなきゃな」

「買い物なら、美夏も手伝おう」

「さーて、出張の準備しなきゃ」

と、三人が顔を合わせた時だった

「な……納得いきません!」

「へ?」

麻耶の叫びに、三人はポカンとした

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「なぜにこうなった……?」

そう呟いてる義之の視線の先には……

「うん! 弟くんのカレーは本当においしいね!」

「ですね」

家族同然の朝倉姉妹

「美味すぎるだろ! 店の販売品か!」

今日から5日間預かることになった、天枷美夏

そして……

「二回目だけど……やっぱりおいしい……」

義之のクラスのクラス委員長、沢井麻耶が居た

これには訳があり、あの後のことである

回想開始

「いくらなんでも、男子の家に女の子を一人で預けるのは危険です!」

と、麻耶が抗議しているのは、風見学園学園長にして、家主の芳野さくらである

「委員長、俺はそんなに信用ないのか？」

「桜内は黙ってて！」

「はい……」

麻耶の言いように義之が抗議するが、即行で負けた

「うにやく……そうは言ってもね……女の子をアパートに一人だけに
するのも危ないと思うんだよねー」

と、さくらが困ったように言う

「そもそも、学園長が桜内の家の家主なんですよ？ なにも起こらないと思うんですか？」

そう麻耶が言うと、さくらは笑みを浮かべ

「義之くんなら、大丈夫！」

と断言した

さくらの言葉を聞いた義之は

(さくらの期待だけは、裏切らないようにしよう……)

と、心に誓っていた

「だったら、せめて朝倉先輩の家にしてください！」

と、麻耶が次善策を言うが

「うにやく、お兄さんの家には余裕が無いんだよねー。その点、僕の家は部屋なら余ってるんだー」

正確に言うと、朝倉家の部屋は空いている

だが、その部屋は今現在、初音島を離れてる純一の妻、朝倉音夢の部屋である

いくら純一でも、妻の部屋に他人を泊める気にはならないらしく、許可は出なかった

ちなみに、朝倉音夢本人としては、別にいいのに。とのことである

閑話休題

「ですが……」

麻耶としては反論したいが、反論する材料がないために口ごもった
すると、さくらが手を叩いて

「だったら、麻耶ちゃんも泊まればいいんだよ！」

と、爆弾発言をした

「え？」

さすがに予想外の発言に、麻耶は固まった

「だって、美夏ちゃんを一人で泊めるのは反対なんだよね？ だったら、麻耶ちゃんも泊まれば一人じゃないよね？」

「え、いや……確かにそうですね……」

「それじゃあ決まり！ 麻耶ちゃんの家には連絡しておくから、今日はこれまで！ 僕はこれから会議なんだ」

「は……」

あれよあれよと言う間に、麻耶も泊まることが決まったのだった

補足だが、麻耶が家に帰ったら、大人形態のアルフが居て、麻耶の宿泊用の荷物を持っていらしたらしい

ちなみにアルフだが、時々リンディの手伝いをしているために子供の世話から料理まで何でもござれである

そして、そのアルフに教えたのは勇斗である

何でも、さくらから電話が来た勇斗は、以前からの遊び相手であるアルフに相談したらしい

相談されたアルフは、すぐさまリンディとフェイトにお願いして沢井家に泊まる許可を獲得

アルフは沢井家に向かったのだった

そして、麻耶の荷物を纏めて、麻耶に渡したのである

以上、回想終了

ちなみに、朝倉姉妹が家に来たら麻耶と美夏が居たので、音姫は義之に問い詰めて、由夢は無言のプレッシャーを放っていた

そして、今現在、朝倉姉妹と麻耶。そして美夏は義之が作ったカレーを食べていた

朝倉姉妹は何回も食べているために、納得した様子で食べていて、麻耶は二回目のために、少しばかり驚いた様子で食べていて、義之の料理を初めて食べた美夏は、驚愕した様子で食べていた

そして五人は料理を食べ終わると、由夢が食器洗い、義之が美夏と

麻耶の泊まる部屋の掃除と布団の運び込み

そして音姫が、風呂場の掃除を行った

それを見た麻耶と美夏は三人を手伝おうとしたが、三人はやんわりと断った

理由としては、二人はお客様なんだから、ゆつくりしてろ。ということだ

そう言われたら、二人としては待つしかなかった

二人は待っている間に会話したらしく、かなり意気投合していた
それを見た義之は、嬉しさ半分、美夏の正体がバレないかの恐怖半分であった

そして時は経ち、朝倉姉妹は家に帰り（隣だけど）、芳野家では風呂の時間となった

ただし、ここで一つの問題が発生した

入る直前になって、麻耶が美夏と一緒に入ろうと提案してきたのだった

それを聞いた瞬間、義之と美夏を戦慄が襲った

美夏がロボットだということを知っているのは、義之を含めて五人だけ

もし、ロボット嫌いの麻耶に知られたら大事である

そう思った二人は、なんとか麻耶を言いくるめて、麻耶を先に入らせることに成功したのだ

そして、麻耶が入浴している間に美夏のゼンマイを巻いたのだが、義之としては精神的に厳しかった

理由としては、義之がゼンマイを巻く度に、美夏が色っぽい声を漏らしたのである

そして、麻耶と美夏が入り終わったので義之が入ったのだが、かなり緊張しながら入った

何故かと言うと、美夏と麻耶の二人は誇張抜きに美少女である

そんな二人が入った後に入るとするのは、かなり意識せざるを得ないだろう

そして義之が出ると、義之は二人をそれぞれ空いていた客間に案内

した

その後、義之も部屋に戻り布団に入ったのだが……

「寝れるかちくせう……」

二人のことを意識し過ぎて、眠気がまったく来なかった
その後もウダウダしていたが、やはり眠れなかったので

「なんか温かいのを飲むか……」

体を温めて眠気を誘うことにして、義之は階段を下りた
すると、義之は使っていない縁側の居間から気配を感じた

芳野家には居間が二つあり、温かい春と夏は庭に面した居間を使
い、寒い秋と冬の間は家の中央の居間を使うようにしている

そして、義之が気配を感じたのは庭に面した居間の方からである

義之は、さくらが帰ってきたのかな？ と、首を傾げながら覗いて
みた

すると、そこに居たのは……

「委員長……」

「あら、桜内」

SSPで見慣れたパジャマを着た麻耶だった

「少し待ってろ……」

義之は一旦離れると、台所に向かい、二人分のレモネードを作った
そして、麻耶の隣に座ると

「ほい、飲んでけ」

と、レモネードの入ったマグカップを渡した

「ありがとう……」

麻耶は受け取ると、口に運んだ

二人はしばらく無言で、レモネードを飲んでいた
すると、麻耶が上目遣いで

「なにも聞かないの……？」

と、義之に問い掛けた

「聞いたら、教えてくれるんか？ だったら、いくらでも聞かせ？」
と義之が言うのと、麻耶はしばらく黙って

「少しね、反省してたの……」

と、呟いた

「反省？」

義之が聞くと、麻耶は頷き

「桜内の家に無理矢理来て、困らせちゃったから……」

「なに言ってるんだよ。決めたのは、さくらさんだろ」

麻耶の言葉を義之は否定するが、麻耶は首を振って

「その原因は、私が学園長に抗議したからでしょ？」

「そりやそうだけど……」

麻耶の言葉に、義之が困ったように頭を掻いてると、麻耶は気になつたのか視線を義之に向けて

「そういうえば、ここは芳野学園長の家よね？ 親戚なの？」

と、義之に問い掛けた

聞かれた義之は、首を傾げて

「あれ？ 話したことなかつたっけ？」

と、麻耶に聞いた

「全然、桜内と密に話すようになったのは最近だし……」

「そーいやあ、そうだった」

麻耶の言葉を聞いた義之は頭を掻くと、視線を上に向けて

「俺な……両親居ないんだ……」

と呟いた

義之の呟きを聞いた麻耶は、目を見開き

「ひよつとして……亡くなったの？」

麻耶の気遣うような声に、義之は慌てて手を振って

「あーいやいや、裕也みたいに殺されたとかじゃないんだ。ただ、気付いたら、一人でさくら公園に居たんだ」

「さくら公園に？」

麻耶が首を傾げると、義之は頷き

「そ、気付いたら一人でさくら公園に居てな。そこをさくらさんに保護されたんよ」

義之の言葉を聞いて、麻耶は沈痛な面持ちで

「そつちもへビーじゃない……」

と呟いた

麻耶の呟きを聞いた義之は、頭を掻いて

「そうかね?」

と麻耶に聞くと、麻耶は無言で頷いた

「まあ、さくらさんに引き取られた後は、さくらの仕事が忙しいのもあって、朝倉家に預けられたんだ」

「だから、朝倉先輩や由夢さんと、あんなに仲がいいんだ」

義之の説明を聞いて、麻耶は朝倉姉妹との仲の良さに納得した

「まあ、家族同然に育ったからな……」

義之がそう言うと、麻耶はしばらく無言になった

そのまま数分間、二人は黙っていた

すると

「ごめんね、桜内」

義之に対して、唐突に謝ってきた

「いきなり、なんだよ」

突然謝ってきた麻耶に対して、義之は訝しんだ

「いきなり押しかけちゃって、桜内を困らせちゃった……」

「だから、それは、さくらさんが……」

麻耶の言葉に義之は反論しようとしたが、麻耶は首を振って

「そうだけど、桜内……天枷さんのことが……好きなんですよ?」

「ぶふっ!」

麻耶の爆弾発言に義之は動揺して、含んだレモネードを吹き出した

義之は数回むせると、視線を麻耶に向けて

「なんで、そうなる?」

義之が問いかけると、麻耶は俯いて

「だって……なにかと天枷さんと二人きりになろうとするし、私が天枷さんをお風呂に誘ったら、必死になって止めたし……」

「それにはワケがあつてな……」

麻耶の言葉に義之は、なんとか反論しようとしたが

「そのワケって、なに?」

「むう……」

言える訳がなかった

もし、美夏がロボットだとバレたら麻耶はどんなことをするか、義之には想像が付かなかった

「ほら、言えないんじゃない」

「それは……」

麻耶の指摘に、義之はどうすべきか悩みだした
すると、麻耶は下を向いて

「安心して、明日には帰るから……」

と言うと、立ち上がろうとしたが、それを義之が掴んで止めた
「なに……?」

「聞いてくれ、委員長……」

義之はそこで深呼吸すると、麻耶の目を見つめて

「俺には確かに、好きな人が居る。だけど、それは天枷じゃない……好きなのは……委員長……お前だ」

と、一息で言った

それを聞いた麻耶は、目を見開き

「ウソよ……」

と呟くが、義之は首を振って

「ウソじゃない……俺が好きなのは、間違いなく、委員長だ」

再び義之が言うのと、麻耶は顔を赤くして座り込み

「私も……私もね、桜内のことが好きだよ……?」

麻耶のその言葉に、義之は嬉しそうにするが

「でも……信用出来ないよ……だって、桜内だもん」
と、俯いた

それを聞いた義之としては

(俺って、委員長の中じゃどんな奴なんよ……)

と、内心で首を傾げた

「まあ、どうこう言ったって、俺が好きなのは委員長なんだ。それは変わらない」

「桜内……」

麻耶に見つめられて、義之は気恥ずかしくなって

「そんじや、そろそろ部屋に戻ろう。風邪引いちまう」

と言いながら、立ち上がった

すると、麻耶が裾を掴んで

「待って……もう少し、一緒に居て……」と、義之に願った

すると義之は、肩をすくめてから座った

すると不思議に、義之と麻耶は見つめ合い、そして少しずつ、互い

の顔が近づき……

「んっ……」

「……」

二人の唇が重なった

こうして、また一つの道が重なり、歯車は動きを変える

この恋路がどうなるのかは、当人達は知らない……

二つの進展

義之の家に麻耶と美夏が泊まり、麻耶と義之がキスした翌日の放課後だった

授業も終わり、卒パ関連の話し合いもなかったので、義之は買い物をして帰ろうかと思っていた

そのタイミングで

「ねえーねえー、義之くん。時間ある？」

と、茜が話し掛けてきた

「ちよーつと、顔を貸してほしいんだよねー。不良風に言うなら……

ツラ貸せや、コラ……みたいなのー」

茜がなぜ、不良風に言ったのか首を傾げながら

「まあ、一応あるが……」

と言うと、茜は振り返って

「杏ちゃーん！ 義之くんは大丈夫だつてー！」

と、麻耶の近くに立っていた杏に告げた

茜の言葉を聞いた杏は頷くと、麻耶を見て

「委員長、ちよつといいかしら？」

「えっ？ なに？」

杏が問い掛けると、麻耶は驚いた様子で顔を上げた

しかし、それも仕方ないだろう

麻耶と杏はクラスメイトだが、あまり親しく話す仲ではないからだ

「ちよつと話があるのよ。付いて来てもらえるかしら？」

と杏が言うと、麻耶は片眉を上げて

「こじやダメなの？」

「教室じゃ話しづらいことなのよ」

という、杏の言葉に麻耶が躊躇っていると

「大事な話なのよ。私達、友達でしょ？」

という杏の言葉に、麻耶は固まった

すると、それを見越してか、杏は小恋とアリシアを見やって

「ねえ、アリシア、小恋」

と呼ぶと、話し合っていた二人は杏を見て

「どうしたの?」

「なにになに?」

と聞いてきた

すると杏は、笑みを浮かべながら

「私達と委員長って、友達よね?」

と聞いた

すると二人は、互いの顔を見てから

「うん、そうだよ」

なにを今更てきに、二人は返した

それを聞いた杏は、麻耶のほうに視線を向けて

「ね?」

と、首を傾げながら同意を求めた

すると麻耶は、少しうろたえた様子で

「そ、そうね……」

その光景を見ていた義之は、杏のやり口を評価した

(小恋とアリシアの純粹さを利用した見事な心理誘導だ……)

と、義之が思っている

「さてと、これで役者は揃ったわね……場所はどうしましょうか?」

と杏が茜に聞くと、茜は唇に指を当てて

「んー……屋上でいいんじゃない?」

「そうね、そうしましょ。委員長、付いて来て」

茜の提案に乗り、杏は麻耶を誘い

「行きましょ行きましょ、義之くんも」

茜は義之を誘った

「え? え? どっか行くの!?!」

「はいはい。いいから、部活行くよー!」

小恋は杏達に付いていこうとするが、それをアリシアが首根っこを
掴んで止めた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

数分後、四人の姿は屋上にあった

流石に寒かったので、義之が魔法で寒さを和らげている

「んで、話ってなんだよ?」

話の内容が気になっていた義之が聞くと、杏が

「焦らないで、これは大事な話なんだからね」

と、義之に落ち着くように促した

「そうそう、今回は二人に聞きたいんだから」

茜のその言葉に、義之と麻耶は首を傾げながら目を合わせた

すると、杏が微笑んで

「ただ、私達が確認することで、少しややこしい事態になるかもしれないわね……そこは勘弁してね……」

「どういうことだ?」

義之が眉をひそめがなら聞くと、杏は頷いて

「単刀直入に聞くわ……あなた達は付き合ってるの? そうじゃないの?」

という杏の言葉に、二人は固まった

「冬休み中から少し怪しいな、って思ってたのよ」

「けど、悪く言うと中途半端」

茜の言葉は正解だった

二人は確かに、昨日の夜にキスはした

だが、告白したわけではない

二人がそのことに固まり、あーうー、と言葉を濁していると

「もー! 煮え切らないなあ!」

「仕方ないわね……沢井さん、どうなの?」

二人の態度に茜は口を尖らせ、杏は麻耶に問い掛けた

「えつと……」

「えつと?」

「だから……」

「だから?」

「っ……」

麻耶が口ごもっていると、二人は麻耶を見つめ続けた
すると麻耶は、大きく深呼吸して

「そ……それに関しては……桜内から説明するわ！」

という麻耶の言葉に、義之は目を見開いて麻耶を見た

「桜内がなんと言おうと、桜内の言うとおりでだから！」

麻耶の言葉に、杏と茜は義之を見て

「だ、そうだけど？」

「その所はどうなの？ 義之」

二人からの問い掛けに、義之は逡巡した

すると、麻耶と視線があい、麻耶の目が潤んでることに気づいた

そんな義之と麻耶を見て、杏達は互いを見て

「なんか、ややこしい事態になっちゃったみたいだね」

「藪蛇をつついちゃったかしら？」

という二人の言葉に、義之は

（だったら、ハナから聞くんじゃねえよ……）

と内心で嘆息すると同時に、考えだした

（確かに俺達は昨日、互いの気持ちを知って、しかもキスマでした……

だけど、まだ告白すらしてない……だったら、否定するか？）

そこまで考えた義之は僅かに目を動かして、麻耶を見た

麻耶は目を潤ませたまま、僅かに俯いていた

その姿を見た義之は、すぐに考えを改めた

（いや、それはダメだ。そんなことをしたら、昨日の思いと行動を否定

することになる……だったら、俺が出すべき答えは……）

義之は答えを導き出すと、深呼吸して

「ああ、そうだな……俺と委員長は付き合ってるよ」

と、断言した

義之の言葉を聞いた麻耶は嬉しそうに微笑み、杏と茜は驚いた様子

で

「本当？」

「嘘じゃないでしょうね？」

と、義之に確認してきた

「嘘ついてどうすんだよ。とは言え、昨日からだけどな」

と義之が補足すると、茜が喜んで

「ね!? ね!? 言った通りでしょ!」

と、杏の肩を叩いている

すると杏は、茜の手をバインドで抑えて

「そうね、そういうことにしとくわ……」

と、溜め息混じりに同意した

「だけど、そんなことを確認してどうすんだよ」

と義之が確認すると、杏が仕掛けたバインドを解除した茜が

「まあ、いいからいいから♪」

と気楽そうに、手を振った

それに続くように、杏が

「まあ、私達が確認したかったのもあるしね……それじゃあ、正直に答えてくれたお礼として、まわりには上手く伝達しておくわ。二人の関係が、自然に浸透するようにね……」

「まー、付き合ってるのを秘密にし続けるのも辛いし、だからといって、教えるのは恥ずかしいしねー」

義之は、茜の言葉に内心頷いてから

「なんで、そんなことを……お前らが……?」

と聞くと、二人は顔を見合わせて

「だって、ねえ……?」

「まあ、それが気になってる子も居るってことよ……」

そう言う杏は、屋上入り口の方に振り向いて

「それじゃあね、お二人さん……」

と言つて、ドアをくぐった

「あ! 杏ちゃん、置いてかないでよー!」

置いてけぼりをくらった茜は、慌てて杏を追いかけていき、屋上には義之と麻耶だけが残った

その後二人は、互いを名前呼びにすべきかを話し合ってから屋上を後にして、買い物に向かった

ほぼ同時刻、診療所地下司令部

そこには、スカリエツティとウーノ。裕也と蓮華の姿があった

「……その話は本当ですか?」

裕也が問い掛けると、ウーノが頷いて

「ええ、間違いないわ。ドゥーエから戦闘機人ネットワークを通じて報告が上がったわ」

ドゥーエというのは、ウーノやノーヴェ達と同じ戦闘機人であり、スカリエツティ達が脱走する時に残って情報収集を務めている彼女のISはそういった潜入向きで、敵中から情報を得たり、暗殺したりなどが出来る

そのドゥーエからの報告を聞いて、裕也と蓮華は苦い顔をした

理由は……

「救難十四聖一人を含む、十四人が初音島に来るなんて……」

インデックスが初音島に対して、襲撃を計画していたからだった「目的はわからないんですか？」

裕也が問い掛けると、スカリエツティは首を振って

「流石に、そこまではわからないみたいだ……ドゥーエも、かなり危ない橋を渡ったらしい」

「そうですか……」

スカリエツティの説明を聞いて、裕也はそれ以上の質問を止めた

ドゥーエが居るのはまさしく、インデックスの総本山の地下図書館である

一瞬のミスが命取り故に、それがわかっただけでも十分だった

「俺と裕也だけじゃ厳しいな……トーレさん達にも対処してほしいが……」

と蓮華が言うと、スカリエツティは頷いて

「もちろん、そのつもりだよ。それに、聖王教会にも応援を要請しておいたから、恐らくは騎士ゼストやシスターシャツハが来てくれるはずだ」

と、二人に説明した

「それじゃあ、俺も初音島全域の対魔センサーの強化や、使い魔を増やしておきます」

裕也の言葉を聞いたスカリエツティは頷き

「そうしてくれ。こちらでもICPOに連絡して、インデックスを監視

してもらおうように申請しておく」

と、伝えた

「頼みます」

裕也のその言葉を合図に、会話は終わった

こうして、世界の歯車は軋みを上げながら回っていく

その行く末は、破滅か、それとも……

衝撃の事実と悲しい別れ

翌日の早朝だった

「行ってくるね……義之君……」

トレードマークとも言えた長い金髪をぎつくりと切ったさくらは、悲しい笑みを浮かべながらそう言うと、芳野家に背を向けた

そして、一人で歩き続けて桜公園に入り、雑木林を抜けて《枯れな

いなにせ、そこには……

「裕也くん……」

制服姿の裕也が立っていた

「待ってましたよ……さくらさん」

「そっか……劫の眼で見たんだね……?」

裕也の言葉を聞いて、さくらはすぐに察して、裕也も首肯した

「ええ……今朝方に」

裕也はそう言いながら、さくらに近付くと

「さくらさん……正気ですか?」

と、さくらに問い掛けた

問い掛けられたさくらは、悲しい笑みを浮かべたまま頷き

「うん……やるよ……」

と、返した

さくらの言葉を聞いた裕也は、唇を噛むと

「なんですか……なんでさくらさんが、桜と融合しなければいけないんですか!?!」

まるで、泣き叫ぶように問い掛けた

「そもそも、この桜はなんなんですか!?!」

裕也がそう聞くと、さくらは桜の幹に触れて

「裕也くんはさ……この桜の噂を知ってる?」

と問い掛けた

問い掛けられた裕也は、真剣な様子で

「ええ、知ってます……願いを叶える桜の樹と呼ばれますよね?」

と、学校で聞いたのだろう噂を言った
すると、さくらは頷いて

「うん……まさしく、その通りなんだ……」

その答えを聞いて、裕也は眉をひそめた

「それは、どういう……?」

と聞くと、さくらは桜を見上げて

「この枯れない桜はね、魔法の桜なんだ」

「魔法の桜……?」

さくらの言った意味がわからないのか、裕也は首を傾げた

「うん……小さな願いでも、多く集まれば大きな力になれる。そして、
ハッピーになれる。そういう思いを込めて、この桜を作ったんだ
……」

「願いを叶える桜……この桜をさくらさんが……」

さくらの言葉を聞いた裕也がそう言うと、首肯して

「でもね、この桜には致命的なバグがあったんだ……」

と、暗い表情を浮かべた

「致命的な……バグ?」

「そう……この桜はね、願いを無差別に叶えてしまうんだ……」

さくらの言葉を聞いた裕也は、一瞬首を傾げたが、次の瞬間には目
を見開いた

「つまりは、邪な願^{よこしま}いまで叶えてしまうんですか!?!」

裕也の驚愕の声に、さくらは頷いて

「そう……そして、最近の原因不明の事件、事故の原因が、この桜なん
だ……」

さくらの言葉に、裕也は守護者として知り得た最近頻発している事
件事故を思い出した

例えば、無人で止まっていた車が突如動き出して電柱に激突した
り、口論していた男性の頭上にあつた看板が落下してきたりと、そう
いった原因不明の事件事故があつた

「だったら、この桜を枯らすなり、切り倒すなりすれば済む話です!

さくらさんが融合する必要はありませんよ!」

と裕也が言うと、さくらは首を振りながら

「それはダメだよ……そんなことをしたら………義之君が消えちゃうから」

という、驚愕的なことを告げた

さくらの言ったあまりの内容に、裕也は絶句して

「義之が消えるって……どういう………ことですか？」

と問い掛けた

するとさくらは、視線を下げて

「義之君はね……僕の願いで生まれた存在なんだ……」

と、悲しそうに言った

「さくらさんの……願いで……」

裕也の言葉に、さくらは頷くと

「裕也くん……僕はね、寂しかったんだ……僕は風見学園を去った後、しばらくの間はアメリカの大学に居て、この桜のことを研究してたんだ。なんとかして、完璧な魔法の桜を作ろうと思ってね……でも、一つのバグを直したら、今度は別のバグが発生するってことが、ずっと続いたんだ……そんな中、送られてくる友人知人からの手紙には、結婚しました。子供が産まれました。ってことが綴られててね……僕が一人で居る間に、皆はどんどん新しい家族を増やしていつて……そんなある日、僕は一人に耐えきれなくなつて、二十年くらい前に初音島に帰ってきて、最初の仕様に戻したこの桜を植えた……そして、十年前に願ったんだ……『僕に居たかもしれない家族をください』って……そして、産まれたのが……」

「義之……なんですか……？」

さくらの長い独白を聞いた裕也が問い掛けると、さくらは頷いた

「だからね、僕が直接産んだわけじゃないけど、義之君は確かに、僕の子供なんだ……」

さくらのその言葉を聞いた裕也は、涙をこらえながら

「だったら……だったら尚更、さくらさんが居ないとダメですよ！

ここは、俺の劫の眼で……っ！」

と言うと、右手を左目の眼帯に持っていた

が、その手をさくららが止めた

「ダメだよ、裕也くん……そうしたら、今度こそ、裕也くんが死んじやうよ……」

と、優しく諭した

さくらのその言葉に、裕也は固まり

「知って……たんですか？」

と問い掛けると、さくらは微笑みながら頷き

「そりゃね。かわいい生徒のことだもん……生徒は僕にとって、我が子みたいなものだよ？ 全部知ってるよ……裕也くんの寿命が、後二年くらいなものも、劫の眼の因果操作を二回使ってるってこともね」

というさくらの言葉に、裕也は衝撃を受けた

それは、自分しか知らないはずの秘密だった

「なんで……それを……」

と裕也が聞くと、さくらは微笑みを浮かべたまま

「言ったでしょう？ 僕にとって、生徒は全員、我が子みたいなものだって」

と言うと、裕也に背を向けて

「だから、裕也くんは生きないといけないよ。皆を、守るんでしょ？」

そう言って、背中を桜の幹に付けると

「それじゃあね、裕也くん……初音島を……世界を……お願いね……」

そう言って、さくらの体が少しずつ消えていき

最後に、いつもの笑顔を浮かべて、さくらは燐光を散らせながら消えた

それを見た裕也は、歯を食いしばると、空を見上げて

「あなたの願い……確かに、叶えます……」

と涙声で、誓った

平和なひと時

さくらが消えた数時間後

場所 付属3年3組教室

「はい、静かにしてくださいー!」

そう言ったのは、教卓の位置に立っている麻耶である

その隣には、義之が椅子に座って待機していた

そして、全員が静かになると

「今から、卒パの出演内容を決めたいと思います!」

と麻耶が言うと、小恋とアリシアが驚いた様子で

「え、もう?」

「まだ2ヶ月もあるよ?」

と麻耶に問い掛けた

「気持ちばかりですが、今回私達が見送られる立場となるので、クリパの時みたいギリギリというのを避けたいんです」

麻耶がそう言うと、二人は納得した様子で頷いた

その後、麻耶は義之と二人で考えた草案を全員に発表した

「私達からの提案は以上です。他に提案がある方は、挙手してください」

と言うと、渉がおどけた様子で

「うひょう、こいつは凄こって。委員長一人で考えたんか?」

と言うと、麻耶は額に人差し指を当てて

「板橋……最初に言ったでしょう? 桜内と一緒に考えたのよ」

「ひゅー、そりゃ仲が良い事で。ひよつとして、二人は付き合ってたらしい」

と渉が口笛を吹くマネをしながら言うと、どこからか笑い声が聞こえた

「おりよ?」

笑い声が聞こえた渉は立ち上がると、教室を見回して

「おい、誰だよ。今笑った奴」

と、笑った人物を探した

が、自分に向けられた視線に気付くと

「ねえ、待って。なんでかわいそうな目で見られてるの、俺は」

と言うと、再びキョロキョロと周囲を見回した

「うわ、やめろ！ 俺を生暖かい目で見るのをやめろ！ かわいそうな人を見るような目で見るのをやめろ！ 知らないのはお前だけだみたいな目をやめろ！」

とそこまで言っつて、固まった

「……っつて、え？ そうなの？」

と渉は、呆然とした様子で見回した

「もしかして……皆が知ってること？」

渉が問い掛けると、数人が頷いた

それを信じたくないのか、渉はゆつくりと視線を動かして

「蓮華？」

真後ろに座っていた蓮華を見た

すると蓮華は、親指を立てて

「当たり前だのクラッカー！」

と肯定した

「……アリサ」

そのまま渉は、蓮華の隣に座っていたアリサを見た

「知ってるわよ」

アリサがしれつと答えると、渉は続いてすずかを見て

「……すずか？」

「うん、知ってるよ」

すずかが頷くと、視線を前に向けて

「……裕也？」

「知つとる」

問い掛けられた裕也は、頬杖を突きながら、空いていた右手を振つた

「……フェイト」

「うん、知ってるよ」

続いて問い掛けられたフェイトは、コクリと頷いた

「アリシア……」

「知ってるー！」

問い掛けられたアリシアは、朗らかに答えて

「……茜？」

「もっちろん♪」

茜は自慢の胸を揺らしながら

「……月島？」

「知ってるよ」

小恋は小さく頷いて

「杏……」

「私が知らないはずないでしょ？」

杏は不敵に笑いながら

「……杉並」

「ふふっ……板橋よ、恥じるな。無知は決して恥ずかしいことではない」

杉並は少し小馬鹿にした様子で、渉に答えた

「……他の皆も？」

渉が涙声で聞くと、全員が頷いた

それを見た義之は、肩をすくめながら

「悪いな、渉。全員知ってたみたいだ」

と言った

すると、渉は目尻に涙を浮かべながら

「うわーん！ 皆のバカーー！」

と叫びながら、教室を飛び出していった

しかし、きちんとドアを閉めているあたりに彼の性格が伺えた

「え、えっと……」

泣きながら飛び出していった渉を見て、麻耶が呆然としていると杏が

「委員長、馬鹿はほっといて、先に進めましょう」

と、先を促した

「で、でも……」

と、麻耶が躊躇っている

「あ、そういえば……」

と、裕也が声を上げた

「どうしたの？」

フェイトが問いかけると、裕也は頬をポリポリと掻きながら

「いや……そういえば、今日の巡回は……まゆき先輩だったなあって」

と、裕也が言った直後だった

『ごおら！ 板橋！ あんたはなに、LHR中に廊下を走ってんのよ！』

という、まゆきの怒鳴り声が響いた

『げっ!? まゆき先輩!? 待ってください！ これには、山より高く、

海より深いワケがありました！』

まゆきに気付いたらしく、渉の焦った声が聞こえてきた

『問答無用！ 必殺！ エアロ……』

『ちよっ！ まっ!』

渉の焦る声と共に、まるで強風のような音が聞こえてきて

『スマツシャー!』

『ギアアアアア!』

ドアが一瞬、大きく揺れた直後に渉の悲鳴が轟いた

『ふうっ……連行するか』

そうまゆきが言った数秒後、ズルズルと引きずる音が徐々に遠のいていった

その一連の音を聞いたクラスメイト達は、予想外だったのか呆然と
していた

「渉……南無」

静かな教室で、裕也は両手を合わせながら、そう呟いた

その後、麻耶の采配でLHRは滞りなく進み、卒パは喫茶店に決
まったのだった

だが、この時はまだ誰も気づいてなかった

刻一刻と、邪悪な牙が近づいてきていることに……

ドキドキの同居生活その2 残酷な……

義之と麻耶の関係が明らかになった日の夜

「ねえ、義之……」

「んー？」

麻耶が問い掛けると、義之はコタツでだらけながら顔を向けた

「なんで、私はココに居るのかしら……」

「難しい質問だねえ……」

麻耶が義之にこんな問い掛けをしたのも、ワケがあつた

「確か、天枷さんと二人きりになるのが危ないって理由で泊まってるのよね……」

「だな」

麻耶の問い掛けに義之が頷くと、麻耶は困惑そうな顔をして

「なのに、その天枷さんが居ないんじゃ……意味ないんじゃないかしら……」

「ごもつとも」

そう

今現在、この芳野家には美夏は居ないのである

それは、今から約一時間前である

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ごちそうさまでした。それでは、兄さん。また明日」

と、由夢が夕食を食べ終わり帰宅しようとしたら

「ああ、待て由夢」

美夏が由夢を呼び止めた

「どうしました、天枷さん？」

「美夏も一緒に行くぞ」

美夏のその言葉を聞いて、由夢は首を傾げながら

「え？ それって、どういう……」

「なにな、たまには友達の家に泊まりたいと思ってるな……ダメか？」

美夏のその言葉を聞いて、由夢はキョトンとしたが

「ええ、まあ……そのくらいなら……って！ それじゃあ、兄さんと沢

井先輩が二人きりになってしまおうじゃないですか!？」

美夏の言葉を理解して、由夢は驚愕した

すると、美夏はにっこりと笑い

「そうだ！ 今回に関しては、美夏はキューピッドになるぞ！」

と高らかに宣言した

すると、義之が

(待て、勝手な真似をすんなよ！ 水越先生から頼まれてんだぞ！)

と、念話で抗議した

(大丈夫！ ゼンマイも巻いたし、バナナも食べた！ 今の美夏にスキは無い！)

義之の抗議を聞いて、美夏はそう返した

(何時の間に……)

義之が内心で頭を抱えていると、美夏は由夢の背中を押しながら

「ではな、桜内！ 沢井とよろしくやれよ！」

と言うと、芳野家から出ていった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

という訳である

「じゃあ、麻耶はどうする?」

義之が問い掛けると、麻耶は顔を赤らめて

「義之は……どうしてほしい?」

と義之に返した

すると、義之は麻耶の手を握って

「一緒に居たい……かな」

「フフっ……そう言ってくれと思った」

義之の言葉を聞いて、麻耶は嬉しそうに微笑んだ

そんな麻耶を義之は、愛おしい思いで抱きしめた

そんな義之だが、懸念事項が一つあった

それは、姉のように育った朝倉音姫である

音姫はここ数日、芳野家に来ていない

その事をそれとなく、由夢に聞いたら、なんでも自室に閉じこもっているか、どこかに行っているらしい

それを聞いた義之は心配しながらも、音姫ならばムチャな事はしないだろう。と思っていた

「ねえ……義之」

「なんだ？」

義之が考え事をしていると、腕の中の麻耶が義之を呼んだ

そして、義之が視線を向けると、麻耶は顔を赤くしながら

「布団に入ったら……キス……してよね」

と、恥ずかしそうに言ってきた

それを聞いた義之は、強く抱きしめながら

「ああ……わかった」

と、頷いたのだった

場所は変わって、桜公園の枯れない桜

そこでは、音姫が暗い表情で立っていた

「私は……私はどうすればいいの……さくらさん……どこに行ったんですか……？」

音姫はそう言いながら、両手と額を枯れない桜の幹につけた

その時、音姫の脳裏にさくらの姿が映った

「え!? まさか、さくらさん……」

信じたくないのか、音姫は愕然とした様子で桜を見上げた

すると、そのタイミングで

「さくらさんは……枯れない桜と融合しました」

という声が聞こえて、音姫は声のした方向に振り向いた

そこには、裕也が立っていた

「どうして……さくらさんが？」

音姫がそう問い掛けると、裕也は桜を見上げて

「さくらさんは……初音島と……義之を守るために、桜と融合したんです」

と言った

「弟くんを……守るため？」

音姫が首を傾げると、裕也はさくらから聞いたことを全て話した

「そんな……」

裕也の話を聞いて、音姫はガツクリと両膝を突いた

「申し訳ありませんが……我々守護者部隊には、この桜に関しての権限は一切ありません。この桜に関しては……残酷かもしれませんが……音姫さんにしか、決める権限はありません」

申し訳なさそうに裕也がそう言うと、音姫は泣きそうな顔で裕也を見て

「どうして……私なの？」

と問い掛けた

すると裕也は、一瞬言いづらそうにしたが

「それは……音姫さんが、この地。初音島を管理する朝倉のお役目を継いだからです」

と告げた

朝倉家

この家は、意外と由緒正しい家柄であり、正義の魔法使いの家系なのである

実を言うと、芳野家もそうなのだが、芳野家は過去に一度断絶しており、その役割を解任されている

そして音姫は前代の朝倉家党首、朝倉由姫《あさくらゆき》からその役割を受け継いでいた

今までは、音姫が学生ということがあったために、さくらがその役割を代任していたが、そのさくら本人が枯れない桜と融合してしまつた為、自動的に音姫に役割が戻っているのだ

裕也の言葉を聞いて、音姫は涙を流しながら

「そんなのって……そんなのって……」

と言いながら、頭を地面にこすりつけた

義之のことが大好きな音姫には、今回の判断はとても辛いものである

桜を枯らせば、初音島は守られるが、変わりに義之が消える

桜を残せば、義之が消えない変わりに、初音島ではどんな事件は増加するだろう

正義の魔法使いの正統後継者の朝倉音姫として、役割をまっとうす

るか

それとも、一人の少年を愛する少女の朝倉音姫として判断するのか
それは、残酷な二者択一だった

もちろん、裕也としても気持ちには痛いほどにわかる

過去に裕也は、守ると誓った妹と世界を守るのかの選択を迫られて、守護者部隊としての役割を選んだ

だから、裕也も本当はこんな選択を言いたくはなかった

だが、言わないといけなかった

初音島を守るとさくらに誓い、守護者部隊の一員として、朝倉家の現党首である音姫に、残酷な選択を

裕也も二者択一のジレンマに襲われながらも、自分の役割をまっとうした

そして裕也は内心で何度も、音姫に謝り、そして涙した

さくらの自己犠牲は、ほぼ無駄に終わってしまった

さくらが枯れない桜と融合した後も、原因不明の事件は続き続けた
枯れない桜の力は既に、さくらの予想を大きく上回っていたのだ
あらゆる願いを叶える桜

それは、願いを受信する度に少しずつ力を増していき、桜を植えてから約十数年でさくらの限界を超えてしまったのだ

それこそ、さくらの予想以上の速度で

だから、さくらは最新手段の融合を選んだのだ
だが、そのさくらの自己犠牲も徒労に終わった

世界というのは、残酷である

辛い選択や、要らぬ犠牲を強いて、涙を強要する

そして、そんな世界を動かしているのが神だと言うのならば……

「そんな神なんて……要らない……」

裕也は血が滲むほどに拳を握りしめながら、そう呟いた後、空を見上げて

「この世界に……神は居ない……」

裕也が涙を堪えながら言ったその言葉は、虚空の中に消えていった

悲しい事実と説得

時は経ち、金曜日の放課後

今日で美夏を預かるのも終わるため、義之は心底安堵していた
あれからも度々、美夏の天然により義之は心臓に悪い思いをした
それが終わるとなると、義之としては解放される気分だった
だがそれと同時に、麻耶との同棲も終わってしまうので寂しくも思
えた

そして義之は、美夏と共に保健室に向かった

保健室に入ると、水越女史が椅子に座っていた

「いらっさーい、義之くん。天枷を預かってくれて、ありがとうね」

と水越女史が言うのと、美夏が腰に手を当てて

「美夏に問題はなかったぞー！」

と自信満々に言うが、義之は溜め息を吐いて

「嘘こけ、お前の言動でこっちはハラハラしっぱなしだったよ」

と苦言を呈した

義之の言葉に美夏が反論しようとしたら、水越女史が手を叩いて

「はいはい、そこまで。で、二人共。天枷がロボットって、バレてない
わよね？」

と問い掛け、義之がそれに答えようとした時だった

突如、ガタンとドアが揺れた

「誰!？」

水越女史が問いかけると同時に、義之が勢いよくドアを開けた
そこに居たのは

「麻耶!？」

義之の彼女の沢井麻耶だった

麻耶は顔を蒼白にしながら、狼狽した様子で

「……天枷さんがロボットって、本当……なの……?？」

と問い掛けた

麻耶からの問い掛けに美夏が答えられないでいると、義之が肩を掴
んで

「麻耶、落ち着いて聞いてくれ！ これには、深い訳があるんだ！」
と、説明しようとしたが、麻耶は唇を噛んでから義之の手を振り
払って駆け出した

「麻耶ー！」

義之は麻耶を追い掛けようとしたが、美夏のことも気になって振り
向いた

すると、美夏は俯きながら拳を握り締めていた
そんな美夏に、水越女史が寄り添って

「天枷は私かなんとかするから、沢井さんを追ってあげて！」
と言った

義之は数瞬迷うと、水越女史を見つめて

「すみません、頼みます」

と言って駆け出した

廊下に出ると、すでに麻耶の姿は見えなかった

麻耶の運動神経はかなり高く、それは二年前の夏に行われた運動会
で義之も知っている

しかも、魔法適性も高いためにそれを考えるとすでに学校から出
ていることすら考えられた

義之はそう考えると、まずは下駄箱に向かった

そして、麻耶の位置を見ると、すでに上履きが入れてあった

義之は軽く舌打ちすると、教室まで急いでカバンを取ると、麻耶の
家に向かった

バスを待つのももどかしく、義之は飛行魔法を使い麻耶の家の方向
へと向かった

本来だったら罰則モノだが、義之としては構ってられなかった

そして、麻耶の家である団地に到着すると、そのまま麻耶の部屋の
ドアの前に着地した

そして、震える指でインターホンを押した

誰も出ずに、十数経った

義之がもう一回押そうとしたら

『はっ』

聞き慣れた男の子の声が聞こえた

「あ、勇斗くん？ 俺だけど」

『あ、お兄ちゃん！ ちょっと待ってて』

勇斗は義之と気づいたらしく、そこで音が途切れ、ガチャリと金属音がして

「お兄ちゃん、いらっしやい！」

勇斗くんが義之を出迎えた

義之は勇斗に目線を合わせると

「勇斗くん、麻耶……お姉ちゃんは？」

と問い掛けた

「さっきかえってきて、だれともあいたくないって言って、へやにもってるよ」

と、たどたどしくも教えてくれた

どうやら、タッチの差だったらしい

義之はその事に内心で悔しく思いながらも、勇斗くんに

「入っていいかな？」

と問い掛けた

すると勇斗は、笑みを浮かべて

「いいよ、はいって」

と促した

義之は入ると、靴を脱いでから麻耶の部屋の前に立った

義之は一瞬躊躇ったが、ドアを軽くノックした

返事はないが、義之は口を開いた

「麻耶、そのままが良い。聞いてくれ」

そこまで言っても、中からは返事はない

「天枷のことを秘密にしていたのは謝る。だけど、これは偶然だったんだ。杉並と一緒に入った洞窟に、天枷が眠っていた装置があって、それを俺が偶然起こしちゃったんだ。起こしたのは仕方ないから、研究所は天枷を普通の学生として風見学園に転入させたんだ。そして、俺と裕也が世話することになった」

そこまで言っても、麻耶から返事はない

「あいつは……天枷はな、約五十年前に作られたロボットだったんだ。ただ、当時はロボット排斥運動が激しくって、あいつは俺達が見つけた洞窟に封印されたんだ。だから天枷は……人間が好きなのに、人間を信じられなくなったんだ。俺はそれをどうにかしたくって、色々と話したりした。天枷がロボットだってバレないように手伝った。だから、罪があるとしたら俺なんだ。頼む。天枷を恨まないでくれ……」

それは、以前に水越女史から教えられたことだった

美夏は精巧に出来すぎていたので、ロボット排斥主義者たちにとっては忌むべき存在として認知されてしまったのだ

それを悲しく思った開発者である、前天枷研究所の責任者の天枷博士はHM—A06型へミナツを廃棄処分したと発表してから冬眠させたのだ

それが、美夏にとっては裏切りと見えたのだ

人間に近い感情を持つからこそ、美夏は人間に恨みと憎しみを持つてしまった

だが、そんな美夏も義之たちに出会って優しい本来の姿に戻っていた

そして、美夏が友人と思っていた中には当然、麻耶も入っていた

だが、麻耶の反応は美夏にとって悲しいものだった

もしかしたら、また冬眠してしまうかもしれないほどに……

しばらく待ったが、なんの反応もなかった

そのことに義之は悲しく思いながらも、帰ろうとした

が、裾が引つ張られて

「お兄ちゃん、お兄ちゃん」

と、勇斗くんが呼んだ

「どうした？」

と義之が問い掛けると、勇斗くんは悲しそうにして

「お姉ちゃん、どうしちゃったの？」

と聞いてきた

「ちよっと、嫌なことがあって落ち込んでるだけだよ。すぐに元通り

になるさ」

「ホントに?」

勇斗が首を傾げてくると、義之は勇斗の頭をなでながら

「ああ、本当だ。だから、勇斗くんはお姉ちゃんに近く居てあげてくれ」

「うん、わかった」

義之の真剣な表情から、大事な約束とわかったのだろう

勇斗は真剣な様子で頷いた

そして、義之は帰ろうとして、ふと思い

「勇斗くんは、ロボットってどう思う?」

と問い掛けた

「うん、かっこいいと思う」

勇斗はアニメとかで出てくる、ロボットを予想したようだ

「じゃあ、ムっていうロボットのことは知ってる?」

「うん! 人間そっくりですごいと思う」

勇斗はどうやら、悪い印象は持っていないようだ

「じゃあ……例えば、ロボットを苛めたり壊したりする人が居たら、どう思う?」

「あのね、そういうのはココロのマズシイ人だって、お母さんが言っていた。人間のほうが強いんだから、守ってあげなくちゃいけないんだって」

どうやら母親の躰がいらしく、五歳児にしてはしっかりしていた(という)ことは、麻耶の考えが、沢井家の標準じゃないってことか……でも、どうして麻耶はロボットが嫌いなんだ?)

義之はそう思うと、以前に会ったあの優しい母親を思い出した

この姉弟の母親に会って話を聞けば、もしかしたらなにか分かるかもしれない

「うん。だから、ひとりでテレビを見てたんだ」

どうやら、今日はアルフも暇ではないらしい

義之としては遊び相手になってあげたかったが、この後のことを考えると帰るしかなかった

叫び

美夏のことが麻耶にバレた翌日

義之がどうしたらいいか、自宅で迷っている

ピンポーン、とチャイムが聞こえた

「はい」

義之がドアを開けると、そこには美夏が居た

「天枷……」

「よ！ 桜内、今はいいか？」

まさか美夏が来るとは思ってた義之が呆然としてみると、美夏が片手を上げながらそう聞いてきた

「あ、ああ……大丈夫だ」

義之はそう言うと、体を横にズラして中に入るように促した

「では、失礼するぞ」

美夏は断つて上がると、勝手知ったるなんとやらといった様子で、居間の方へと向かった

すると、美夏は先にコタツへと入っていた

義之は美夏が座っている反対側に、腰を下ろした

「で、どうした？」

義之が問い掛けるが、美夏はしばらく黙っていた

「もともと……美夏は人間に期待などしていなかった……」

美夏の言葉を義之は、黙って聞いた

「だから、悪く思われてもぜんぜん平気だったのだ……でも、沢井がロボットを悪く思っていたとなると話は別だ。友達になれると……思っていたからな」

「友達だろ？ 俺達とお前は……」

美夏はその言葉に、義之は思わず反論した

すると、美夏は苦笑いを浮かべて

「そりゃ、貴様達三人は、最初から美夏がロボットだと知った上で接しているのはわかってる。貴様らがそんなふうだったから、美夏はしなくていい期待を……人間に抱いてしまったのかもしれない……」

美夏はそう言うが、彼女の言葉からは怒りよりも哀しげなニュアンスを義之は感じた

義之の周りには、どちらかと言えば、常識知らずでお気楽な人物が圧倒的に多い

それが、美夏にとって居心地のいい環境になっていたのだろう
すると義之は、美夏を見つめて

「麻耶だってバカじゃない。そのうちわかってくれるさ」と言った

「そうだといいいのだが……」

義之の言葉を聞いて、何時もは強気な美夏が気弱そうに俯いた
その時、チャイムが再び鳴った

「ん？ 今日客が多いな」

「もしか……沢井か？」

義之の言葉を聞いて、美夏が呟くように言った

（確かに……その可能性は高い……だったら、天枷と麻耶を会わせた
らマズいな……）

美夏の言葉を聞いた義之は、そこまで考えると美夏に対して

「天枷、お前はそこの押し入れに隠れとけ」

と指示した

「なぜ、美夏が隠れないといけない？」

と首を傾げたが、義之は諭すように

「今の状態で、麻耶と会ったらマズいだろ？」

と言った

すると、美夏は先ほどの発言を思い出したようで

「あ、ああ……そうだな……」

と言うと、義之が指し示した押し入れに入った

義之がそれを確認すると、もう一度チャイムが鳴った

「はーい！ 今開けまーす！」

義之は出来る限りの声を上げながら、玄関に向かった

そして、玄関に到着すると、義之は美夏の靴を隠してからドアを開けた

そこに居たのは……

「麻耶……」

義之の彼女である麻耶だった

よく見ると、寝不足らしく、目の下にクマが出来ている

「どうした?」

出来る限り優しい声で問い掛けると、麻耶は一泊置いてから

「大事な話が……あるの……」

と言った

「わかった。上がれ」

麻耶の真剣な表情を見て、義之は麻耶に入るように促してから念話で

(天枷、来たのは麻耶だ。そのまま隠れておけ)

と知らせた

(わかった)

美夏が返事をしたのを確認してから、義之は居間へと麻耶を通した
そして、義之は麻耶が座ると麦茶を入れて机に置いてから

「大事な話って、なんだ?」

と問い掛けた

麻耶は数回ほど、口を開けたり閉めたりすると

「あのね、義之……私ね……天枷さんのことを……学園に言おうと思
うの」

掠れるような声で、そう言った

「……なに?」

意味を凶りかねた義之は、首を傾げた

すると、麻耶は辛そうな表情で

「だって……天枷さんはロボットなのに、学生として居るなんておか
しいでしょ……?」

と言った

その言葉を聞いた義之は、思わず机を強く叩きながら立ち上がった

「麻耶! お前、何を言ってるのか、わかってるのか!」

と、怒鳴るように声を張り上げた

「わかってるわ……だけど……」

麻耶は義之の言葉に、辛そうにしながら呟いた

すると義之は、麻耶に近づいて肩を掴むと

「なんでだよ、麻耶。なんで、そんなにロボットを嫌うんだよ？」

と問い掛けた

すると麻耶は、涙を滲ませながら

「私は……私の家は……ロボットのせいで、家族がメチャクチャになったのよ！」

と叫んだ

麻耶の叫びを聞いた義之は、目を見開いて

「どういう……ことだ……？」

と問い掛けた

すると麻耶は、自分の失言に気付いた様子で唇を噛み締めながら俯いて

「ごめんなさい……私、帰るね……」

と言うと、肩を掴んでいた義之の手を振り払うと部屋を出ていった麻耶の言葉を聞いて、義之が固まっていると、ドアの開閉音が聞こえた

そして、義之が呆然としてしていると、押し入れが開き、中から美夏がヨロヨロと出てきて、両膝を突いた

美夏が両膝を突いた音で、義之は我に帰り視線を美夏に向け

「天枷……」

劣るように美夏の名前を呼んだ

すると美夏は、泣きそうな顔と声で

「桜内……美夏は、美夏は……どうすればいいのだ……？」

と義之に問い掛けたが、義之には答えられなかった

場所は変わり、地下指令室

「その情報、間違いないんですね？」

裕也が問い掛けると、椅子に座っていたスカリエッティは頷いて

「ああ、間違いない……救難十四聖一人を含む、十名近い部隊が出陣し

たそうだ」

と言った

すると、裕也の隣に立っていた蓮華が歯を食いしばり

「そんだけの数が居たら、下手な村や町が確実に消されるな……」

忸怩たる思いを滲ませながら呟いた

実際に、十名の部隊で村や町を消し去ったというのは、少ない過去に、裕也や蓮華も救助に向かったが間に合わずに、憤ったのを覚えてる

「そして、標的だが……おそらく、ヴィヴィオちゃんだと思われる」

というスカリエッティの言葉を聞いて、裕也は眉をひそめて

「あの、高町家で保護してる女の子ですか？」

と、問い掛けた

裕也が問い掛けると、スカリエッティは頷いて

「この映像を見せてくれ」

と言つて、モニターに映像を映した

モニターには、ヴィヴィオの胸像が映し出されている

「あ？ 今更ヴィヴィオの顔がどうし……」

「待ってください」

蓮華の言葉を、神夜が遮った

「この目の色は……」

神夜はヴィヴィオの目を見ると、口元に手を当てて唸りだした

すると、先に裕也が指を鳴らして

「そうだ！ この目の色は聖王の特徴だ!!」

と叫んだ

裕也の言葉を聞いたスカリエッティは頷いて

「そう。この子の目は聖王の特徴なんだ。ただし……聖王の系列は、とつくの昔に滅んでるはずなんだがね……」

スカリエッティはそう言うと、頭をガシガシと乱暴に掻いた

「とりあえず、聖王のことは置いておいて……確実なのは、数日中にインデックスが攻めてくること」

その場の全員はスカリエッティの言葉を聞いて、うなずいた

「だから皆、気を抜かずに警戒してくれ」
「「「はい!!」」」

スカリエツティの言葉を聞いて、全員は返事した

二人の決意

麻耶との会話の翌日、俺は登校した

麻耶は案の定と言うべきか、休みだった

あんなことが有ったからか、会いにくいのかもかもしれない

先生曰わく、勇斗くんから電話で休むって連絡が有ったらしい

そして、休み時間

俺は、杏を呼び出した

「話つてなに、義之……」

「あのな……天枷のことなんだが……」

ちなみに、天枷は今日は休みだった

恐らくだが、麻耶と同じ理由だろう

「ああ……美夏がロボットだつてこと？」

……エ？

「ま、待て……お前……気づいてたのか？」

「ええ……だつて、美夏の動作がμの初期プロットと似てたからね

……もしかしてって」

こいつ……どんな洞察力だよ……

つて、そうか

雪村流暗記術で覚えてるのか

「それに、あの子の喋りも一部だけ……μと同じだしね……」

そこまでかい

恐ろしいな、雪村流暗記術

よし……気合い入れ直して

「でな……天枷が大変なことになってるんだ」

「……どういふことかしら？」

俺の言葉を聞いて、杏が眉をひそめてきた

そして俺は、天枷との出会いから全てを話した

俺の話を聞いて、杏は真剣な表情で

「なるほど……だから、委員長と美夏が休んでるのね……」

と呟いてから、俺に視線を向けて

「それで、美夏はどうしてるの?」

「恐らくだが、また眠ろうとしてるんだと思う」

これは昨日、天枷を送り届けてから水越先生から聞いたことだ
なんでも、天枷からの要請で洞窟からあのカプセル装置一式を回収
したそうだ

多分だが、今度は俺が押しても起きないだろう

「なるほどね……義之はどうするの?」

「俺は……俺は二人を助けたいんだ」

俺の言葉を聞いて、杏は頷いて

「でしょうね……だから、義之……二人をお願いね」

と言いながら、俺の目を見た

「ああ……任せろ!」

杏の言葉に、俺は右手を上げながら答えた

義之 side END

第三者 side

その時、裕也達は学校を休み初音島中を回っていた

「No. 12の強化、完了つと……」

「これで……三分の一ですか……」

「サーチャーと魔法式魔力センサーの強化……かなり面倒だな」

裕也と神夜が強化と確認していると、機材とパーツを持っていた蓮
華が呟いた

「お前は、こういう細かいのは苦手だからな」

「蓮華は……おおざっぱですからね」

「あれ? これって、貶されてる?」

二人の言葉を聞いて、蓮華が首を傾げていると

「まさか」

裕也と神夜の二人は息を揃えて、そう断言した

「ほっ……良かった」

「「弄ってるだけだ（です）」」

「待て、ハハハ!」

蓮華の言葉を遮って二人が言うと、蓮華は驚愕の視線を二人に向け

た

そして、二人が笑っていると

「裕也くーん！ 神夜ちゃん！ 蓮華くーん！」

と、三人を呼ぶ声が聞こえた

三人が声のした方向に視線を向けると、知っている人物が駈けてきていた

「すずか！」

それは、裕也にとっての幼なじみの一人

月村すずかだった

「手伝いに来たよ」

すずかは到着すると、カバンの中から愛用の工具を取り出しながら告げた

「いや、それは嬉しいんだが……」

「学校はどうした？」

蓮華が問い掛けると、すずかは胸を張りながら

「休んだ！」

と断言した

三人は思わずすっこけて

「自信満々に言うな！」

「それはそれで問題ですよ!？」

「俺達は仕方ないけどさ!？」

と突っ込んだ

するとすずかは、真剣な様子で

「私だって、民間協力者なんだよ？ 手伝えるなら、手伝いたいよ……」

この初音島を……世界を……」

と語った

それを聞いて、裕也は乱暴に頭を搔いて

「そう言われたら、断れないな……それに、すずかの方が機械の扱いは上手いからな……」

と言うと、視線をすずかに向けて

「じゃあ、サーチャーの強化をお願い出来るか？」

「うん！」

裕也の要請に、すずかは満面の笑みを浮かべて頷いた

「蓮華と神夜は魔法式魔力センサーの強化に回ってくれ」

「あいよ」

「了解しました」

裕也の指示を聞いて、蓮華と神夜は裕也たちと別れた

そして、数分後

「はい、No.13、終了つと」

すずかはそう言いながら、サーチャーを軽く叩いた

「いや、マジで早いな……」

裕也はすずかの手際の良さに、感嘆していた

「ふふ……メカニックマイスターをなめないでね？」

裕也のつぶやきを聞いたすずかは、微笑みながらそう言った

メカニックマイスター

それは、国際免許の一種である

ある一定の年齢に達すれば、誰でも試験は受けられる

しかし、合格率は例年10%以下という低さの、いわゆる狭き門な

のである

しかし、すずかはその試験を一発合格したのだ

とはいえ、そのために数か月間ほど専門学校に通っていたのだが

閑話休題

「やれやれ……すずかの将来は安泰だねえ」

裕也が呟くと、すずかは笑いながら

「裕也くんも、なにか資格を取ったら？」

と言うが、裕也は肩をすくめて

「取っても、あんまり意味ないなあ……先短いし」

という裕也の言葉に、すずかはハツとした様子で

「あと……どのくらい？」

と問い掛けた

すると裕也は、少し間を置いてから

「あと……十年もないね……」

敢えて明言はしなかったが、裕也がそう告げるとすずかは唇を引き結んでから立ち止まった

「すずか？」

すずかが立ち止まったことに気づいて、裕也は振り向いた
すると、すずかは何か決意した様子で裕也に視線を向けて

「裕也くん……大事な話があるの……」

すずかの真剣な表情を見て、裕也は歩みを止めて、視線を合わせて
「なんだ？」

と問い掛けた

すると、すずかは深呼吸をして

「私ね……裕也くんが大好きです……」

と宣言した

すると、裕也は呆然とした様子で

「だが、俺は……」

「わかってるよ……寿命が短いことも……フェイトちゃんとも付き合ってることも……でもね、諦めたくないんだ」

すずかはそう言うと、裕也に近づいて

「だからね……私は……裕也くと最後まで一緒に居たいの……」

すずかはそう言いながら、微笑んで

「だからね、裕也くん……生きて……みつともなくてもいい……大怪我を負ってもいい……絶対に、生きて……」

すずかはそう言うと、裕也を追い越してクルリと回り

「私達は……皆、それを望んでるから」

すずかは悲しそうな笑みを浮かべながらそう言うと、裕也の手を握って

「ほら、急ごう！ 時間が足りなくなっちゃおうよ！」

と言いながら、裕也を引っ張った

「あ、ああ……」

裕也は引っ張られるまま、すずかと一緒に駆け出した

親の願い

翌日の火曜日の放課後

俺は、麻耶の家に来ていた

ただ、麻耶は居なかつたけど、俺が会いたかったのは麻耶では無く、麻耶のお母さんの綾さんだ

俺は麻耶がああの時に行った

『私の家はロボットのせいで、バラバラになったのよ』

という言葉の真意を聞きに来たのだ

しかも、今日は運良く綾さんの体調は良いみたいだ

「すいません、突破お伺いしてしまつて」

「いいのよ。それで、私に話つてなにかしら？」

俺が謝ると、綾さんはそう問い掛けてきた

その言葉を聞いて、俺は唾を飲み込み

「こんなことを聞くのは、不躰かもしれませんが……ですが、どうしても知りたいんです……どうして、麻耶はあんなにもロボットを憎むんですか？」

俺の問い掛けを聞いて、綾さんは悲しそうに微笑んだ

「そうね……麻耶ちゃんがああなつたのは……ある意味で、私達のせいなのよ……」

「どういうことですか？」

俺が問い掛けると、綾さんは視線を窓の方に向けた

「ここ最近、あの子が悩んでるのはHMA-06型ミナツちゃんが理由よね？」

綾さんが天枷を型番付きで呼んだことに、俺は驚愕した

「知ってたんですか……？」

「ええ、昔から知ってるわ」

俺が問い掛けると、綾さんは懐かしむように笑った

「ずっと昔にね、私の旦那さん、琢磨さんがミナツちゃんの設計図を見せながら『彼女は最高のロボットだ！』って、興奮してたわ」

綾さんはそう言うと、クスクスと笑った

「まさか……旦那さんは天枷研究所で働いてたんですか？」

「ええ、そうよ……懐かしいわ……麻耶ちゃんからミナツちゃんの話
を聞いた時、起きたんだって思ったもの」

まさか、封印されてたことまで知ってたなんて……

俺は数舜ほど呆然としたが、首を左右に振ってから

「それで、どうして麻耶はロボットを？」

と再度問い掛けた

「あら、そうだったわね。ごめんなさいね……」

綾さんはそこで一旦区切り、語り出した

「麻耶ちゃんがロボット嫌いになったのはね……今から五年ほど前の
ことなの……」

そして、綾さんはポツポツと語り出した

義之 side END

第三者 side

それは、今から約10年近く昔からだった

その時は、まだ沢井琢磨氏も生きていて、綾もそんな琢磨を支えて
いた

だが、そんな環境だったので麻耶は一人で家に居る事が多かったら
しい

時々、クロノなどが一緒に居たが何時もという訳にはいかなかっ
た

そんな環境を改善するために、琢磨氏はミナツの基礎稼働データを
ベースに一体のロボットを製作した

それが、HMA-07型ミアキである

そしてミアキは稼働データを得るのを兼ねて、沢井家に置かれるこ
とになった

ミアキは正式に、沢井美秋として沢井家の一員となり、その見た目
と性格も相まって麻耶のお姉さんの存在になった

そして、それから五年後、悲劇が起きた

その頃、沢井家では綾が勇斗を身ごもっていて、大事を取って入院
していた

麻耶ももうすぐで弟が産まれると、喜んで生活していたが、ある日の事だった

麻耶が学校から帰ると、美秋が見るも無惨に破壊されていたのだ
なお、これは後にロボット排斥主義者の過激派の犯行とわかり、犯人は逮捕された

ただ、麻耶が帰った時にはまだ美秋は稼働していた
麻耶が必死に声を掛け続けるが、そんな麻耶の目の前で美秋は停止してしまった

その後、琢磨氏は必死に美秋の人格データと記憶データをサルベージし再起動しようとしたが、とうとうそれは叶わなかった

その後、美秋の人格及び記憶データは別のAIユニットに収められて保存されたらしい

しかも、それと同時期に沢井家や天枷研究所に言われなき誹謗中傷の手紙や電話が殺到

それが原因で、琢磨氏は自殺してしまったのだ
なお、天枷研究所からきちんと、琢磨氏の功績を称えたお金と一緒に莫大な慰謝料が支払われた

だが、綾はそのお金には一切手を付けずに麻耶と勇斗の二人を養うために、昼夜を問わずにがむしやらに働いた

しかし、それが理由で綾は体を壊してしまった

その頃から、麻耶はロボット関係の話聞くのも拒み始めたらしい
なお、犯人の容疑は器物損壊罪だった

綾の話聞き終えた義之は、激しい憤りを覚えた

五年も一緒に過ごしていたら、それは家族同然である
それなのに、ただの器物損壊罪である

犯人は僅か数年で出所だ

「麻耶ちゃんはね、本当は琢磨さんのことも、ロボットも大好きなの……でも、ロボットを憎んでいないと、精神の均衡が取れなかったと思うの」

「でしようね」

綾の話聞いて、義之は納得した

自身もそんな存在を失ったら、同じようにするだろう
そして、義之が黙っていると

「それで、ミナツちゃんはもうどうしてるのかしら？」
と、綾が問い掛けてきた

「天枷は研究所に頼んで、再度封印してもらおうかと思えます」

義之の言葉を聞いて、綾は数秒間ほど目を閉じると

「今夜、麻耶ちゃんを桜内君の家に行かせるわ」
「……………え？」

綾の言葉を聞いて、義之は首を傾げた

「麻耶ちゃんとミナツちゃんを助けることが出来るのは、桜内君だけ
だと思ってる……………」

「綾さん……………」

義之が固まっていると、綾は笑みを浮かべて

「二人のことを、よろしくね……………桜内君」

「はい、任せてください……………」

綾のお願いを聞いて、義之は深々と頭を下げた

少女の慟哭

義之が麻耶の家から帰ってきて、数時間後

義之が一人で待っていると、チャイムが鳴った

義之はそのチャイムから、誰が来たのか分かった

「よ、麻耶……」

「こんばんは、義之……」

扉を開けた先に居たのは、義之の予想通りに麻耶だった

麻耶は義之に目を合わせようとはせず、終始俯いている

「寒いだろ、上がれよ」

「うん……」

義之が家に入るように促すと、麻耶は小さく頷いてから入った

麻耶を招き入れた義之は、そのまま麻耶の手を引いて自室へと向かった

麻耶も義之に引かれるがまま、義之の部屋に入った

そして、義之と麻耶は対面する形で座った

「麻耶……天枷について、話したいんだ」

「私は……話すことなんて、ないけど……」

義之の言葉に、麻耶は冷たい目をしながらそう返した

しかし、その返事は義之にも予想できた

だから、義之は数時間前に知った情報を切り出すことにした

「天枷が……また、眠りについた」

「……え？」

義之の言葉を聞いて、麻耶は思わず首を傾げた

「水越先生の話じゃあ、まだ完全には眠ってない……お前が、天枷のことを学園側に知らせるって言ったあの時、実は背後の押し入れに隠れていて聞いてたんだ……きつと、天枷もシヨックだったんだと思う……」

なんでも水越先生の話では、今すぐでは無いらしい

長期間のスリープに耐えきれるかどうか、機材と美夏のスキヤニングを行うらしい

しかも、水越先生曰わく

『今度は前みたい、再起動スイッチを押してもダメよ。天枷自身の同意がない限り、再起動はしないわ。彼女の希望で、そういう仕様に変更させてもらったの』

という話だった

それを聞いた時、義之は胸を痛めた

美夏は義之達と接していく内に、徐々に優しい笑みを浮かべるようになっていた

そのことを、水越先生は嬉しそうにしていた

なんでも、水越先生や天枷研究所の職員達も暇さえあれば、美夏と話したり、食事していたらしい

だが、最初の頃は無視されたり、下手したら殴られたりしたらしいだが、最近は微笑みながら会話に興じたり、一緒に遊ぶこともあったらしい

それは、美夏が義之達を友人を認識したかららしい

「それで……？」

義之の話聞いて、麻耶は首を傾げながら義之に問い掛けた

「頼む……俺といっしょに来て、天枷を目覚めさせてくれ」

義之は頭を下げるが、麻耶は無言だった

「お前、あんな別れかたのままでもいいのか？ 明日の夜には、天枷は人工冬眠に入ってしまう。そうなったら、もう俺達には手の出しようがなくなる……次に目を覚ますのは、前と同じように五十年先か、百年先になるのか……」

「嫌よ……本人が眠りたいんなら、眠らせてあげればいいじゃない……」

その言葉を聞いて、義之は麻耶の肩を掴んで

「友達だろ？」

「友達なんかじゃないわよ……ロボットなのよ？ あれはモノなの……意志を持って動いているように見えるだけなの……ただの物体なの！」

麻耶の口からそんな言葉を聞いて、義之の胸が痛んだ

「……本気か？」

「そうよ」

義之からの問い掛けに、麻耶は義之を睨みつけて

「彼女達が受け答えするのは、プログラミングでそう決められているだけなの！」

「お前、μにも感情の原型はあるって言ったじゃないか！」

「それは……研究者の理想の話をした……だけよ……理論上の話であって、本当に感情があるわけじゃないわ」

いつもは理性的なだけあり、麻耶は自制が利かない感情を、全て強引な倫理でねじ伏せようとした

だがそれでは、自分をどんどん袋小路に追い込むだけだ

義之は祈る思いで、麻耶の目を見つめながら

「なあ……本当は、ロボットのことが好きなんだろう？ 天枷に眠ってほしくないって、お前も思ってるんだろ？」

「思っていない！ ロボットなんて、この世からいなくなっちゃえばいいんだ！」

麻耶は泣き叫ぶように言うが、すぐにハツとして口元を手で覆いながら

「……義之、私のこと嫌いなの？ ヤなことばかり言う子だと思ってる？」

と義之に問い掛けた

義之は麻耶の涙を拭いながら

「思っていないし、嫌いじゃないさ」

と答えた

すると、麻耶は首を振りながら

「嘘……だって、私の言ったことに反対してるよ……」
と言った

その言葉に、義之は

「本当のことを言わないからだ……」

と言うと、義之は麻耶の目を見つめて

「麻耶……話してくれないか？ お前のお姉さんのことを……美秋さ

んのことを」

と言った

すると、麻耶は目を見開いて

「どうして、義之がそのことを……」

と呟いた

「麻耶のお母さん、綾さんから聞いたんだ……だから、話してくれ……お前のお姉さん、美秋さんのことを……」

義之のその言葉に、麻耶は俯いた

正直に言えば、義之がやっている事は麻耶の傷口を抉る行為だろう本当だったら、義之としてもこんな事はしたくない

だが、今やらないと麻耶はこれ以上に進めないし、麻耶と美夏の両方が救われない

だから、義之は心を鬼にした

麻耶と美夏を救うために

どれくらい待っただろうか

麻耶はポツポツと語り出した

そのほとんどは、綾から聞いたのと同じだった

だが麻耶視点ゆえに、より麻耶の思いを感じた

初めて美秋に出会い、一緒に過ごしたこと

桜公園で一緒に遊んだこと

勇斗の名前を一緒に考えたこと

麻耶の話から、義之は麻耶の美秋への思いを感じた

(本当に、実の姉妹みたいに過ごしたんだな……)

しかし、その幸せは長くは続かなかった

ある日、麻耶が帰宅したら、美秋が見るも無惨な姿に壊されていた

その美秋を見て、麻耶は泣きながら懇願した

お願いだから、生きてと

だが、そんな麻耶の懇願虚しく、美秋は機能を停止した

その後、故琢磨氏が記憶と人格のサルベージを行い必死に目覚めさせようとしたがそれも失敗に終わった

しかも、天枷研究所や麻耶の家にいわれ無き誹謗中傷の電話や手紙

が殺到

それが原因となり、故琢磨氏は精神的に追い詰められて自殺
綾も麻耶と勇斗を育てるためにがむしゃらに働き、体調を崩してし
まった

麻耶はそれら全てを、ロボットのせいにすることで精神の安寧を保
つ決断を下したのだ

本当はロボットが好きなのに……

「だってそうでしょう？ お姉ちゃんが死んだのに、誰も悲しんでくれ
なくて……お姉ちゃんを殺した奴はただの器物損壊罪で……そん
なの、おかしいよ！」

気が付けば、麻耶は泣き叫ぶように話していた

そんな麻耶を、義之は無言で抱き締めていた

「義之……私、どうすればいいの……」

義之は麻耶が泣き止むまで、ずっと麻耶を抱き締めていた

カウンントダウン

翌日、義之と麻耶は昼過ぎに目を覚ました

平日なので、学校は遅刻所ではない

だが、二人としては今はどうでも良かった

「麻耶、俺は天枷研究所に居る」

義之はそう言うと、ベッドから立ち上がった

「義之……私は、どうしたら……」

麻耶がそう言うと、義之は微笑みながら

「天枷は今日の夜遅くに、洞窟に封印される……俺は麻耶を待ってるからな……」

「出来ない……出来ないよ……」

義之の言葉を聞いて、麻耶は涙を浮かべながら首を振った

「麻耶……天枷は恐らく、麻耶を待ってる……」

義之はそう言うと、麻耶を抱き締めて

「だから、どんなに遅くなってもいい……必ず来てくれ……」

と言うと、部屋から出た

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ほぼ同時刻

裕也と蓮華、神夜は地下司令室に集合していた

しかも、完全武装状態だった

よく見れば、居るのは裕也達だけではなく、反対側の壁際にウーノ

達の姿もあった

しかも、裕也達と同じように、完全武装状態だった

司令室のメインモニターには、白髪が特徴的な三人の姿があった

画面中央には、顎髭を蓄えている恰幅のいい老人

名前はラルゴ・キール

ICPOの名誉武装隊長である

その右側に居るのは、メガネを掛けた男性

同じく、ICPOの法務相談役、レオーネ・ファイルス

最後に左側に居るのは、白髪に柔らかな微笑みが特徴の女性

統幕議長のミゼット・クローベルである

「それで、お三方……先ほどの情報は本当ですか？」

と聞いたのは、スカリエツティだ

スカリエツティが問い掛けると、三人は頷いて

『最近調査して分かったのだが、文献で《聖王のゆりかご》が実在したと分かった』

『しかも、そのゆりかごをインデックスが保有している可能性が高いんです』

『ゆりかごに関しては、未だに詳細は調査中です』

と語った

聖王のゆりかご

それは遙か昔、群雄割拠の時代に聖王に連なる部族が開発した巨大な戦艦である

文献によれば、聖王のゆりかごは次元跳躍砲撃すら可能と書いてある

だが、今までその存在は否定されていた

しかし、国連が有する巨大な図書館で調査した結果、聖王のゆりかごが実在することが分かった

しかも最悪なことに、それがインデックスの手に渡ってしまった

守護者部隊としては、劣勢に立たされた形である

だが、ゆりかごを動かすには聖王の血筋が必要である

だが歴史上、聖王の血筋は滅んでいる

しかしながら、今初音島には聖王の特徴を有する少女

ヴィヴィオが居る

ヴィヴィオがインデックスに捕まったら、インデックスは間違いないくゆりかごを起動するだろう

『こちらにも援軍を送りたいが、世界中で奴らが暴れていてな……』

『なかなか、戦力が集められないのです……』

『すみませんね……』

三人は申し訳なさそうに、頭を下げた

「いえ、仕方がないでしょう……数では、奴らの方が多いですからな」

スカリエツティはそう言うと、姿勢を正して

「それでは、我々は初音島の守備を固めます」

と言った

三人が頷くと一旦通信画面は閉じて、新しくリンデイと中年の男性
ゲンヤ・ナカジマの顔が映った

ゲンヤ・ナカジマはスバルとギンガの父親で、リンデイと同じ警察
の協力者である

リンデイが風見署の署長で、ゲンヤは風見署の機動隊長である

『今現在、こちらは動かせる署員を集めています』

『とはいえ、島民の避難もあるから、戦力としては半分しか動かせない
やな』

二人がそう言うと、スカリエツティは頷いて

「仕方ないだろうね……インデックスは一般人とて、容赦なく危害を
加えるだろう……」

と呟いた

すると、裕也が一步前に出て

「直接的な戦闘は俺達に任せてください。ですので、リンデイさん、ゲ
ンヤさんは避難誘導を優先してください」

と言った

裕也の話を聞いて、リンデイとゲンヤは頷いた

裕也は蓮華達に振り向くと、決意が強い意志が籠もった様子で
「俺達が最前線要員です。皆……絶対に守ろう！」

と宣言した

裕也の宣言を聞いて、蓮華達は真剣な表情で頷いた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、数時間後

場所、天枷研究所

「まったく……アポ無しで来るなんて、桜内君もムチャするわね」

「すいません……」

水越女史の苦言を聞いて、義之は頭を下げた

水越女史の言葉の通り、義之はアポイントメントも無しに天枷研究

所に来たのだ

もちろん、アポイントメント無しに来たので、義之は警備員に押さえられた

そして、義之が中に入れずにヤキモキしていると、天枷研究所所属のμ

個体名イベールが現れて、義之が水越女史の知り合いだと教えてくれたことにより、義之は中に入ったのだ

そして、水越女史の研究室に入ると、義之の視界に入ったのは、かつて洞窟で見つけた美夏が入っていた機械が置いてあった

そして中には、インナーだけを着た美夏が寝ていた

「天枷……」

義之は機械に近づいて、美夏を見つめた

すると、水越女史が近づいてきて

「今回は天枷の要請によって、彼女の同意が無いと、スイッチを押しても目覚めないようになってるわ」

と説明した

それを聞いた義之は、僅かに逡巡してからスイッチを押したが、美夏は目覚めなかった

「やっぱり、俺じゃあダメか……」

義之は呟くと、水越女史に体を向けて

「水越先生……麻耶を待たせてもらって、いいですか？」

と問い掛けた

すると水越女史は、啞えていた無着火のタバコを指に挟むと

「沢井さん……本当に来るの？」

と問い掛けた

すると、義之は力強く頷いて

「必ず、来ますよ……」

と言った

すると、水越女史は深々と溜め息を吐いて

「やれやれ……長期戦になりそうね……イベール、コーヒーお願い」「承りました」

水越女史の言葉を聞いて、イベールは頷いて部屋から退室した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「つくし……うあ……」

くしやみして、義之は目覚めた

どうやら寝ていたらしく、気づけば部屋は暗くなっていた

ふと時計に視線を向けたら、夜の12時近くだった

なお、この時義之は気づいてなかったが、バイクが走り去る音がしていた

義之が視線を巡らせると、水越女史が机に突っ伏す形で寝ていた

「水越先生……水越先生……」

「んあ……桜内君……？」

義之が揺ると、水越女史はゆっくりと起き上がった

「もうすぐ、12時になりますよ……」

義之の言葉を聞いて、水越女史は体を起こすと

「そう……沢井さんは来た？」

と義之に問い掛けた

「いえ……来ませんでした……すいませんが、天枷を……」

「分かったけど、ちよつと待って……私、低血圧だから……完全に起きるのに、少し時間が……掛かるのよ……」

義之の言葉を聞いて、水越女史はユラユラと揺れながらそう言った
それを聞いて、義之は寝ている美夏に近づき

「天枷……ごめんな、こんなことになって……でも必ず……必ず、天枷が過ごしやすい時代が来るように頑張る……それが何年後になるかは分からないが、絶対に子孫に語り継がせるからな……」

義之がそう語り、立ち上がった

その時、ドアが勢い良く開き麻耶が現れた

「麻耶……」

「ぜえ……はあ……天枷……さんは……？」

義之が驚いていると、麻耶は荒く呼吸しながら義之に問い掛けてきた
「ここに居るが……麻耶、どうやって来たんだ？」

時間的には、既にバスは止まっている

義之の家からはかなり遠いので、どうやって来たのか義之には分からなかった

すると、麻耶は呼吸を整えながら

「杉並が……バイクで……」

と言った

それを聞いて、義之は頬が引きつった

（あいつ、バイクの免許持つてるのか？ いや、杉並だったら持っててもおかしくない……）

義之はそう思うと、麻耶に対して

「麻耶……このスイッチだ……」

と言いながら、美夏が寝ている機械を示した

「天枷さん……」

麻耶はヨロヨロと近付くと、膝を突いた

「押ししても、天枷の同意が無いと眠りから覚めないわ」

水越女史がそう言うと、麻耶はビクツと体を震わせて

「無理よ……私が押ししても、天枷さんは……起きるわけが……」
と涙を流した

「麻耶……」

義之はどう言葉を掛けていいのか分からず、口を噤んだ

すると、麻耶は自身の体を抱きながら

「どうすればいいのか、分からないよ……助けてよ……お姉ちゃん……」

と泣いた

その時、義之は不思議な光景に気付いた

「なんだ……これ……」

窓の無い研究室で風が吹いており、桜の花びらが舞っていた

「桜の……花びら？」

水越女史が呆然と呟いた途端、義之達の視界を眩い光が覆った

そして、ゆつくりと目を開けると先ほどまで美夏が寝ていた機械の

横

つまりは、麻耶の前に一人の女性が立っていた
後頭部で纏めた長い赤髪に、赤を基調とした割烹着を着た優しそ
うな女性が

「お姉……ちゃん？」

麻耶の呆然とした声を聞いて、義之はその女性が誰か分かった

「まさか……美秋さん？」

「え？ 美秋って、破棄されたHMA-07型のこと？ てか、何が起
きてるの？ 何かの手品？」

義之の言葉を聞いて、水越女史は呆然と美秋を見た
すると、義之は笑みを浮かべて

「これは、魔法ですよ……もしくは、奇跡……かな？」

「魔法……ね」

義之の言葉を聞いて、水越女史は微笑みながら美秋と麻耶を見つめ
た

そして、一夜の奇跡が始まる

彼女の願いと……

「お姉ちゃん……なの？」

目の前に現れた女性、美秋を見ながら麻耶は呆然と呟いた

「久しぶりね……麻耶ちゃん」

美秋は座り込んでいる麻耶を見ると、微笑みを浮かべた

「お姉ちゃん……お姉ちゃん！」

麻耶は美秋にすがりつくように、涙を流した

すると、美秋は麻耶の頭を撫でながら

「麻耶ちゃん、何があったの？ 麻耶ちゃんがそんな風に来る時は、大抵何かあった時だから……」

美秋がそう問い掛けると、麻耶は唇をつぐんでから

「あのね、お姉ちゃん……私……友達に酷いことを……しちやっただの……」

「話してみても……」

美秋が先を促すと、麻耶はポツポツと語り出した

少し時は遡り、場所は変わって桜公園

「ごめんね、弟くん……こんなお姉ちゃんを……許して……」

そう呟いたのは、朝倉音姫である

彼女は《枯れない桜》を枯らせるか枯らせないか大いに悩み、どうやら枯らせる決断を下したようだ

そして、音姫が桜公園に一步入ろうとした時だった

「決めたようですね、音姫さん」

という、裕也の声が聞こえた

音姫が声のした方向、背後に視線を向けると、そこに居たのは二本の刀を手に持った裕也の姿があった

「ここは俺が抑えます……行ってください」

「それって、どういう……」

裕也の言葉に疑問を覚えて、問い掛けようとした瞬間

音姫は空間に満ちている殺気に気付き、視線を裕也の向こう側に向けた

そこに居たのは、白地に金色の刺繍が施された法衣を纏った大柄な男だった

「イ、インデックス……っ！」

しかも、纏っている法衣は救難十四聖を示している

たった一人だけだと言うのに、音姫は生きた心地がしなかった

「音姫さん……行ってください！」

裕也はそう言うと同時に、相手に向かって飛び出した

裕也はそのままの勢いで、両手に持った刀を繰り出した

だが、相手はそれを巨大な金棒《クリストフォアの戦鎚》で防いだ
「クリストフォアの戦鎚っ!?」ということは、鉄腕のクリストフォロか！」

裕也はそう言いながら、罅迫り合いを保った

「若いな……貴様ほどの若さで、この腕か……久方ぶりに楽しめそう
だ！」

クリストフォロはそう言うと、手に持っていた戦鎚で裕也を押し飛ばした

しかし裕也は、押し飛ばされた勢いを利用して一気に距離を取った
しかし、着地点付近に音姫が居ることに気づいて

「行ってください。早く！」

と声を上げた

「っ！」

それまで固まっていた音姫は我に帰って、桜公園の奥へと駆け出した

「行かせん！」

「させるか！」

音姫をクリストフォロが追いかけてしようとしたが、それを裕也が阻んだ

なお、この襲撃は一カ所だけではなかった

風見学園、高町家、天枷研究所に計二十名余りが同時に襲撃してきた
ていた

もちろん、裕也だけでなく、蓮華や神夜、更にはトーレ達も出撃及

び交戦していた

その頃、天枷研究所内の水越女史の研究室での麻耶の独白は終わっていた

語り終えた麻耶は、泣きながら

「私……あの子に酷い事を……」

と呟いた

すると、美秋は麻耶の頭を撫でながら

「大丈夫よ、麻耶ちゃん……美夏姉さんなら、きっと許してくれるわ」

と言った

「でも、でも……」

麻耶がためらっていると、美秋は眠っている美夏を見ながら

「大丈夫。美夏姉さんは優しいから、麻耶ちゃんが自ら行動すれば、許してくれるわ……」

と美秋は悟った

美秋の言葉に、麻耶はしばらく黙り込むが

「うん……わかった」

と頷いた

麻耶が頷くと、美秋は満足そうに頷いてから義之に視線を向けて

「君が、麻耶ちゃんの彼氏さんかな？」

と問い掛けた

「あ、はい。そうです……」

義之が肯定すると

「そっか……」

と美秋は義之を見つめてから頷いて

「うん……君なら、大丈夫そうね」

と言った

そして、麻耶の頭を撫でながら

「麻耶ちゃんをよろしくね……麻耶ちゃんって、意地っ張りだけど、本当は優しくって泣き虫だから……」

と言った

「はい、わかりました……」

美秋の言葉に義之が頷いた時、美秋の体が透け始めた

「お姉ちゃん……体が！」

麻耶が驚いていると、美秋は自分の体を見ながら

「時間が来ちゃったみたいね……君なら分かるかな？」

「……え？」

美秋の言葉に、義之は首を傾げた

「私を一時的に起こしてくれた存在が、終わったみたいなの……」

「……そう、ですか……」

美秋の言葉に、内心で首を傾げながら義之はそう言った

（一時的に起こしてくれた……？）

義之が考え込んでいると、美秋は麻耶に視線を向けて

「大丈夫よ、麻耶ちゃん……すぐにまた、会えるわ……だから、美夏姉さんを起こしてあげてね……」

と言った

「うん……わかったよ、お姉ちゃん……」

美秋の言葉に麻耶が頷き、それを見た美秋は微笑んでからその姿を消した

「お姉ちゃん……」

「麻耶、スイッチを……」

麻耶が美秋の消えた場所を見つめていると、義之は麻耶の肩に手を置いて美夏の眠っているカプセルを指差しながら促した

「うん……」

麻耶は微笑むと、美夏が眠っているカプセルのスイッチを押した

少しすると、モーターの駆動音が聞こえて美夏の瞼がゆつくりと開いた

美夏は目を覚ますと、キョロキョロと周囲を見回して、麻耶に気付いた

そして、カプセルの蓋を麻耶が開けると美夏は微笑んで

「沢井……」

と麻耶の名前を呼んだ

「おはよう……天枷さん……」

麻耶は美夏の名前を呼ぶと、嬉し涙を流しながら美夏を抱きしめた
こうして、二人の少女の諍いは無くなった
だが、崩壊の序曲は既に始まっていた……

襲撃と誘拐

美夏が目覚めると蓋がゆっくりと開き、美夏もそれに伴って起き上がった

麻耶は嬉し泣きしながら、美夏を抱き締めて美夏もそんな麻耶を抱き締めている

そんな二人を義之は微笑みながら眺めていたが、その時思い出したのだ

美夏のデバイスに搭載予定だったAIの名前が、なんと呼ばれていたのかを

「水越先生！ 天枷のデバイスに使う筈だったAIは、どこにありますか!?!」

義之が突然大声を出したのに、水越女史は驚きながらも

「え、あの棚の紫色の箱の中だけど……」

と壁際にある棚を指差した

義之はその棚に駆け寄ると、水越女史が言った紫色の箱を手にとって蓋を開けた

中に入っていたのは、綺麗な紅色の球体だった

義之はそれを持つと、麻耶に駆け寄って

「麻耶!」

とそれを差し出した

「これは?」

麻耶は不思議そうにしながら、義之に視線を向けた

「俺の考えが正しいのなら、これは……美秋さんだ」

義之のその言葉を聞いて、麻耶は目を見開いた

「だけど……お姉ちゃんは昔、壊されちゃった筈……」

麻耶の言葉に義之は頷いて

「ああ……でも、麻耶のお父さんはサルベージに成功してたんだろ?」

「え、ええ……」

麻耶が頷くのを見て、義之は手の中にある球体を見て

「さつき美秋さんは、私を一時的に起こしてくれた。って言ってた

……だったら、今は休眠状態だけなんだ」
と言った

「え……？」

麻耶が呆然としてみると、義之は球体を見ながら

「多分だけど、美秋さんは待つてたんだよ……麻耶が起動するのを」
と言った

「お姉ちゃん……」

麻耶は紅の球体を持つと、魔力を解放した
すると、今まで沈黙していた球体が光り出し

《魔力承認……完了……起動プロセス開始……》

と言う、音声が届こえた

その音声はまだ機械的だが、まさしく美秋のものだった
《起動完了……待つてたよ、麻耶ちゃん》

「お姉ちゃん……お姉ちゃん……！」

美秋の声を聞いて、麻耶はA Iユニットを抱き締めた

その光景を見て、義之が微笑みを浮かべた

その直後、研究室にけたたましい警報音が鳴り響いた

「なんだ!？」

「なに!？」

義之と美夏が視線を上にした直後

『緊急事態発生! 緊急事態発生! 研究所内部に侵入者! 繰り返し返す、研究所内部に侵入者! 所員は避難せよ! 所員は直ちに避難せよ!』

その放送を聞いた直後、水越女史が歯噛みして

「来たわね……インデックス!」

と呟いた

その数瞬後、廊下側の壁が爆発と共に吹き飛んだ

全員が一斉に視線を向けると、縛煙の向こうから現れたのは白い法衣を所々血で濡らしたインデックスの使徒だった

インデックスの使徒は研究室内を見回すと

「この部屋にも居ない……ハズレたか……」

と呟いた

「さて、殺すか……」

使徒はそう言うと、杖を掲げた

その直後

「桜花あー！」

叫びながら、義之は駆け出した

すると、警備員に預けられて警備室に置かれていた桜花が光輝いて

《緊急事態発生。遠隔起動！》

と喋り、次の瞬間に義之はバリアジャケットを展開していた

「させるかよー！」

義之はその言葉と同時に肉薄し、桜花を振り下ろしていた

だが、使徒は持っていた杖でその一撃を簡単に防いだ

「義之ー！」

麻耶が心配そうに声を上げると、義之は肩越しに

「麻耶、天枷、水越先生！俺が押さええてる間に逃げろー！」

と叫んだ

「義之を置いて、逃げるわけにはー！」

「すまない、桜内ー！」麻耶は義之に駆け寄ろうとしたが、それを美夏が

阻止

そして麻耶を抱え上げると、水越女史と駆け出した

「義之いー！」

麻耶が再度義之の名前を呼んだ直後、研究室で大きな爆発が起きた

「すまない、桜内……すまないー！」

今の美夏はデバイスを有していないし、水越女史は元々魔法は使えない

そんな自分に来るのは、義之の言葉通りに逃げることでだけだった
数少ない友人を見捨てるような行動に、美夏はギリツと歯を軋ませ
ながら走り続けた

途中で何回か非常口を見つけたが、その全てはドアが歪んでいて開
けられそうになかった

ゆえに、三人は正面玄関を目指した

だが、正面玄関ホールに到着して三人は固まった
なぜならば、正面玄関ホールは地獄絵図へと変わっていたからだ
使徒の侵入を阻止しようとしたのだろう
杖タイプのデバイスや拳銃を持った警備員達が、無惨な死体となっ
て血だまりの中に沈んでいた

「なんて、ことを……」

その光景を目にして、麻耶は顔を青ざめていた

だが、水越女史は冷静に

「研究所で雇った警備員に間違いはないわね……人数的には、半分つ
てところね」

と呟いた

「とりあえず、外に出るぞ」

美夏のその言葉に水越女史は頷き、麻耶を支えながら正面玄関から
出た

そして、その時になって気づいたが、学園の方角で黒煙が上がって
いた

「警察はなにを……」

麻耶が呆然と呟いていると、水越女史が

「これを聞いてみなさい」

と自分が持っていた端末を手渡した

どうやらラジオモードになっているらしく、音声が届こえた

『繰り返し緊急警報をお知らせします！ 今現在、初音島は正体不明
の武装者達により襲撃を受けています！ 民間人の方々は警察の誘
導に従い、所定の場所へ避難してください！ 繰り返しします！』

と切羽詰まった様子で語っている

「そんな……」

麻耶はその放送を聞いて、地面に座り込んでしまった

その直後、大きな爆発音がして爆煙の中から何かが飛び出した

その飛ばされてきた存在は二三回程地面をバウンドすると、三人か
ら少し離れた場所で止まった

その飛ばされてきた存在を見て、麻耶は驚愕した

「義之！」

なにせ、飛ばされてきたのはボロボロになった義之だった。麻耶は立ち上がると倒れている義之に駆け寄り、義之を助け起こした。

「義之！……しつかりして、義之！」

麻耶が声を掛けると、義之の目がうつすらと開き

「逃げろ……早く！」

と呟くように逃げるように促した

そのタイミングで、歩く音が聞こえてきて

「まったく……手こずらせてくれる」

と面倒そうな声がして、先ほどの使徒が壁に空いた穴から出てきた。その使徒を見て、美夏は拳を構えると

「沢井……桜内を連れて逃げろ」

と言った

「天枷さん!?!」

「美夏が時間を稼ぐ！」

麻耶が止めようと手を伸ばした瞬間、美夏は驚くべき速度で使徒へと飛びかかった。

リミッターを解除したのか、地面が美夏の足の形に凹んでいる

「アアアアアア！」

美夏は雄叫びを上げると同時に、拳を繰り出した。だが、それすら使徒は容易く受け流し

「邪魔だ」

と言いながら、使徒は美夏へと杖を振るった

「ガッ!?!」

その一撃はがら空きになっていた美夏の脇腹に直撃し、美夏は先ほどの義之と同じように吹き飛んで地面へと激突した。すると使徒は、自分の杖に視線を向けて

「今の手応えは……」

と呟くと、美夏の方に視線を向けた

そこに見えたのは、苦しそうに直撃を受けた部分を抑えている美夏

だった

だが、その部分は内部構造が露出しパチパチと放電していた
「なるほど……貴様、化け物の類だったか……」

使徒はそう言うのと、美夏の方へと杖を向けて

「貴様から処理する」

と言つて、魔力を溜め始めた

それを見た麻耶は、近くに來た水越女史に視線を向けて

「義之をお願いします！」

と言つて、美夏の前に飛び出して両手を大きく広げた

「なんのつもりだ？」

「沢井、よせ……！」

使徒は訝しみ、美夏は麻耶を制止した

だが、麻耶はその場から退かず

「もうこれ以上、私の前で誰も死なせない……！」

と告げた

それを聞いた使徒は目を細めて

「そうか……ならば、貴様から先に逝け……」

と麻耶に照準を合わせた

それを見た麻耶は、固く目を閉じて

(ごめん……義之、天枷さん……私、ここまでみたい)

と思い、死を覚悟した

だが、何時まで待っても痛みすらこない

不思議に思い、麻耶は恐る恐ると目を開いた

すると、使徒は杖を下ろしていて左手を耳に当てていた

「器の確保に成功した……了解した……撤退す……いや、ついでに」

人増やそう」

と使徒は言うのと、麻耶に杖を向けた

その直後、麻耶の両手両足をバインドが拘束した

「バインド!？」

麻耶は咄嗟にバインドから脱出しようと、もがいた

だが、その瞬間には使徒が懐に入っ

「眠れ」

と、麻耶の頭を掴んだ

「義……之……」

麻耶は義之の名前を呟くと、ダラリと体から力が抜けた

使徒はそんな麻耶に掛けていたバインドを掛け直すと、麻耶の体を抱え上げて空間転移で消えた

「そんな……」

「沢井……」

その光景を見て、水越女史と美夏は呆然とした

その数分後、蓮華が裏手から現れて事態を知り、悔しそうにグランヴェルを地面に叩きつけた

この襲撃によって、一般人数十名が死傷

襲撃してきたインデックスの使徒は、半数以上が撃破された

こうして、インデックスによる初音島襲撃は一旦幕を閉じることになった

週末戦争編 宣戦布告

襲撃事件の翌日、初音島の水越病院はまるで野戦病院のような有り様だった

ロビーには怪我人が溢れており、看護師や医師が駆け回っては処置をしていた

そんな水越病院の一室にて、義之は入院していた

なお水越女史の口添えにより、個室をあてがわれていた

その個室には、音姫や由夢の朝倉姉妹を筆頭にほとんどのメンバーが集まっていた

「すみませんでした……俺が他の連中に時間が掛かったばかりに……」

そう謝ったのは、壁際に立っていた蓮華である

蓮華は神夜と天枷研究所を担当したのだが、数人の使徒に手こずっている間に侵入されたのである

それにより、義之が怪我を負ったのを自分達の責任と感じていた

「いえ、あなた達はよくやってくれたわ。六人を相手にして、倒したんだから」

水越女史はそう言いながら、蓮華の肩に手を置いた

「それで、裕也君は大丈夫？」

と水越女史が問い掛けると、裕也は包帯を巻いた右手を上げて

「回復魔法も使ったので、明日には治ります」

と告げた

裕也の説明を聞いて、水越女史は頷き

「でも、よく救難十四聖を相手にして撃退できたわね」

と言った

裕也は戦っていた救難十四聖の一人、鉄腕のクリストフォロに致命傷を負わせて撃退していたのだ

だが、裕也も無傷ではなく一撃喰らい、右腕を骨折していた

だが、スカリエツティの迅速な手術とシヤマルの回復魔法により、明日には治るほどにはなっているが

そして水越女史は、ヴィヴィオが誘拐されたなのはを慰めていた
だが、裕也はそれよりも別のことが気になっていた

(まさか、義之が存在してるなんて……)

そう

枯れない桜が枯れたというのに、義之が消えてないのだ

そのことに関して、音姫と念話で議論したのだ

そして、二人で至った答えは

《人との繋がりが、義之を枯れない桜が枯れても存在させている》
である

人の思いというものは、奇跡を起こす

過去にそういつた例は幾つかあり、音姫と裕也はそれだと判断した

その時、水越女史が

「問題は誘拐された沢井さんとヴィヴィオちゃんね……」

と呟きながら、腕組みをした

水越女史の言葉に、修理を終えていた美夏が頷き

「あいつらは一体、何をする気なんだ？」

と首を傾げた

「分からないが、絶対に碌でもないのは間違いないな……」

蓮華がそう言ったタイミングで、今まで壁際で黙っていたチンクが
急に

「テレビを点けろ！」

と声を上げた

「どうした？」

「何があった？」

裕也と蓮華が問い掛けるが、チンクは焦った様子で

「いいから早く！」

と急かした

チンクの様子に首を傾げながらも、テレビに近かった由夢がテレビ
の電源を入れた

画面が映ると、そこには一人の女が映っていた
豪華な装飾が施された白い法衣に、レースのケープを被った一人の
女

「こいつはー!」

「教皇ヨハンナだ?!」

その女の姿を見て、蓮華と裕也は目を見開いた

その女こそが、バチカン法王教皇庁禁書目録聖省の最高幹部

教皇ヨハンナだった

『もう一度お伝えします……二日後、我々禁書目録聖省は世界統一作戦を行います……目的は勿論、世界の統一です……そして、その最初の作戦地は……日本は初音島とします』

「な!?!」

「なんだと!?!」

ヨハンナの言葉を聞いて、その場のほとんどのメンバーが驚愕した

ヨハンナが言ったのは、実質的な世界支配だ

『世界は未だに、悲劇と争いに満ちています……それはなぜでしょうか? 主義主張の食い違い……民族差別……文化の違い……色々と理由はありますが、大本の理由は、互いを認められないからです……ですから我々は、唯一神の名の下により良い世界を作るために、我々に敵対する勢力を殲滅することを、ここに宣言します』

ヨハンナの話に、誰も言葉が出なかった

それは事実上の、武力制圧を宣言していた

『特に、我々に幾度となく刃向かってきた武装組織、守護者部隊を断固として殲滅することを誓います……彼らは我々の理想を理解しようとせず、我々の敬虔な使徒達を何人も殺戮してきました……そんな彼らを、我々は断じて許せません』

ヨハンナがそう言うと、カメラが下がり、ヨハンナの背後に莫大な人数の使徒が映った

『そして、最初に向かう初音島は、そんな守護者部隊の最大級の拠点と我々は判断しました……そして、初音島に住む者達も同罪です……初音島は、地図から消しましょう』

ヨハンナがそう宣言すると、背後に立っていた使徒達が雄叫びを上げた

『では、っ機嫌よう……』

ヨハンナが頭を下げた数秒後、映像は終わった

その数秒後

「そんな……」

「なんで……」

小恋とななかは、顔を蒼白にして座り込んだ

他のメンバーは絶句していたが、裕也、蓮華、神夜、チンク、美夏、

水越女史は怒りの光を瞳に宿して

「好き勝手言いやがって……!!」

「上等ですね……!!」

「受けて立ってやろうじゃねえか!!」

「美夏達の怒りを、思い知れ!」

「これは、忙しくなるわね……!!」

と呟くと、義之の病室から出ていった

これが後に言う、初音島攻防戦

もしくは、《週末戦争》の幕開けだった……

備え

裕也達は守護者部隊初音島支部に戻ると、早速会議を始めた

内容はもちろん、先の演説から分かったインデックスの襲撃である
風見警察署の署長であるリンデイと、機動隊の隊長のゲンヤは守護者部隊と一緒に初音島を守ると言ったが、問題は初音島の一般人達の避難であった

最初は初音島の外に逃がして、近隣の街に避難させるという案が出された

だが、橋の本土側が閉鎖されて、更にはフェリーも止められたのだ
なぜそんな事をしたのか、初音島の市長がそれぞれの街に問い質したら、《巻き込まれるのは御免だ》

という解答であった

すなわち、彼らは初音島を見捨てたのである

市長は彼らに抗議したが、彼らは一切取り合わなかった

そして裕也達が困り果てていた時に、杉並が現れて

『我が非公式新聞部の地下アジトへ避難しては如何かな？』

と言ったのである

その後、裕也と蓮華、更にリンデイを連れて杉並は地下アジトへと案内した

驚いたのは、地下アジトの規模だった

非公式新聞部の地下アジトは、学園地下だけでなく、初音島全体に存在し、普通の教室並みの広さの部屋が52も存在することが分かったのだ

しかも、同じように入出口は学園だけでなく、初音島全体にあり、学園だと、階段の鏡の裏にあったり、中庭の花壇の隅にあったり、校庭のド真ん中にあったり、果てには、道路や公園のトイレに有ったりしたのだ

裕也達はそれを見て、非公式新聞部の神出鬼没さの理由を知った

閑話休題

リンデイは非公式新聞部地下アジトへの避難を決定し、一般人達へ

避難するように促した

中には移動の難しい病人も居たが、それは医療設備毎地下に運び込んで対処することにした

当然ながら、52の部屋には収まりきらなかったので、通路にも避難させることにはなったが、なんとか全員の避難が完了したのが、翌日の夕方近くであった

その後、食料や衣類や寝具の運び込みを行って、地上では、防衛の為に防衛線の構築が始まった

しかし、初音島の戦力は警察、守護者部隊、聖王教会騎士団合わせて約四百足らず

それだけでは、防衛が不可能なのは予想出来ていた

ゆえに、スカリエツティは世界中の守護者部隊や聖王教会騎士団に援軍を要請

更には、警備用にと製造配備していたガジェットの利用を決定したガジェットの調整に、スカリエツティやウーノ、クアットロだけでなく、すずかまで協力を申し出た

しかも、裕也達として予想外だったのが、一緒に戦うと意識を取り戻した義之や音姫、なのは達も立候補したのである

裕也は最初難色を示したが、義之達は一步も引かなかった

特に、義之や美夏、なのはとユーノ達は頑なだった

義之と美夏は麻耶を、なのはとユーノはヴィヴィオをインデックスに誘拐されており、自分達で取り戻したいと思っていた

これ以上の説得は無理と判断して、裕也はせめて非殺傷設定を外さないようにと義之達に言い含めたのだった

時は少し戻り、インデックス側は一隻の船で移動していた

その船の名は箱舟

そして、艦橋に当たる場所に居たのは、インデックスの女教皇ヨハンナであった

そんな彼女の背後には、数人の付き人が待機していた

だが、その中の一人が守護者部隊の一人

スカリエツティの生み出した戦闘機人の一人、ドゥーエだった

ドゥーエは11年前の脱出時にワザと残り、スパイとして活動していたのだ

しかし、なぜバレていないのか

それは、彼女のISが理由である

ドゥーエのIS、その名も《ライアーマスク》

見た目だけでなく、声まで別人にすることが出来るのだ

彼女はそれを利用して、11年という長きに渡って、スパイ活動を続けてきたのである

当然ながら、何回も見つかりそうになって、殺されそうになった

だが、初音島に居る姉妹達や裕也達を思って乗り越えてきた

だが、今回ばかりは命を懸けざるをえなかった

今この場には、付き人達以外に使徒は居ない

そして、目の前には無防備なヨハンナの背中

まさしく、絶好のチャンスだった

だが、それと同時に言い表せない不安があった

まるで、目の前居るヨハンナを殺せないという不安が

だが、そんな不安で絶好のチャンスを不意にする訳にはいかなかった

ドゥーエは飲み物を乗せたトレイを持つと、ヨハンナに近づいて
いって

「ヨハンナ様、お飲み物にございます」

と恭しく頭を下げた

「よしなに」

ヨハンナはそう言うと、コップを受け取り、それを飲み始めた

その瞬間、ドゥーエはトレイを離して自身の専用武装たる《ラス
ティー・ネイル》を展開

そして、ヨハンナの首をその爪で切り裂いた

(殺った！)

吹き上がった血と手の感触からドゥーエはそう思ったが、次の瞬間
には混乱した

なぜなら、今自分が殺した筈のヨハンナの姿が消えていたのだから

しかも、死体だけでなく血の跡すら無くなっていた
予想外の光景に、ドゥーエは混乱の極みに達して固まっていた
その時

「愚かな……」

背後から溜め息混じりの声が聞こえて、ドゥーエは振り向いた
その直後、ドゥーエはもの凄い衝撃を受けて吹き飛び、壁にめり込
んだ

そして、視界が歪んだドゥーエが見たのは、殺した筈のヨハンナが
無傷で立っていた姿だった

「有り……得ない……」

自分は確かに、ヨハンナの首を切り裂いた筈……

ドゥーエがそう思っていると、ヨハンナは微笑みを浮かべて
「あなたが私を殺しに来るのは分かっていました……ですが、私は死
にません」

ヨハンナはそう言うと、自身の胸元に手を当てて

「私と同化しているヨハンナの神名碑……それにより、私は現象と同
じになりました」

と説明すると、ヨハンナは息を呑んだ

現象になった

つまり、ヨハンナは《そこに居るだけ》

事実上の不死だった

そのタイミングで、数人の使徒がなだれ込むように部屋に入ってきた

どうやら、ドゥーエを殺しに来たらしい

それを見たドゥーエは、心中で

(ごめんね、皆……私、此処までみたい……)

と謝ってから、目を細めて

(せめて……皆に会いたかったな……)

と思ったのを最後に、ドゥーエの意識は途切れた

開戦

ヨハンナの宣言から二日後

守護者部隊、警官隊、聖王騎士団の連合部隊は、島のフェリー港に展開していた

あれこれと議論した結果、そこが最も上陸に適していると判断したからだ

もちろん、インデックスも分かっているだろうことは予測しているだから、出来る限り罫を張り、策を講じた

後は、味方の援軍が間に合うのを祈るばかりだった

どうも、各国でもインデックスやインデックスに連なる組織が動いているらしく、間に合わない可能性の方が高いとのことだった

そして、朝8時を回ろうかという時だった

『H.Qより展開している総員に通達！』

地下司令部に居るウーノから通信が届いた

『ソナーに感アリ！ 数は三！ 上陸まで、後三十秒！』

ウーノの報告を聞いて、警官隊に緊張が走った

だが、彼らはその場から引かなかった

この戦いの前に、風見署のリンディ署長が彼らに戦いたくないなら、避難しても構わないと告げたのだが、誰一人として避難しなかった

彼らも初音島の住民であり、家族や友人、恋人を守りたいと言ったのだ

なお、連合部隊が展開しているのは、フェリー湾の中腹で倉庫が並んでいる場所である

外苑部には、非殺傷設定を解除し、一部重装備化したガジェット群が展開している

『上陸まで、後五秒！ 四、三、二、一！』

ウーノがカウントダウンした直後、ズズンという音がした

そして、展開している連合部隊の全員の視界に、倉庫越しだというのに、巨大な船が三隻見えた

『インデックスはどうやら、箱船を投入したようだね。本気だな』

映像で見たのか、スカリエツティがそう言った

「箱船ってなんだ？」

蓮華が問い掛けると、ウインドウが開いて

『箱船というのは、インデックスが作った大規模人員移動船です。空間魔法で内部空間を広げてあって、かなりの人数が収容できます』

『三隻だから、最大で数万規模だね』

とウーノとスカリエツティが立て続けに説明した

スカリエツティ達の説明を聞いて、その場の全員に動揺が走った
インデックスが数万規模に対して、連合部隊は約四百名

その差は歴然である

だが、すぐに気を取り直して前を見据えた

その直後、巨大な爆発音が鳴り響いた

「H Q、今のは？」

『今のは、クアットロが仕掛けた罠が発動したの。気にしないで』
裕也が問い掛けると、すぐさまウーノがそう返した

その頃、H Qたる地下司令部では

「ウフフフフ……お馬鹿さん達……ここは私達の庭なのよ？ 罠ぐら
いあるに決まってるでしょ？」

とクアットロが恍惚とした笑みを浮かべていた

それを見たスカリエツティが、冷や汗を流しながら

「なあ、ウーノよ……クアットロはあんな性格だったかね？」

と問い掛けると、ウーノは何処か遠くを見るような目をしながら
「なんでも、罠を仕掛けるのが楽しくって、そんな罠に嵌まった相手を
見るのが面白いそうです……」

と答えた

そして、二人は顔を見合わせると深々と溜め息を吐きながら

「ダメだ、コイツ。早くなんとかしないと……」

と呟いたのだった

場所は戻って、フェリー湾

連合部隊は待機を続けていたが、徐々に爆発が近づいてきていた

『HQより前線部隊各員に通達！ 接敵まで、後二十秒！』

と通達が下り、それを聞いて、裕也が片手を上げた

すると、警官隊の砲撃魔導士達やライフル等で武装した警官達がデバイスやライフルを前に向けた

その十数秒後、爆煙が近距離で発生し、その爆煙を突き破って、インデックスの尖兵が見えた

使徒の法衣を着ているが、人間とは思えない雰囲気だった

もしかしたら、インデックスの実験により自我が崩壊した人間かもしれない

だが、今の彼らは敵

倒さなければ、自分達が死ぬのだ

そして、使徒達がある一定のラインに到達した時

「撃ええ！」

と裕也が手を振り下ろした

その直後、ライフルやグレネードランチャー、魔力砲が火を噴いた銃弾や爆発、魔力砲の直撃を受けて、走っていた使徒達は次々と地面に倒れて、血だまりを作った

だが、それを見ても後続の使徒達が止まる気配は無かった

だからなのか、裕也達守護者部隊と聖王騎士団の騎士達が立ち上がった

そして、全員デバイスを構えて

「警官隊の皆さんは砲撃を継続！ 守護者部隊並びに、聖王騎士団は突撃します！」

と裕也が言うと、全員は領いた

全員が領いたのを見て、裕也も刀を抜いて

「総員……突撃い！」

と刀を前方に突き出して、先頭を駆け出した

こうして、絶望的な数の差の防衛戦が始まった

推移

開戦から約一時間

裕也達は善戦していた

『第一機動隊は後退して、給弾と休憩をしてください！』

「了解！ 後退する！」

ウーノからの通信を聞いて、警察の部隊が後退を始めた

「デイエチ！ 彼らに支援砲撃を！ セツテは敵の足止め！」

「了解！」

裕也の指示を聞いて、デイエチはヘビーバレルで支援砲撃を始め、セツテは両手に持ったブーメランブレードを敵に向かって投擲した。デイエチの砲撃の直撃を食らった使徒は消し飛び、セツテのブーメランブレードを受けた敵は、真つ二つになって地面に血溜まりを作った。

だが、それでも使徒達は止まらない

まるで、自分達は捨て駒だと言わんばかりに命を捨てて駆けていた

その光景に、警官隊の一部が萎縮していた

命を捨てる光景に、怯えているのだ

「来るな……来るな……」

一人の若い警官は呟くように繰り返しながら、銃撃を続けた

『第三警官隊と代わって、第四警官隊は後退してください！』

「了解！ お前ら、下がるぞ！」

ウーノからの通信を受けて、その若い警官が所属していた警官隊が後退することになった

だが、その警官は錯乱状態になっているらしく、後退せずに銃撃を続けていた

だが弾切れになり、弾倉交換しようとして、予備弾倉も無いことに気づいた

「しまった……弾が！」

「武田、前だ！」

弾倉が無いのに気づき困惑していると、隊長らしき人物がその警官

に注意を促した

そして、その警官が前を向いたら、目前に刃を振り上げている使徒が居た

「っ……!!」

その警官が自身の死を予見した直後、その使徒の首が飛んだ

「あっ……あっ……」

その光景を見て警官が呆然としていると、その警官の襟首を蓮華が掴んで

「とつとと下がれ！」

と罵倒しながら、乱暴に投げた

「おらっ！ そいつを連れて、さっさと行け！ 後、そいつは医療班に引き渡せ！」

「了解、すまない！」

蓮華に言われて、若い警官を二人掛かりで引きずって下がっていった

「裕也！ 警官隊に精神的にヤバい奴が出始めたぞ！」

蓮華がそう言うのと、血糊を振って飛ばした裕也が

「予想してた。ウーノさん！ 計画通り、第二防衛線まで下がります！」

と叫んだ

すると、通信ウィンドウが開いて

『了解！ これより、聖王教会騎士団第二小隊と騎士ゼストを派遣します！ 彼らと連携して、後退時間を稼いでください！』

と通達がきた

「了解！ これより、後退戦を開始します！」

裕也はそう返答すると、刀を構え直して

「これより、第二防衛線まで下がります！ 警官隊は先に後退を開始！ 我々守護者部隊と聖王教会騎士団第二小隊が後退時間を稼ぎます！ 負傷者が居る場合、装備を捨てても必ず連れて帰ってください！」

と号令を下した

「了解！了解！」

裕也の号令を聞いて、各隊は行動を開始した

特に、警官隊は射撃を繰り返しながら、ジリジリと後退を開始

それを、到着した聖王教会騎士団第二小隊とゼストが支援を開始した

「ゼストさん！」

裕也が呼ぶと、一人の使徒を刺し貫いたゼストが近寄って

「防人、我々で一度切り込むぞ。後方攪乱を行い、後退時間を稼ぐ」と提案した

「了解！蓮華、神夜、聞いたな！」

裕也がそう言うのと、近くで背中合わせで戦っていた二人が視線を向けて

「おうよ！ いっちょ派手に暴れてやろうぜ！」

「承りました！」

と頷いた

「ウーノさん！ 俺達はこれより、敵の中心に切り込んで後方攪乱を行います！ トーレさんとディード、オットーを警官隊と騎士団の援護に！」

『了解、回します！』

『これより、クワットロの能力を発動させるのと合わせて、追加のガジェットを応援に向かわせる！ 各員、データ共有で惑わされないように対応してくれ！』

ウーノに続いて、スカリエッティから通信が入った

クワットロの能力名はシルバーカーテンといい、精密な幻覚を生み出すのだ

その精度は本物と見分けがほとんどつかず、下手したら味方すら惑わされるほどである

ゆえに、味方はゴーグルに戦術データリンクを映し出し、惑わされないようにするのだ

「了解！了解！」

全員は返答すると、データ共有を行った

その後、裕也達の目前に、夥しい数のガジェットや、裕也達の姿が現れた

裕也達はデータ共有でそれらが幻覚と分かっているが、使徒達は困惑したようで動きが止まった

「今だ！ 切り込むぞ！」

「続けえ！」

その隙を突いてゼストを筆頭に、裕也達は一気に切り込んだ

そして裕也達は、絶望的な事実を知る……

突撃

戦闘開始から約数時間

裕也達は港の入り口付近まで後退していた

港の入り口は一カ所しかなく、防衛に適している

だが、善戦とは言えなかった

なぜならば、敵の戦力にガジェットが混じってきたのである

しかも、かなり強化されたタイプまで有った

だが

「全力全開！ スターライトー……」

「雷光一閃！ プラズマザンバー……」

「響け、終焉の笛！ ラグナロク……」

その声を聞いて、裕也は

「総員、伏せろ！」

と号令を下した

裕也の号令に従って、警官隊や騎士団は伏せるか物影に隠れた

その直後

「二ブレイカー！二」

三人の声が出た直後、眩い閃光が視界を覆い、それと同時に凄まじ

い衝撃波が走った

閃光が収まり、裕也は顔を柱から出した

そこに見えたのは、もはや惨状だった

建物は軒並み倒壊し、ガジェットは吹き飛んでいて、接近しようとして

していた使徒達は倒れ伏して呻いていた

これをやったのが、たった三人の少女達だと言うのだから、未恐ろ

しい事だった

しかし、裕也はこれ幸いにと

「今の内に、一気に削る！ 守護者部隊、突撃！」

「騎士団も続け！」

裕也に続いて、ベスト率いる聖王教会騎士団も突撃を始めた

やはり、今の内に数を減らせるだけ減らしたいのだ

だが、突撃するのは危険を伴う

敵中で孤立したら、あつという間に全滅するだろう

だが敵の氣勢を削ぎ、箱舟を沈めるか、もしくは教皇ヨハンナを倒すことが出来れば、この戦争は早期終結するのは間違いない

裕也達はそう判断し、敵陣深くに切り込んだ

そして、裕也達は衝撃的な光景を目にした

それは……

「ドゥーエさん!!」

戦闘機人の二番目

ドゥーエが、箱舟の前の立ててある十字架に張り付けにされていたのだ

しかも、その近くには十人の金色の刺繍が施された法衣を纏った使徒

救難十四聖と、薄いベールを被った女教皇

ヨハンナが居た

「ドクター！ ドゥーエさんが捕まってる！ 見た感じだと、重傷！」

裕也がそう報告すると、舌打ちする音がして

『直前で捕まったか！ 助けることは!?!』

と裕也に問い掛けた

「現状の戦力では難しいです！ セインとウエンディを！」

『了解した！ 直ぐに回す！』

「頼みます！ 蓮華、神夜、ゼストさん、援軍が来ます！ ドゥーエさん

を救助しましょう！」

裕也がそう言うと、蓮華と神夜は頷くがゼストが

「だが、どうやってだ？ 確認された救難十四聖全員とヨハンナだぞ

？」

と問い掛けた

裕也を含めて、ゼストや蓮華、神夜はオーバーSランクである

だが、それは救難十四聖やヨハンナも同じである

「数に於いて、裕也達は劣勢の立場である

だが、裕也には考えがあった

「俺達が奴らを引きつけて、その隙にウエンデイがドゥーエさんの上空を通過。その際に、降下したセインがドゥーエさんを救助してISを使って離脱させます」

セインのIS

《『ディープダイバー』は無機物の中をまるで水中のように移動出来る能力である

故に、どこかの施設からの脱出や、人質救助等の時には非常に有用性が高い能力だ

しかし、そういった能力と本人の性格故に、セインの戦闘力はそれほど高くない

だから普段は、聖王教会でシスターをしているか、後方攪乱、もしくは敵施設への潜入などを請け負っているのである

以上、説明終了

「騎士ゼスト、周囲の使徒は私達が引き受けますー！」

そう言ったのは、聖王教会騎士団のシスターシャツハである
シャツハは言い終わると同時に、部下を率いて半円形に展開
自身のデバイスであるヴィンデルシャフトを構えた

「御武運を」

「そちらも」

二人は短く言葉を交わすと、ゼストはそのまま駆け抜けた

「頑張ってくださいー！」

「御武運をー！」

「死ぬなよー！」

裕也達もそう言いながら駆け抜け、ドゥーエ救助に動いた

「まずは引きつける！ お前たち、やるぞー！」

「はいー！」

「象徴しましたー！」

「おうよー！」

ゼストの号令に三人は返すと、それぞれデバイスを構えた

ここからが、戦いの本番である

異世界からの救援

「つくあー……平和だねえ……」

「だな……」

そう言ったのは、元の世界に帰った吉井明久と常村結華の二人である

戻った後、二人は学園長に詳細を説明

学園長は腕輪を破棄しようと言ったが、二人は拒否

そのまま持つて帰った

それから時は経ち、季節は冬になっていた

二人は居間に出したコタツに入りながら、テレビを見ていた

テレビは某五人組アイドル達主演の番組で、色々な場所に行つては体を張つて開拓したり、農業をしたり、地域PRをやったりしている

「本当に凄いよね、この人達……」

「もはや、本業が分からないな」

二人がそう呟いた時だった

二人の脳内で

《助けて……》

という声が響いた

「今の!？」

「やくらさん!？」

どうやら二人同時に聞こえたらしく、二人は顔を見合わせた
すると再び

《初音島を……裕也君と義之君を……皆を……助けて……》

という声が聞こえた

「まさか……」

「初音島で、何かあったのか?」

二人は顔を見合わせながらそう言うが、もう声は聞こえなかった
だが、二人は迷わなかった

二人は居間から出ると、部屋へと向かった

そして、机の引き出しを開けると、中に入っていた二つの箱を取り

出した

「まさか、本当に行く事になるなんてな……」

「うん……だけど、行かない理由は無いよね?」

結華の言葉に明久がそう返すと、結華は無言で頷いた

明久は結華が頷いたのを見ると、二つの箱を開けた

その箱の中に入っていたのは、腕輪だった

そう

あの世界に渡る原因となった、赤月の腕輪だった

もはや使うことは無いと思っていたが、二人は捨てる事が出来なかった

なぜか、二人には予感があった

もう一度、あの世界に行く事になるという予感が

そして、それは現実となった

二人はそれぞれ、腕輪を装着するとそれぞれ蒼い腕時計と、赤いブレスレットを反対側の手に装着した

そして顔を見合わせてから、腕輪を装着した腕を高々と掲げて

「起動《アウエイクン》!」

とキーワードを唱えた

その直後、二人の足下に魔法陣が展開された

「待っててね、裕也君!」

「今から、あたし達が行くからな!」

二人がそう言った直後、二人の姿は部屋から消えた

そして気がつけば、二人は空高くに居た

「つて、空ああああ!?!」

「いきなり、随分な事態だな!」

二人は上空に現れたことに驚いたが、見えた初音島を見て

「そんな……!?!」

「初音島が……燃えてる!!」

初音島の一角で火災が発生しているのを見て、そこをジッと見た
そして気づいた

白い法衣を着た一団と、警官隊や剣や槍の形のデバイスを持ってい

る一団が交戦していることに

「あれはインデックス！」

「インデックスが、侵攻してきたのか！」

二人はインデックスが侵攻してきたことに気づき、顔を見合わせた
そして、腕時計とブレスレットを着けた腕を掲げて

「バーンズ！」

「サーシャ！」

「セットアップ！」

二人同時に、キーワードを唱えた

《《セットアップ！》》

次の瞬間には、二人はバリアジャケットを纏っていた

「待ってて、皆！」

「今行くからな！」

二人はそう言うと、飛行魔法で戦場へと向かった

ただ、知り合った友人達を助けるために

絶望的な真実

「来るぞー！」

裕也が叫んだ直後、前方に居た救難十四聖の一人が魔法を発射した
禍々しい赤い魔力砲が、裕也達目掛けて空を走る

「俺の後ろにー！」

裕也はそう言いながら、鉋切長光を抜いた

次の瞬間銀閃が走り、魔力砲を切り裂いた

そして魔力砲の向こうには、救難十四聖と教皇ヨハンナ。その向こうに、捕まっているドゥーエが見えた

「ゼストさんー！」

「任せろー！」

裕也が名前を呼ぶと、ゼストは槍を振るった

その一撃を避けるために、救難十四聖達は一斉に散開した

だがヨハンナは一切動かずに、ゼストの一撃を受けた

しかも、その一撃でヨハンナの首が飛んだ

「なっ!?!」

「なにっ!?!」

その予想外の光景に、裕也達は驚愕した

だが体は動き、ドゥーエの周囲に展開した

その直後

『行くつす、セイーン!』

『あいよおー!』

という通信が聞こえた

そして、上空から人影が降ってきた

ショートカットにした水色の髪が特徴の少女

セイーンだった

セイーンはその手に持っていたナイフを振るうと、ドゥーエを縛っていたロープを切断した

そして、ドゥーエを抱えると

「IS、デーパーダイバーー！」

自身の能力を発動して、地面に潜った

裕也達はそれを確認しながらも、周囲に視線を向けた

ヨハンナを殺したというのに、救難十四聖達や他の使徒達は慌てた様子は無い

その様子に、裕也達が疑問を覚えていた

なぜ、ヨハンナが死んだというのに、慌てていないのか

ヨハンナの死は、彼らの敗北の筈だと

裕也達が不思議そうに思っていた

まさにその時だった

「背中がお留守ですよ」

とヨハンナの声が聞こえた

「なに!?!」

それにいち早く気づいて、ゼストが振り向いた直後

「があっ!?!」

そのゼストが、吹き飛ばされた

「ゼストさん!?!」

「ゼストの旦那!!」

直前でユニゾンアウトしたのか、先ほどまでゼストが居た場所には、小さな赤い髪の女の子

ユニゾンデバイスのアギトが居た

アギトは吹き飛ばされたゼストに近寄ると、ゼストの名前を呼んだ

だが、先ほどの一撃が致命傷に至ったらしく、ゼストは返事出来なかった

裕也達はすぐにその場から離れて、ゼストの立っていた場所に視線を向けた

先ほどまでゼストが立っていた場所に後ろには、殺した筈のヨハンナが無傷で立っていた

「有り得ない……」

「確かに、首を飛ばした筈だぞ……」

神夜と蓮華が呟くと聞こえたのか、ヨハンナは微笑みを浮かべて「驚いているみたいですね……」

「と言うと、裕也達を見ながら

「特別に教えてあげましょう……私は、ヨハンナの神名碑によって、現象へと至りました……」

と告げた

「現象、だと……？」

「それは、つまり……」

蓮華と神夜が言葉を無くしていると、ヨハンナは慈悲深い笑みを浮かべながら

「私は、不老不死なんですよ」

と答えた

それを聞いて、蓮華達は絶句した

要するに、死なないのだ

「そんなん、どうやって倒せてんだよ……」

「倒せるわけが……」

二人が絶句していると、ヨハンナはクスクスと笑ってから

「では、我々の力を見せましょう……」

と言うと、黒い表紙の本を出した

そして、その本を広げると何かを唱え始めた

その数秒後

『H Qより総員に通達！ 海中に巨大な反応を感知！ 約四百mサイズ！』

という、ウーノからの悲鳴染みた通達が入った

その直後、ゴゴゴゴ……という地響きのような音と共に、海中から巨大な何かが姿を現した

三角形に近い造形に、甲板にある角のような装飾

何よりも、その凄まじい威圧感

「まさか……！」

「聖王のゆりかご……！」

そう

その巨大な船こそが、かつて旧暦に世界を席卷した戦艦

「さあ、我々の力にひれ伏しなさい……このゆりかごに」

聖王のゆりかごである
ここから、絶望的な戦いが始まった

新たな契約

海中から現れた巨大な戦艦

古代ベルカの戦艦

聖王のゆりかご

「聖王のゆりかごを動かすには、聖王の血筋が必要な筈……まさか!」
何かに気づいたらしく、裕也はヨハンナが持っている黒革背表紙の本に視線を向けた

「貴様……あの女の子、ヴィヴィオをどうした!?!」

裕也が怒鳴るように問い掛けると、ヨハンナはクスクスと笑って

「あのゆりかごの中ですよ……死ぬまで我々が有効活用してさしあげます」

と答えた

まるで、道具を使い潰すように

しかも、ヨハンナは続けて

「ああ、そうそう……この島で捕まえた異端者も、使わせてもらっています。官制能力が高かったのです」

と告げた

「貴様あ……沢井まで!」

ヨハンナの言葉を聞いて、裕也は怒りを露わにした

ヨハンナは、麻耶をゆりかごを使うための道具にしているのだ

その直後、裕也の前にウィンドウが複数開いて

『裕也君!』

『大丈夫か!?!』

そこに映ったのは、なのはと義之だった

なおそれぞれ、義之の背後には美夏の姿が

なのはの背後にはユーノとヴィータの姿が有った

どうやら、それぞれチームで動いていたらしい

「俺はなんとか大丈夫だ! 聞け、ヴィヴィオと沢井はあの中、ゆりか

ごの中に居る!」

裕也がそう言うのと、全員は驚愕の表情を浮かべて

『聖王のゆりかご!?!』

『あれがか!?!』

『古代ベルカの兵器!?!』

聖王のゆりかごは歴史の教科書でしか聞いたことがなく、なのは達は驚いていた

だが、ユーノはどこか興味深そうだが

「しかも、奴らはヴィヴィオも沢井も死ぬまで使う気だ!」

裕也がそう言うと、なのは達は表情を変えた

憤怒の表情へと

人の命を道具のように使うインデックスのやり方に、怒りを覚えたのだ

「行け! こいつらは俺が押さえる!」

裕也がそう言うと、なのは達は頷いてウインドウを閉じた

どうやら、突入するようだ

視線を僅かに上に向けると、小さい人影が数人ほどゆりかごに向かっている

それを見て、裕也は少し黙考すると

「蓮華、神夜。お前達もゆりかごへ……」向かえ。と言おうとした時、再び裕也の前にウインドウが開いて

『その必要はない』

とスカリエツティが告げた

「ドクター、しかし……」

裕也が反論しようとしたら、スカリエツティは右手を上げて

『既に、トーレとディエチが向かった。そして、君達の方にも援軍を送った』

と言った

その直後、裕也達の背後に三人の人影が舞い降りた

振り向いた先に居たのは、フェイト、アリサ、シグナムの三人だった

「フェイト、アリサ、シグナム!」

「お前ら!」

裕也達が驚いていると、シグナムは重傷のゼストに歩み寄り

「騎士ゼスト……私を呼んだ理由は……」

と問い掛けた

「どうやら、シグナムはゼストに呼ばれたらしい」

ゼストは頷くと、近くを飛んでいたアギトに視線を向けて

「その子を頼む……お前ほどの騎士ならば、必ず使いこなせるだろう……なにより、魔力光が似ている……」

と言った

すると、アギトは泣きながら首を振って

「嫌だ！ アタシは旦那しか……」

と言うが、ゼストは

「私では……お前の能力を十全に使いこなせない……お前の炎の能力がな……だが、シグナムならば、相性は良いだろう……」

と言った

すると、アギトは涙を流しながら

「旦那……」

とゼストを見つめた

するとシグナムは、片膝を突いて

「その願い……確かに引き受けます……我が剣に誓って……」
と宣言した

シグナムの宣言を聞いてゼストが頷くと、シグナムはアギトに視線を向けて

「アギト、だったな……騎士ゼストの思い、無碍には出来まい？」

と問い掛けた

するとアギトは、軽くシグナムを睨んで

「今はまだ、あんたがアタシのロードに相應しいかわからない……だけど、もし相應しくないって判断したら……」

「その時は、お前の炎で私を焼け……」

アギトの言葉を継ぐようにシグナムは言いながら、右手を差し出した
た

それを見て、アギトは右手をシグナムの掌にあわせて

「ユニゾン・イン！」
とキーワードを告げた

突入

義之と美夏、なのはとヴィータの二組はゆりかごに近づくと、突入口を探していた

「くそっ！ まるでハリネズミだぞ！」

「ぼやくな桜内、何としても取り付くぞ！」

義之が悪態を吐くと、美夏が咎めた

すると、隣になのはとヴィータが止まって

「ヴィータちゃん！」

「おうよ！」

とタイミングを合わせて、魔法の準備を始めた

「ディバイーン……バスター！」

「コメット……フリーゲン！」

二が放った魔法はまっすぐにゆりかごへと向かい、壁面に直撃した煙が晴れると、そこには穴が空いていた

「よっしゃ!! 二人とも、ナイス！」

「行くぞ！」

それを見た義之と美夏は歓声を上げると、弾幕をくぐり抜けて穴から内部に突入した

中は不気味なほど静かだったが、中に入った直後、二人が展開していた飛行魔法は一瞬だが、その機能を失った

しかし二人は慌てず、すぐに飛行魔法の出力を上げて対応

そして、すぐに原因を察した

「AMFか!!」

「かなり高濃度だな!!」

二人に遅れて数秒後、なのはとヴィータも突入してきた

なのはとヴィータの二人も、同じようにAMFの妨害を受けたが慌てずに対処した

そして、義之と美夏の二人と近い場所に着地した

そして、互いに無事を確認すると

「AMF濃度が高いな……」

「うん……魔力の消耗が激しい……そっちは？」

「美夏達は大丈夫だ……防人達が最前線で戦ってくれたから、魔力は十分だ……そっちはどうだ？」

美夏が問い掛けると、なのはとヴィータは自信満々な様子で頷いて

「大丈夫！ 魔力なら、まだまだ残ってるから！」

「あたしもだ！」

と返した

それを聞いて、義之達が頷いたタイミングで

『皆、聞こえる?!』

と通信ウインドウが開いて、ユーノの姿が映った

『今、ゆりかごの内部資料を見つけ出した！ そっちに送るね!』

と言うと、新しくウインドウが開いてマップが表示された

そのマップを見て、4人は息を呑んだ

ヴィヴィオが居ると思われる聖王の間

ゆりかごの動力源たる動力炉

麻耶が居るらしい管制スペース

それらが、全てバラバラの位置だったのだ

そして今4人が居るのは、ちょうどその中間地点

導ける答えは一つだけだった

「俺と天枷が管制スペースに行く」

「じゃあ、あたしは動力炉だな」

「私は聖王の間に」

4人は手早くそう言うと、頷きあつてから行動を始めた

義之と美夏は最下層へ

ヴィータは中層最後尾の動力炉へ

なのはは最上層の聖王の間へと

4人は散開すると、脇目も振らずに行動を開始した

不安じゃないと言えば嘘になる

だがこの4人ならば、絶対に成し遂げる

どんな困難だろうと、それを乗り越えて無事に脱出出来る

4人にはなぜか、そういった確信があつた

なぜかは分からない
だが、確信していた
だから4人は、目的地目掛けて一目散に動いた

封印解除

義之達がゆりかごの中に突入した頃、裕也達はある意味で決戦をしていた

裕也達が戦っているのは、教皇ヨハンナを含めたインデックスの最強戦力の約十数名

それに対するのは、裕也を含めた数名のみ

人数差は如何ともし難いだろう

だから裕也は、禁を破ることを決めた

「ドクターー！」

裕也が声を上げると、司令室に居たスカリエツティは眼前に魔法陣を表示させた

そして、通信ウィンドウの向こうに居るカリムとリンディに目配せすると

「防人裕也……魔力リミッター、完全リリース！」

と中心部分のスイッチを押しした

その直後、裕也の体から漆黒の柱が立ち上った

それは、抑圧されていた裕也の魔力だった

裕也は産まれて間もなく、その身を強化された

そして、強化されたのは何も身体能力だけではない

魔力も、幼い身には有り余る程に強化されたのだ

そのランクは、未だに人が到達なしえなかったSSS

つまりは、測定不能

しかし、そんな膨大な魔力値にいくら強化された身体能力とはいえ、幼い身には耐えられなかった

だからスカリエツティは、裕也の魔力にリミッターを掛けたのだ
そして、今そのリミッターは外された

裕也本来の魔力が吹き荒れ、裕也の左目の眼帯の下から目映い光が漏れている

裕也の魔力に呼応して、^{アイオン} 切の眼が活性化したようだ

その時、金色の閃光が空に展開していたインデックスの魔法使いや

ガジェットを撃破しながら裕也達の方に近付いてきた

「裕也！」

それは、高速戦闘を可能とした魔導士

フェイト・T・ハラオウンだった

どうやら、天に登った魔力柱の色に気づいたのだろう

「フェイトか……」

裕也は背後に着地したフェイトを見ずに、両手に持っていた無銘の刀を地面に刺した

そして、両手を合わせると

「来い……千歳の徒、真打ち！」

裕也がそこまで呪文を唱えると、左手の掌から柄が出てきた

その柄を、裕也は掴んで

「童子切……安綱!!」

その刀を抜いた

その刀は、今まで裕也が使っていた刀の中では、一番普通の刀だった

いや、たった一ヶ所だけ違う場所があった

それは、鏢の場所だった

普通の刀だったら、見事な装飾が施された金属製の鏢が装着されている筈の場所にあつたのは、瘤こぶだった

黄色い肉の瘤こぶが、四つ程グルリと着いていた

しかもその瘤こぶは、不気味に脈動していた

「裕也……その刀は……」

「出来れば、使いたくなかったがね……」

フェイトが恐る恐る問い掛けると、裕也はそう答えて構えた

そして、その刀に気づいたのは他にも居た

「ノーヴェ、あれ！」

「なに？ ……あのバカっ！」

ウエンデイの言葉を聞いて、ノーヴェは裕也の持っている刀を見て悪態を吐いた

裕也が持っている刀

銘は童子切安綱といい、その昔に日本三大妖怪の酒吞童子を切り捨てたという伝説の刀で、日本三大名刀に指定されているのだ

しかし、この安綱はある呪いがあった

切り捨てられた酒吞童子の怒りなのか

安綱は、使い手の血肉を食うのだ

ただし、代価として絶大な効果を発揮する

空間すら切り裂き、そして、不死身の敵に死を与える

つまりは、ヨハンナには天敵の一振りなのだ

しかし、ヨハンナを斬り殺すまで裕也はその身を食われ続ける

しかも、裕也は確実性を上げるために、禁忌の力を開放する

「裕也！・それだけはダメー！」

左目の眼帯に手を掛けた裕也を見て、フェイトは裕也の左腕に抱きついた

それを使えば、裕也が確実に死ぬと分かっているからだ

しかし裕也は、笑みを浮かべて

「皆を、守るためだ」

と言うと、その眼帯を力任せに引きちぎるように外した

そして、天を見上げて

「^{アイオン}切の眼よ！ 今代の所有者、防人裕也が命じる！ 我が魂を食らい、

その力の全てを發揮せよ！」

と宣言した

その直後、切の眼はこれまでとは比較にならない光を発した

（俺の魂、欲しければくれてやる！ だから、全てを發揮しろ！）

裕也がそう思った直後、異変が起きた

裕也の周囲に、半透明の人影が現れた

しかも、一人二人ではなく、数十、数百に匹敵する人影だった

「なに、これ？」

何が起きてるのか分からず、フェイトは呆然とした

現れたのは老若男女問わず、服装や装備にも統一性が無かった

しかし、唯一の共通点があるとしたら、右目の金色の眼だった

「まさか、この人達って……」

フエイトは、現れた人影の正体に気づいた

「歴代の、^{アイオン}却の眼の所有者………?」

フエイトの推測は当たっていた

そこに現れたのは、長い年月の間に^{アイオン}却の眼を有した者達

その中でも特に、戦闘能力に秀でた者達だった

ある老人は一冊の本を開き、72体の人外を操り

ある青年は、その手に持った札を投げて術を発動し

ある馬上に乗った色黒の大男は、雄叫びを上げながら剣を降り下ろし、配下たる兵と共に突撃していった

「これは、まさかっ!」

その現れた存在は、古にその名を馳せた英雄達や無名の猛者達だ

そして、裕也もまた、その領域に踏み込んでいた

「行くぞ、ヨハンナ………ここで、お前達の企みを終わらせる!」

裕也はそう宣言しながら、安綱を突きつけた

親子の戦い、始まる

裕也がリミッターを解除した頃、ゆりかごに突入した義之と美夏は最下層へ、なのはは王の間へ、ヴィータは駆動炉へと向かっていた。突入した場所の都合で、一番最初になのはが王の間に到着した。そしてなのはの目に入ったのは、玉座に座っているヴィヴィオの姿だった。

しかし、その姿は変わり果てていた。

なのはが知るヴィヴィオは、幼い少女だ。

だが、今玉座に座っているのは、見た目は高校生ほどになり、その身に纏っているのは、なのはと似た意匠の黒いバリアジャケットだった（原作のあのバリアジャケットです）。

なにより一番変わっていたのは、その目だった。

目に光が無く、まるで人形のようなだった。

そのヴィヴィオの姿に、なのはは一瞬身が震えたが

「ヴィヴィオ……一緒に帰ろう?」

と声を掛けた。

しかし、ヴィヴィオは何も言わずに拳を握り締めた。

それを見て、なのはは腰を僅かに沈めて構えた。

その直後、ヴィヴィオの拳が眼前に迫った。

なのははそれを、持ち前の反射神経で屈むように回避した。

だが気づけば、目の前にはヴィヴィオの膝があった。

避けられないと悟ったなのはは、その一撃をレイジングハートで防御

だが、あまりの威力に腕が痺れ、3m程地を滑って後退させられた。

なんとか転倒するのを堪えて、なのはは頭を上げて前を見た。

すると、ヴィヴィオはまるで矢のような速度で肉薄してきていた。

しかも、その勢いのまま右拳を繰り出してきている。

なのははその一撃をプロテクションを展開して、上へと受け流して、がら空きとなった胴体に杖での一撃を叩き込もうと振りかぶった。しかし、戦いたくないという思いから、僅かに動作が鈍った。

その瞬間、脇腹に強い衝撃を受けて、大きく飛ばされて壁に激突した

「ガハッ!？」

壁に激突した衝撃で、なのはは強制的に息を吐き出された
前に視線を向けると、ヴィヴィオが右足を振り上げた状態で固まっていた

どうやら、回し蹴りの直撃を受けたらしい

たった一撃

たった一撃の直撃を受けただけで、なのはの肋骨は悲鳴を上げていた

(これが、聖王の血筋の一撃……なんて、重い……)

歴史でしか知らない、聖王の一族

しかし、その強さは理解していた

否、していたつもりだった

しかし、その強さは自分の予想よりも遥かに上だった

なのはは、自分のバリアジャケットの防御力に自信があった

事実、なのはのバリアジャケットを抜いてダメージを与えてきたのは、片手で数える程しか居ない

しかし、ヴィヴィオの一撃はその防御を意図も容易く貫通した

それだけで、ヴィヴィオの強さをなんとか計りきれた

(近接、密着距離に持ち込まれたら、勝ち目は無い……ミドルなか、ロングレンジ長距離を維持しないと……だけど……っ!)

なのはは唇を噛んだ

正直に言えば……

「ヴィヴィオとは、戦いたくないよ……っ!」

共に過ごしたのは、とても短い

しかし、その短期間の間になのはとヴィヴィオはまるで親子のように過ごした

だからまだ漠然的だが、なのははヴィヴィオを自分の娘のように思っている

実際に血は繋がっていないくとも、自分がお腹を痛めて出産したわけ

でもない

しかし周囲からも

『まるで、親子みたいね』

と言われた

だから、今はもう……

「ヴィヴィオは、私の娘だよっ！」

なのははそう言うと、レイジングハートを構えた

そして、その目に宿るのは、決意の籠った不屈の光

自身のレイジングハートの起動詠唱にもある、不屈の心！

「レイジングハート……守るための……取り戻すための戦いだよっ
！」

《了解、主！ 必ず取り戻しましょう、可愛いヴィヴィオを！》

レイジングハートの鼓舞を聞いて、なのはは頷くと同時に、周囲に
アクセルシューターを十数発精製した

こうして、親子の戦いが始まる

二人の思い

ゆりかご最下層

管制フロア

義之と美夏の二人はそこに到着した

そして、その広大なフロアで見つけた

義之の恋人にして、美夏の友人

沢井麻耶を

「麻耶あ！」

「沢井い！」

二人が呼び掛けると、麻耶はゆっくりと振り向いた

そして、光の無い目で二人を捉えた

すると、麻耶の周囲に展開されていたホロウインドウとホロキー

ボードを閉じて杖を構えた

そして、周囲に魔力球を展開して

「……………アクセセル……………シユート」

と二人目掛けて、魔力弾を発射した

その数、約二十

麻耶は砲撃魔法も機動近接魔法も得意ではない

しかし、そのマルチタスクから来る精密な誘導や魔法の複数同時発

動を得意としている

二人はそれを理解しているから、回避ではなく迎撃を選択した

義之が濃密な弾幕を形成し、美夏がその弾幕を潜り抜けてきた魔力

弾目掛けてストックしていた速射砲撃を発射

二人の連携により、麻耶が放った魔力弾を全て撃墜した

その直後、二人の両手両足を黄色のバインドが縛った

だが、すぐに

《バインド・ブレイク！》

そのバインドは、義之が持っていた美秋が破壊した

そう

義之は、麻耶が操られているならば、もしかしたら美秋の声を聞い

て気が戻るかもしれないと思ったからだ

しかし、その美秋に二人は助けられた

それは、美秋の気遣いな性格から来ている

本来だったら、義之は美秋の正式な使い手ではない

しかし、今は義之を仮の使い手と認証していることにより、義之の魔力で魔法を使っている

「美秋、助かった」

「すまん」

《いえ、構いませんよ》

二人がお礼を言うのと、美秋は軽い調子で返した

しかし、問題はここからだった

操られた麻耶を助ける方法を、二人は知らない

もし、前に裕也が言っていた遠く離れた場所から操られているのならば、二人に麻耶を解放する手段は無い

そうなれば最後

前の裕也のように、殺すしか無いのかもしれない

今、局面は世界の行く末を決める戦いだ

裕也は、世界と妹を天秤に掛けて、世界を取った

涙ながらに、世界を

（裕也は、こんな気持ちだったのか……っ！）

（防人は、戦士として選択したのか……！）

二人は裕也が気持ちと、選択を理解した

戦いたくない、殺したくない

だが、戦い殺さないと世界が危なくなる

しかし、今は助けられる可能性があった

それは、今インデックスはほぼ総力を挙げて攻めてきていること

そして、ゆりかごを使うために麻耶とヴィヴィオの二人を操っていること

ここから推察して、インデックスは近くから二人を操っている可能性が非常に高いのだ

確かに、遠距離からでも操ることができる

しかし、距離が離れるほどにタイムラグが起きるそうだが今はインデックスにとつて、大事な戦いのはずである
だったら、タイムラグ無しで操りたいはず

故に、この操り魔法を使っている使い手はこの初音島にも来ているはずだと

だから、二人は希望を持って戦いに臨んだ

外で戦っている裕也達が、操っている魔導師を倒してくれると

(頼んだ、裕也！)

(防人……お前なら、成してくれるだろう?)

それは、他力本願かもしれない

しかし、二人は信じていた

裕也達が、敵を撃破してくれることを

だから、傷付ける戦いではなく、取り返す戦いを始めた

友人達

なのはと別れたヴィータは、一人で駆動炉目指して進んでいた道中に居たガジェットは全て粉碎し、隔壁を打ち砕いて進んだそれにより、駆動炉の間近にまで迫っていた

しかし、無傷ではなかった

現れたガジェットの数

仕掛けられていた罠

それらにより、ヴィータは全身を朱に染めていた

だが、足取りは確りと前に進んでいた

「こんなの、痛かねえ……痛かねえ！」

ヴィータは自分に言い聞かせるように言いながら、一歩ずつ確実に前に足を踏み進めた

そして、妨害してきた最後の使徒を壁に叩き付けて、ヴィータは目的の部屋に入った

そこに見えたのは、巨大な結晶体の物体だった

「これが、駆動炉……」

ヴィータのその呟きを肯定するように、その物体から膨大な量の魔力が溢れている

ヴィータはそれを確認すると、カートリッジを装填

そして、駆動炉を睨み付けて

「いづくぞおおお！」

駆動炉に向けて、全力で突撃した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

場所は変わり、地上

そこでは、激戦が続いていた

そんな中、はやては直感的に上を見上げた

地上に向けて砲撃を繰り返す、圧倒的な古代の戦艦

聖王のゆりかごを

するとはやては

「誰か、指揮を引き継いでください！ 私も、あの中に入ります！」

と叫んだ

実ははやて、付近の警官隊の指揮を行っていたのだ

しかも、その指揮は正確かつ迅速だった

はやては元々、イベントやゲームなどでよく陣頭指揮を執っていた恐らくだが、元々そういった方向に適性があつたのだろう

そんなはやては、嫌な予感がした

今からゆりかごに突入しないと、大事なことに間に合わない

だかははやては、指揮の引き継ぎを頼んだのだ

するとその時、はやての前に通信ウインドウが開いて

『指揮はこちらで引き継ぎます！ 行ってください！』

と通信と指揮を一手に引き受けていたウーノが言った

それを聞いて、はやては

「ありがとうございますー！」

と言うと、ゆりかご目指して飛んでいった

戦ってるのは何も、彼女達だけではない

避難した民間人の中から、危険を承知で立候補してきた者達が居る

戦場たる港湾区画から近い、風見学園では

「負傷者の方はこちらに来てくださいー！」

「治療しますからー！」

将来は医務官を目指している小恋と、保健委員の由夢が怪我人の治療をしている

他にはシャマルも居り、次々と運ばれてくる負傷者を治療している

彼女達の手や顔には負傷者達の血が付着しており、どれ程の人数を

治療したのかを伺わせる

しかし、彼女達は気にする様子はない

正確には、気にする暇が無いのだ

今彼女達は、自分に出来ることを必死にこなしていた

一人でも多くの負傷者を、自分達の知識と技術で助ける

前線と後方という違いこそあれど、そこもまた戦場だった

そして、風見学園の近くでは

「ここから先には、魔力弾の一発たりとも通しませんわー！」

エリカ・ムラサキが防御特化デバイスという利点を活かし、強固な障壁を展開

前線を突破してきたらしいガジェットの攻撃を全て防いでいた
そんな彼女を捕まえようとしたのか、一機のガジェットⅢ型がアームをエリカ目掛けて伸ばした

しかし、彼女が防御特化だとわかっていて一人にするほど、他のメンバーもバカではなかった

「うらっしやああああ!!」

と、掛け声と共にアームを弾いたのは、デバイスを展開させた渉だった

渉は手甲が展開された右手でアームを弾き上げると、脚甲の付いた左足の回し蹴りでアームを破壊

一気に接近すると、左ストレートを繰り出した

渉が繰り出した左拳は、ガジェットの装甲を貫通

内部にめり込んだ

「弾けろっ！」

渉がそう叫んだ直後、ガジェットは一気に膨張

爆発した

渉の得意とする魔法の一つ

爆破である

渉曰く

『何かをぶっ壊すのには、大変便利な魔法』

とのことで、よく工事現場で使っている

「渉、退きなさい」

と言ったのは、魔導書型デバイス

雪月華を持った杏だった

杏の言葉に従い、渉は一気に後退した

その直後

「水槍弾雨！」

と杏が唱えると、長さ約2mにも達する水柱が雨霰とガジェット群に降り注いだ

魔導型デバイスの恩恵で、杏は圧倒的数の魔法を扱える

そんな杏の脅威度が高くなったのか、空を飛んでいたガジェットⅡ型が杏に向けてミサイルを放った

しかし杏は、動じない

そして、微笑みを浮かべると

「よいしょっ！」

と人影が杏の前に出た

その人影

茜は、両手で持っていた双頭鞭型デバイス

藍玉を高速で回し、即席の障壁を展開

杏に迫ってきていたミサイルを、全て防いだ

そして素早く操ると、不用意に接近していたガジェットⅡ型を数機叩き壊した

すると、地中から更に数機のガジェットⅢ型が現れた

現れたガジェットⅢ型は、孤軍奮闘していた渉目掛けてミサイルを一斉に発射した

それに気付いた杏と茜がミサイルを迎撃するが、数発が迎撃を突破渉に迫った

だが

「あー!!」

と声が響き渡った直後、残っていたミサイルは全て空中で爆発した
ミサイルを発射したガジェットを撃破した渉は、ある方向を見た

そこに居たのは、ブイサインをしている白河ななかだった
ななかの魔法は、希少技能で音である

攻防、支援と幅広い使用が出来る

しかし、血筋からか今のところは白河家の女性にしか確認されてない
い

そして今のは、音による壁を作り出し、それでミサイルを防いだのだ
だ

そして、この場所で戦ってるのは彼女達だけではない

「いっしやあああああー！」

「はあああああ!!」

無事に着地した明久と結華の二人も、奮戦していた

雷撃を宿した刀で切り裂き、焰を宿した槍でガジェットを抉った

二人は元の世界に戻ってからも、訓練を欠かさなかった

それが正に今、開花した

例え、帰れなくても構わない

何故ならば、自分達は自分の意志で来たのだ

(裕也を、助けるために!)

人を助けるのに、理由は必要無いのだから

仲間たち

「さあ……決着を付けようか、ヨハンナ……」
裕也はそう言いながら、安綱を突きつけた
その刀身からは、凄まじい力が溢れている
妖刀、童子切安綱

この刀はその昔、日本三大妖怪の一体
酒吞童子を切った刀である

不死身と称された酒吞童子を切り、倒した
しかし、その際に呪われたのである

それは、使い手の血肉を食らうのだ

故に、童子切安綱の使い手は長くは保たず、次々と使い手を変えて
いった

しかし、そんな安綱をある一族が回収し封印

それを、守護者部隊が回収し裕也が使い手になったのだ

不死殺しの概念を有する刀だ

対ヨハンナ戦で使えると判断していたのだ

そして、それは当たった

ヨハンナは、魂と同化している魔道具

ヨハンナの神名碑により現象化

それによって、不老不死となったのだ

だが、何事にも天敵が居る

不老不死だろうが、現象だろうが

不死を殺すモノ

因果を操る者が居る

ヨハンナにとっては、天敵その物だった

「貴方が、私に勝てるっても？」

「勝つ……勝ってみせる……例えば、億分の一だろうが、お前を殺すとい
う因果を引き寄せてみせる！」

裕也はそう言って、駆け出した

「愚かな」

ヨハンナはそう言いながら、魔法を発動した
発動したのは、電磁槍

見た目は至って普通の槍だが、防いだり受け止めたりしたら凄まじい電磁力が襲いかかり焼かれるのだ

だから、回避するしかない

裕也はその電磁槍の下を、まるで潜るように回避しつつ近寄った

そんな裕也を足止めしようと、救難十四聖が動こうとした

だがそれは、裕也が呼び出した英雄達によって妨げられた

それは、過去に劫の眼を有した英雄や無名の猛者達

征服王イスカンドル

魔術王ソロモン

そして、金眼の魔王ヴェラード

いずれも、過去に多大な戦果を上げて名を知らしめた猛者だ

更に、それに追随するように誠の文字を背負った侍

烏帽子を被り、札を手にした若者

中には、黒と水色の二本の剣を持つている青年すら居る

彼ら無名の猛者として、その強さは計り知れなかった

その彼らにより、救難十四聖は全員足止めされた

その隙に、裕也はヨハンナに肉薄

刀を振るった

その一撃をヨハンナは、僅かに体を横にずらして避けた

しかし、一撃で終わるわけがない

裕也は風を切り裂きながら刀を振るった

振るい続けた

それら全ては、必殺の意志が込められた連撃だった

狙いは首、額、脇、胸部だ

しかし、それら全てをヨハンナは避けた

それを見て、救難十四聖を含めた使徒達は驚いた

普段だったら、一切避けない

なにせ、ヨハンナは現象なのだから

《そこに居るだけ》

《体が死んだだけ》

ただ、それだけ

だから、気付けばそこに居る

そうしないのは、ヨハンナが自ら鍛練の手解きをした時くらいだ
教皇とは言え、ヨハンナとて魔法使いだ

鍛練しないと、魔法や戦闘の腕は鈍る

実戦を想定し、相手の攻撃を回避したり防御したりする

そうしなければ、鍛練にならない

自分だけでなく、相手にも

しかし、実戦でヨハンナが回避行動を取るのは初めて見た
何度も繰り返し返すが、ヨハンナは不老不死だ

故に、回避行動は必要としないのだ

わざと受けて、相手が呆けた隙に仕留める

それが、ヨハンナの戦法だった

相手に自分が不死身だと分かせて絶望させ、殺すという方法も
やった

そうすれば、確実に相手は何もしなくなったからだ

だが、裕也は知ってもなお殺しに来ている

もし、本当にヨハンナを殺せるのならば？

殺す方法が、本当にあるのならば？

そこまで考えて、使徒達は動き出した

使徒達の最高責任者であり、信仰する神の次に敬愛する教皇ヨハン
ナのために

「あの異端者を殺せ！」

「ヨハンナ様のために！」

使徒達は口々にそう叫びながら、裕也目掛けて攻撃を放った

だが、その悉くが英雄達によつて防がれた

彼らとて、高度の魔法使いの使徒だ

しかし、相手はそんな彼らよりも格上の英雄達

しかも、半霊体

普通の攻撃は無意味

普通の攻撃じゃなくとも、彼らのその腕により悉くが防がれるか避けられる

そして、倒される

その隙に、裕也は目にも止まらぬ速度で剣劇を繰り出す

その時だった

空から、ガジェット郡が裕也目掛けて飛来してきた

その数は、優に百を越える

しかし、英雄達は使徒達の相手に全員が回っている

だが、裕也と共に戦っているのは英雄達だけでない

「火龍……一閃！」

「トライデント……スマッシュャー！」

飛来してきていたガジェット目掛けて、火と雷の砲撃が放たれた

それだけではなく、遙か彼方から魔力の矢が飛来してきて、ガ

ジェットに次々と命中した

砲撃を放ったのは、シグナムとフェイト

そして矢を射ったのは、風見学園の屋上に佇んでいるすずかだった

しかし、三人の攻撃を僅かなガジェットが突破

そして、裕也に攻撃を放とうとした

だが、他にも仲間は居る

「おらあ！」

「忘れんじやないわよ！」

「しっ！」

蓮華、アリサ、神夜の三人が迫ってきていたガジェットを撃破

そして、裕也の背後を守る

敵が居るのは、前だけじゃない

後ろにも居る

ここは戦場だ

なにが起こるか分からない

だから、少しでも万全の態勢を取る

それが、最善の結果になると信じて

未来のために、彼らは戦場を駆け抜ける

「いい加減に、品切れになれっつての!!」

「五月蠅いぞ、桜内! 黙って戦え!」

義之の文句に美夏は怒っているが、二人は正確に戦っていた互いの背後をカバーし、死角を無くしていた

なにせ、スファイアが展開するのは正面だけではない

ここはゆりかごの内部

つまり、敵のまっただ中

敵は360度、あらゆる場所に現れる

獲物たる自分達を、殺すために

だが、二人とて簡単に倒されるつもりはない

義之は学園でも指折りの高位魔導師で、近接に重きを置いた万能型美夏はロボット故に分からないが、戦っている最中に成長していた

その証拠に、見るより早く右側に現れたスファイアに反応し、右手を上げて魔法を発動、撃破

左側からレーザーが来ていたが、それは首を傾けただけで回避

そのスファイアは、義之が飛ばした魔力刃で斬られた

「無理すんなよ、天枷! バナナは!」

「ここに入る前に、食べた! 問題ない!」

義之の言葉にそう返すと、美夏は羽織っていたジャケットの内から一発のカートリッジを取りだし、それを右手の手甲に装填した
そして、右手を高々と掲げて

「発動!」

と叫んだ

その直後、美夏の周囲に炎で編まれた蜂が多数現れた

それを確認すると、美夏は右手を振り下ろしながら

「行け!」

と号令した

すると炎の蜂達は美夏の指示に従い、周囲のスファイア郡に突撃次々と破壊した

それにより一時的にだが、僅かに時間が稼げた

その隙に義之は、右手に持っていた刀の柄尻を鞘に当てて
「桜花！」

と叫んだ

その直後

《両刃連結刃！》

刀と鞘が一体化し、両刃剣型の連結刃になった

それが、義之の奥の手だった

裕也達すら知らない、義之の切り札

「麻耶、本邦初公開だ……！」

義之はそう言うと、それを高速で振り回し始めた

すると、連結刃はまるで生き物のように二人の回りを動き回り始
めた

操作を少し間違えば、その刃は美夏にも襲い掛かるだろう

しかし美夏は、防御する素振りすら見せない

それは、義之を信頼しているからだだった

「頼むぞ、桜内！」

「オオオオオオオオ！」

美夏の言葉に答えるように、義之は雄叫びを上げながら連結刃を振
り回した

それにより、スファイアが次々と切り裂かれ爆散する

新しく現れても、一瞬で破壊された

中には破壊されずに、レーザーを放ったスファイアもあった

しかし、放たれたレーザーは二人に当たる前に連結刃で弾かれた

それを見た美夏は、思わず

「まるで、巢を守る双頭の龍のようだ……！」

と呟いていた

後に、この技は《ウロボロス・ガーディアン》と命名され、それを
使いこなす義之は《双頭龍の御主》と呼ばれるようになる

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ちくしょう……ここままで、なのかよっ……！」

と呟いたのは、全身血塗れのヴィータだった

ヴィータは駆動炉とスフィア、ガジェットに攻撃を開始

キズを増やしながらも、大量のスフィアとガジェットを破壊し続けた

だが、最後の一機のガジェットに相撃ちの形で腹部を刺し貫かれたそのキズとこれまでのダメージで、ヴィータは立つのがやっとだった

目の前に、破壊すべき駆動炉が存在しているというのに、アイゼンを持つ腕が上がらない

その時だった

背後から、新たな機械の駆動音が多数近づいてきていることに気づいた

振り向けば、夥しい数のガジェットが大挙に押し寄せてきていた

「敵の……増援だと……っ」

それが敵の増援と察して、ヴィータは歯噛みした

今の状態の自分ならば、簡単に殺されるだろうことは直ぐに予想出来た

目の前の駆動炉を破壊できず、後数分したら自分は殺されるだろうそれが悔しくて、ヴィータは涙を溢しながら

「ごめん、はやて……ごめんっ！」

と謝った

次の瞬間だった

背後に迫ってきていたガジェットの群れの位置で、広範囲空間魔法が発動

ガジェットの群れは、空間ごと抉られて消え去った

「え……？」

何が起きたか分からず、ヴィータは茫然とした

その時

「謝ること、あらへんよ」

と一人の少女の声が、ヴィータの耳に入った

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵グラーフ・アイゼンがこんな、ボロボロになるまで頑張ったんや……怒るわけ、ないやろ」

そう言いながら駆動炉の部屋に入ってきたのは、ヴィータの最愛の主

八神はやてだった

はやてはヴィータの近くに着地すると、慈しむようにヴィータを見て

「後は、私に任せてええよ」

と告げた

そしてはやては、キツと駆動炉を睨んで

「さあ……壊させてもらうで!!」

と声を上げた

流転

「ぐっ……お……っ！」

「騎士ゼスト、無理をするな！」

全身血まみれのゼストが、槍を杖代わりにして立ち上がると、近くで戦っていたシグナムが制止した

だが、ゼストはそれを聞かずに

「俺は最早、長くは保たない……だが！」

そう返答すると、槍を逆手に持った

そして、キツとヨハンナの方向を睨み付けて

「ハアアアアア！」

と烈迫の気合いと共に、槍を渾身の力で投げた

ゼストが投げた槍は、凄まじい勢いでヨハンナに迫った

それにヨハンナは気付き、避けようとした

だが、その狙いが自分ではないと気付いた

では、一体何が狙いなのか

すぐに気付いたが、既に手遅れだった

ゼストの投げた槍は、ヨハンナの右後ろに浮いていた本を破壊した

のだ

莫大な魔力を放出していた、魔導書を

「しまった……っ！」

魔導書を壊されて、ヨハンナは目を見開いた

その魔導書は、麻耶やヴィヴィオを操っていた魔導書だったからだ

ゼストとしては、大きな賭けだった

しかし、その賭けに勝った

「ふっ……俺の……勝ちだ……」

ゼストはそう言った直後、倒れ伏した

その直後、ゆりかごの動きも変わった

今までガジェットを出撃させて、地上に砲撃を行っていたのに、そ

の行動全てが止まったのだ

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ほぼ同時刻、玉座の間

「……ヴィヴィオ？」

時を同じく、中で戦っていたなのはは状況が変わったことに気付いた

ヴィヴィオが頭を抱えて、唸っていたからだ

「なのは……ママ……」

ヴィヴィオは痛みを堪えているからか、涙を流しながらなのはを見た

その目は、正気に戻っていた

「ヴィヴィオ！」

それに気付いて、なのはは駆け出した

だが

「来ないで！」

とヴィヴィオの制止の声と共に、拳が繰り出されていた

その一撃は防いだが、なのはは衝撃で押し飛ばされた

「ヴィヴィオ!？」

「私、思い出しちゃったの……」

なのはが視線を向けると、ヴィヴィオは涙を流していた

「私は、遙か昔の人間のクローン……それに、兵器だった……このゆりかごを動かすための生態コア……人間じゃなかったの！ 全部作り物だったの！」

「違うよ、ヴィヴィオ！」

ヴィヴィオの言葉を聞いて、なのはは即座に否定するが

「違わないよ！」

とヴィヴィオは否定した

だが

「違わない！」

となのはは、力強く否定した

なのはのその言葉に、ヴィヴィオは目を見開いた

「確かに、ヴィヴィオは作られた命かもしれない……だけど！ ヴィヴィオは昔の人じゃない！ 今を生きてる命だよ！ 私達と一緒に

居た、ヴィヴィオだよ！ 私の娘の、ヴィヴィオだよ！！

「なのはママ……………」

なのはの言葉を聞いて、ヴィヴィオは声を震わせた
そんなヴィヴィオを見て、なのはは

「ヴィヴィオは、どうしたいの？」

と優しく問い掛けた

その問い掛けに、ヴィヴィオは俯いてから

「私は…………私は…………なのはママと一緒に居たいよお！」

と叫んだ

それを聞いて、なのはは力強く頷き

「分かった……………だったら、信じて？ 私を、皆を！」

と杖を構えた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

時は少し戻り、駆動炉区画

「これで、どうやあああ!!」

はやてがその掛け声と共に放った砲撃で、駆動炉は砕け散った

それを見て、ヴィータは

「よっしゃあー！ 流星はやて！」

と歓声を上げた

すると、近くに着地したはやてが

「少し前から、妨害のガジェットやスフィアが出なくなったからな

…………どうやら、この戦いも終わりに近づいてきたみたいやな」

と言った

そして、ヴィータに肩を貸して

「じゃあ、脱出するで！」

と言って、飛行魔法を発動した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「あつ…………義之…………」

「麻耶！」

「沢井！」

義之が連刃を止めた時、麻耶が頭を押さえて座り込んだ

それを見て、義之と美夏の二人は麻耶に駆け寄った

麻耶は、そんな二人に視線を向けて

「迷惑、掛けちゃったわね……」

と苦しそうに喋った

その言葉に、二人は笑みを浮かべて

「どうってことねえよ」

「美夏達が、やりたかったただけだからな」

と返答した

その言葉に、麻耶は微笑みを浮かべると

「そうだ！ システムは!?」

とウインドウを引き寄せた

そして、操作を始めた

そして

「お願い、間に合って！」

と言つて、あるスイッチを押した

「麻耶、なにを？」

「ヴィヴィオさんの戦闘システムとの接続を、カットしたの。それに合わせて、非常システムの停止と戦闘システム自体の機能停止もね」

義之の問い掛けに、麻耶はそう返した

それを聞いて、義之は笑みを浮かべて

「ナイスだ、麻耶」

と麻耶の頭を撫でた

そして、麻耶を立たせると

「それじゃあ、脱出だ！」

と行動を開始した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

再び、玉座の間

「あ、体が……」

「ヴィヴィオ？」

それまで戦っていた二人は、ヴィヴィオの動きが止まったことで戦闘が中断された

そして、ヴィヴィオは体の調子確かめるように手を握ったり開いたりしてから

「体が、自由に動ける……」

と言った

ヴィヴィオのその言葉を聞いて、なのは嬉しそうに笑みを浮かべて

「義之君が、成功したんだ！」

と声を上げた

そして、ヴィヴィオに駆け寄り

「ヴィヴィオ、外に出るよ！」

とヴィヴィオに手を差し伸べた

「うん！」

ヴィヴィオは頷くと、なのはの手を握った

そして、二人は玉座の間から外に出た

最後の切り札

「ゆりかごが……止まった？」

「これは……」

ゆりかごが止まったことに気付いて、一部で困惑が広がっていた
「どうやら、ゆりかごは制圧されたようですね……ですが、それがどう
しました？」

そう言ったのは、裕也を魔力弾で弾き飛ばしたヨハンナだった

「確かに、ゆりかごは制圧されました……しかし、依然として戦況は此
方が有利です。此方には、まだ三万は居ます」

そのヨハンナの言葉に、その場に居た誰もが唇を噛んだ

禁書目録聖省の戦力三万

それに対して、連合部隊の戦力は約四百

その戦力差は圧倒的

数の差というのは、単純な暴力である

今は連合部隊の士気が高いから何とかなっているが、それも時間の
問題だろう

疲労が溜まれば動きが鈍くなり、戦線が崩壊するのは間違いない

それ以前に、今は動きが止められている救難十四聖

そして、教皇ヨハンナ

それらが一斉に魔法を放ったら、対処は難しい

そして何よりも、対ヨハンナの切り札

^{アイオン}
劫の眼の使い手

裕也の消耗が激しかった

今裕也は、刀を杖代わりにして激しく呼吸している

何時まで戦えるのか、それは分からない

だが、長くはない

持って、後十分程だろう

「どうやら、その兵器ももう長くは動けないようですね」

ヨハンナはそう言うのと、右腕を高々と掲げた
すると

「私が裁きを降します……契約により我に従え、高殿の王」と詠唱を始めた

それを聞いて、フェイトが目を見開いた

「この呪文は……上位古代語呪文!?」

「止めるオオ!!」

蓮華の叫び声の直後、ヨハンナ目掛けて次々と魔力弾が放たれたしかし、その全てが当たる直前で防がれた

それを行ったのは、ヨハンナの下に戻った救難十四聖だったそして魔力弾を防いだ数秒後、救難十四聖が散開した

その直後

「千の雷!」

広範囲殲滅落雷呪文が放たれた

その時だった

「それを待っていたよ、ヨハンナ……」

と裕也が呟いた

それと同時に、地面に広大な魔法陣が形成された

太極図の魔法陣が

そして、その中心に居たのは、裕也だった

「敵弾吸収陣」

その呟きの直後、破壊の雷撃は裕也が掲げていた左手に集まっていた

「な!?!」

それを見て一番驚いていたのは、他ならぬヨハンナだった

予想外の魔法で防がれたからだだった

「貴様!・それは、闇の魔法!?!」

それは、禁書目録聖省でも名前しか知られてない魔法だった過去に居た一人の吸血鬼が生み出し、使った魔法だ

しかし、それ故に制限があった

それは、《人ではないこと》

その理由は、生み出したのが吸血鬼だからである

そして使い手もまた、吸血鬼だった

つまりは、人外が使うことが大前提だったのだ
ならば、裕也は使えない筈である

否

裕也は使えるのだ

その理由は、裕也に行われた改造手術

その時に、裕也の中に龍種の遺伝子が組み込まれていたのだ

それにより、ほんの僅かではあるが、裕也は人では無かったのだ

それに気付いて、裕也は闇の魔法を修得したのである

切り札として

「魔法固定……掌握！」

裕也はそう言いながら、テニスボールサイズになった千の雷を握り潰した

その直後、裕也の体が発光し始めた

更に、裕也の周りにバチバチという音と共に雷光が走っていた

『H.Qより総員に通達！ 今後、セイバーには迂闊に触れるな！

今のセイバーは体が雷と化している！ 触れば感電する恐れアリ

！ 繰り返し返す！』

そう通信が入ると、裕也はまた左手を動かした

「左腕開放……千の雷……固定、掌握！ 雷天双荘!!」

そして、同じ魔法を再度掌握した

すると、体から放たれる雷光が激しくなった

「裕也……まさか、雷の上位精霊化している？」

それは、雷に適性のあるフェイトだから気付いたことだった

雷の上位古代語魔法の二重装填

それにより、裕也は一時的にだが雷の上位精霊と化していた

それにより、裕也は体が常時雷化

移動速度と思考速度が桁外れに上がっていた

だが、その恩恵が続くのは裕也の魔力が切れるまでである

そして裕也は、最後の切り札を切る

「童子よ童子……我が身を喰らい、現身うつしみとなりて、過去の大怨を晴らせ
!!」

裕也がその呪文を唱えた直後、安綱から桁外れの魔力が放出された
すると、ノーヴェエが走り寄って

「裕也、このバカ野郎!! お前、それを使ったら体が中から食い尽くされるぞ!」

と悲鳴混じりに叫んだ

その直後、裕也が吐血

それを見て、フェイトが駆け寄ろうとした

だが、それはウエンデイによって止められた

フェイトがウエンデイを見ると、ウエンデイは泣くのを必死に堪えていたのが分かった

「ハッ……既に、この眼を発動した時に死ぬのは決まってるんだ……

そんなの、今更だ!」

裕也はそう言うのと、刀を構えて

「ヨハンナ……最後の戦いだ……俺が倒れるか、お前が倒れるか……

さあ、始めようか!」

と宣言して突撃した

最後の突撃を

不退転

「行くぞ……ヨハンナ」

そう言った直後、裕也の姿が消えた

「消え……っ!？」

その速さは、フェイトにも視認出来なかった

フェイトの最高速度はマツハに到達し、本人もその速度までなら視

認出来る

しかし、裕也の速度は完全に見失っていた

それもそうだろう

今の裕也は、光速で動いているのだから

今裕也は、秒速350kmで動いているのだ

簡単には視認出来ない

唯一見えるのは、裕也の体から発せられている稲光のみ

しかし、それすらも速い

気付けばヨハンナに肉薄し、刀を振り上げていた

その一撃をヨハンナは回避したが、辛うじてだった

そこに、救難十四聖の一人

鉄腕のクリストフォロが攻撃を仕掛けた

その一撃を裕也は先程と同じ様に光速で回避したが、その一撃で数

mのクレーターが出来た

それだけで、威力が分かる

直撃を受けたら、無事ではすまないだろう

余波で、警官にコンクリートの塊が当たり吹き飛んだ

その警官に、別の警官が救助に向かう

そして裕也は、そのクリストフォロの真後ろに回り込むと

「邪魔だ……っ!」

と言って、刀を突き刺した

次の瞬間、クリストフォロの全身を雷撃が襲った

その雷撃は数秒間続き、雷撃が終わると、裕也は刀を抜いた

その直後にクリストフォロは力なく膝から崩れ落ちた

そのクリストフオロの全身からは白い煙が上がっており、無事ではないのが一目で分かる

恐らくは、死んだだろう

だが、クリストフオロには目もくれずに裕也は後退していたヨハナに迫った

だが、その間に更に数十人の使徒と救難十四聖が割り込んだ

どうやら、裕也を倒す腹積もりらしい

しかし、そこに更に数人現れた

「邪魔させつかよっ!!」

「はあっ!!」

「せいっ!」

蓮華、シグナム、アリサだった

しかしよく見れば、シグナムの色彩に変わっている

それは、八神家の一員であり融合騎のリインフォースⅡとユニゾンしたのとも違う色合いだった

その正体は、ゼストが残したもう一騎の融合騎

アギトとユニゾンした姿だった

「何故だろうな……お前とのユニゾン……妙に心地いい……どうした、アギト……泣いているのか?」

実はこの時、ユニゾンしていたアギトは言葉に出来ないほどに高揚感を得て涙を流していたのだ

その感覚は、ゼストとのユニゾンでは得られない感覚だった

《何でもない! 次、来るぞ!!》

「分かっている……」

アギトの言葉に返答すると、シグナムは愛機

レヴァンティンを構えた

そして

「火竜……」

《一閃!!》

二人は動きと言葉を重ねて、魔法を発動させた

その魔法は正しく、火の竜を彷彿させる魔法だった

その一撃により、大半の使徒達は戦闘不能に陥った
そこへ、蓮華が

「グランヴェル！」

《了解！》

愛機、グランヴェルにカートリッジをロードさせながら切り込んだ
そして

「大地斬!!」

と強烈な一撃を叩き込んだ

その一撃で、数人の使徒が真っ二つに切り裂かれた

その蓮華を倒そうとしたのか、数人の使徒が蓮華に向いた

そこに、横から襲い掛かる人影

「シッ！」

アリサは腰の入った炎の宿った右拳を、一人の使徒に叩き込んだ

その一撃でその使徒は吹き飛ばされて、別の使徒にぶつかった

そこにアリサは、左手を向けて

「フレアシューター!!」

炎の魔力弾を発射した

その魔力弾の直撃により、その二人は倒れ付した

そこにアリサは、更に

「プロミネンス……」

右手に魔力を収束させて、一步強く踏み込んだ

そして

「ブレイカー!!」

その魔力砲を解き放った

その威力はなのはに劣るものの、使徒達に大打撃を与えた

三人の連撃で、使徒達の防衛線に穴が空いた

その隙を突いて、裕也がヨハンナに突撃した

その裕也を倒そうと、一人の救難十四聖

篡奪のアカキウスが剣を横風ぎに振るった

確かに、その一撃で裕也の胴体は分かれた

しかし次の瞬間には、その裕也は掻き消えた

「雷を使ったデコイか!？」

「降御雷!」
ふるみかつち

アカキウスがその正体に気付いた直後、上空から一本の雷撃がアカキウスに直撃

アカキウスは黒焦げになって、倒れた

この短時間で二人も救難十四聖が倒れたからか、使徒達の間にも動揺が走った

その隙に裕也はヨハンナに迫り、連合部隊側は攻勢に出た

しかし、元より数の差が激しいのは否めない

最初こそ押し返せたものの、すぐに劣勢に転じた

連合部隊約四百に対して、まだ数万もの戦力が残っている禁書目録

聖省

このままでは、壊滅するのも時間の問題だった

その時

『空に多数の転位反応検知! 戦艦クラスです!』

とウーノから、通信が来た

その直後、空に次々と巨大な艦艇が姿を現した

戦争は終局を迎える

終焉

「まさか、ここに来て敵の増援か!？」

「嘘でしょ!?! あの数、どんだけ来たんだよ!?!」

その艦隊を見て、明久と結華は絶望した

今でさえギリギリだと言うのに、これ以上は無理だと

二人の近くには、倒した使徒達が倒れ付している

その人数は、三十人は下らない

それは、周囲で戦っていた渉達も同じだった

全員、疲労で荒く呼吸している

これ以上の戦闘は厳しいだろう

全員が悔しさに、歯噛みした

その時

『こちらは、守護者部隊、欧州方面軍の者だ! 間違つて撃つんじやねえぞ?!』

『同じく、アメリカ方面軍の者だ! よく頑張つたな、学生諸君!』

という通信が聞こえて、その艦隊から次々と魔導師が降下してきた

その人数は、万に届くだろう

守護者部隊の応援が、間に合つたのである

「間に合つて、くれたんだ……」

「諦めるには、まだ早いぞ!」

「押し返せ!!」

応援部隊の到着で士気が上がり、意気消沈気味だった連合部隊は声を上げて前に出始めた

特に、学生達はそれが顕著だった

友達を助けるためにと、誰も死なせないと奮闘した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「これは……守護者部隊の応援か!」

「間に合つたか!」

上空に現れた艦隊を見て、蓮華やシグナムが嬉しそうな声を上げた間に合わない確率の方が高いと思つていた二人は、半ば諦めかけて

いたのだ

それが間に合ったのだ

「諦めろ、てめえら！ ゆりかごも、最早役立たずだ！」

「大人しく投降しろー！」

二人が投降を勧告するが、使徒達は聞き入れない

次々と魔法を放つていく

二人はそれを回避か防ぎながら近付くと、使徒達を撃破していく
整っていた倉庫群は軒並み破壊され、地面は血肉で染まっている

倒れ付している死体は使徒が大半だが、警官の死体や聖王教会騎士

団の騎士達の死体もある

誰も彼も志半ばで倒れた

無念だっただろう

その思いを果たさんと、その仲間達は叫びながら攻撃を続けた
本当は誰もが、一刻も早く戦いが終わってほしいと願っていた

平和になってほしいと

しかし、戦争に明確なルールなどは存在しない

勝つか負けるか

生きるか死ぬか

たったそれだけである

勿論だが、負けるつもりも死ぬつもりもない

だから、誰もが死力を尽くして戦っていた

生きるために

勝つために

「アアアアアアア!!」

「オオオオオオオ!!」

剣を槍を杖を振るい、目の前の敵を打ち倒す

そうしなければ、友が家族が恋人が

大事な人達が、死んでしまうから

そんなこと、絶対に許せない

だから、彼等は死地に立った

「ヨハンナアアアアア!!」

「異端者がっ！」

そして裕也は、長年の決着を付けるために命を削っていた
口の端からは血を溢し、右腕は妖刀の影響で感覚は無くなっている
だがそれでも刀を振るい、戦っていた

死んでいった人達との、約束を果たすために

「アアアアアア!!」

「ギッ!」

そして、とうとう裕也の一撃がヨハンナに当たった

その一撃で、ヨハンナの体から血が流れた

いつもだったら、次の瞬間には無傷のヨハンナが現れる筈だった
しかし、変わらなかった

ヨハンナの右肩から血が流れ、ヨハンナが右手に着けていた純白の
手袋が真っ赤に染まっていく

「バカな……これは……っ!」

「もつとだ……もつと、力を……っ!」

裕也が呟く度に、妖刀

童子切安綱から禍々しい力が溢れる

そしてそれを振るい、ヨハンナを斬り付ける度にヨハンナの傷が増
えていく

「私の魂と同化していた、ヨハンナの神銘碑が……っ!」

「俺の命の全てをやる……だからっ!」

そして、裕也の一撃でヨハンナの右腕が飛んだ

「碎ける!」

「ヨハンナを倒せる力を……俺に寄越せえええ!!」

裕也のその一撃は

間違いなく

ヨハンナの胸を

刺し貫いた

その光景に最初に気が付いたのは、フェイトだった

フェイトも無傷ではなく、顔の左半分は血で染まっている
だがその光景は、ハッキリと見えた

そのフェイトと戦っていた一人の使徒がフェイトの視線を追って、その光景を目撃した

そこから次々と、それが波及していった

そして、数分と経たずに戦闘は止まっていた

「これで終わりだ……ヨハンナ……」

「その……ようですね……」

その会話を最後に、裕也は刀を抜いた

その勢いでヨハンナは二三歩前に歩くと、膝を突いて倒れた

その直後、ヨハンナの肉体は消えた

それを見て、使徒達の士気は瓦解

潰走を始めた

それを逃がさないと、守護者部隊や警官隊、騎士達は次々と捕まえるか撃破していく

そんな中、フェイトは裕也に歩み寄ろうとした

だが、次の瞬間

「裕也!」

裕也は、力無く地面に倒れ付した

フェイトは駆け寄ると、裕也を抱き起こした

そして、息を飲んだ

裕也の体が、イヤに軽かったのだ

いくら強化魔法を使つてるとはいえ、裕也の体を簡単に抱き起こせるわけがないのだ

そこに、ノーヴェエが駆け寄り

「裕也! この馬鹿野郎が! 安綱は、使い手の血肉を食らう妖刀だろうが!? あれを使えば、死ぬってわかってただろう!! それに、闇の魔法もだ!」

と怒鳴った

「ノーヴェエ、どういふこと?」

「……闇の魔法も安綱も、刎の目と同じように使い手を殺すんだよ……その対価に、莫大な力を与える……」

フェイトの問い掛けに、ノーヴェエは苦々しげにそう答えた

それを聞いて、フェイトは言葉を失った

どうあつても、裕也に未来は無かつたのである

世界と皆の未来を守るために、命を捨てていたので

そこに、続々と友人達が集まつてきた

蓮華かアリサがはやてがシグナムがヴィータがなのはがヴィヴィオが義之が麻耶が音姫が由夢がまゆきがユーノが渉が杏が茜が小恋が美夏がザフィーラがすすずかがシャマルがナンバーズが明久が結華がムラサキがクロノが

全員が集まつた

裕也とフェイトを囲むように

ほぼ全員が怪我を負つていて、戦いの激しさを物語っている

「裕也！ しつかりしろ！」

「戦いは終わったんだ！」

「もう、戦わなくていいんだよ！」

「だから、しつかりしろよ！」

全員が口々にそう言うが、裕也の体は動かない

それどころか、目に光がない

「皆……そこに……居るのか……」

囁くように、裕也が喋った

それを聞いて、全員は察した

もう、目も見えていないのだと

だからフェイトは思わず、裕也の左手を握って

「居るよ！ここに皆居るよ！」

と叫んだ

すると、裕也はうつすらと笑みを浮かべて

「俺さ……勝つたぞ……ようやく……長い戦いを……終わらせた

……」

と喋った

それを聞いて、フェイトは頷いて

「そうだよ！だから、裕也も生きてよ！」

と泣きながら叫んだ

だが裕也は、それに答えず

「ようやく終わったよ……父さん、母さん……美樹……」
と言った

次の瞬間

裕也の体は、全員の目の前で消えた

数瞬後、悲痛な叫び声が島全体に響き渡った

こうして、初音島攻防戦

しゆうまつ戦争は、幕を下ろしたのだった

終章

さくら

通称《しゅうまつ戦争》から、約一年が経った

初音島の各地では復興が着々と進んでいたが、未だに多くの爪痕が残っていた

戦闘の余波で壊れた橋は後回しにされており、港湾施設も修繕されている最中である

ライフラインはなんとかなっているが、未だにヘリや飛行戦艦等で物資を運んできている

季節は春になり、桜が咲き始めていた

「あれ……ボク……どうして……」

その初音島で、ある人物が意識を取り戻していた

「そっか……桜が咲いてるからだ」

その人物

芳野さくらは、うつすらと存在していた

彼女は魔法の桜と同化し、音姫が枯らしたことにより意識も消えたはずだった

しかし春になり、他の桜が咲き始めたことにより散っていた意識が集められたのだ

ふと気付けば、さくらの意識は別の場所に来ていた

場所は、風見学園だった

学園の体育館には、未だに家が無い人達が過ごしている

ふと気付くと、さくらは生徒会室に居た

そこでは、音姫とまゆきが何かの書類を整理していた

腕には生徒会の腕章はない

時期を考えると、引退しているのだろうか

「あれから、一年か……」

「そうだね……最近、ようやく平和になったなって思えるようになったよ」

まゆきの言葉に同意するように、音姫がそう言った
そして、ある一枚の書類を音姫が見て、固まった
するとまゆきが、音姫の持っていた書類を覗き込んだ
そして、音姫が固まった理由を察した
それは、一人のプロフィール用紙と退学申請書だった
名前は、防人裕也だった

「……」

「音姫……」

その書類を見て、音姫は涙を流した

その少年は、命懸けで世界を救った英雄だ

しかし、自分達には感謝することすら出来なかった

「裕也君……」

そこで場所は変わり、スカリエツティの診療所

そこでは、怪我人の治療が行われていた

「いいですか、この怪我の場合はこうですよ」

「はい、わかりました」

とクアットロから教わったのは、小恋だった

小恋は本当だったら本島の専門学校に行く予定だったが、戦争の影響で医師が足りないことを鑑みて、教師免許を持っている者が近くに居ることを条件にして、スカリエツティ診療所にて勉強しながら実地研修中だった

更に、それを補助していたのは

「はい、これで終わりです」

「お姉ちゃん、ありがとう！」

由夢だった

由夢は学校で保健委員だった腕を買われて、小恋の補助をしていた
実際、由夢の補助は的確だった

小恋が間違えそうになったら、念話で指摘したりした

そして必要な薬があれば、そつと差し出していた

今も、包帯を小恋の近くに置いていた

そして、治療が一段落した時だった

スカリエツティが現れて

「二人とも、すまないが、これを学校に持っていつてくれないか？」

と茶封筒と段ボールを指差した

「私達が、ですか？」

「本当ならば、私が行かないといけないんだね。今から回診なんだ。すまないね」

由夢が問い掛けると、スカリエツティはそう言って去っていった

そして二人は、由夢が段ボールを、小恋が茶封筒を持って学校に向かっていた

すると、二人は舞い散る桜を見上げて

「……平和、ですね」

「そう、だね……」

と短く会話すると、また歩きだした

そこでまた場所が変わり、今度は天枷研究所だった

その一室では、麻耶と義之が何やらキーボードを叩いていた
すると、ドアが開いて

「沢井、桜内、そろそろ学校に向かう時間だぞ？」

と入ってきた人物

美夏がそう言った

それを聞いて、義之と麻耶は揃って背伸びしながら

「もう、そんな時間か……」

「気付かなかったわね」

と言った

どうやら、相当集中していたようだ

二人は作業を止めると、立ち上がった

すると、美夏が

「それで、美秋のデバイス構築はどうだ？」

と問い掛けた

すると、麻耶が机の上から赤いペンダントを取って

「今日の模擬戦でデータを収集して、それで微調整するわ」と言った

それを聞いて、美夏はポンと手を叩きながら

「なるほど、だから学校に行くのか」

と納得していた

そして三人は、揃って学校に向かった

そこで場面が変わり、今度は高台だった

その高台では、蓮華、アリサ、神夜が歩いていた

その腕には《巡回員》という腕章が付けられていた

「戦争終結直後に比べたら、大分マシになったな」

「そうね……空き巣やら、強盗やら出たものね」

「それを見つげ次第、殴り飛ばしたのは二人でしたね」

と会話しながら、三人は海が見える場所に出た

そこには、先客が居た

「明久さん、結華さん」

「来てたんですか」

とアリサと神夜が声を掛けると、二人は顔を向けて

「ああ、うん」

「バイト、終わったからな」

と言った

そんな二人の前には、石碑があった

その石碑には

《世界を守りし英雄達、ここに眠る》

と彫られてあった

「ここに眠ってるわけじゃないけどね」

「やつぱり、来ちまってな」

二人はそう言うのと、目を細めた

その表情で、さくらは気付いた

「そっか……裕也君……死んじやったんだ」

裕也は、さくらとの約束を守って死んだ

世界を守るために、命を懸けて

その後もさくらは、色々な所を回っていき、見た

喫茶翠屋では、高町家とユーノ、ヴィヴィオが、裕也と撮影したの

だろう集合写真を見ていた

警察署では、ゲンヤとリンデイが新しく入ったらしい警察官に訓示を言いながら、死んだ警官達の為に黙祷していた

ホテルアルピーノでは、アルピーノ親子とエリオ、キヤロが避難者のために走り回りながらも、悲しそうだった

八神家では、はやてが何やら必死に勉強していて、それを八神家一堂が心配そうに見ていた

そして気付けば、さくらはあの場所に居た

枯れた枯れない桜の所に

そこに、フェイトが現れて

「……裕也……世界は平和になったけど……やっぱり、裕也が居ないと、寂しいよ……」

と言って、泣き始めた

さくらはそれを見ると、枯れている桜を見上げて

「なんとかならないの!?!」

と叫んだ

今まで見てきて、耐えられなくなったのだ

「枯れない桜は、願いを叶える! 例え、ひとつひとつが小さい願いでも、それが多く集まれば、必ず叶う! だから、叶えて!!」

とさくらが叫んだ

その直後、枯れていた枯れない桜が、輝いた

サクラノキセキ

『……て』

暗闇の中、裕也の頭の中に声が響いた

そして、不思議に思った

なぜ、意識があるのかと

「俺は……死んだはず……」

と裕也は呟いた

その直後

『いえ、貴方はまだ、死んでいませんよ』

と再び、頭の中で声が響いた

ふと気付けば、目の前にその存在が居た

六枚の翼を持つ、赤い左目と金色の右目が特徴の女性が

「貴女は……誰だ？」

『私の名は、デミウルゴス』

裕也が問い掛けた直後、そう頭の中で声が響いた

その名前を聞いて、裕也は驚いた

デミウルゴス

それは、過去に禁書目録聖省と検邪聖省の二つの共謀で壊滅させられた街が信仰していた創造神の名前だった

「そのデミウルゴスが、なぜ……」

『貴方の魂は私が回収し、修復してました……消える直前だったので、一年も掛かってしまいました』

デミウルゴスのその言葉を聞いて、裕也は驚いた

まさか、劫の眼で消耗した魂が修復されるとは思っていなかったからだ

『まさか、あの眼を複製するとは思わず、気付くのが遅れました……申し訳ありません……間に合ってよかった』

「劫の眼を、知っているのか……」

『はい……滅ぼされた街の地脈に眠っていたのが、嘗ての眼の原石だったのです……それを回収し、化工したのが禁書目録聖省だったの』

です……』

その説明を聞いて、裕也は納得した

それならば、確かに複製を作るのも可能だと

『これは、有ってはならぬ物……』

そう言ったデミウルゴスの右手には、金色に輝く眼があった

そして右手を閉じると、消滅した

『体は、貴方を思う方々が奇跡を起こしたようですね』

「なに？」

その言葉の意味が分からず、裕也は首を傾げた

しかし、その疑問にデミウルゴスは答えず

『さあ、お行きなさい』

と言った

その直後、裕也の視界は真っ白に染まった

その時

「幸せになってね、お兄ちゃん」

と少女の声が聞こえた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

場所、学園保健室

「裕也さん!？」

と眠っていた由夢は、見ていた夢の内容で思わず飛び起きた

その内容は、裕也がフェイトと桜公園で会った夢だった

だが夢と気付き、由夢は溜め息を吐いた

なぜ、由夢が保健室に居たのか

それは、スカリエツティからの届け物を学園長代理に渡した後だった

た

水越舞華が

『ちよーっと、本家に呼ばれたから、保健室に居てくんない?』

と言われたのを、承諾したからだ

そして保健室に居たのだが、疲れと調度いい陽気で眠ってしまった

ようだ

だが、眠ってから一時間程しか経っていない

恐らく、一緒に来た小恋も、まだ学園に居るだろう

一度スカリエツテイ医院に戻ろうとした時、義務付けられていた学園への報告を忘れていたからだ

そして溜め息を吐いた後、由夢はすぐにあることに気付いたそれは、自身が見る夢の意味

「私の……夢は……」

由夢がそこまで呟いた時、ガラリとドアが開いて

「ただいまーつと。ごめんね、朝倉さん。保健室任せちゃって」

と水越女史が帰ってきた

それと同時に、由夢は立ち上がり

「後はお願いますー!」

と飛び出した

水越女史が呆然と見てきていたが、由夢は気にせず走ったすると、前に居た音姫とまゆきが振り向き

「ごら、由夢ちゃん! 廊下は走らないの!」

「どうしたの、妹ちゃん。なんかあった?」

と言ってきた

由夢は、そんな二人の横を走りすぎる時に

「お姉ちゃん、高坂先輩、着いてきて!」

と言った

それを聞き、音姫とまゆきは一度顔を見合わせると由夢の後に続いた

そして校舎から出ると、近くに義之、麻耶、美夏、小恋が居た

「由夢、どうした?」

「なにかあったの?」

「どうしたんだ、由夢」

「あれ、由夢ちゃん?」

と声を掛けてきたが、由夢はそのまま走った

どうやら、それで何か起きたと感じたらしく、四人も後に続いた

場所は変わり、喫茶翠屋

そこには、アリサ、すずか、蓮華、神夜が来ていた

そしてフロアには、なのは、ユーノ、明久、結華が居た
すずかはどうやら、喫茶翠屋名物のシユークリームを買いに来てい
たようだ

ユーノは最近、喫茶翠屋でバイトを始めたのだ

蓮華達は、休憩に寄ったのだ

その時突然、神夜が頭を押さえた

そして見えたのは、裕也とフェイトが抱き合っている姿だった

「神夜、大丈夫か？」

「どうしたの？」

「神夜ちゃん、大丈夫？」

と蓮華、アリサ、なのはが心配そうに声を掛けてきた

だが神夜はそれに答えず、視線を桜公園の方に向けて

「彼が……帰ってくる」

と呟くと、机の上にお金を置いて走り出した

「ちよ、おい！」

「どうしたのよ！」

神夜には非常にレアだが、未来予知のレアスキルがあった

とはいえ、それは稀にしか見えない

だが、その的中率はほぼ100%である

それを知っているのは、義兄に当たる蓮華と裕也くらいだ

それで見たのだから、帰ってくる

神夜はそう確信しながら、桜公園目掛けて走った

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

場所、桜公園

その枯れた枯れない桜の根元で、フェイトは泣き疲れて眠っていた

その時フェイトは、自身の体に何かが掛けられたことに気付いて目

を覚ました

最初は視界がボヤけて見えなかったが、少しすると見えた

寝ていた自身の隣で、本を読んでいる少年が居た

その少年の横顔を、フェイトが見間違える訳がなかった

「……裕也……？」

「ん、起きたか……まったく、幾ら春になったからとはいえ、外で寝たら風邪を引くぞ?」

フェイトが呼び掛けると、裕也は小説に葉を挟んでからそう言いながらフェイトの頭を撫でた

その声はまさしく、裕也だった

フェイトは最初は夢かと思ったが、直ぐに夢ではないと気付いた
何故なら、頭を撫でている裕也の手が暖かかったからだ

夢じゃないと理解したフェイトの目尻に、みるみると涙が溜まった
そして

「裕也!」

とフェイトは、裕也に抱き付いた

裕也は倒れそうになったが、片手を突いて防止

そして、フェイトの体を優しく抱き締めて

「ただいま、フェイト」

と優しく囁いた

フェイトは裕也の肩に顔を埋めながら

「おかえり……おかえり、裕也……」

と繰り返し、喜んでいた

そこに、何時ものメンバー全員と明久、結華が現れて大騒ぎになったが、割愛させていた

だが一重に、全員が裕也の帰還を喜んだ

こうして、戦乱に翻弄され続けた少年の戦争は幕を下ろした

それから二十年後、一人の女性が島に帰ってきたことで新しい物語が始まるが、それは別のお話